

Ib～ハッピーエンドへ行き着くためには～

月館

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

I b 9周年という事ですので書いてみました。

頑張って完結まで持っていきます。

みんなもI bをすこつてこ。

この作品も1周年、I b 10周年と一緒に達成致しました。これも皆様が読んでくれるおかげです。この場を借りて感謝を。

作品無事完結致しました！

目次

第一章 絶望の始まり

プロローグ | 1

始まりの終わり | 4

いざ美術館へ | 6

美術展探訪 | 9

異変 | 13

ファーストインプレッション | 16

主人公&世界観設定 | 19

T i p s : 休息のひととき | 22

第二章 ふたり

薔薇を探せ | 26

気に食わない | 29

次の部屋へ | 33

閑話：クリスマスif | 37

なんにもない | 43

黒い手 | 47

閑話：お正月if | 50

お使い | 57

蟻の絵 | 62

無個性 | 65

次の部屋へ | 71

通過点 | 74

かくれんぼ | 79

かくれんぼの終わり | 83

猫の間	88
唾を吐いてはいけません	93
今再びの……	96
ウソつきたちの部屋	100
凄惨な現場	103
閑話：バレンタインif	110
次の為の小休止	126
人形	129
リンゴの木	134
ギロチン	138
Tips：9年後の君へ	141
ゆめ	150
おはよう	154
朱い部屋	157
あうん	160
閑話：ホワイトデーif	163
敗走	172
再探索	176
走る	178
喉の潤い	182
本	185
涙	189
始まりの	193
うっかりさんとガレット・デ・ロワ	196
永遠の恵み	201

人影

青い薔薇

邂逅前の一息

第三章 さんりん

顔合わせ

閑話：NG集if

ギャリーという人

いつものが通じない

瞳

迷路

ボタン

隠されていた部屋

目薬

サボリ気味

瞳の導き

踏み出し

感情の後ろ

ブーケトス

擬態

小部屋

マネキンの行列

束の間の平和

枚数

バチバチ

お誘い

273

270

267

265

262

259

256

253

251

248

244

241

238

235

232

230

228

225

223

218

214

212

208

204

赤い目	357
嫉妬深き花	354
モテモテ?	350
閑話：NG集if その2	345
メアリー	339
第四章 最後のピース	
決別	335
平和な旅	332
深海の……?	329
言い合い	325
夜桜	321
迷路	318
じゃんけん	315
探索再開	312
起床	309
再びの邂逅	305
逃走成功	302
行くも地獄止まるも地獄	298
籠城	295
囿	292
遠回り	289
鏡	286
追跡者の違い	283
鏡の間	279
直前	276

運命の分かれ道	446
おもちゃ箱	443
sketchbook	439
私の道	436
つなぐ	433
交渉	428
メアリー	424
王様	420
ヒント	417
ジャグリング	414
本音	410
閑話：1周年&UA10000突破記念if	402
真実	399
三度目の正直	397
実入りの無い部屋	394
釣り針	391
赤い霧	387
絵の具玉	384
人形の手柄	381
新しい仲間……？	378
足止め	375
紐	372
赤色の目の人形	368
閑話：if	364
分断	361

初詣	541
クリスマス	531
夏祭り（後編）	525
夏休み（前編）	517
後日談（if）	515
あとがき	509
END：1 君の求めたハッピーエンド	504
名付け	501
パパ	497
デウス・エクス・マキナ	494
じいさん	490
再会	487
違い	484
好き……？	481
時は遡る	476
名前の謎	472
最後のピース	469
まるで別人	465
同一人物な他人	460
END：2 貴方を想って	455
サヨナラ	452
決心	449
最後の休息	449

第一章 絶望の始まり プロローグ

茹だるような暑さも過ぎ、過ごしやすい季節になった9月。友達に勧められて「Ib」をプレイしている。

ゲーム内容としては美術品の中に閉じ込められたイヴがオネエと金髪少女を連れて色々な謎を解き明かしていきながら美術品の中からの脱出を試みるホラーゲームだ。

しかもマルチエンディングで、フリーゲームなのに何回やっても飽きない。しかし、どのエンディングを見ても3人とも幸せになるものがない。

ちやうどこの頃流行っていたフリーホラーゲームは救いがないものが多かったせいなのか分からないが、俺にはそれがとつもなく悲しく信じたくない現実だった。それ程までにこのゲームの1キャラ1キャラに対する愛情が芽生えていた。

「本当にもう……これは辛いなあ……。」

そう一人ごちりながらパソコンと向き合う。どうにかしてこの感情の負の連鎖を断ち切ることは出来ないだろうか。そう考えていると俺の頭の中に一つの案が浮かぶ。

「そうだ。俺が書けばいいや。誰に見せる訳でもないし好きなことを書き殴ればいいんだ。」

そう思い早速パソコンのメモ機能を開こうとしたところ、外からポストに何かを入れたような音が聞こえた。

普段だったら特段気にしないような音なのだが今の俺は何故か引っかかるものがあった。

「とりあえず気づいちゃったし、確認でもしに行きますか。」

そう言いながら席を立つ。なんだか胸騒ぎがする気分を降って湧いた創作意欲で無理やり押し潰しながらポストへと向かう。

ポストの中を覗くとそこには宛先も名前も書いていない、しかし「招待状」と書かれた封筒が入っていた。慌てて当たりを見渡すも、ポ

ストにこの封筒を投函した張本人は居るはずもなく。俺は少しの間ただただ立ち尽くしていた。

程なくして探すのを諦めた俺は部屋に戻りながらポストに入っていた封筒を開ける。どうやら美術品の展覧会のチケットのようだが、しかし、このチケットを見ているとなぜだか頭が痛くなる。なんだか世界が書き換えられている気分になる。

少しして頭痛が治まってきたようで、目の前のチケットに再び意識が行く。どうやら会場は近いらしい。ここなら自転車で10〜20分程走れば着くだろう。とりあえず家族に心当たりがあるか聞いてみよう。そう思いながら俺はリビングへと足を運ぶ。

これから紡がれる物語は1人の青年がハッピーエンドのために色々と足掻く物語……。その先に待っているのはハッピーエンドなのか……。それとも救いのないバッドエンドなのか……。

その行方はまだ誰にも分からないまま……。

始まりの終わり

家族にチケットが届いたこととその事に心当たりがあるかどうか聞いてみたが、どうやら両親ともチケットを頼んだり譲り受けるという類の話は誰ともしていないらしい。

まるで急に出没したかのようなこのチケットの行き先は元々うちだったのか分からない内はこの美術展に行くのもよろしくないだろう。なんてそんなことを思いながらも、心の底では行きたい気持ちが高くなってきている。普段から美術に触れているわけでもなければ美術品に興味があるわけでもなかったのに、この美術展には行かなければならない気がしている。

「とりあえず明日近所の人たちに聞いてみるか……。」

翌日、近所の人の家をいくつか回って聞いてみたがチケットはおろかこの美術展が開催していることさえ知らない人が大半だった。なんだか嫌な予感がしつつも、そんな予感を覆い尽くすくらいに「行きたい」「行かなければならない」という感情が増幅する。とりあえずその日は帰宅して、親に美術展に明日行ってくる旨を伝える。

その日の夜、俺は何かを忘れていた気がしていた。生きていく上で必要ではないが、確かに自分にとって大切な思い出のような何かを……。

そしてパソコンを起動させるとデスクトップ画面にアイコンがひとつ入っていたであろう空白がぽっかりと空いていた。その穴は何故か今の俺にはとても大きく見えた……。

着替えも済み。ついに美術展へ赴く準備は出来た。とは言ってもナップサックに財布と携帯、それとモバイルバッテリーにドリンクと携帯食料のカロリーメイトくらいだろう。美術展には初めて行くし、

美術品を見るだけだけならすぐ見終わるだろうからその足で遊びに行けるように軽装にした。欲を言うならカメラも持っていきたいところだが、俺は持つてないしもし撮れなかった時のことを考えると邪魔になるだろう。服装は白いTシャツに黒の薄い上着、下はジーンズにスポーツシューズというとてもラフな格好だが、まあジャージー式よりはマシだろう。

「じゃあ行つてきまーす。」

「あら、もう行くの？車には気をつけるのよ。」

「それくらい分かってるよ。あ、あと見てきたついでにちよつと外で遊ぶから帰り遅くなる。」

「はいはい。変なところに行かないようにね？」

「それもう耳にタコができるくらい聞いた。」

そんな会話を母さんとしながら靴を履く。なんだかんだ言つてこんな会話が1番気が楽なのは話してる相手が親だからなのか。なんて考えながら俺は自転車の方へ向かう。そして自転車のハンドルを握った、その瞬間。俺の思考がクリアになる。

「1度入ると もう戻れない

ここでの時間も 全て失う

それでも あなたは 飛び込むの？」

そんな言葉が瞬間的に冴え渡った頭の中に浮かんでくる。だが、そんなチンケな問に対しての解答は既に決まっている。

「飛び込むに決まってるだろうが！それが例え後悔することになつても！」

そう口から零しながら俺はペダルを力強く踏み込む。その時、昨日から感じていた嫌な予感がちよつとだけ大きくなった気がした。

いざ美術館へ

「ふーん。ここが美術展会場か。」

普段だつたら来ないであろう美術館。そこで美術展は開催されていた。正直どこかのホールを借りてやるものだと思っていた俺は、チケットを確認した時は驚いたものだ。

なんてことを思いつつ時計を見ると、9:50くらいを指していた。開場まであと10分ほどあるし、いの一番に入って作品を見たい訳でもないのでのんびりと外観を見て回ることにした。ネットで調べた限り小々中規模な美術館のようだが、周りの公園のようなどころにはオブジェやベンチが置いてあり、のんびりと大分できそうな場所のようである。

程なくして自販機を見つけたのでどんな飲み物があるか覗いて見た。ラインナップはよくある自販機と変わらないが、塗装がモノクロの漫画のような絵がびつしりと描かれている、あまり見た事のないものだった。そんな自販機に驚きつつ俺は紅茶とお茶、それにスポドリの本3本を買う。正直ドラッグストアやスーパーの方が断然安い、まあ思い出料金ということでもいいだろう。

「しかし、飲み物三本追加は少し重いな……。つい買っちゃったけど大丈夫か？これ。」

普段ならこんなを買わないであろう飲み物を持ちながら、俺はついに美術館の中へと向かう。

初めて見に来たとは言え、いや初めてだからこそ他の人の迷惑にならないように気をつけねば。これで変に注意をされたりでもしたら親に迷惑をかけるかもしれないからな。

なんてことも思いながらフロントの人にチケットを渡してどこへ向かえばいいか聞く。

話を聞くと、どうやら1階と2階を展示スペースとして使ってお

り、1階に入口があるようだ。チケットはその受付に渡してくれと返された。そこまでの道もそう遠くないらしく、目の前の道を真っ直ぐ歩くと大きな立て看板が置いてあり、そこが入口らしい。それでその看板に書かれているのは

【ワイズ・ゲルテナ展】

「ここが……入り口か。」

俺の目の前にはそこそこ大きな扉が静かにその口を開いている。この奥に様々な美術品が飾ってあると考えるとこの大ききなものも頷ける。

しかし、それ以上にこの扉から感じるプレッシャーは大きいものがある。まるでここから引き返せと最後通告をされている気分だ。それ以上進むと俺にとって良くないことが起こるぞ……と。

だけどここで止まる訳には行かない。なんでかは分からないが、止まっては行けない。そんな気がする。

そんなこんなしていると中の受付の人が訝しげにこちらを見つめてくる。その視線になんだかいたたまれなくなり、俺は会場入口を……くぐった。

急いで受付に向かうと、先程こちらに視線を投げていた初老くらいの男性が物腰柔らかな対応を見せていた。

「ようこそおこしくできました。こちら、【ワイズ・ゲルテナ展】の会場となります。チケットはお持ちでしょうか？」

「あ、はい。」

始めて来る、あまり来慣れていない雰囲気場所に少しビクビクしつつも俺は受付にチケットを渡す。チケットはちゃんと使えるもの

だったようで、チケットの半券と栞のようなものを受け取った。

「あの……。こういうところに来るのは初めてなんですが、禁止事項などは有りますか？」

俺がそう聞くと受付の男性は懇切丁寧に説明をしてくれた。

どうやら、基本的にどこの美術館も飲食及び美術品の写真撮影は宜しくないらしい。

まあ、メインとなる美術品が痛んだり美術品の価値を損なわないようにするためだろう。

ただ、

「初めてだからといってそんなに肩肘張らずに、リラックスすると楽しめますよ」

と言われた時には入口前で固まっていたことを暗に言われている
と思ひ、とても恥ずかしくなった。本当は

「違ふんです。本能が警告していたんです。ここには立ち寄るなつて。」

と否定したかったが、それを言ったところでまた痛い子みたいな反応が帰ってくるだけだろうから、曖昧な相槌を返した。

何やかんやがあつて、漸く美術展会場の中に入ることが出来た。ここにはゲルテナが生涯にわたって作り上げてきた彫刻や絵画などが多数展示されているらしい。パンフレットにはそう書いてある。

どうやらパンフレットを見る限り1階は絵画中心、2階はそれに加えて彫刻なども展示されている様なのでまず1階を見て回ろう。

美術展探訪

1階の展示スペースにはいきなり大きい2枚の絵がお出迎えしている。そのうちの一つはなんと床にペイントされているらしい。どうやって運んだのか……。少し気になるところだ。なんて思いながらその絵【深海の世】の説明文を読む。

『ヒトが立ち入ることは許されない』

その世界を堪能するため私は
キャンバスの中にその世界を創った』

この文章を読んだ瞬間、再びプレッシャーを感じた。しかも次は、この【深海の世】から。全身が震えあがるくらいのを。

俺はこのゲルテナの作品から嫌われているのだろうか。それとも品定めされているのだろうか。なんだかよく分からないまま順路に向かつて別の作品へと足を進める。

……どうやら次は大きなバラを象ったものようだ。この作品は今までのものと違って儂くも力強い雰囲気を感じる。

作品のタイトルは【精神の具現化】。

『一見美しいその姿は』

近づきすぎると痛い目に遭い

健全な肉体にしか咲くことができない』

確かに。なんてそう思わせる説明文。しかし、何故かこの文章の裏にはすごく大きななにかが隠れているようなそんな感じがした。

「ま。人間なんてそんなもんだよな。」

なんて、まるで高二病みたいな発言だなと自分を鼻で笑う。
隠されている”十二か”に触れないように。臭いものには蓋をす
る。

1階の展示物を一頻り見たところで次は2階へと向かう。その道
中、白いブラウスに赤いリボンを着けた外国のいい所のお嬢さんのよ
うな容姿の女の子がパタパタと走っている。その姿にほんわかしな
がらも彼女とすれ違った。その瞬間、ふとなにかに気づいた俺は後ろ
を振り返る。すると彼女の走っている姿も子供の走る足音さえも無
くなっていた。

2階に着いた俺は、右手側に石像のようなものがあるのに気づき順
路を少し無視することに変な嫌悪感を覚えながら説明を見るために
歩く。

石像に近づくにつれて、そのおかしな風貌に目があった。どうやら
この石像には頭がないらしい。名前を見ると【無個性】と書かれてい
る。頭がないのは、俺からしたら随分な個性になると思うがゲルテナ
は違うらしい。まあ考え方なんて十人十色。普通の感性をしていな
い人の一部が芸術家になるのだろう。その感性がわかるようで分か
らないから。ひとつの物事の解釈を常人では出来ないような表し方
をするから。だから芸術家なのだろう。

少ししてから順路に戻った俺は、他の作品にゆっくりと目を向け
る。

【新聞を取る貴婦人】【吊るされた男】【双塔】【心配】など、色々な絵
画が飾ってある。他にも、【口直しの樹】なんてシャレたものもあっ
た。そんな感じで思っていた以上に楽しんでいた俺はこの美術展の
中で1番大きいであろう絵画の前に着いた。その作品の名は

【絵空事の世界】

何故かこの絵の周りには人は居なく、この美術展を回ってきた中で1位2位を争うくらいとても静かな場所だった。それも、不気味なくらいに。

少し不自然に思った俺はこの絵をしつかりと見る前に順路を進むことにした。すると少し進んだところで少しずつ人のいる気配が感じられるようになった。そこからもう少し進むと、展示物である「特等席」とそれを見て座りたそうにしている女性が見えてきた。

あの絵について気になった俺は1回受付まで戻ってこの美術展の中で一番大きい絵画を聞いてみた。すると、1番大きい絵画は「悪意なき地獄」だと言う。

その話を聞いた瞬間に体が硬直する。悪寒が走り、背中には嫌な汗が流れ、全身に鳥肌が立つ。足は震え、受付の人がいなかったら膝を着いていたであろう。それ程までに焦燥していた。

口の中が渴いてカラカラになりながらも感謝の言葉をかけ再び2階へ向かう。真つ直ぐと向かうのは「絵空事の世界」。ここは俺しか行けないのか。1度その場を離れたら入る資格がないのか。それを確かめに足早に目標へと歩く。

【絵空事の世界】の前まではどうやら行けるようだ。そしてここには人っ子一人居やしない。そんなことを思いながらぼんやりと絵を眺める。まるで落書きのようなその絵は阿鼻叫喚の地獄のようにも見える。今まで見た絵画と違い、何を表しているのかさっぱり分からない。そんなことを思いながらこの絵の説明を見ようとすると照明が点滅し始めて、仕舞いには当たりが暗くなる。

「え、停電？まじか……。何かあったのかな……。」

しかし、ここには人の声が届かない。少し様子を見に来た道に戻る
とそこには

さつきまでそこにいた人たちがみんな消えていた。

異変

2階をざっと見ても誰もいない。1階なら、受付ならと下ってみると受付にすら誰もいない。みんな一瞬のうちにどこかえ消えてしまった。

俺も外に出ようと思い来た時は開いていたそこそこ大きい扉の前に立つと何故か閉まっている。どうにか開かないかと力いっぱい扉を動かすが、どういいう訳かビクともしない。この感じは鍵をかけたと言うよりは溶接してある感じ。1枚の鉄板の真ん中を開けようとしている感じだ。ノブのガチャガチャという音だけが辺りに反響する。これでは何をしたらところで焼け石に水だろう。

「もう一度あの絵のところに戻ってみるか……。」

己の不安を消し去るために俺は足を動かした。このままじつとしていたらきつと俺は壊れてしまう。

誰もいないことをいいことに美術館の中を走って移動した俺は直ぐに【絵空事の世界】の前に着いた。

すると、額縁の下に絵の具の滴っているような後がある。何かと思えばそれに近づいて見てみると、後ろからトントントンとリズム良く音が聞こえてきた。振り返った見てみると

おいでよ大利ひろかず

「うわあああああ!!!」

俺はその場で腰を抜かしてしまった。なんで俺の名前を知っている。なんで俺を誘おうとしている。なんで、なんで……。一種の錯乱状態に陥った俺は辺りを見回す。誰かいないのか。なんで居ないのか。俺はどうしてここにいるのか。思考がまとまらない。

そんな時、先程まで青い絵の具の滴っていたところに文字が書いて

あるのが見える。

〃下においてよ大利ひろかず

君の役割を思い出させてあげる〃

その文字列を見た瞬間、俺の中の恐怖は全て消え去った。しかし、なんて書いてあるのか頭で理解はできるが1文字1文字単独では読めそうにもない。

しかし何はともあれすべきことは決まった。しかしその前に荷物の確認を行う。何をするにも冷静沈着を心掛けるための第1歩だ。ナップサックの中身

- ・財布……所持金5000円とちよつと、あと学生証
- ・携帯……今日はまだあまりいじってないから電池は満タンに近い
- ・モバイルバッテリー……電池は満タン
- ・飲み物……スポドリ、お茶、オレンジジュースが1本ずつ
- ・カロリーメイト……味はプレーン。大きいサイズで4本入っている

「確認完了……。飲み物3本持つておいてよかった……。」

不幸中の幸いだろうか。こういう時にいちばん困るのは飲み物というイメージがある。しかしこれで行く準備は揃った。この状況を脱出する手がかりはひとつ。下においてよと言う壁に書かれたメモのみ。それを鵜呑みにするのもいかがかと思うが、今の状況下でそれに従う他なんの余地も残されていない。自分にそう言い聞かせつつ、俺は1階へとゆつくりと、しかし力強い足取りで歩いていく。

1階へ下り、ふと入口近くの窓を見る。なにか見えるだろうか。そんなことを思い、近づいて覗いてみると上から赤い血のようなものが大量に垂れてきて窓の半分以上を紅く染める。

「うおあ!？」

俺は即座に飛び下がり、様子を伺う。まるで獣にでもなった気分

だった。

その後少しの間ずっと件の窓を見つめ続けていたが特になにも起きなかった。ほっと一息置いたら、また気を引き締めて探索を続ける。

展示スペースの方へ足を運ぶと、【深海の世】の周りの柵が1部外されており、そこから作品の中に行けるようだった。しかし、ただ床の上に書いてあるだけの絵の筈なのにその水の質感は本物の海の中のように見えた。

「この中に入って来いってことかよ……。こいつは付喪神か何かか？」

心を込めて作ったもの、使ったものには魂が宿るといふ。そんな何かを感じさせる作品になっている。さつき見た時はプレッシャーしか感じなかったのに。やっぱりこの世界……

「普通じゃないな……。」

そんな分かりきったことをつい口から零れてしまう。しかし言わずに溜め込むといずれ爆発し、壊れるだろう。そんな最悪な事態を体は回避する。

少しの葛藤の末、俺は【深海の世】の中へ足を入れる。どうやら深海と言いつつも足場はあるようだった。その事に少しほっとしつつも、改めて下へと足を伸ばす。

どうやら足場は階段上になっているようだ。絵の中も、入る瞬間水の音がしたが中身は水ではないらしく、靴や服に水は一切ついていない。これは安心して先に進める。

この先に一体何が待っているのだろうか。俺の役割とは一体何なのだろうか。不安な気持ちを押し殺しながら1歩1歩着実に足を進めよう。

ファーストインプレッション

俺は今すごく気まずい。先程ぶつかった少女は今にも泣きそうな顔でこちらを見つめてくる。そんな顔をされても、今の俺はどうしていいのか分からない。それに何故ここに俺以外の人がいるのか。ここに居るのであれば、なぜ美術館には誰もいなかったのか。

そのふたつの疑問が相まって、俺は思考停止をしてしまっていた。いつまでも思考を停止させている訳にもいかず、何とかショート状態から持ち直すと俺は少女へと向き直る。

「えーつと……。言葉は通じる？」

少女は未だ潤んでいる目をこちらに向けながらこくんとひとつ頷く。正直外国のお人形さんのように可愛いお嬢様と言われてような容姿だったため、念の為の確認だ。

言葉が通じることもわかったところで聞きたいことは幾つもある。しかし年端も行かないようないたいけな少女にあれもこれもと質問するのは酷だろう。なので自分の中で質問を3つに絞った。答えてくれるといいのだが。

「それじゃあこれからお兄さんが幾つか質問をするから、分かるところだけ教えてくれるかな？……ここから脱出するためと思ってくれ。」

少女は再び頷く。良かった。こちらに協力的な様子だ。これですらなくとも彼女は俺をここに閉じ込めた犯人かそれに近い人物出ない可能性が高まった。

「じゃあまず1つ目。君のお名前は？」

「……イヴ。イヴっていいいます。」

「そっか。イヴちゃんね。」

イヴ……。やはりどこかの国の令嬢かいとこのハーフ、いやクォーターなのだろうか？少なくとも身近で聞くような日本人の名前ではない。とにかく次の質問へ移ろう。

「じゃあ2つ目。どうやってここに来たの？」

「えつとね。パパとママと一緒に美術館に行ったの。……………」

どうやら話を聞く限り、俺と同じような方法で来たらしい。要するにお仲間という訳だ。なんだか安心したような。守る労力が増えたことを嘆きたいような。なんとも言えない気分になった。しかしこの子はすごい。俺よりも度胸がある。俺がイヴちゃんくらいの歳の時は勉強もせずにゲームして親に怒られてばかりだった。そんな過去の俺がこんな状況に放り込まれたら泣き喚いて野垂れ死にしていた事だろう。

「……………それでこの部屋をでようとドアを開けたらお兄さんがいたの。」
「そっか。パパやママとはぐれて寂しいよね。パパとママに会いたい？」

「うん！」

「そっか……。わかった！お兄さんに任せて！必ずイヴちゃんを外まで連れて行ってあげる！」

「ほんと!?お兄さんありがとう！」

そう言つてイヴちゃんは顔を綻ばせる。この笑顔に今までの緊張や疲れが消え去る気がした。

しかし何はなくともまず俺の薔薇^命を見つけなければ。こんな変な世界のことだ。見つからぬうちに死んでしまうなんてことも大いに有り得る。

「じゃあイヴちゃん。早速ここを離れよっか。」

「うん。……………ねえ。お兄さんはなんていうの？」

「え？ああ、名前？則内大利すのうちひろとしって言うんだ。ヒロでもトシでも、今まで通りお兄さんでもなんて呼んでもいいよ。」
「スノウチヒロトシ……。変な名前だね！」

どうやらイヴちゃんにとって俺の名前は変な名前らしい。柄にもなくシヨックを受けてしまった。……。この名前に励まされて生きてきたんだけどなあ……。変な名前か……。子供って容赦ないなあ……。ははっ、笑えてくるぜ。

しば。そういう時は大概滑る。それも面白かろう。

イヴと二人きりの時は何を話せばいいのかわからないので、無難なことしか聞けない。幼女と話して誤認逮捕はゴメンだし。美術館内には警察どころか人がいないけどね。無個性と赤い服の女系列は居るけど。

ギャリーが仲間に加わったらはっちゃけさせてあげたい。(願望)
きっとギャリーもその場を和ませるために多少はノリに乗ってくれ
ると思うの

閑話

「イヴちゃんイヴちゃん。」

「？」

「お兄さんの事結局なんて呼んでくれるの？」

「えつとね。ヒロトシ！」

「おつふ……。これは怒った方がいいのか……。喜ぶべきなのか……。」

「??？」

閑話2

「そういえばヒロトシが背負ってるバッグには何が入ってるの？」

「え？これ？うーん。愛と勇氣……。かな？」

「詰まんねえ事言つてねえで早く教えろよ。」

「え？あ、はい。携帯電話とそのバッテリー、あと飲み物と携帯食糧。それと財布です。はい。」

「へえ。いっぱい持ってきてるんだね！」

「あ、うん。そうだよ。」

以上は本編と何ら関係ございません。本編では大利をヒロトシとは呼ばないです。こんな脅迫も致しません。ご了承ください。

Tips : 休息のひとつとき

どうやらイヴちゃんは英語圏の人らしい。想像通りだが、だったらなぜ日本語で会話できるのだろう。たとえ親族に日本人がいたとしても日本語がききとれることは出来るだろうけど、こんな流暢に話すことはとてつもなく難しいはずだ。

もしかして片親どちらかが日本人なのか？それともこの訳の分からない空間が自動翻訳をしているのだろうか？まあどちらにせよ会話が成り立つことに感謝をしよう。

なんて思いながら俺はファーストネームとファミリーネームを入れ替えて自己紹介し直した。……名前変じゃないよな？

「なんでお兄さんは美術館に来たの？」

「うーん。なんでだろうな。普段は美術に興味を持たなかったし。案外ゲルテナさんに呼ばれてるのを俺の第六感が感じたのかも。」

そんなことは無いだろうけれど場を和ませるために態と誇張して伝える。すると彼女のお気に召したらしくニコニコと笑顔を見せている。

こんなところに意図せず一人で放り出されたもんだから、心が壊れても何らおかしくはないはずなのに未だ壊れずに形を保ってる。年齢に見合わないすごい精神力だ。たとえばそれが綱渡り状態だったとしても。

「イヴちゃんって今年幾つ？」

何の気なしに俺はちよつとした疑問を投げかける。少しでも話が途切れると俺が気まづくくなるからだ。

でもこの話は少し踏み込みすぎたかもしれない。女の人はたとえ若くても年齢の事を聞かれるのは嫌がると聞いたことがある。小学生くらいの子にそれは杞憂が過ぎるかも知れないが、危ない橋はいく

ら叩いたところで渡りたくはない。

だがこちらの葛藤に全く気づいていないようで、イヴちゃんは口を開く。

「えつとね。9才！3年生になったの！」

「そっか9歳か。学校が楽しい時期だね。授業も少し難しくなってきた面白いでしょ。」

「うん！この間はね！かけ算したんだよ！」

「おつ。じゃあ九九は全部言えるかな？」

「うん言えるよ！1×1＝1、1×2＝2……」

どうやらイヴちゃんは楽しく学校へ通っているみたいだ。こういう話をしていると、なんだか親になった気分になる。子供を持つってどんな感じなのだろう。こんな状況で考えることでもないがふと考えてしまう。

きつとイヴちゃんくらいまで大きくなると今までの苦労分凄く可愛いんだろうなあとか。もしかしたら小生意気な子供になっていつまでも苦労するのかなあとか。

そんなことを考えているとイヴちゃんがムスツとした顔でこちらを覗いている。

「ん？どうしたの？」

「む〜！九九全部言えたのに聞いてなかった！」

「あー。ごめんね。親のことをいろいろかんがえちゃって。」

なんて正直に濁しながら言うと、イヴちゃんは頭にハテナを浮かべながら俺を見つめてくる。

「それってお兄さんのパパとママのこと？」

「俺の両親と言うよりは俺が子供を持ったらって感じかな。子供がイヴちゃんくらいになった時に自慢できるお父さんになれるかなって。それとも子供に何一つやってあげられないお父さんになるのかな……。ってイヴちゃんには難しかったかな？」

「もー！わたしそんな子どもじゃないもん！」

そう言いながら頬をプクッと膨らませる。そんな姿が愛らしくて、ついほっぺを指でつんつんとつついてしまう。それを続けていると、堪忍袋の緒が切れたのかももう知らないと言わんばかりにそっぽをむく。

「ほんとにゴメンね。イヴちゃんが可愛くって。妹がいたらこんな感じだったのかな。」

「わたしはお兄さんの妹じゃないもん。でも可愛いつて言ってくれたから許してあげる。」

「ははあ！有り難き幸せえ！」

「お兄さん何それえ！あははは！」

俺は正直に話したことを少しだけ後悔しつつ話を誤魔化す。どうせ誰にも分からない問題だ。少なくとも9歳の女の子に話す内容では決してない。俺はなにも見えていないのか。自分自身を叱責する。付け上がらないように。現実を見据えるために。だいたい俺なんて

「お兄さんはきつと。」

「えっ」

「お兄さんはきつといいお父さんになるよ。」

「――。」

この子は何を言っているのだろうか。いいお父さんになる？俺が？まさか。そんなわけが無い。だって俺なんてズボラで生意気で人に楯突くことだけは1人前で……

「ここまでいっしょに歩いてきたわたしが言うんだもん！まちがいなふよー。」

「――そっかあ。そうだいいなあ。」

「きつとそうだよ！」

この時俺は、初めてイヴちゃんに心を開いた。そんな気がした。

第二章 ふたり 薔薇を探せ

「じゃあ自己紹介も済んだし、早速出発しよっか。イヴちゃんは大丈夫？」

変な名前と言われて落ちた気分を無理やり引っぱりあげ、先に進もうと提案する。するとイヴちゃんは出てきた部屋に気になるものがあったようで後ろをチラチラと見ている。

「どうしたの？部屋の中に何か気になるものでもあった？」

「うん。」

「わかった。ちよつとだけ入って見よっかな。イヴちゃんはどうする？」

「1人はいや……。」

そう言つてイヴちゃんは俺の服の端っこを掴む。

そりやそうだ。今まで1人でここまで来たんだ。それが短い道のりだったとしても。この歳で親が居ない心細さはとてつもなく心に来るはずだ。この子の辛さをわかつてあげることは出来ないけれど、俺と同じ仕打ちを受けている以上恐怖を抱いていることに変わりはない。そんな子に俺がしてやれることといえば行動を共にとることくらい。出来ることならその恐怖心を全て担ってあげたいのに。イヴちゃんには申し訳ないがそれしか出来ないのだ。

「わかった。一緒に行こうか。」

「うん……。」

イヴちゃんが出てきたドアと対面する。この先には一体何があるのか。考えるだけで嫌になる。でもきつと見た目だけのハリボテだろう。怖くない恐くないこわくないコワクナイ……：自分にそう言い聞かせる。そして自分の決心が鈍らないうちに一気に扉を開け放つ

「女の……人？」

「あれ？表情が戻ってる……。」

そこには静かに微笑む女性の絵が飾ってあった。穏やかなその表情はまるで子供を見守る母親のような。そんな温かさを感じる。ただ一つ欠点を挙げるとしたら、この女性は髪の毛が長すぎて額縁に収まっていなところだろう。これではまるで額縁の後ろに生きている人が立っているみたいだ。

しかし、イヴちゃんが今言った言葉も気になる。『表情が戻ってる』。つまりはこの表情が1度変わったということだ。それでそれに恐怖したイヴちゃんは、慌てて扉から出ようとしたところ俺にぶつかった。確証はないがおそらく間違っていないだろう。ならばどんな風変わったのか。そんなことを考えていると、絵画の下に何やら書いてあることに気づく。どうやら作品紹介では無さそうだ。

『薔薇とあなたは一心同体

命の重さ知るがいい。』

……これは俺の想像していたことは間違っていないようだ。ならば尚更俺の薔薇^命を見つけないければ野垂れ死にする可能性が爆増する。しかもイヴちゃんの目の前で。

それは情操教育的にも倫理観的にも宜しくないだろう。一刻も早く探し出さなければ。

「ねえイヴちゃん。イヴちゃんの薔薇はどこにあったかな？」

「わたしの薔薇はね。部屋の前にあった花瓶に入ってたよ。」

「そっか。……お兄さんね。まだ自分の薔薇が見つかってないんだ。だから探すの手伝ってくれるかな？」

「うん！いいよー！」

「それとね？その薔薇はとても大切なものなんだ。だから絶対に無く

したり花卉を筆つちやダメだよ。これは約束だ。」
「……………わかった！」

子供はとても好奇心が旺盛だ。たとえいくら大人しい子でも好奇心には勝てないだろう……………と思う。

イヴちゃんに限って薔薇を筆るなんてことはしないとは思いますが、口頭で注意しておくことに越したことはないだろう。

気に食わない

どうやらこの部屋にはこの絵画以外何も無いらしい。イヴちゃんが入った時も鍵くらいしかめぼしいものはなかったと言っていた。

とりあえずこの部屋を出るために絵画に背を向けると、何故か開け放つてからそのままにしていた扉が閉まっていた。なぜ閉じたんだろうかと考えながら扉のノブを捻り、開けようとするがなぜだか開かない。何度か捻って押したり引いたりしてもビクともしない。

「……イヴちゃん。さつきここを出ようとした時って普通に開いた……？」

「？うん。ガチャってしたら開いたよ。」

「そっかー……。なるほど。俺が気に食わないと。」

俺は話を聞いて2つの仮説を立てる。1つは俺が入ったことにより何かしらこの部屋に変化が出たパターン。このパターンだとその変化を見つけない限り、この部屋からは出られないだろう。そして2つ目は、イヴちゃんのみが扉を開けることが出来るパターン。こつちの場合だと、なんとというか俺の立つ瀬が無い。まるでお化け屋敷の中を小学生の女の子に先導されている気分になる。なんとも情けない。とにかく先のふたつを確認しなければ。俺の薔薇^命の所在も脱出の糸口も掴めないというもの。まずはイヴちゃんに扉を開けてもらおう。

「ねえイヴちゃん。ちょっと扉開けてみてもらってもいい？」

「なんで？お兄さん開けられないの？」

「うーん。それもあるけどちよつと確認したいことがあるからね。」

「ふーん、変なの。」

そう言いながらイヴちゃんが俺の前に立つ。彼女もノブを捻って扉を開けようとするが開かないらしい。これでイヴちゃんのみが開

けられるという考えは薄くなる。まだ可能性が無くなった訳では無いが。

ではもうひとつの方をメインに考えよう。なにか違和感のするものはないか。少しでも気になるものはないか。探せ。俺の未来を探せ。今のその先を探せ。

「お兄さんどうしたの？お顔怖いよ……。」

「——あ。ごめんね。この部屋に違和感がある気がしてね。ちよつと考えてたんだ。何が違和感に感じるのかって。」

「違和感……？」

「そう。この部屋の違和感。あの絵の人の表情が戻ってる違和感。

……そういえばなんであの絵の人は怖い顔になったの？」

「え？鍵を取ったから……。」

鍵……。イヴちゃんが鍵と理解できるくらいには鍵の形をしているのだろう。大方ほかの扉を開ける鍵なのだろうが、ならこの部屋の扉にも鍵穴があってもおかしくない。

そう思い俺はノブの辺りをよく観察する。……あった。ノブの下にあったからか見えていなかった。この鍵穴の形からしてアンティークのような形の鍵だろう。

つまりその鍵は、これから何かしらアクションを起こすために必要なフアクターなのだろう。では今、閉じ込められてしまったフアクターは？……俺か？俺に足りないものか？もし後者なら薔薇^命がこの部屋にあるはず。それで無いのなら……。

思考の海にたゆたっていても仕方ない。何かしらの行動を起こそう。そう思い俺は再び絵画に近づく。

近づくとも尚更この絵は生きているように見える。絵画に間違いは無いのだが、質感が絵画のそれでは無いのだ。……もしかしたら俺たちの会話も聞いていたのかもしれない。それで俺はロリコンかなにかと勘違いされてるから外に出られない……？

「えつと……絵画さん。俺の声は聞こえますか？」

向こうからのアクションは何も無い……と思ったが、壁に文字が浮かぶ。どうやら聞こえているようだ。

「どうしましたか？ろりこんさん。」

……。俺は怒ればいいのか悲しめばいいのかわからなかった。ただ一つ、この勘違いを解く。この事はこなさねばならない。

「ロリコンでは無いです。なんで俺たちをこの部屋に閉じ込めてるんですか？」

「この子と二人きりにするとあなたが何をするか分からないからです。」

「ロリコンではないので何もしません。外に出してください。」

返答はない。どうやら俺の事を認めてないようだ。致し方ない。交渉の時間だ。

「では、俺の薔薇が見つかったら彼女に渡します。彼女が俺の行動を不快に思ったら薔薇の花弁を1枚ずつ筆る。これでどうでしょうか？」

「……。仕方がありませんそれで行きましょう。」

そう壁に書かれた次の瞬間。後ろの扉から鍵が解錠された音が聞こえる。ようやくここから出られるらしい。この美術館は俺のことが嫌いらしいことはこの一部屋目で嫌という程理解した。次からは今以上に気を引き締めて当たるとしよう。それと、渋々とはいえ鍵を開けてくれた彼女？にも感謝を述べなければ。……本当は嫌だけど機嫌を損ねてまた閉じ込められるのも嫌だから。

「鍵を開けてくれてありがとうございます。約束したことは必ず。」

それ以降この絵からの返答はなかった。だがそれが普通なのだ。やはりこの美術館は全てがおかしい。改めてそう思える出来事だった。

フツと一息ついて後ろを振り返るとイヴちゃんが何かありえないものを見るような目でこちらを見ている。俺の行動を思い返すと、なるほどそれもそうか。俺はいきなり絵に話しかけ、鍵を開けたように見えるのか。

「えっとー……とりあえず外に出よっか？」

「——お兄さんがこの美術館にわたしを閉じ込めたの？」

「違うよ？俺も閉じ込められたの。うーん……どうしたら信じてくれる？」

「えっとじゃあね。お兄さんの子供の頃のお話して！」

「え？子供の頃？うーん……一応世間的にはまだ子供なんだけどなあ……。まあいいよ。」

そんな話をしながら俺たちは外に出る。

その後ろではあの絵画が変わらずに微笑み続けている。その微笑みは子供の成長を微笑ましく見守るお母さんの様な優しいものだった。

次の部屋へ

「じゃあ小学生の頃の話をしようか。……ん？」
「うん？お兄さんどうしたの？」

机の位置が変わっている。それに、その上にある花瓶の中には1輪の薔薇が入っていた。見たことの無い色の薔薇が。

どうやらイヴちゃんはこちらをずっと見ながら話していたから気づかなかつたらしい。

「いや、ね？ついに俺の薔薇も配られたらしい。ほら！」
「ふああ……。白色の薔薇、キレイ……。」

どうやら俺は白い薔薇らしい。色によって花言葉が変わるのかわからないが、まあもしあつたとしてもバラなのだし悪い意味では無いだろう。

そんなくだらないことを思いながら、俺はイヴちゃんに白薔薇を渡す。先程あの絵画とかわした約束を無碍にする程、俺の根性は座っていない。それに、これからもし力仕事がある時に毎回受け渡しを発生させるのも面倒だからだ。

「じゃあイヴちゃん。俺の薔薇を持ってってくれるかな？」

「え？でも……。」
「そんなに深く考えなくていいよ。俺からプレゼントして貰ったくらいの感覚でいいんだ。」

「……うん。わかった。」
「ありがとう。イヴちゃんの薔薇と同じ扱いしてあげてね？じゃないと俺、悲しくて苦しくなるかも。」

そんな冗談を言うと、イヴちゃんはひとつの決心が着いたかのように強く頷く。これで二つとも一緒に持っていてくれれば直接花卉を

筆ってくる奴がいてもイヴちゃんだけにダメージはいかないだろう。むしろ俺のバラばかりを狙って貰えるといいのだが……。

そんなことを思いながら進むと来た当初はおいでと書いてあった壁にかえせと書いてある。今手に入れたものと言えば白薔薇のみだが、それを返して欲しいのだろうか？だがそれを返してしまったら、その時は俺の命が危なくなる。

そう思っているとイヴちゃんに異変が。どうやら心当たりがあるらしく、すっかり怯えてしまっている。俺はどうなろうと仕方ないが、せめて彼女は心身ともに元気なままで元の世界に戻って欲しい。だから俺は彼女を励ました。

「大丈夫だよイヴちゃん。もし何かが悪くてきたら俺が助けるから。さつき約束したでしょ？外まで連れて行ってあげるって。だから、信じて？」

「……うん！」

我ながら根拠の無い約束をしてしまったものだと反省をする。しかし、こんな小さな子にここを一人で脱出しろとは俺には言えなかった。後悔はない。

しかしこれで約束の件は大丈夫だろう。あとは最大限脱出ルート
の探索をするだけだ。1人だと見落としがあるかもしれないがこちら
らは2人。4つの目があれば大抵は見つかるといふもの。これは
……勝ったな。

「お兄さん、わるい顔してる……。わるい事はしちやダメなんだよー！
「悪いことはしないよ。ただ、2人だから1人より心強いなって。」

「えー！絶対うそだー！わるい顔してたもん！」
「本当だって。それよりもここから進もう。多分ここからが本番だからね。」

そういうとイヴちゃんは緊張した面持ちになる。それはそうだろう。この馬鹿げた美術館の入口、所謂エントランス部分でこんなにく

んどくさいことになっているのだからこの先何が待ち受けてるのか。正直考えたくもない。だけど脱出するためには前に進むしかない。小休止はあつても完全に足を止めることはしたくない。

少し進むと廊下は行き止まりらしく扉と机、絵画があつた。机上には何故かノートが置いてある。ノートを開くと何も書かれていない。どうやら新品のノートらしい。ノートを持っていこうとしたがどうやら持つていけないらしい。ノートの片面が机に完全にくっついて取れそうにない。メモが取れるだけでだいぶ楽になると思ったのだが持つていけないのであれば致し方ない。無難に日付と名前、それと少し気晴らしに机の近くに飾つてある絵画を簡単にだが書いておこう。

……【幾何学模様の魚】ねえ。幾何学がなにかよく分からないが、なんかが凄いいことは分かる。

俺が書き終わリイヴちゃんも書き出したので、先に扉が開くか試してみる。——。どうやら開かないみたいだ。でもイヴちゃんは鍵を拾つたと言つていたし、きつとそれがここを開けるものだろう。そう思い扉から少し離れて未だノートに記入しているイヴちゃんの方へ向かう。

書いている途中のノートを少し覗き込んでみるとノートには「I b」の文字が。

あれ？イヴって「E v e」では無いのか？というかその前に発音的にBではなくVの発音なのでは？あれ？

「あ！お兄さん覗かないで！」

「え？……ああごめん……。」

「もう！乙女のノートを覗くのはマナー違反だよ！」

「うん……。そうだよねうん。」

このままではダメだ。一旦考えないようにしよう。思考を関係ない方向に持つていかれるな。脱出のことを第一に考えろ。

……よし大丈夫。冷静になった。冷静になったらなつたでこの

ノートはイヴちゃんだけのノートではないような……なんて思考が浮かび上がるがそれはどこかに投げ捨てておこう。少なくとも今ツツコミを入れたらイヴちゃんの機嫌を損なうかもしれない。

なんてくだらないことを考えていたらイヴちゃんが書き終わったようだ。

「大丈夫かな？ じゃあ出発しようか。イヴちゃん、さつき言ってた鍵は今出せるかな？」

「うん！ コレだよ！」

彼女彼女はそう言うと言いつつ青い鍵を取りだした。なんとというかおもちやのような作りの鍵だ。こんなもので開くのだろうか？ しかしこれに賭けるしかない。そう思いながら鍵穴に挿してゆつくりと回す。すると目の前の扉からへカシヤンと音がした。

閑話：クリスマスif

「二」メリークリスマス！「二」

俺たちはそう言いながらグラス同士を合わせる。あの美術館に迷い込んだのが9月頃だったからもう既に3ヶ月近く経っているという事だ。ほか3人に近況を聞きながらいつかみんなで会えないかと話していたら、みんなクリスマスイブは家族とすごしたりなんなりと予定が入っていたがクリスマスに大きな予定は無いと言っていた。なのでこうしてみんなで会うことができたというわけだ。

……皆クリスマスに会うような友達はいないのだろうか？俺は居ないがこうして会えたのだから居ない訳では無い。決して友達が少ない訳では無い。無いと思ったら無い。

「いやーみんな元気そうでよかったわ！アタシはメアリーに振り回されっぱなしだったからこういう会は気楽でイイわね。」

「ちよつと！ギャリー！そんな言い方はないじゃん！ちよつとこの世界が楽しくて舞い上がったただけなんだから！」

「その舞い上がり方が尋常じゃないのよ……。もうっこつちの身にもなって欲しいわ。」

「まあまあ。ギャリーもメアリーも落ち着いて。メアリー、あのケーキ一緒に食べよ？」

「ケーキ！食べる！私イチゴが多いところがいい！」

そんなことを言いながらイヴとメアリーはケーキの所へと歩いていく。ケーキは文句が出ないように等分されてあるもの

を買ってあるから苺の数に違いは無いのだが、まあ後で俺のいちごをあげれば少しは静かになってくれるだろう。

とりあえず今は子供は子供で、大人は大人で話すとしようか。

とは言ってもこの三ヶ月間何か変わったことが身の回りに起きたかと聞かれれば、俺の周りにそんなおかしなことは何一つ起きなかった。美術館の件件から何一つおかしなことは起きてないはず。強いて

いくなれば英語の聞き取りは前より断然上手くなった程度だろう。しかし皆が何を言っているのかはわかるが喋ることは出来ない。それは3人も一緒に日本語の聞き取りはできるようになったらしい。だからこそこういう会が成り立つのだろう。……俺が英語喋れるようになったらもつとみんなも楽なんだろうなあ……。

「で？そっちはどうなのヒロトシ。彼女のひとりでもできたかしら？」

「出来るわけないでしょ。欲しいとも思わないし。彼女との時間より今この皆という時間の方が大事だから。」

「んもう！そんなんじや乗り遅れるわよ！もつと男ならガツガツ行かないとー！」

「ギャリーも男でしようが……。」

「で・も！そう言ってくれたのは凄く嬉しいわ。アタシも同じ気持ちよ。」

なんて話しながら俺たちはイヴとメアリーの方を見る。こんなふうに楽しく過ごせるのもみんなであるの世界から出られたおかげなのだ。今はただ、あの世界の父ゲルテナに感謝しよう。メアリーも一緒に出してくれたことを……。

「ちよつとギャリー！トシ！そこでイチヤイチャしてないでこっち来て遊ぼうよ！それとプレゼント交換もしたい！」

「メアリー。ご飯があるからバタバタしちやダメだよ。ホコリが入っちゃおうよ？」

「うゝ……。ごめん、イヴ。」

「さてと！お嬢様もお呼びですしそろそろ行きましよ！ヒロトシ！」

「ハイハイ。仰せのままに。メアリー！プレゼント交換はまだだ。先ずは料理を食べきるぞー！」

「トシ！そう来なくっちゃ！私はお肉がかり！トシは野菜がかり！それでもいい？」

「ダメだ。バランスよく食べなさい。せつかくイヴとイヴのお母さんが美味しい料理を作ってくれたんだ。全部堪能して食べなさい。」
「え〜！トシのケチ！アホ！わからず屋〜！」

クリスマス会もお開きになり、イヴを送っている最中だ。メアリーはギャリーと2人で暮らしているので送る必要は無いのだろうが、俺もみんなと別れるのは名残惜しいので3人とも送っていくつもりである。

「ギャリー。メアリーは寝た？」

「ええ。もうぐっすりよ。」

「2人ともこの日を楽しみにしてたからな。楽しんでくれたようで何よりだよ。」

「ヒロトシもこの会を開いてくれてありがとね。」

「別にお礼を言われることでもないよ。俺がやったことといえればイヴのお母さんに料理を頼んだこととそれを運んだことくらいだ。」

そう。俺のしたことなんてそんなものだ。だから褒められるとなんだかむず痒くなってしまふ。しかしギャリーはそうは思っていないらしい。少しムスツとした顔でこちらを見つめてくる。

「……何さ。そんなに見つめられても何も出ないぞ。」

「もつとアンタは素直に物事を受け取りなさいよ。ひねくれてても何もいいことはないわよ。」

「別にひねくれてなんかないさ。ただ俺が思ってることを言ったただけだよ。」

「じゃあこの会を立案したのは誰だっけ？場所の提案をしたのは？準備と後片付けをしたのは？」

「俺です……。て言うか！後片付けは皆でしたらうが！準備もイヴのご家族に手伝ってもらったし。あの会場の予約をしたのはギャリーだ。俺なんて全体的にちよつと手を出しただけなんだよ。」

だから何も褒められることはしていない。そう言おうとした。しかし俺がそれを言う前にギャリーは足を止める。何かを言おうとしている。彼は一体何を言おうとしてるのか。それが気になり俺も足を止める。

「多分アタシならこんな会は開けなかった。……いや開けなかったの方が正しいわね。」

「……なんで。なんでそう思うんだ？」

「さつき言ったでしょ？メアリーに振り回されてるって。でも実際はこの子に助けられてる。でもアタシはこの子と暮らしていく為に働かないといけない。たとえ少し収入がいいところで働いていたとしても賄えないくらい人一人養うのってすごくお金が必要なの。でも前のアタシにそんな経済力はなかった……。」

「それでギャリー自身に余裕が無いってことか……。」

「そういう事。だからこの会を開いてくれたアンタにはすごく感謝してる。アタシの心に余裕をくれた。メアリーの心に楽しみをくれた。それってすごいことなのよ？」

そんなことを言いながら彼は笑う。俺はそんな彼になんと声をかければいいのか分からなかった。でも何かを伝えたい。そんな気持ち俺の心突き動かしている。

「ギャリー。きつと大丈夫だよ。」

「えっ？急にどうしたの？」

「きつと今は慣れない環境に入ってどうすればいいか分からないだけ。これから徐々に分かってくいようになるさ。」

「ヒロトシ……。」

「メアリーもきつと分かってくれてるから家の色んなことを手伝ってくれるんだ。彼女も子供じゃないから。ならばはギャリーが慣れるのを待つだけ。慌てなくて大丈夫。……なんて！ギャリーもこんな当たり前のこと分かってるよな。ぶっめん。」

なんて偉そうな口を聞いてしまったんだろうか。ギャリーは俺よりも年上だ。こんなこと分かってて行動しているだろう。俺の言動が悔やまれる。そう思っただけ俺は顔を伏せてしまった。

「ヒロトシ。顔をあげてちょうだい。」

「えっ?」

「ありがとう。すごく嬉しかったわ。だからそんなに落ち込まないで。言った本人が落ち込んでたらアタシも気分が下がっちゃうわ。」

「ギャリー……。ありがとう。」

「ええ。どういたしまして。さてそろそろイヴの家に着きそうだから2人を起こしてあげましょ。サヨナラくらいは顔を合わせてほしいじゃない?」

「そうだな。起こそうか。」

俺が励ましていたはずなのに励まされるなんて、俺もまだまだ子供なんだな。でもそんな関係が俺達にはちょうどいいのかもしれない。そんなことを思いながら俺はギャリーを横目で見ると、メアリーはなかなか起きないらしく大変そうにしている。

そんな光景に少し笑いながら俺もイヴを起こす作業に入る。

「それじゃあまた。次もみんなで見るといいな。」

「そうだねお兄さん!」

「次のイベントは何かしら。新年のカウントダウン?」

「うーん……。私起きてる自信ないなあ。」

「だったら皆で初詣に行こうか。それなら朝でも昼でも大丈夫だし。」

そういうと彼らは一様に首を傾げる。そうか。初詣は日本の文化か。すっかり失念していた。まあお正月にもし会えたらその時に説明をすればいいか。

なんて初詣の説明を未来の俺に託す。きつとうまくやってくれるだろう。

「まあ元旦に会えたら説明するよ。そっちの方が時間もあるから。」

「ガンタン？つてのもよく分からないけどわかったわ。楽しみにしとく。」

「年越してすぐ会うの？やったー！！イヴ！いっぱい遊ぼうね！」

「うん！いっぱいあそぼ！」

今年の正月はお年玉準備しとかないとなあ……なんて思いながら3人と別れる。

どうやら2人も家がそこそこ近いらしく、ここでいいらしい。なんだか一気に1人になって少し寂しいが、まあ元旦に会えるかもしれないんだ。それまでの辛抱だな。そんなことを思いながらフーッと息を吐く。口から出た行きは白くなり、外の寒さを思い出させる。

「おーっさむさむ。さっさと帰ろつと。」

俺はぶるつと体を震わせながら帰路に着く。みんなと次会う日を心から楽しみにしながら。

なんにもない

1面真っ青の廊下を抜けた先は、1面緑色の部屋？だった。正面右の壁には様々な虫の飾つてある。そこから少しだけ視線を左に寄せると、奥へと行けそうな通路があり、その前の柱にはなにやら注意書きらしきものが貼つてある。

他にも何かないかと辺りを見回すと右奥にはどうやら扉がありそうだ。左側には壁しかない。

今できることは2つ。左前の通路に行くか、右奥の扉に行くか。俺一人ならば右奥の扉に行くが、同行者の意見も聞かなければ。そう思いイヴちゃんに声をかける。

「道がふたつあるけど、イヴちゃんは左と右どっちに行つてみたい？」

「うーん……。右側のドアが気になるかな。」

「あ、やっぱり気になる？じゃあそっちに行つてみようか。」

「え？お兄さんはそれでいいの？」

「もちろん。俺もそっち気になるなあって思つてたし。」

嘘偽りない一言ともに扉の方へ歩みを進める。まあどちらにも行くことになるだろうから、気になるところは虱潰しに調べていく。そうすればきつと見つからないものはほとんど無くなるだろう。なんて、謎解きそつちのけで探索のことばかり考えていると、イヴちゃんが俺の服をちよんとつまんでこちらを引き止める。

何かあったのかと振り返つてみると、彼女はしゃがみこんで足元を見ていた。何を見ているのかと俺もそこに目を向けてみると、そこには蟻がいた。なぜだかこの蟻はイヴちゃんをしっかりと認識している感じがする。

「ぼく　アリ。」

「!？」

「へく。ありさんって言うんだ！よろしくね！」

蟻が喋るのかこの世界は。何が何だかもうよく分からない。俺が混乱しているのをよそに彼？彼女？は話を続ける。

「ぼく 絵 だいすき」

ぼくの 絵 かつこいい」

「そうなんだ！見てみたいなあ。どこにあるの？」

「ぼくの 絵 見たいけど」

ちよつと 遠い ところにある」

「そっかく……。じゃあ私たちが持つてきてあげる！待つててね！」

どうやら俺が惚けている間に話が進んでいたようで、俺たちは蟻の絵を探すことになった。まあこの狭い部屋の中だ。きつとすぐ見つかるだろう。なんてことをこの部屋を見て思う。

イヴちゃんが蟻との会話も終わったところで俺たちは扉の方へと向かう。途中で蝶の成長過程が1枚ずつ描かれている絵画を見ながら歩いてみると、直ぐに扉の前へと着いた。

「じゃあ扉開けるよ。すぐ逃げられる用意をしておいてね。」

「うん……。」

イヴちゃんは少し緊張しているようだったので、つい頭を撫でてしまった。まあこれくらいならあの微笑んでいた絵画も許してくれるだろう。……多分。

「……え？お兄さん？」

「大丈夫。ちよつと覗くだけだからそんなに緊張しないでいいよ。」

「そうなの？」

「うん。それにイヴちゃんちゃんは無事に元の世界に帰りたいたろ？ずっと緊張してたら途中でバテちゃうからね。肩の力抜いて程よくリラククスしよう。」

俺は言葉を選びながらイヴちゃんへ語りかける。それでも俺の伝えたいことが伝わっているかなんて分かりやしない。むしろ伝わってないと思う。それでも俺は励ましの言葉を口にする。たとえ言葉で伝わっていなくても、口にしないと伝えられるものも伝わらないから。だから俺は言の葉を紡ぐ。

やはりと言うべきか、イヴちゃんの緊張は取れていないように見える。この間偶然見つけたものだが肩の力を抜く方法を見た事があり、まだそれを覚えてる。本当に効果があるのか実践をしていないから分からないがやらないよりはマシだろう。ネット情報を信じてみますか。

「よしイヴちゃん。1回思いつきり肩に力をいれてみようか。こんな感じでやってみて。」

「え？肩に？こうかな？むむむ！！」

「そうそう。そしたら次は一気にその力を抜いてみようか。こう、だるくんと。」

そう言っただ俺は何も力が入っていない肩を揺らす。こういう時は見本があるとわかりやすいと思っただけだが、成程これは有効だな。

俺も少し緊張していたらしくなかなか程よく緊張が抜けていいパフォーマンスができる気がしてくる。それを見せる相手が芸術品相手というのがなんとも言えないところではあるが。

どうやらイヴちゃんも少し緊張が緩んだようで少し安心した。張り詰めた緊張ほどぶつぷりと言った時に怖いものは無い。後でしっかりと休憩を挟まなければ。飲み物もある事だし心身ともに休まることを期待するでしょう。

「どう？少し気が楽になったかな？」

「うん！多分！」

「そっかそっか。じゃあこの扉の先をチョロっただけ覗いちやおつか。」

「おー！」

子供というものは本当に正直ものだ。こちらとしても清々しいほどの正論を言ってくることもある。だから子供は好きだ。俺が、大人が見ないようになっているところにもズカズカと入って気持ちがいいくらいにズバツと彼ら彼女らの意見を言ってくれるから。

扉の中をそろりと覗くと中央にそこそこ大きな穴があるくらいで他に何も無かった。

改めてしっかりと扉の先へと足を踏み入れる。穴のように見えたものの正体はやっぱり穴だった。しかも見えていたものより大きいように見える。これくらいならジャンプすれば飛び越えられそうだし。しかしこのままだと俺はともかくイヴちゃんが通れないだろう。何処かにこの穴を隠す板状のものを探すことに。

1度扉を出て一息つく。どうやらイヴちゃんもほつとしていたようだ。それはそうだろう。こんな蟻が喋る世界なんだ。ここから先絵画から虫が飛んできたり石像が動いたとしても不思議ではない。

どんな原理なのかは気になるが、きつと思いい出に引きずられている幽霊みたいなものだろう。

なんて妄想が俺の中で縦横無尽に動き回っているのを感じながら俺はイヴちゃんに尋ねる。

「イヴちゃん。ここらでちよつとだけ休憩でも挟む？」

「うん、そうする。」

二つ返事で帰ってきた言葉に少し安堵しながら俺たちは少しだけ壁によりかかりながら座った。

黒い手

蜘蛛の絵と蝶の卵の絵「プロローグ」の間で少しだけ休憩をとる。だいたい体感にして10分15分くらいだろう。

あまり休憩になつてなかつたかもしれないが、お互いにこんな訳の分からない空間に長居はしたくないためそろそろ動くことにした。

さつき右側の扉の中を見てきたが今のままでは進めないため、何かしら穴を塞いでくれそうな板状のものを探すために入口から見て左前の置くね続いていた通路？を見に行こうと思う。

しかしその前に、柱に貼つてあつた注意書きのようなものを読んでおかないと痛い目にあう可能性がある気がする。ここまで何者かに試されている、そんな予感を感じたから。

「さてイヴちゃん。ここにはなんて書いてありますか？」

俺は柱の注意書きを指さしながら自分なりに学校の先生っぽくイヴちゃんに聞いてみる。何となくそのノリを察してくれたのか、イヴちゃんはしつかりと手を挙げて書いてある文を読み上げる。

「はい！《はし に ちゆうい》です！」

「正解です。日本語はわかりますか？」

「分かりません！」

日本語が分からないのならば、今イヴちゃんが話している言語は一体何なのか。恐らく多くの国で共通言語となつている英語なのだろうとは思っているのだが、まあ確かなソースはないのでこれ以上は気にしないことにする。

それにしてもイヴちゃんはだいぶノリノリで生徒になつてくれている。ならこちらも先生を続けよう。少しでも楽しく進めるように。

「なら結構。ともかく端に注意して歩いていきましょう。」

「分かりました！はしっこには寄らないようにします！」

「いい心構えです。お……私が先頭を歩きますので着いてきてくださいね。」

「はーいー！」

小学校の先生ってこんな感じなのだろうか。如何せん小学校卒業は5年前。入学に至っては11年前になる。楽しいことや辛かったことなどは辛うじて覚えているが、そんな細かいとこのなんて覚えていない。まあきつとこんな感じだった。そんな感じがする。

そんなことを思い出しながら柱とイヴちゃんを背にして立つ。

「イヴちゃん。服しつかり掴んでね。何が来ても守るから。」

「う、うん……。」

自分自身何が来るのか身構えながら言ったせいも、少し語気が強くなってしまったようだ。そのせいか分からないがさつきまで元気があった(様に見えた)イヴちゃんは少し脅えていた。でも正直俺自信いっばいいいっばいなところもありイヴちゃんを気遣う余裕はなかった。端に注意と書かれていたが一体どちらからいつ何が来るのか。その事が思考のほとんどを占めていた。

気を引き締めながら歩きはじめるとそいつはすぐに姿を現した。

少しびっくりしたが腰を抜かすほどではなくて少し安心した。流石にイヴちゃんの前で恥ずかしい姿を晒したくはない。

「これは……手か？」

「この手まっくろだね。」

この手をよく観察してみるとどうやら壁を突破って出てきたので

はなく、壁が手を出しているような感じらしい。少なくとも腕のあるあたりの壁に穴や罅は見受けられない。

しかし、この手に体が触れてしまうとどうなるのだろうか。少なくとも警告文が張り出されている以上危険なことに変わりはないのだが、何がどう危険なのか知っておかないと心に油断ができてしまう。

「……よっし。いっちょ握手してみるか。」

「お兄さんこの手と握手するの？」

「うん。何が危険なのか分からないと怖いでしょ？だから一回触っておきたいなって。」

「え〜！危ないよ〜！」

「大丈夫大丈夫。イヴちゃんは一応俺の薔薇を見ておいて。何か変化があるかもしれない。」

「うーん……。わかった〜。」

渋々と言った感じだが、イヴちゃんは薔薇を見てくれることに。この出方からしておそらくこの手はダメージを与える「敵」のようなものなのだろう。そして、薔薇と命は一心同体あが本当なら俺の薔薇は何かしらの変化が現れてもおかしくない。

これは俺の為。イヴちゃんの為。ひいては未来の為の先行投資なのだ。そう自分に言い聞かせながら俺は覚悟を決める。

「——イヴちゃん。行くよ。」

「こっちはいつでもいいよ。薔薇はちゃんと見てるから。」

冷や汗が背筋を伝う。俺の直感が止めておけという。しかし今ここで確認しておけば自分たちに危害を加えてくる奴らの特徴が掴めるかもしれない。それがわかるだけでかなり大きいだろう。

そんな葛藤が再び襲ってくるが、何とかそれを意地で抑える。そうして俺は黒い手にゆっくりと触れた——。

閑話：お正月 if

「二「あけましておめでとうございますー!」」

「クリスマスに続いて年明けも一緒に過ごせるとはね。嬉しいわ!」

ギャリーはそう言うのと俺たち3人をゆっくりと見る。三者三様に着物を着ているからだろうか。まあ俺は紋付羽織袴なのだが。

そんな見慣れない格好をしているからなのか、ギャリーは目を輝かせてこちらを見てくる。

「キヤー! イヴ! メアリー! 2人とも似合ってるわ! ステキよ!」

「ふっふーん! まあ当然よ! 私はお父さんがお父さんだもの!」

「うーん……わたしには派手じゃないかなあ? メアリーみたいにキレイじゃないし。」

「イヴ。似合ってるぞ。安心しろ。」

なんて四種四様に言葉を放っていく。どうやらイヴは着物が似合っている自信が無いらしい。しかしそんな心配など無用の産物だろう。とてもよく似合っている。口下手でそんな言葉しか言うことは出来ないけど。

一頻り服装で盛り上がったところで俺は懐からポチ袋を出して、イヴとメアリーへそれぞれ渡す。このお金の出処は俺のお年玉だ。早く働いて自分の稼いだお金で払えるようになりたいが、まだ先の話だろう。

「ねえトシ? この小さな袋は何?」

「お兄さん。この中に何が入ってるの?」

「2人ともその中身を見てご覧?」

怪訝な表情を浮かべながら2人はポチ袋の中身を見る。その瞬間に驚いた表情をするが、すぐに嬉しそうに笑顔を浮かべ始める。

「ねえトシ！これって！」

「このお金もらっていいの!？」

「ああ。俺から2人への『お年玉』だ。大切に使うんだぞ？」

「うん！」

ああ。両親や親戚のおじさん達はこの笑顔のためにお年玉を渡していたんだな。そんな感じがした。それにしてもやっぱりお金は万国共通で喜ばれるもんなんだな。

そんなふうを考えているとギャリーがジトくつとした目でこちらを見つめてくる。恐らくお年玉の文化を伝えてなかったからだろう。喜んでいるふたりを横目に俺は余っていたポチ袋をギャリーにそつと手渡す。

「ごめん。伝え忘れてた。これに2人の年齢的に……大体10ドル位入れるんだ。」

「ふーん？ニホンって変な文化があるのね。ヒロトシはいくら入れたの?。」

「俺は1人1000円。まあさつきも言ったけどだいたい10ドルだな。」

「なるほどねえ……。ま、伝え忘れたことは水に流すわ。アタシも渡してくるからちよつと待っててね。」

そういうと、ギャリーは素早くポチ袋に10ドルずつ入れて2人の元へと向かっていった。まあ俺が渡しておいて、年上のギャリーが渡してないのは体裁が悪いのだろう。それに俺がしつかりと事前に伝えていれば済んだ話だ。ギャリーからのお小言は甘んじて受け入れよう。

「でもなんでお年玉なんて渡すの?。」

「確かに！お金をあげるなんて私考えられない！」

「あーつと。それを聞いてくるか。うーん……なんて説明すればいいのか。」

「えー。わかんないの。ヒロトシっておばか？」

「いや、説が幾つかあるんだよ。」

そう言つて俺はお年玉について説明する。曰く歳神（年神）を正月に迎えるために丸い鏡餅（歳神の象徴）を用意し、それを家長によつて子供に分け与えられたその餅のことを御歳魂おとしだま言い出したとか。曰く前の御歳魂は歳神の靈魂として扱われており、そんな大切な物を年のありがたい賜物たまものであるとして年賜としだまと呼ばれたとか。

聞かれると思つて調べておいてよかつた。しかしこんな話をしても2人にはよく分からないだろう。

「うへえ。よく分かんない。イヴは？今の分かつた？」

「うーん……。わたしもよく分からなかつたな。」

「まあ神様からの子供の1年の健康を願つた贈り物が元なんだよ。お年玉としてお金を渡すようになったのは65年前らしいし。」

ちなみにお年玉を渡す習慣が確認できたのは中世。わかりやすく言うと武士がまだいた時代だ。その頃は武士は太刀。町民は扇。医者丸薬を渡していたようだ。そんなことを教えてくれた Wikipedia 先生。ありがとうございました。おかげで日本人の威厳が保たれました。

そんなこんなしているとどうやらお昼を過ぎたようで、子供たちの方からくうくと可愛い音が聞こえてきた。今日は元旦だし、あそこの神社はそこそこ広いから屋台なども多少は開いているだろう。

「それじゃあ皆で初詣に行こうか。人がいっぱいいるから手を繋いでいこう。」

「ハツモウデ？そういうえばクリスマスパーティーの時にも言つてたわね。どんなイベントなのかしら。」

「簡単に言えば去年1年の感謝と今年1年の無事を祈る行事だな。神様に去年はありがとう今年もよろしくって挨拶をしに行くんだ。」

「へえ！なかなかロマンチックじゃない！ねえ2人とも！」

「うん！私行きたい！神様にありがとうって言いたい！」

「ええ。私外出たくないなあ。この世界に来れたのはみんなのおかげであって神様のお陰じゃないし。」

イヴとギャリーは初詣に対してノリノリなのだがメアリーはどうやら乗り気ではないらしい。恐らく俺たちがあの世界に行くまで誰に願ったところで外に出られなかったからなのだろう。神という存在を嫌っている節があるように感じる。

しかしここは日本。一神教では無く万物に神が宿り見守ってくれているとされている多神教国家だ。連れて行って損は無いだろう。もしかするとゲルテナも日本では神認定されているやもしれない。

「メアリー、この国では全てのものに神様が宿っていると伝えられているんだ。」

「全ての物……。ならこの家にも？この服にも？」

「そう。だから日本人はものを丁寧に使う人が多い。それに初めはただの“モノ”でも丁寧に扱い続けると付喪神、つまりは神様になれるとされているんだ。」

「ただのモノでも……。神様に……。」

「そんな幾つもの神様に挨拶をするためにみんな初詣に行っているんだ。メアリーも大切なものがあるのなら一緒に初詣に行こう？」

俺がそう言うとメアリーは顔を伏せる。元々絵画だったメアリーにこの話をしたのは悪手だったか。それともこの考え方が気に食わないのか。そんな悪い方向に俺は捉えてしまった。まあ日本には善神が多いとはいえ良いエピソードばかりではないからな。仕方ない。

「私も……なれるかな。」

「え。何になりたいの？」

「神様に、私もなれるかな。」

そつちか。まあ俺は未だにメアリーが人間なのか絵画なのか知らないからなんとも言えない。でもこの世界に来ることが出来ているあたり、恐く人間の体なのだろう。人間から神になる……。ダメだ。即身仏しか思いつかない。しかも神じゃなくて仏だし。

「そうだなー。知り合いを大切に。使っているものを大切に。そして何より自分を大切に。して日々を過ごしたらなれるかもしれない。」

「かもしれないって……。確かなことは言えないの？」

「だって俺の知り合いに神様いないからね。いるのなら確かなことを伝えられたんだけど。」

「そつちか……。」

「でも神様になりたいなら色んなものを大切にしないとイケないよ。」
「なんで？神様ならなんでも自由にできるじゃん。ものだって作れる。」

「ならなんで神様は俺たち人間を増やした？それは必要だからだ。そして今日この日まで人類は滅亡していない。つまりは人間を大切に扱っているんだ。弛まないように試練を与えながらね。」

そこまで言うともメアリーは思案の表情を浮かべる。どうやら揺れているようだ。あまりこんな真面目な話をめでたい日に支度は無かったのだが、まあ致し方あるまい。こんな年もたまにはあるものだ。

何も起きない年などない。それは俺たち4人がよくわかっている。だからこそ見えない何かに縋りたくなる時もあるものだ。しかしその感覚がメアリーには無いのかもしれない。今まであの現実味の無い美術館にいたのだから。

「分かった。今回は一緒に行つてあげる。でも今回だけだよ！」

「ああ。それでいいよ。きつとイヴとギャリーも喜ぶ。な？」

「うん！一緒に行ってすぐくうれしい！」

「むしろメアリーを置いて3人で行くなんて考えてなかったわ。当たり前でしょ？」

そう2人から言われ満面の笑みを零すメアリー。そんな彼女を俺は暖かく見守っていたのだが、それが気に食わなかったらしくまたムスツとした表情に戻りそっぽを向く。

「ふんっ。トシなんて知らないっ！」

「あらあら。嫌われちゃったわね。」

「俺としてはあんまり笑い事じゃないんだけどな……。」

「お兄さん。わたしが励ましてあげる。」

ギャリーに笑われ、イヴに励まされながら俺はははつと乾いた笑いをする。まあ何はともあれこれで4人揃つて初詣へ行ける。

さすがにこの世の中、神様を信じている人は数少なくなれどこういう年中行事は無くならないで欲しいと思うのは俺が日本人だからなのだろうか。楽しいからという理由もあるがやはり意味のある大切な行事なのだから。

なんだ事を思いながら3人と自分の格好を見直してこれは視線を集めるだろうなああとこれからのことを憂う。しかしこれでいいのだと思う。俺たちのいい思い出としてこれからも語れるのだから。

「よし、じゃあ神社に出発するぞー。ご飯も向こうで済ませるからそのつもりでよろしくー。」

「神社でご飯って何かあるの?」

「ああ。屋台が出る。」

「ジャパニーズヤタイ！私すごい楽しみ！」

「メアリー。無駄遣いはしないように。アタシはお金貸さないから

ね。」

「ぶー！ギャリーのケチ！オカマ！守銭奴く！！」

「ちよつと！オカマは関係ないじゃないの！後アタシは普通の男よ！」

「あはは！2人ともなかよくね！」

きつと神様はこの光景を見て腹を抱えて笑ってるだろう。そんな神様にする俺の願いはただ1つ。

“今年もこの関係が崩れませんように。”

それだけだ。

お使い

「ツツツツツ——！！」

黒い手に触れた瞬間、俺は急に全身に強い鋭痛に襲われる。まるで内臓をちぎり取られたような感覚。あまりの痛さにその場に蹲ってしまいそうになる。

「——お兄さん？大丈夫？」

イヴちゃんの声が聞こえる。ここで倒れてはダメだ。彼女が進むことに怖気付いてしまうかもしれない。しかし、彼女は必ずここから脱出させなければならぬ。そうしなければいけない気がする。彼女の声のおかげで痛み以外の思考が動き始める。それと同時に倒れゆく俺の体を、そうはさせまいと全身で踏ん張る。少しでも心配をかけないように。

踏ん張るタイミングが遅かったのか少しふらついてしまったが、倒れていないだけまだマシだろう。そんなことに多少安堵しつつイヴちゃんに向き直る。

「あはは……ちよつとふらつとしちゃった。でも俺はこの通り元気だよ。」

「本当に……？」

「もちろん。嘘はつかないよ。」

もちろん嘘だ。さっきの鋭痛が少しだけ残っていて顔を顰めそうになる。でも顰めた顔を見たイヴちゃんが怖がるかもしれない。なんてことを思うと不思議と笑顔でいられた。

……自分はロリコンではないことを祈りたい。きつと子供が好きただけだ。そうに違いない。

「それよりも、薔薇はどうかかな？ なにか変化はあった？」

「え？ あ！ お兄さんの薔薇の花びらが減ってるよ！」

「——なるほどねえ？ あの言葉はそういうことか。」

どうやら、薔薇と命は一心同体は文字通りらしい。ならこの花卉が全て散ってしまったら何が起こるのか。そんなことを想像するのは難くない。ならば、できる限り俺が盾となってイヴちゃんを護らなければいけないということになる。こんな痛みを小学生に与えてしまつては、高校生大人の名折れだろう。

「イヴちゃん。この手には絶対に触らないでね。」

「なんで？」

「どうやらこの手は誰でも人を攫つてしまう悪い手らしい。俺も今引つ張られたからよろけちゃったんだ。」

「そうなの？ わかった！」

流石にイヴちゃんに本場の事を言うのは憚られる。なので少し暈して伝えることにした。取り敢えずこれでこいつには注意してくれるだろう。

「さて、あと少しだけ聞けばまた曲がるところがあるっぽいから行つてみよっか。まだ背中についてきてね。」

「うん！」

この道はすごく短いとはいえまだ歩き始めて数歩しか来てないところで止まってしまった。この調子ならまだこの黒い手は出てくるだろう。少なくとも1回は。ならば用心しておくに越したことはない。『備えあれば憂いなし』だ。

「じゃあゆつくり歩くからスピード合わせてね。」

「はいー！」

なんだか本当に小学校の先生か親になった気分になる。イヴちゃんは本当にいい子だ。この子の親御さんはさぞかし優しくも厳しい、しっかりとした大人の方なのだろう。

1歩1歩ゆつくり、しかし着実に前へと進みながらそんなこと思っていた。

その後、2回黒い手が出てきた。曲がり角に差しかかるまでテンションを張っていたせいか、右側の壁が途切れた時ついほと一息ついてしまった。そう、気を緩んでしまったのだ。

右前に見えた蟻の絵画を確認するために1歩を踏み出した次の瞬間、目の前から黒い手がずるりとこちらへ向かってきた。もう新しく来ることは無いだろうと高を括っていた矢先にこの出来事が起こったもので、俺は柄にもなく驚いてしまった。そこを後ろにいたイヴちゃんに見られてしまい、俺は恥ずかしくてたまらなくなっていた。

「蟻の絵があつたね。」

「そうだね。怖がりなお兄さん。」

「あー……そのことは忘れて貰えると嬉しいなあ……なんて。」

「うーん。難しいかな！ひよおおおあああいい!!なんて言ってる面白かったもん！」

悪意なき暴力とはこのことなのだろうか。俺のメンタルがイヴちゃんの手によってズタボロにされていく。

正直穴があるならそこに入って引きこもりたい。いや、もういつそ貝にでもなってしまうたい。それくらいに恥ずかしかつた。そんな傷口にイヴちゃんは容赦なく笑顔で塩を塗りたくつてくるのだ。

もうここまで来ると怒りと言うよりも悲しみの方が強いのだろう。ネガティブ思考に落ちそうになるのを頑張って持ち上げる。

「これ以上その話をされちゃうと俺泣いちゃうなー。イヴちゃんとお話したく無くなっちゃうなー。」

「え〜！なんで〜！」

「なんでも。じゃあ蟻の絵を持ち運べるか確認するから少し離れてね。」

「ぶー！お兄さんのケチー！」

「ケチで結構。……お、外れそうだな。」

イヴちゃんの言ってることを話半分に聞きながら俺は蟻の絵を外す。絵は少し大きいのが、重さはそんなになく持つところをしっかりとしているのでもしかしたらイヴちゃんでも持てるかもしれない。まあ危ないから持たせないが。

まあそんなこんなで俺は蟻の絵を手に入れたので、イヴちゃんが約束していた蟻にこの絵を見せに行こう。

あの黒い手ゾーンを何とか抜けて蟻の所へと戻ってきた。仕方ないと思えばいいのか面倒だと思えばいいのか。蟻を見つけるのは手間がかかる。元々細々とした作業自体苦手だし今は絵画を持っていることだ。イヴちゃんが見つ付けてくれるだろう。なんてことを思いながらさも探していますという雰囲気を出しながら足下を見回す。どうやら俺の近くにはいないらしい。なんてちよつとした茶番の様だなんて思っていると、やはりイヴちゃんが蟻を見つける。

「はいっ！持ってきたよー！」

「あ それ ぼくの 絵」

「そうだよ！頑張っってとってきたんだ！」

「やっぱり かっこいい」

「うっとり」

最初に会った時から思っていたがこの、蟻はナルシストなのだろう。それか自分を大分美化して書いてもらったからか。どちらにせよ蟻の願いは叶えたわけだ。さて、そろそろこの部屋の完全攻略をし

ようか。

蟻の絵

俺は蟻に絵を見せた後、その絵を持って穴のあいていた部屋へと向かった。イヴちゃんが何やら不安そうな顔をしながら着いてくるがこれも致し方ない。この絵には犠牲となつてもらおう。そんなことを思いながら部屋に入っていく。

穴の前に着いた俺は、それにかぶせるように蟻の絵を置く。置いて見た感じピツタリと隠れるようだ。これでイヴちゃんがジャンプしなくても通れるようになった。ただもちろん踏まれるために作られたものでないため、耐えられたとしても2, 3回が限界だろう。無駄に往復しないように気をつけなければ。

「よし。これで通れるようになった。じゃあイヴちゃん。行こつか。」

「ええ……。この絵を踏んでアリスさん怒らないかなあ……。」

「きつと大丈夫。蟻もこの状況を知ったら許してくれるさ。」

「うん……。何か許されない気がするけど……。まっいつか！」

なんてイヴちゃんも吹っ切れたようでこの絵を踏んで通ることに抵抗がなくなってきたらしい。この世界的にあまり宜しくないのだろうが、イヴちゃんの為だ。我慢しておくれ蟻よ。俺に踏まれないだけ僥倖だと思つて強く生きてくれ。

「じゃあイヴちゃん。ここ通つてみて。多分イヴちゃんなら通れるから。」

「うん……。わかった。」

その言葉を聞いた俺は彼女から不安を感じとつたため、敢えて一足先に穴の向こう側へと飛び移る。これでこちらに来る決心が穴が空く恐怖心に打ち克つてくれれば良いのだが。まあほんのスパイス程度には効いてくれるだろう。

イヴちゃんの覚悟が決まり、こちらへゆつくりとした足取りで向

かってくる。額縁からミシツと音がなる度に少し体がビクツと強ばらせているがそれでも何とか対岸の俺の前までやってくる事が出来た。俺はそんな彼女に対して労いの言葉とともに頭をわしやわしやと撫でる。

「おーイヴちゃんよくやりました。褒めて進ぜよう。」

「ちよつとく！お兄さん！髪の毛がボサボサになっちゃうく！」

「ちよつとくらい気にしなくても大丈夫だよ。今は気にせず撫でられとけー。」

「うあく！やめてく！」

そんな言葉を聞き流しながら俺はイヴちゃんの頭を思う存分撫で回す。俺には兄弟も年下の従兄弟もいなかったためごく新鮮で楽しかった。俺にも弟か妹、それか弟分妹分のような存在がいればこんな感じなのだろうか。俺には分からないが、退屈はしなさそうだ。なんて考えながらイヴちゃんの頭から手を退かす。

やはりと言うべきか、イヴちゃんはご立腹のようだ。髪を手櫛で整えながらこちらをジトーっ見つめてくる。そんな彼女を見て俺がもう一度右手を頭に持っついていこうとすると、イヴちゃんは頭を精一杯守ろうと頭を抱える。

「大丈夫。もうしないよ。」

「ホントに？ホントにもうしない？」

「多分ね。イヴちゃんもこれに懲りたらあまり年上をからかわないよに。」

「は〜い……。」

なんて少し拗ねたようにこちらへ返事をする。その姿はさながらイタズラを怒られた子供のようで少し微笑ましい。口に出したらもっと拗ねて会話すらままならなくなりそうだから言わないが。

のほほんとした雰囲気を充分に楽しんだところでふとこちら側の

扉を見つめる。この先からは鬼が出るか蛇が出るか。何が待ち受けているのだろうか。少なくともまともなものは待っていないのだろう。

そんな確信を胸に秘めながら俺は扉を開けた。

無個性

次のフロアを覗いてみると、どうやらそこはで長くない廊下のような場所だった。しかしどちらを見てもどこかにつながつている様子はなく行き止まりとなっている。そして奥の行き止まりには何やら見覚えのある彫像——確か無個性といったか——がぼつんと佇んでいた。そしてその手前の壁には何やら絵画が飾ってありそんな雰囲気がある。

兎にも角にも進まないことに事態の進展はない。先程の出来事で緩んでしまった緊張感をピンと張り直しフロアに足を入れる。

入ってみてわかったことがひとつある。この部屋は何やら雰囲気重い。何やら良くない事の前兆のようにも感じるそれは俺の体にズシンと重くのしかかる。何故だか分からないがこの部屋で間違いなく「ナニか」が起こる。そんな確信さえ持ててしまおうようなそんな雰囲気。そんな雰囲気を作るべく感じさせないように俺はイヴちゃんへ話しかける。

「よし。この部屋はあまり物もないしチャチャツと探索を済ませて次の部屋に行こうか。」

「うん！わたしも何かないか頑張つてさがすよ！」

「おーそれは頼もしいな。頼りにしてるよイヴちゃん。」

「任せて！わたし物をさがすの得意なんだから！」

そんな言葉に少しホツコリとしながら、しかし張ったテンションを緩めないように俺は辺りを改めて見回す。どうやら先程見えた絵画のようなものは蝶の成長の続きのようだ。タイトルはさすがに見えないが、蝶が何かに覆い被さられているように見える。あまり縁起の良いものではないし、見ていて気分も良くはならない。リアルという名の銃口を突きつけられているようなそんな感覚さえ感じる。

そんな絵のタイトルを確認しに俺は絵画の前へと足を運ぶ。

「エピソード……か。随分と洒落が効いてるねえ。これが俺らの果てとでも言いたいのか？」

だとしたら随分とこちらに喧嘩を売ってきている。それともこちらの謎解きの実力を甘く見ているのだろうか。どちらにせよ言えることはただ一つ。

「ここを無事に脱出してやるよ。見てろよ、ゲルテナ。俺の……俺らの底力見せつけてやるから。」

なんて自分を鼓舞するためにカツコつけてたらイヴちゃんにすごいものを見てしまったかのような目で見られていることに気づいた。その瞬間俺の中にやってしまったという感情が押し寄せてくる。少しこの雰囲気にもまれていたのかもしれない。それにこんな不可解な場所に来てしまったのだ。俺の心の奥に押し込められていた少年心が擦られてしまったのかもしれない。そうだ。きつとそうに違いない。

そんな言い訳を誰にする訳でもなく自分自身に言い聞かせる。何度も何度もそうしていると、痺れを切らしたのかイヴちゃんが俺に話しかけてきた。

「お兄さん。さっきのつてなあに？」

「あついや、えつと……。決意表明、かな。」

「決意表明？なんだかよく分かんないけどすごそう！」

「あ、あはは。何も凄くないよ。ただ願望を口にしただけだから。」

「願望？底力見せるのが願望なの？変なの。」

実際は底力を見せたいのではないのだが言葉が少なかつたせいで何か勘違いされたまま話が進んでいる。が、まあこれくらいなら特に気にしなくてもいいだろう。

そんなふうはこの話題を自己完結させて、俺は“エピローグ”を後目に無個性の方へと向かう。どちらかと言うとこちらの方が重要性としては高いだろう。ただの彫像のはずなのに今にも動き出しそうな雰囲気醸し出している。宛ら俺たちに注意喚起を促しているようだ。しかし、今のところなんの害も及ぼしていないこの彫像をずっと気にし続けるのもなかなか難しいものがある。そう思った俺はおもむろにその彫像の右手を触ってみる。が特に何も起きずがっちり握手を交わしてしまった。

「うーん……。この彫像は俺たちを襲ってこないのか？」

「お兄さんさつきからどうしたの？急に決意表明したりこのマネキンさんの手を握ったり。何かおかしいよ？」

「あーうん。色々と気になることがあってね。」

「ふーん。」

ふーんで終わっちゃうんだ……。なんて思いながら俺は無個性から手を離す。……。なんだか少し肩の位置が下がった気がする。が、まあ多分気のせいだろう。少し肩肘を張りすぎていたのかもしれない。

しかしこれでもし今後襲われずに触れ合いを求められたらどうなるんだろうか？……。そんなことあるはずないか。数が少ないとはいえ今まで会ってきた作品たちはどれもこれも俺たちに害を及ぼしたり無干渉だったから。これでもし触れ合いを求められてもこちらとしてはエイリアンと触れ合っている感覚にしかない。それがどんな感覚なのか知る由もないが。

イヴちゃんの方へ振り向くとどうやら足元に何かを見つけたらしい。しゃがみこんでじつと一点を見つめている。何を見つけたのか皆目見当もつかないがきつと脱出の手がかりになるものだろう。

「どう？なにか見つかった？」

「あ、うん。カギを見つけたんだけど取れないの。」

「えっ本当？ちよつと俺が試してみてもいい？」

「うん！いいよー！」

床に落ちている鍵が取れないとなると、床から剥がすために必要な器具アイテムでもどこかに置いてあるのだろうか。しかし今まで歩いてきたところにはそれらしきものは見当たらなかった。見通しているだけなのかもしれないけれど今まで通ってきた部屋数的にその線も薄いだろう。

俺が鍵に触れようとするすると鍵からキーンと金属同士が物価だたよな音がした。イヴちゃんの方を向き今の謎の音が聞こえたか確認すると少し強ばった表情でこくりと頷く。さて、気張ろうか。

「じゃあ取るよ。一応周りを見ておいてね。何が起こるかわかんないから。」

「うん。わかった。」

イヴちゃんも前のフロアの件があったからか少し身構えていた。あの女性の絵画のように特に害のないものが起こるのならばまだ良いのだが先程の黒い手のことを思うとあまり安心ばかりしてられない。イヴちゃんには申し訳ないがその不安な気持ちを払拭するのは後にさせてもらい、俺は鍵を拾う。

何やらコツンと固いものが床に当たる音が真後ろからする。バツと振り返ると先程より1歩分近づいているように見える無個性の姿がある。イヴちゃんは動いたところは見てなかったらしく無個性の方を向いて頭にハテナを浮かべている。

百歩譲って1歩分ならまだ俺の見間違いかもしれないが先程の音も気になるところ。しかしこれで襲われましたじゃシャレにならない。い。

「イヴちゃん。ちよつとこここの入口を開けてきてくれないかな？これ、もしかしたら走るよ。」

「えっ？うん。わかった。」

これであとは無個性コイツがこれからどう動いてくるか。そこが問題なんだが……。

「ま、襲ってきますよね……。痛いのは嫌だしさっさと逃げますか。」

歩くようにこちらに向かってくる無個性。しかしその際に小型動物が威嚇しているかのような音が無個性の方から聞こえた。つまりはそういうことだろう。やはり俺達はあまり歓迎されていないらしい。それかこの方法がここの歓迎の仕方なのか。どちらにせよこちらの身の安全が確保できてないのなら逃げるしか方法はない。立ち向かいたいのも山々だが、過失は蒙りたくないし、何しろこちらには武器がない。それに壊したら壊したで良くないことが起こりそうだから物品破損は必要最低限に収める必要があるだろう。こういう時の感程よく当たるものは無い。

「イヴちゃん！そっちに行くけど無個性には触れないように！わかった!？」

「わかった！それよりもお兄さん！後ろ来てるよ！」

「了解！俺が入ったらすぐ扉閉めて！」

そこまで言う俺はスパートをかける。正直そこまで急がなくてもこのスピードなら巻けそうなのだが扉を閉める時間も考慮するといくら頑張っても1秒ほどはかかるだろうし急ぐに越したことはないだろう。

急いで穴の空いた部屋に飛び込むとイヴちゃんは扉を閉めてくれる。その閉めた扉に俺はもたれかかって息を整える。これで扉は押えられるし俺も楽な体勢を取れる。そして扉を押えていることによつて（多分）イヴちゃんも少しだけ安心することが出来る。一石三鳥では無いか。

なんて思っているとすぐにドンドンと扉を叩く音が聞こえてくる。初めのうちはまだ良かったのだが、次第にその音は大きくなっていつてついに扉を壊す勢いになってきた。

「これはまずい……！イヴちゃんごめんね！」

「え？……キャッ！」

俺は走ってイヴちゃんを抱き抱えるとその勢いのまま蟻の絵の上をジャンプで通過する。一方無個性は俺という支えが無くなった扉にタックルをしたせいで体制を崩していた。これ幸いと思ってもうひとつの扉をくぐると、扉の奥で何かが割れる音がした。恐らく無個性が穴の存在に気づかず落ちてしまったのだろう。多少とはいえ蟻の絵の原型が残っていたのは僥倖だったか。イヴちゃんの体重でギリなんだ。それより重い俺や無個性に通ることなど出来るはずがない。

緊張の糸が解けた俺はその場に座り込んでしまった。それまでずっと俺の腕の中で大人しかったイヴちゃんが降りるとこちらを向きほっぺを膨らませてぷりぷりと怒っていた。

「お兄さん！きんきゆうじたいとはいえ女の子の体に気安く触っちゃダメなんだよ！」

「ごめんね。でもまあするしか思い浮かばなかったんだ。」

「もう！それじゃ立派な大人になんてなれないんだから！」

「ははっ。そりゃごもつともで。本当に申しわけない。」

「むう！……でもカツコよかったよ、お兄さん。」

……こりや将来とんでもない小悪魔に育ちそうだな。あまり男を誑かさないうように育って欲しいものだ。なんて変に親目線になりながらも俺はこの瞬間を楽しく過ごしていた。

次の部屋へ

ほんの少しだけ休憩をした俺たちは移動を始める。向かうのは蟻の絵が初めに飾ってあった横にあった扉。恐らくその鍵がさつき拾った物だろう。

途中蟻がいたのを思い出し少し憂鬱な気分になっているとイヴちゃんが発見してしまったよう話をしてる。

「あ、アリさん！また会ったね！」

“あれ？ ぼくの 絵 もってない”

「え？あゝ……えつとおゝ……。」

“ぼくの 絵 どうなった”

「あーイヴちゃんを助ける為に格好良く散っていったよ。」

あまり手助けになっていないだろうが一応助け舟を出しておく。イヴちゃんだとテンパってあることないこと言ってしまうそうで怖かったから。いくらいい子だとはいえまだ小学生。知らない方がいい真実もある。だって実際にはイヴちゃんが踏んだところで絵は壊れなかったし。むしろトドメを刺したのは無個性だ。しかしこんな事は蟻は知らなくてもいいことなのである。

“さすが ぼくの 絵

ちりぎわも かつこいい”

「ああ。すごく格好よかったぞ。まるでヒーローだった。」

「う、うんー！すごく助かった！ありがとうねアリさん！」

どうやらうまい具合に信じて貰えたようだ。これで10割嘘なら問題があるが、別に全てが嘘って訳でもないし大丈夫だろう。それにあの絵画が俺じゃなくイヴちゃんの役に立ったんだ。男の俺よりはまだマシだろう。2つ目の予想は蟻が男の場合だが。

ここでのんびりするのでもいいが俺達は進まないといけない為ここ

ら辺でお暇させて頂くことにする。蟻に別れを告げた俺達はあの黒い手の道を通って再び蟻の絵のあった所まで戻ってきた。

「なんだかここまで来るのにすごく時間がかかった気がする。」

「そうかな？わたしはすぐおわった気がするけどね。さっきの追いかけてっことはアトラクションみたいで楽しかったし！」

「あく楽しかったようで何よりだよ。俺はもうコリゴリだけどね。」

子供はしたたかとはよく言ったものだ。俺としてはだいたいぶ命がけのチェイスだったんだがこの子は追いかけてっこときたもんだ。まあ間違いはないから何も言えないのだが。

扉の近くには机があり、その上にはまたしてもノートと羽根ペンが置いてある。きっと所要所に置いてあるのだろう。まるでセーブポイントのようだなんて思いながら俺はそれに日付と自分の名前、それと小さく蟻の絵を書き記す。

何となしに2回目も書いてしまったがこれはこれからも描かないといけないのだろうか？名前と日付はまだいい。聖地巡礼の時に各所に置いてあるノートに書く感じだから。でも絵はどうなのだろうか？確かに絵が上手い人は描いたりするが俺は棒人間くらいしか描けない。どうしたものか……。まあイヴちゃんから何か言われたらどうするか決めるか。

イヴちゃんにペンを渡して俺はこれから何が起こるのか少しだけ夢想してみる。まずは敵が増える。これはほぼ確実に来ると思っている。ちゃんとした理由はないが強いて言うなら“定番だから”だろうか。創作物のお約束とはいえバカには出来ないだろう。

後はなんだろうか。謎解きが増えたりするのだろうか。それとも迷路に迷い込むとか？どちらにせよ頭はあまり宜しくないで御遠慮願いたいところだ。

そんなことを考えていたらイヴちゃんも書き終えたらしくこちらを覗くように見ている。

「書けた？じゃあ次の部屋に行こうか。」
「うん。」

なんだか急にイヴちゃんの言葉数が少なくなった。ノートを書き始める前までは普通に喋っていたので、少なくとも何かあった訳では無いだろう。だとしたら他に何が考えられるのだろう。ホームシックだろうか。それとも急に怖くなった？どちらにしても俺が出来るとしたらあまり無いだろう。あえて挙げるなら彼女を寂しくさせないようにするくらいか。

俺がイヴちゃんのために何が出来るのか分からないが、せめて悲しませない様に頑張ろうか。なんてことを思いながら俺は次の部屋へ続く扉を開ける。

次の部屋にそろりと入って見ると、そこには謎の窪みと猫のような狐のような目の模様が窪みを中心として左右対称に描かれていた。

通過点

どうやらこの部屋は目の前のでかいペイントだけだと思っていたが左右にも部屋があるらしい。辺りをパツと見渡しても特に何かがある訳でもないので手がかりはこの左右の部屋にあるのだろう。さて、どちらから向かうべきか。

俺がどちらから行こうか迷っていると、イヴちゃんは俺の袖を弱々しく引つ張って何かを言いたげにこちらを見つめてくる。

「どうした？ さつきからあんまり喋らなくなったけど怖いことでもあった？」

「あつちからなんかいやな感じがする……。」

そう言いながらイヴちゃんは左側の部屋の方を指す。こういう時の嫌な予感ほどよく当たるものは無いため行かなくていいよと行ってあげたい気持ちもあるが、だからといってイヴちゃん1人にするのはそれはそれで彼女の精神が持つかどうか怖いところがある。

多感な時期の子をなんとも言い表せない所に放置して悪影響を及ぼす可能性も否めない。もし悪影響を受けた場合俺は責任を取れないし彼女にはもしかすると一生摘むことの出来ない何かを植え付けてしまうことになるかもしれない。

そこまで考えた俺はさすがに1人にさせる訳にも行かず、結果嫌な予感がする左側を後回しにして右側から向かうことに。

左側の探索については数分後か数十分後か。探索が終えたあとの俺に丸投げすることにしよう。

右側の部屋に入ってみるとそこはまるで美術準備室のような色んな彫像がごったがえしている部屋だった。無個性も何体かいるがどうやら動きそうも無さそうだ。そんな事を思いながら真っ直ぐ歩いていく。同じような彫像が5つ並んでいる所を通りすぎると後ろからズツ……ズツ……と何かを引きずる音が聞こえてきた。

急いで後ろを振り向くとちょうど真ん中の彫像がこちらに向かつて動いていた。よく見ると目のところが赤く光っているようだ。動きは全然早くないため逃げるのはなんともないがずっと着いてくる可能性を考えると少し面倒に思えてくる。

彫像から逃げて少し進んだ足元に少し大きな窪みがあり、少し躓いてしまった。そのせいで彫像が俺たちに近づいてくるが、これは使えるかもしれない。そう思った俺は窪みの少し先で足を止めてイヴちゃんを後ろにつかせる。

「あの彫像多分転けるけどその時破片が飛んでくるかもしれないから気をつけてね。」

「うん。……大丈夫だよね?」

「きつと大丈夫。あいつが勝手に転けるだけだから。」

俺の予想だが。まあこの予想はきつと当たるだろう。なにやら引きずるように動いているようだし少しの段差でも躓くだろう。それで壊れたとしても俺らは何もしてないしきつと何も問題は無いだろう。

ゆつくりと、しかし確かに近づいてきていた彫像は俺の予想通り窪みに躓いて割れてしまった。その際ガシャンとすごく大きな音が出ていたのでイヴちゃんがすっかり怯えてしまった。こんな調子で逆側の部屋に入れるのだろうか?なんて俺は少し不安に思いながら割れた彫像の辺りを見る。

「ん?なんだこれ。……魚の尾か?」

「あ、これ……。まんなかの部屋の穴の形に似てる……。たしかお魚の形だったはず。」

「あれ。そうだっけ?じゃあ逆側には頭側でもあるのかねえ。」

そう言いながら俺は彫像が倒れて塞がれた道を見る。俺一人ならばジャンプすれば何とか超えられなくはないがイヴちゃんも一緒と

なると厳しいものがある。幸い迂回できる道があるからそちらにしようとして右手側を見るとポツンと灰色の花瓶がひとつ不自然に鎮座している。

今までの道のりで像はいくつも見てきたが花瓶のような容器を見るのは初めてだ。少し警戒しながら近づくとどうやら中に液体が入っているらしい。

「イヴちゃん。薔薇って今どんな感じ？花弁は少ない？」

「うーん……。赤も白も多くはないかな。赤いバラの方が小さいかも？」

「そっか。あーじゃあ2本同時に入れてみるか。」

あまりイヴちゃんに負担はかけたくないけど、あまり過保護すぎてもイヴちゃん自身が嫌がるだろう。それにもしこれが回復要素ならこれからの探索が楽になるだろう。

あまり乗り気ではないがここでの発見が今後の探索を楽にするかもしれない。

この美術館に来ると決まった時から全てかもしれない思考で考えないと俺は何もしないし新たな発見はないと思いき、黒い手に触った無個性と握手してきたりしたが、今までのものよりこの花瓶がいちばん怖いかもしれない。それは何故だろうか。自分でもよく分からない。でもこれが回復手段なら有難い。そんなことを思いながらイヴちゃんが花瓶の中に2輪のバラを入れようとするところを見届ける。

「それじゃあ入れるよ……。」

「おう。何時でもいいぞ。ばつちこい。」

ばつちこいと言った時にイヴちゃんは少し頭を傾げたが、あまり気にもとめず花瓶の中へ薔薇を入れる。もしかしたら痛みや苦しみが襲ってくるかもしれないと身構えていたが、俺の身体に齎されたのは

体の底から力が湧き出してくる。黒い手に触れ手から少し経った今でも多少残っていた節々の痛みすらも癒えていくようなそんな感覚。さすがに全回復という感じではないが、それでも十分なくらいには体力が戻った感じがする。

ふと薔薇はどのように変化しているのか気になって花瓶の方を見てみると、赤い薔薇と白い薔薇両方とも花卉の数が増えている……：気がする。変化前をあまりしつかりと見ていなかったせいでちゃんとした変化は分からなかったが、花卉のボリューム感が増しているように見える。

「イヴちゃん。体の調子はどうか？なんか元気が湧いてくるような感じはしない？」

「お兄さんも感じたの？じゃあこれは元気になるかびんなんだね！」

「そうだね。また花瓶を見つけたら薔薇を入れよっか。花瓶の中に液体はまだ残ってるかな？」

「え？うーん……。残ってないみたい！ゆらしてもポチャポチャ聞こえないし！」

「なるほど使い切りなんだね。じゃあ薔薇を入れるタイミングは慎重に考えないとだね。」

「うん！」

これはいい発見になった。恐らくこれからは花瓶を探しながら探索をすることになるだろう。そうすればもしダメージをくらってしまってもすぐに回復をしに行けるということになる。しかし一つにつき1回しか回復できないのは面倒な縛りとなる。回復するタイミングを見極めるのは至難の業になりそうだ。正直今回復したのも適切なタイミングだったのか不安になる。しかし試さないことには回復できるものだということは分からなかったため致し方ないだろう。俺はそう自分に言い聞かせる。

「それじゃあこの部屋から出ようか。いつまでもここに居ても何も進まないからね。」

「うん……。」

イヴちゃんは嫌な予感のしたもうひとつの部屋のことを思ったのか気分が落ちていた。しかしあの部屋に行かない訳にもいかない。俺は心を鬼にしてもうひとつの部屋へ向かうために出口へと足を運び始めた。

かくれんぼ

取り敢えず真ん中の部屋に戻ってきた俺達は左側の部屋へと繋がっている扉の前に立ちじつと前を見据えながら考える。この先がイヴちゃんの言っていた嫌な予感のする部屋なのだが、それを聞いたせいなのか俺も嫌な予感がしてきた気がする。しかしこれはきつと思ひ込みだろう。そう思ひ込むしかない。

まあここでじつとしていても何も事態は変わらないので部屋に入ってみることに。きつとまだいきなり襲われるようなことは無いはずだ。

「イヴちゃん。そろそろ行こうか。」

「うん……。手をつないでもいい？少しこわいの。」

「いいよ。もし中に行つてきつそうならすぐに言つてね。部屋から出るから。」

「分かつた……。」

そういうとイヴちゃんは俺の方におずおずと手を出す。それを握つてあげると少しイヴちゃんの手が冷たいことに気づく。ただ単純に寒かつたのか。それとも極度の緊張状態なのか。おそらく緊張状態であることは察しているのだが、もし寒いのであれば今来ている上着を貸すくらいならできるであろう。しかし生地があまり厚くないので少し心許ないだろうか。

「お兄さん……。？行かないの？」

「ん？ああ、行こうか。その前に寒くない？大丈夫？」

「……。？大丈夫、寒くないよ。どうして？」

「んー。手が冷たいから心配になっちゃってさ。寒く感じたら俺の上着くらいなら貸すからすぐ言つてね。」

「うんわかつた。すぐ言うね。」

やはりあまりここに長居してもいいことは無さそうだ。そう思い俺は扉のノブに手を掛ける。イヴちゃんを気にかけてつつ俺は扉をゆっくりと開いた――。

扉の先にはなにやらカーテンで何か隠されている壁が幾つかある。しかし手前の壁にはカーテンがなく、棒人間が描かれているだけだった。そして左奥の部屋の壁には何やら魚の頭と尾の真ん中を切り分けようとしている絵がある。あれが何かをすれば絵から出てくるのだろうか。……いや、もう少し現実を見た方がいいのか？そもそも絵から物体が出てくるなんてありえない。こんな世界で外の常識を持ってきたところで通用しないのは何となくわかっているが、絵からものが出るなんて流石にないだろうと思いたい。

「それじゃあこの部屋も少し見て回ってみるか。イヴちゃん行けそう？」

「うん……。がんばる……。」

なんだか嫌なことを無理やりやらせている気分になるがこれは致し方ないと思う。この部屋の謎を解決しないとこの美術館から出られないかもしれないのだから。

そんなことを思いつつゆっくりと歩き出す。まずはカーテンのかかっている壁から見てみようと思い、まっすぐ歩き出すと棒人間の絵の前を通り過ぎたその瞬間にパシヤンと液体が何かにかかった音がする。ふと辺りを見回すと某人間の真下に何やら先程はなかった文章が。

“かくれんぼ する?”

その文章を読んだ次の瞬間、走り去って行くかのような音とともに棒人間は姿を晦くらます。しつかりとは見えないがカーテンの下にはポタンのようなものがあるように見えなくもない。

ならばどこかのカーテンの下に棒人間あいつはいるのだろう。俺の運がないことはこのクソみたいな世界に来ている時点で証明されているだろう。そんな俺がこんな運要素しかないものに挑戦したところで全て開くまで終わりませんでしたみたいなおチになるだろう。それならばこの部屋に嫌な予感を感じていたイヴちゃんに最終決定権を持つていてもらった方がいいかもしれない。俺には無い第六感シックスセンスを信じてみるのも大切だろう。ゲームでそうだったから間違いない。だがそんなことよりもイヴちゃんに聞きたいことがある。

「イヴちゃん。この部屋の中で一番嫌な感じのするところって何処かな?」

「……あそこ。あそこはいやだ。」

「怖いとかじゃなくて嫌だ?」

「うん。あそこだけはなんでか分からないけどいやだ。」

「わかった。じゃああその前は極力通らないようにしようか。」

イヴちゃんが指を刺したのは俺たちの斜め左後ろの壁。恐らくあそこにもカーテンがかかっているのだろうと思われる。となるとあそこにはイヴちゃんにとって良くないものが飾ってあるのだろう。ならばあまり近づかないよう気をつけながら他の場所のカーテンを開ける他ないだろう。ならばまずはこちらの棒人間のいた壁の横のところのカーテンから開けていこうと隣の壁へ移動する。

「イヴちゃん、ここ開けるけど大丈夫?」

「ここなら大丈夫……だと思う。」

「じゃあ開けよっか。」

俺はそう言うとボタンへと手を伸ばす。人差し指がボタンを押し
たその時、カーテンがひとりでに開き出す。そこに描かれていたのは

どこか分からないところで力なく倒れている俺の姿だった。

かくれんぼの終わり

なぜ俺の絵がここに飾られているのか。なぜ絵の中の俺は力なく倒れてしまっているのか。そんなことよりもこの絵がこれから齎すであろう俺への不利益とは一体何なのか、それとやはり俺の当て感はず信用ならないことについてが頭の中をよぎる。

後者はかなりどうでもいいとしてもこの絵の齎すであろう不利益。これがかなりネツクになる。もしこの絵を見る前と見た後ではこれから出てくるであろう追跡者^敵の数が段違いだとしたら。もしこれからのギミックがより難しいものに変わっているとしたら。そんなことが思い浮かんでしまう。しかしそんなことを考えても今更それを確認する術はない。

とにかくここを切り抜けて先へと進まなければ。それとこれから運要素はイヴちゃんに任せて俺は謎解きに専念しよう。その方がきつと早く進む。

「他のところを開けに行こっか。次はイヴちゃんが決めていいよ。」

「えっ？あの……お兄さん大丈夫？」

「え？体の痛みとかは特にないよ。体調も別に悪くないし。」

「そうじゃなくって……！メンタルは大丈夫？」

「あーうん。まあ大丈夫だよ。」

イヴちゃんは心配そうな表情をしながらこちらを見つめてくる。しかしこの絵に対しての恐怖やこの絵を見ていると不安になると言ったようなそんな思考は全く浮かんでこなかったのです。そんな表情をされてしまうとなんだかこちらが申し訳なくなってくる。

「それよりどこのカーテンを次に開ける？イヴちゃんはどこが大丈夫だと思う？」

「うーん……。右後ろか1番左かなあ……。その2ヶ所は大丈夫な気がする……。」

「じゃあまずは1番左から行ってみようか。そこが違ったら右後ろのカーテンを開けよう。」

俺がそう提案するとイヴちゃんはこくりと頷いてくれる。それを見た俺は目的地へと歩き始める。後ろからイヴちゃんが着いてきているのを足音で感じつつそう遠くない距離を真つ直ぐと進む。そして壁をひとつ過ぎ去って目的のカーテンの前にて足を止める。

まず1つ目の候補である入口右側の一番奥にある壁。棒人間ここで見つかつてくれれば此方としては何も言うことは無いのだががそう上手くいくのかどうか。兎にも角にも押してみないことには何も始まらない。イヴちゃんが大丈夫な気がすると言っていたし、まあおそらく大丈夫だろう。

「じゃあ押すよー。」

「うん。……お兄さん緊張感ないね。」

「そりやイヴちゃんを信頼してるからね。ま、当たってなくても責めるつもりはないけど。」

「ええ〜……。」

何やらイヴちゃんは不満そうで不安そうだが今この場においてイヴちゃんの第六感シックスセンスが俺よりも優れていることは明白なので大変情けないことながらそれに頼らせて頂くことにする。

そんなくだらない茶番をしている間に俺はボタンに指をつける。そしてイヴちゃんの見えない隙にボタンに触れている指へ力を入れる。するとカチツという音と共にカーテンが開かれ、辺りはゆっくりと暗くなっていく。暗闇とまでは行かないものの前がそこそこ見づらくなるくらいまで暗くなったところで明度の変化は止まった……気がする。あくまで体感だから実際には変化し続けているのかもしれないが、まあ感じとれないので大丈夫だろう。

しかしここがハズレとなると後は嫌な予感のする壁の右隣が正解なのだろうか。嫌な予感がすることあんなことを聞いた手前、あまり近づきたくないのが

本音だがまあ行くしかないだろう。

「よし。次のカーテンを開けに行こう。対角だから場所が分かりやすくて助かるね。」

「うん……。」

やっぱり近くに行くのは不安なのだろうか。しかし僅かな手がかり(と言っていいのかも怪しいが)なのだ。それに縋る他ないだろう。自分自身、こういう運ゲーの様なものは得意じゃないとついさつき判明したばかりなので今現在あまり乗り気では無いのだが致し方ないだろう。

「じゃあ移動するよー。限界来そうなら手を握るなり大声で威嚇するなりして下さーい。」

「うん……。わかった……。」

あまり元気の無い姿に心配しつつ、俺たちは移動を始める。次こそ正解であると嬉しいのだが期待はあまりしないでおこう。期待しすぎても外れた時に受けるショックが大きいだけだし。

例の壁を内心でビクビクしながら通り過ぎて漸く目的の壁の前へと着く。そんなに遠くないはずなのにすごく長い時間歩いたような気がしてしまうのはきつと精神的に疲れてきているからだろう。いやきつとそうに違うない。

なんてくだらないことを思いながら俺達はカーテンの方へと体を向けた。

「さて、と……。とりあえず開けよつか。」

「もう開けるの……?ここは大丈夫かな……。」

「きつと大丈夫だよ。人の直感ってバカに出来ないからね。それにさつきも言ったけど間違っていたからって責めるわけじゃないから安心してね。」

「うん……。わかった……。」

フォローはできる限りしたつもりだがあまり効果はないように感じる。ここは一旦イヴちゃんに寄り添って彼女のメンタルを回復させた方がいいのか、それともこの部屋を早々に終わらせて休憩を挟んだ方がいいのか。少し考えてみたがどちらも一長一短で俺が決めていいのか迷ってしまう。

しかし、イヴちゃんに聞いたとしてもきつと「わたしは大丈夫だから進もう」と言うような感じの返答が帰ってくると思われるのであるか聞こうにも聞きづらくなってしまう。これは考えすぎだろうか？

しばらく考えた後、俺はこのカーテンを開けたら一旦休憩することに決めた。それを伝えてはいないが、まあ開けてから言えば大丈夫だろうと思ひ俺はボタンへと漸く指を伸ばす。

「じゃあ押すよー。」

「うん……。いいよ。」

イヴちゃんはしきりに左側のカーテンを気にかけているせいか返事が上の空な感じがする。しかし言質はとった。早速開けていくことにしよう。

俺の指がボタンを押すと目の前のカーテンがシャツという音と共に 勢いよく開く。そこに俺たちにこんな面倒なことを仕向けた張本人が堂々とした態度で立っている絵が書かれていた。

「みつかった けいひん あげる」

そんな文字が棒人間のそばに書かれたと思うと、すぐその後に奥に見えていた大きな絵画の方からゴトンと何かが落ちる音がした。

その音でイヴちゃんはふと我に返ったような素振りで見たりを見

回していた。どうやら意識はずっと隣の壁に行っていて当たりを引いたことに気づいていなかったらしい。まあそれも致し方ないだろう。何かがあつた時はお互いにフォローし合えば何とかなる。多分。

猫の間

未だ状況が掴めていないイヴちゃんの手を優しく引いて大きな絵画の前へと歩いていく。あまり時間も掛からずに絵画の前に着くと、なるほどこれはでかい。遠目で見えていた時には気づかなかつたがこんな大きな紙に魚を一刀両断する絵のみが描いてあるのはなんだか寂しいようにも思える。背景も白いままだし何を意図してゲルテナは描いたのだろう。

そんなことよりも魚の頭の部分を探さなければ。恐らく先程の音はここから頭が落ちた音だろう。まず絵画から物体が落ちてくるとか正直訳が分からないが、それは無個性が動いて襲ってきたり、ありがこちらに理解できる言語を喋っている時点で今更な事だ。それならば落ちた頭はどこへ行ったのか。そんなのは決まっている。

「そりや絵の下に転がってるよな。下手に転がってなくて安心した。」
「……お兄さんって独り言多いよね。いつもなにかブツブツ喋ってる。」

「え。そうかな？そんなつもりは無いんだけど……。」
「ちゃんと自分のことは知ってないとだめだよ！お兄さんは独り言が多いー！」

「はいはい……。わたくしは独り言が多いです……。」

自分では全く多いとは思わないのだがまあ人から見たら多いのだろう。……今度本当に独り言が多いのか母さんに聞いてみよう。

まあ何はともあれ魚の頭と尾が見つかったわけだ。これをひとつにすればきつと真ん中の部屋もなんとかなるだろう。

「イヴちゃん。これをさっき拾った魚のしっぽの方とくっつけてみて。多分ひとつになるから。」

「わかったー！」

少し元気が戻ってきたイヴちゃんはふたつを重ねる。すると何故か元々切られてなかったかのように継ぎ目が無くなったひとつの魚の模型が出来上がった。

何が起きたのかさっぱり分からないがまあ気にしても仕方が無いだろう。聞いたところで誰も種明かしできないだろうし考えるだけ無駄だ。

そんなことより魚の模型は完成したのでこれでこの部屋からおさらばすることが出来る。どうせ次の部屋もまともな部屋では無いのだろうが、同じところにずっと居るよりは幾分か精神に優しいだろう。

「それじゃあイヴちゃん。魚の窪みの所に嵌めに行こうか。それここから早く離れよう。」

「うん！早く行くー！」

そう言うと彼女は俺の手を引つ張つて扉の方へと向かう。扉の前に来た際に一瞬だけ後ろの方を気にしていたが、すぐ前を向いて扉の向こうへと小走りで駆けていく。俺は少し怖いもの見たさで例のカーテンのボタンを押したい気持ちを抑えつつイヴちゃんの背中を追う。

今までいた部屋と真ん中の部屋とを繋ぐ扉を閉めて改めてほぼ扉しかないこの部屋を見渡す。こうしてちゃんと見ると確かに壁の窪みは魚のような形をしていることが伺える。

「じゃあ早速嵌めようか。ササッとここを出て元の場所に戻りたいしね。」

「うん！わたしも早くママとパパに会いたいもんね！」

「元気があつて大変よろしい。……あ、俺の事はイヴちゃんの両親にあんまり言わなくていいからね？」

「なんで？お兄さんにはお世話になったもん。ママとパパにちゃんと言ってお礼しないと！」

「うん。お礼とかは大丈夫だから。無事に帰れたってことが何よりのお礼だから。」

「え〜っつまんな〜い!」

イヴちゃん、なにやらしつかりしすぎではないだろうか？普通の小学生には思えないような発言が飛び出ている気がする。今どきの小学生がここまでちゃんとしているのなら俺の小学生時代はなんだっただのだろうか。少なくとも俺の場合は面白ければなんでも良かったのだけは覚えてる。あとは怒られないために謝っていた記憶しかない。実に憐れである。

しかし、もし俺たち二人とも五体満足で戻れたとしてそんなお礼などされた日には倍返し以上しなければこちらの気が済まないというもの。だって俺もイヴちゃんがいたからこそまでメンタルをやられずに来られているのだから。言うなればwin-winの関係なのだ。それなのにこちらだけ貰うのはおかしいだろう。だから双方渡し合うか、お互いに何もしないの2択しかないと思う。

「イヴちゃん。ここから出られたとしてもこのことを皆信じてくれないと思う。それこそ両親さえも半信半疑で聞くとと思う。それでも言うのなら止めはしないよ。」

「あつ……そっかー……。たしかに信じてもらえないかもしれないね。わたしだったら信じないもん。」

「でしょ？だからイヴちゃんの両親に伝えるのは無し。もちろん俺も父さんと母さんにこのことは伝えないつもり。」

「わかったーこれはわたしだけの秘密！……なんかワクワクするねー！こういうのー!」

そうやって彼女は満面の笑みを浮かべる。やはりこういう誰にも言えない秘密というものは万国共通でワクワクするものなのだろう。

一連の流れもひと段落してよいよ俺達は窪みのある壁と向き合う。恐らくどこかに次の部屋へとつながる道が出てくると思うのだ

がこの部屋なのか。はたまた両隣の部屋のどちらかなのか。

「じゃあ魚の人形をここに入れよつか。」

「わかった……。うう……。緊張する……。」

「そんな酷いことは多分起きないと思うからそんなに緊張しないでいいよ。ほら、さっきのやつやって力抜いてこ。」

「うん……。」

そう言つて彼女は肩に力をきゅつと入れ一気に脱力する。お陰で肩の力は抜けたようで表情も少し柔らかくなつたように見える。そしてそのままイヴちゃんは窪みに魚の模型を嵌める。すると壁の内側からなにやら大きく重いものがどこかに擦りながら動いているような音が聞こえる。次の瞬間、目の前の壁が上へと上がると同時に大量の猫の鳴き声のような音が部屋中に響き渡る。

奥の部屋まで壁が上がりきると同時に猫のような鳴き声も止む。何が起きたのかわからず呆然と立ち尽くしてしまつていた俺とイヴちゃんはゆっくりとその思考を再起動させ始める。なぜ猫の鳴き声があったのかはあまりよくわかつてないがまあ関連性があつての事だろう。と、そこまで考えてからふと目のような模様があつたことを思い出し上の方を見上げてみると黒目だつたところは赤い縦の線に変わつていた。それこそまるで明るいところにいる猫の目のようになつている。

「なるほど……。そういう事か。」

「猫さん……。どこ……。？」

「イヴちゃん。上を見上げてご覧。」

「えっ……。？……。あ！猫さんの目！」

「多分この壁自体が猫みたいだね。だから魚を要求してきたり壁が開く時に鳴き声が聞こえたりしたんだね。」

なんて話もあまり聞かずにイヴちゃんは猫の目に釘付けのようだ。

猫が好きなのはわかるが俺としては早々に進んでおきたいところ。何とかここから離れるために策を巡らそうとしたがまあここは強行突破で行こう。

「はい。じゃあ先に進むよー。早くしないと置いてっちゃうよー。」
「えー！もう行くの！待ってー！」

いつも通りどこか締まらない空気のまま俺達は次の部屋の扉へと歩き出した。願わくばこの先も危険なことが起こりませんよう。

唾を吐いてはいけません

扉を開けた先は前の部屋と余り変わらない色をした壁の部屋だった。前の部屋とは一括りにされているのだろうか？そこら辺はなんとも言えないところだが、少なくともこの部屋は前の部屋よりも広いことは確信した。それに今までと違って初めて額縁の中で動く絵画が机の近くに飾ってある。なぜあの絵画は舌をずっと動かしているのかはよく分からないがきつとろくな事じゃないだろう。

目の前の少し細めの通路はそんなに長くなさそうだが、なんだか似たような道がちよつと前にあった気がする。それに異様に右側が遠いのも気になる。1ヶ所凹みがあつて何かそこにありそうなものだがここからでは何があるかは見えないでいる。

ぎつと目に見える限り通路の奥を見ても特に何も見えないし右の窪みの方を見ても何もない。強いて言うなら目の前の通路の右側になにかの影が見えるように見えるくらいか。

とにかく目先のもので特に触れられるものもないしとりあえずここまで定番になっているノート書きをしようと机の方へ体を向ける。

「とりあえずノートに落書きしに行こうか。それから色々考えよう。」
「うん！」

そう言うのと俺たちは机の方へ歩き出す。すると、あの舌の動いている絵画から何かを吐き出すような音と同時に青い液体のようなものが吐き出される。あまり飛距離は出なかったようで俺たちに当たりはしなかったものの想定外の攻撃により少し驚いてしまったのは事実。イヴちゃんにこれ以上情けない姿は見せられないと思つていたのだが再び見せてしまったかもしれない。しかし自分自身そこまでホラー耐性はないのだから致し方ないだろう。そう言い聞かせながらイヴちゃんの方へ視線を向ける。

イヴちゃんの視線は絵画に向かつてはいるがあまり驚いていないみたいだ。それのおかげか俺が驚いているところは見てなかったよ

うに感じる。見られなかったことを喜ぶべきか、それとも油断していた事を反省するべきか。どちらにしてもまずはお互い無事であったことを喜ぼうと思う。

「お兄さん……。今飛ばしてきたのってつばかな？」

「多分そうだね。汚いから踏まないように気をつけようね。」

「うん！わかった！」

少しヒヤリとしたものの色々失わなかったことに感謝してノートへと向かう。今回は何を描こうか。猫のような目を描くか、それとも今唾を飛ばしてきたべろべろ絵画を描くか。まあ安定して猫目だろう。イヴちゃんも猫にすぐ反応していたし、何かよく分からないものを飛ばしてくるようなやつよりもよっぽど好感が持てるだろう。輪郭とヒゲを足して猫として完結させるか少し迷ったが今回は目しか確認できなかったし別にいいだろう。今後猫を見かけた時にはその時は満を持して猫を描こう。

そんなことを思いながら描き終わるとイヴちゃんにペンを渡す。何かを書いている姿を後ろから見ていると何を書いているのかはやはり気になってくる。しかし前回の覗き(?)はあえなく失敗しているのでここは慎重に行動しなければまた怒られてしまう。もちろんそれが怖い訳では無いというかむしろ可愛いのだがわざわざ怒らせることをしたいわけではない。でも気になる。なので今回は後ろからコツと覗こうと思う。

バレた。まあそりゃ後ろでチヨロチヨロしてたらバレるか。しかしまあ端の方は運良く見れたので今回はよしとしよう。また次の時

の為にどこかでバレないように覗く技術を磨いておかなければ。

まあ何はともあれふたりとも描き終えたので探索に戻らなければ。今立ってるところからノートとは正反対の方を見てみると何も無いようにしか見えない。左側の通路もあることを考えると、一度この区域の安全確認を済ませた方がいいだろう。しかし今は単独行動ではない。イヴちゃんの意志も聞いておかなければ。

「イヴちゃん。この部屋とその通路の先の部屋、どっちを先に見たい？」

「うくん……。どっちでもいいよ。お兄さんが決めて！」

「了解。じゃあこの部屋から先にばつと見ちゃいますか。」

今まで俺がきめてないのを思い出して譲ったのではないかと少しだけ疑問に思いながら提案する。もしイヴちゃんがなにか感じていたのならば遠慮なんかせず言って欲しいものだがそうしてもらおう為の友好度はまだまだ足りないということだろうか。そう思いながら何故か白紙を飾っている額縁を一瞥して俺たちは歩き始めた。

今再びの……

取り敢えず向こうの壁まで歩こうと歩き始めてすぐにもうひとつの部屋につながっている通路の入ってすぐの所に何かボードのようなものが無造作に床に置かれていることに気づいた。しかしボードになにか書かれているのは分かるのだがなんと書かれているのかはさっぱり分からない。何故だか分からないがとりあえず今は読めないうことを頭に入れて置いて先に進むことにする。

「えっ……お兄さんこれはいいの？」

「ん？ああそれは今はいいよ。なんか読めなかったし今は大丈夫だと思おう。」

「ふーんそっか。」

イヴちゃんはすぐに興味が無くなったらしく素っ気ない態度を返してくれた。少し冷たい返しに驚きつつもそれもまた子供のおちゃめな部分だろうと自分に言い聞かせる。そうして辺りを見回しながらゆっくと進んで行くとなにやら壁に文字が書かれているのを発見する。こちらはどうぞやら読めるようだ。

“猛唇注意”

と書かれている。猛唇とは一体何なのだろうか。文字からするに気性の荒い唇というふうに読み取れるがそれは一体どういうことなのか。そんなことを考えながら俺たちは少しずつ歩を進めていく。すると先程入口から見た時には何も見えなかった壁の窪みのところに文字通り唇が“居る”。描かれているのではなくそこに“居る”のだ。しかも無機物のような生氣のない感じではなく今もそこに生きていてじつと獲物を待っているように見える。

「イヴちゃん。この唇は危険みたいだからとりあえず後回しにしようか。まだあの通路の奥も見えてないからそれからにしよう。」

「うーん……。」

なんて言いつつも唇の方から視線を外そうとしないイヴちゃん。それどころか少しずつ近づいていつているようにも見える。

「はい、そこまで。もう向こうに行くよ。」

「えく！もうちよつとだけく！」

「ダメダメ。ほら、ちやっちやか歩く。」

「おさないでよく！お兄さんのケチく！」

「ケチで結構コケコッコー。ほら、自分で歩かないと次は抱っこするぞー。」

「ヤダー！自分で歩く！」

強い否定の言葉に軽くショックを受けつつも、それをあまり外に出さないように奥へ繋がる通路へと俺たちは歩き出す。

通路の前に立つと先程は読めなかったボードに書いてある文字が読めるようになっていく。どうやら「忘れたところに……」と書いてあるようだ。試しに先程の位置に移動して読もうとすると、やはり読めなくなっている。どうやらこの文字は正面から見ないと読めないうようになっていくらしい。正直面倒な仕様だが何処の事を書いているのか解りやすくはなっている為、頭ごなしには否定出来ない。

そんな事よりも忘れた頃にはどうということなのか。おそらくはこの通路にも何かしらの罠が仕掛けられていて、それが前にあったのだろう。ではこの美術館に入ってからそれらしい罠はあったのだろうか……。思い当たる節があるにはあるが、あれはそんな忘れるほど前だろうか？しかしそれ以外はこれといって罠らしい罠はなかった為、一応注意だけは怠らないようにしよう。

「ここは真ん中を通過して行くかうかイヴちゃん。多分また黒い手が出てくると思うんだ。」

「そうなの？わかった！」

そう言つて俺たちは通路の真ん中を歩き始めた。しかし進めど進めど黒い手は一向に出てこない。今の俺たちは警戒しながらゆつくり歩いてるとはいえ、元々そんなに長くない通路なので直ぐに通過してしまふだろう。そんなことを思いながら歩いていく。通路も終わりに差し掛かり、部屋まで後一步と言つたところで左側の壁からシャーツという音と共に黒い手が勢いよくこちらに向かつて伸びてくる。意識外からの攻撃だった為に少し驚いてしまったがあまり表にでてないと思うしきつとイヴちゃんにはバレていないだろう。

「あははっ！お兄ちゃんビクつてした！」

「……。」

どうやらイヴちゃんが笑つてしまう程度には体が跳ねていたらしい。きつとイヴちゃんにはバレていないだろう（キリッ）なんて考えていた俺が馬鹿らしくなってくる。しかしいつまでもそんなことを気にしている俺ではない。たまには大人の余裕というものをイヴちゃんに見せなければいつまでもバカにされ続けるだろう。平常心だ。何が起きても平常心を常に意識しろ。俺。

「……悪趣味だな。この部屋。」

「お兄さん……。ここ、怖い……。」

緊張感の緩んだ俺たちを出迎えてくれたのは何故か片足だけ縛られて宙ぶらりんになつている人形たちだった。6体ほどそんな人形があるのだが幾つかは触ることが出来るくらいの高さのものもあり調べることは出来るが、好き好んで調べたくはない。

それよりも向かつて左側に見える扉の中に入る方がまだマシだろう。そう思いそそくさと人形のない扉の方へと向かう。

扉の前へ着くと横には何やら文字が書いてある。

「ウソつきたちの部屋」か……。どういう事だろう。」

「この中にウソばかりつく人たちがいるってことだよな？ ぜんいんウソをつけてたらどうすればいいんだろかね？」

「こういうものって誰か嘘ついてない人は必ず1人居るはずだから頑張って探そっか。」

「うん！ お兄さんもがんばって考えてね！」

「今までいい所なしだから俺もこれは頑張るよ。」

そんなことを話しながら俺たちは扉をゆっくりと開けた。

ウソつきたちの部屋

扉を開けると、そこには6枚の絵画が飾ってあった。そのそれぞれが女性のようなシルエツトなのだが髪の毛は描かれてなく、見えている肌は全て松崎しげるも真つ青な程真つ黒で服の色も淡い色は無く全てが主張の激しいカラーの服を着ている。因みに入口から見えて左から緑、茶、黄、青、白、赤の順番となっている。

「こいつらがウソつきたちなのか。額縁の下になにか書いてあるしこれが問になってるんだらうな。」

「お兄さん！早速はじから見ようよ！」

「それも良いけど俺は先に奥の部屋が何なのか視たいな。」

「え〜！先に何書いてるか見よーよー！」

「あー、わかったわかった。一通り流し見てから奥の部屋に行こうか。それでまた戻ってきてじっくりと考える。それで良い？」

「うん！これがせつちゅーあんだね！」

そんなことを言いながら俺たちは緑色の服を着ている絵画の前まで移動をする。

緑の人の下には「石像の正面に立って 西に3歩 次に南に1歩 そこが正解」と書かれている。成程。これで次の部屋に石像がある事は分かった。あとは奥の部屋の仕掛けの確認とこの謎解きだろう。この調子で全員分話を聞いていこう。

とりあえず全員分聞くことは出来た。まだ何処が繋がっているのかをしっかりと確認してないため解けることは無いが奥の部屋の確認をしに行こう。

「イヴちゃん約束通り奥の部屋に行こうか。謎解きに大切なものがあ

るかもしれないし。」

「うん！これ楽しいね！なにかのアトラクション見たい！」

「言われてみれば何処かにこういう謎解きができる場所とか確かに有りそうだね。」

「でしょ！わたしここにきて今一番楽しいかも！」

「そりゃよかった。」

どうやらイヴちゃんはこれを目一杯楽しんでいる様だ。俺としては命懸けに近いものを感じているのだが、これが無邪気というものなのだろうか。今の俺では到底することの出来ない考え方だなとふと思ってしまった。

奥の部屋に入ると目の前に堂々とした佇まいでこちらを向いている男性の石像が立っていた。そしてその周りの床には何やら四角い模様が等間隔で描かれている。俺たちの足元にもその模様が描かれていたので何となくじっくりと見てみると、どうやら剥がせそうな感じがする。試しに足で少し弄ってみると少し動く感覚がしたことから前の部屋で明言されていた“1歩”はこの1マス分と考えて良さそうだ。

石像の前に立つとこの石像が何かを持っていたことに気づく。その持っているものを覗いてみると“なかまはずれがひとりいる”と書かれた板を持っているようだ。どうやら俺達はその仲間外れを見つけ出すことが次の目標のようだ。

「それじゃあまたさっきの部屋に戻ろうか。」

「うん！なんかワクワクするね！」

「楽しいのはわかるけどさっきも似たようなこと言ってたよ。」

「いーの！楽しいこととか嬉しいことは言葉にしなきゃ！じやなきや楽しくないもん！」

そんな言葉を聞いた俺は本当にこの子はただただ純粋な子だと思った。純粹すぎて此方が浄化されてしまいそうになる。そんな馬

鹿みたいなことを思いながら俺達は嘘つき達のいる部屋へと戻る。
これから起こる凄惨な物を見ることになるとも知らずに……。

凄惨な現場

嘘つき達の飾ってある部屋へと戻ってきた俺達は今一度この6人がなんとやっているのかを確認をする。

曰く、

緑：石像の正面に立って 西に3歩 次に南へ1歩 そこが正解

茶：石像の正面に立って 東に4歩 次に北へ2歩 そこが正解

黄：白い服が言ってることは 本当だよ

青：本当のこと言ってるのは 緑の服だけだよ

白：石像の正面に立って 東に2歩 次に南へ2歩 そこが正解

赤：黄色の服に同意！

との事だ。なにか紙にメモが出来れば話は別なのだが……。

「あつ。携帯があるじゃん。」

「へっ？お兄さん何か言った？」

「いや、メモ出来るものをさういえば持って来てたなって思い出してさ。」

「もー！お兄さん！そういうのは早く言ってよー！」

「ごめんごめん。ただ紙媒体じゃないから使えるかどうかだけ確認するね。」

そう言っただけ俺は携帯をカバンの中から取り出す。美術館の中ではあまり携帯を触らない方がいいと思っただけ電源を落としてカバンに仕舞っていたのが仇となったのか、今の今まで持っていること自体忘れていた。

電源をつけてみると、少しの起動セクションを待った後にいつものロック画面が表示される。深海の世を通った時にもかしたら壊れた可能性もありえなくはないと思っただけ俺は安堵のため息をする。メモ機能を開く前に念の為ネットにつながるか確認を試みたところ、やはり繋がっていないようだ。画面上部のステータスバーにも圏外と表示されていた。

「やっぱりネットには繋がらないか……。ワンチャンSNSで謎解き有志に力添えしてもらえるかと思っただけど無理そうだな。」

「お兄さん何それ！なにか板が光ってる！」

「何って……。スマートフォンだけ……。」

「Smart Phone？うくん……。わたし聞いたことないなあ……。お兄さんのおうちってお金持ち？」

「いや、ごく一般的な家庭に生まれた普通の男子高校生だけ……。イヴちゃんの両親とか携帯電話って持ってないの？」

「持ってるけどそんなタッチで動かすものじゃなくてボタンで動かすパカパカするやつだよ？」

……イヴちゃんって過去の人物なのだろうか。スマホが出始めたのって大体10年くらい前だろ？ガラケーが主流だったのって遅く見積っても2010年位までじゃなかったか？それなのに現代で未だスマホを全く知らない人がいるとは思えない。

メモ機能を開きながらそんなことを思う。しかしいつまでもそんなどうでもいいような思考を続ける訳にも行かないので一先ずこの問題は頭の端に置いておいて謎解きの方へ集中をする。

とは言っても誰が誰に賛同しているかを書けばすぐに仲間はずれが分かるだろう。

まとめてみた結果

白↑黄↑赤

緑↑青

茶

という事が分かった。やっぱりこういう問題は書くものがあれば直ぐにわかってしまうことがひとつの問題点としてあるかも知れないが、俺自体はこの謎ときを楽しんでいる訳では無いので、考える楽しさが半減するとかそういうことは無い。

しかし俺は良いのだがまだ答えが分からないらしくうんうんと頭

を悩ませている彼女に答えを言うのか否か。それが問題だ。

「イヴちゃん。一応俺はわかったけどもう少し自分で考える？それとも答え言おうか？」

「もう少し一人で考えてみる！すぐ答えなんてつまんないもん！」

「分かった。じゃあ10分くらい経ったらヒントが必要かまた聞くね。」

「うん！ありがと〜！」

なんて会話を最後にまたイヴちゃんは謎解きを始める。俺は特にすることがないので取り敢えずスマホの電源を再び落とす。次いつ使うことになるのか分からないのにつとつけておくのも如何なものかと思ったからだ。しかし、しまうのはカバンではなくポケッタの中にする。これでいつ必要になってもすぐに取り出せる。……この場合電源は落とさない方が良かったか？そんな後悔を少しでも心に残しつつ俺はイヴちゃんの方へ向き直る。どうやらまた絵画の言っていることを見直しているようだ。

かれこれ5分ほど経ったか、6枚の絵画の前をずつと行ったり来たりしていたイヴちゃんの足が止まり大声で

「わかった〜!!!」

と叫び始めた。どうやら解けたらしいので、俺と答えが同じものになったのかどうかともし違った場合どちらがあっているかを議論しなければ。

「じゃあどの人が正解を言ってると思ったかセーので指を指そうか。イヴちゃんがセーのって言っているよ。」

「うん！じゃあいくよ？セーの！」

その掛け声とともに俺は茶色の服を着た女性の絵画を指さす。イヴちゃんが指を指しているのは——、どうやら俺と同じく茶色の服を着た女性の絵画のようだ。満場一致なら特に話し合う必要も無いので早速奥の部屋でタイルを剥がしてそこにあるであろう「何か」を見に行こうじゃないか。

そう思い動き出した俺にイヴちゃんは不満げに口を開く。

「お兄さんずるいよね。そのSmartPhone？つて奴でシャシャつと何かしたらすぐ答えわかってたもん。……もしかして答え見たの？」

「いやいや……。さすがにここは電波が届いてないからインターネットには繋がらないよ。俺が使ってたのはメモ機能だよ。ほら。」

そう言っただけ俺はイヴちゃんに携帯の電源を入れて画面を見せる。わかりやすいメモの取り方というわけではないから少しごちゃごちゃしているかもしれないが、手書きよりはスッキリしているからまあ気にしなくても大丈夫だろう。それに……

「それに狡いのは大人の特権だよ。」

「え〜！そんなのずる〜い！」

「はっはっは。そう褒めるな褒めるな。」

「ほめてないもん！」

そんな冗談を交えながら奥の部屋へと再び入る。そして石像の正面に立つと俺はメモしたものを確認する。東に4歩北に2歩とあるがどちらが北か。もし今向いている正面が北とするならば、東は右側だろう。今までのギミックもそんなに頭のひねったものはなかったしきつとここもそれくらい単純で大丈夫な筈。

「イヴちゃんはこの石像の前で待ってて。俺がちよつとタイル開けてくるから。」

「え？わたしもいっしょに行くよ？」

「うーん。もしこれが間違ってたら何かしらの罰があるかもしれないからここで待ってて欲しいな。それにそんなに離れてる距離じゃないしよ。」

「うん……分かった。」

「ありがとう。じゃあちよつと行ってくる。」

そう言つて俺は石像から右へ4つ目、そこから上へ2つ目のタイルへと移動をする。もしこれが正解なら何かがあるはず。そんな期待と、もしかしたら黒い手みたいなきずを散らしてしまうようなものが来るかもしれないという緊張感の両方を保持しながらタイルへと指を伸ばす。

タイルの下には黄色い文字で4と書かれており、他には何も出ては来なかった。それにホツとした次の瞬間、隣の部屋が急に騒がしくなった。何かを切り裂くような音とそれと同時にガラスの割れる音が俺たちのいる部屋にまで届いてくる。

一体何が起きた。そう思わざるを得ないこの状況で俺はどれくらい呆けていたのだろうか。ハツと我に返るとイヴちゃんの元へと駆け寄る。

「イヴちゃん！大丈夫？怪我とかはない？」

「うん……。わたしはなんともないよ。でも……前の部屋からスゴい音が……。」

「うん、そうだね。じゃあちよつと戻ってみよっか。なにかギミックが動いた音なのかもしれないし。」

俺はそう言つて扉の方へと歩みを進める。何か嫌な予感がしてたまらないがそんな予感をぐっと押し込んで扉の前に着く。そしてドアノブに手をかけると1回ゆつくりと深呼吸をしてイヴちゃんへと

声を掛ける。

「じゃあ開けるよ……。心の準備をしておいてね……。」

「うん……。こっちは大丈夫だよ……。」

「オツケー……。じゃあ行こうか……！」

そう言つて扉を開け放つと目の前には通路へと戻る扉以外何も無い。それではこちら側の壁だろうか？それとも両奥の壁か？

そんなことを思いながら振り向くとそこにはまるで血のように紅いペンキをその体や額縁に滴らせているナイフを持った5枚の絵画とズタズタに引き裂かれて元はどんな絵だったのかすらわからなくなつてしまつた1枚の絵画があつた。

「……っ！これはキツイな……。イヴちゃん。これは見ない方がいい。」

「え？何……が……。きやあああああああ!!!」

「イヴちゃん!!」

彼女は叫び声を上げたかと思うとその場に蹲つてしまった。慌てて傍に駆け寄ると身体をがたがたと震わせながら何かをボソボソと呟いている。ゆっくりと優しく、落ち着かせるように背中を摩つてあげながらイヴちゃんが何を言っているのか耳を澄ませてみると、どうやら「ごめんなさい。ごめんなさい。」とずっと何かに向けて謝っているようだ。しかし今回の事はまさに予測できなかった事態だった。まさかこんな惨たらしい行為がすぐ近くで行われるなんて誰も思うわけが無い訳で。

あれからどれくらい経ったのだろうか。まだ会話は出来そうにないが、漸くイヴちゃんの容態は安定してきて動けるくらいには回復してきていると思える。しかしいつまでもこんな部屋にいてはまたいつさっきのような状態になるかわかったものでは無いので、早急にご部屋を出してしまうのがいいだろう。これから向かうのは……取り敢えずさっきのノートの前辺りならマシだろう。

「イヴちゃん。動けそう？」

「……。」

彼女はゆっくりと縦に頷く。その顔に先程の謎解きをしている時のような覇気は感じられなくなっている。正直こんな状態の女の子を無理やり歩かせるようなことはしたくないのだが、だからといっておんぶや抱っこをする訳にも行かないだろう。そう思った俺は蹲っているイヴちゃんに手を貸してゆっくりと立ち上がらせる。その際、俺は憔悴しているイヴちゃんを見ていられなくなり、彼女が俯いているせいもあって目を合わせる事が出来なかった。

「それじゃあこの部屋を出よっか。ノートのあるところまで戻ろう。」
「……。」

立ち上がった彼女に俺はそう声をかけるも返事は来ない。今まだ心の中では自分を責め続けているのかもしれないが、慰めるにしてもここでは多少でも回復するとは思えない。そんな訳で俺達は一旦元来た道へ戻るのであった。

閑話：バレンタイン・i f

バレンタインデー。それは世の女性たちが好意の持つ男性に、又は仲の良い友達などにチョコレートを贈る日とされている。それに伴って、日本では「1年の内最もチョコレートが売れる日」ともされている……らしい。しかし諸外国では男性が女性に花束やアクセサリーなどのプレゼントを贈ることの方が多いらしく、お返しも同日にしてしまうことからホワイトデーなんてものも無いそうさ。

なんて特別な人恋人という存在に無縁な男が愛の日について語ったところでお前が言うな状態なのだが、そんな俺に相談をもちかけてきた人がここに1人――。

「お兄さん……。バレンタインに何送ったらいいかな？」

「えー。それ俺に聞く？チョコとかクッキーとかみんなで分け合えるものがいいんじゃない？ってことしか俺からは言えないよ？」

「そっかー。ニホンジンなら何かすごいものを渡しあつてそうだなって思っただけだなあ……。」

「うーん日本人に対する偏見が凄い。と言うか誰に贈るの？其れによつて助言も変わるんだけど。」

「……ギャリーとメアリー。いつもお世話になつてるから何か贈りたいなつて。」

「ほーん？なら心のこもつたものならなんでも喜んでくれそうだがねえ……。」

バレンタインデーが近くまで迫つていたある日、イヴは俺の元を訪ねてきていた。どうやらイヴはあの二人に対して贈り物を考えているようだが思いつかないらしい。……ナチュラルに俺が省かれていゝることは気にしないでおこう。きっと俺本人に聞かないように予めギャリーとかに助言してもらつてゐるんだろう。というかそう信じさせて。

閑話休題。俺に考えられる贈り物は手作りのお菓子とか安物でい

いのでパールツクのアクセサリーとかだろう。特にメアリーなんかは髪の毛が長いのでイヴとお揃いの髪留めなんか良さそうではないか。それにギャラリーには同じようなアクセントのついたネクタイピョンか、少し値は張るが普段使いできて長持ちする万年筆の様なものを贈れば喜ばれるのではなからうか。

「イヴはどういう物贈ろうと思ってる？後は……予算とかも聞いとかないと。」

「うくん。やっぱり喜んでくれる物がいいな。あとはやっぱり花束とか！」

「あー花束か。全く思いつかなかったわ。普段使い出来るものしか頭になかった。」

「もー！ロマンがないなあ。だからモテないんだよ。ギャラリーも言ってたよ。『ヒロトシはいつになったら良い人と巡り会うのかしら』って！」

「うぐつ。別にいいだろ。みんなに迷惑かけてる訳じゃないし。それに彼女なんて作ったら今以上に遊べなくなるぞ。」

そんな苦し紛れな言い訳を、俺は9つも年の離れた女の子へ言い放つ。尤も、俺自身彼女を作る気が無いのはクリスマスから変わってなくそれよりもイヴとギャラリー、そしてメアリーと遊んでいる時の方が有意義な時間に感じるのだ。それなのになぜ彼女なんて作る必要があるのか。なんてこの間ギャラリーに彼女の有無を聞かれた時から考えていた。

しかしこうも責め立てるかのごとく言われてしまうとなんだか作らないのが悪いように感じてくる。

「って言うか、そんなこと言うイヴは誰かい人はいないのか？まあまだ早いかもしれないけど。」

「えっ!?えっとお……そのお……。いない……かな？」

「……え?……ああーふーんそっかー。イヴにも春が来たのか。」

誰々？俺の知ってる人？」

「えつと、その……。ひ、ひみつ！教えてあげないもん！」

「……ギャリーだな？」

「ひゃう!?そ、そんなこと言ってないもん！お兄さんのバカ！」

どうやら凶星のようだ。元々嘘のつけない性格に加えて困るとすぐ顔に出してしまう癖のせいでも分かりやすく、むしろ教えてくれているのではないかと思えるほど表情がコロコロと変わる。

尤も、それを伝えたことですぐに何とかなる訳では無いしそれでは少しつまらないのでそのままの君で育ってくれ。

「しかしギャリーか好きか。じゃあ贈り物にはマカロンなんてどうだ？」

「マカロン?どうして?」

「ほれ。ギャリーってマカロン好きだろ?それにマカロンって確かバレンタインに送ると意味を持った気がする。忘れたけど。」

「へく……。マカロンか……。でもそれだけじゃなあ……。」

「と言うか贈り物なんて最後は心だから感謝の気持ちとか友愛の気持ちとかが籠ってればなんでもいいと思うぞ。」

「心……。気持ち……。うん。そうだよね！贈るもの、決めた！当日はお兄さんも楽しみにしててね！」

「ん?おう。……。ん?俺も?」

頭にハテナマークが浮かんでいる俺を後目にイヴは帰路に着く。……しかしあんなので良かったのだろうか?よく分からないがきつと本人的にはなにか収穫があったんだろう。いい方向へと転がってくればいいのだが……。

バレンタインデー当日。

今日は日曜日。例年からチョコを貰えていない俺にとっては全く関係のない日が来てしまったようだ。学校が休み……と言うかももうすぐ大学進学や就職の為学校側が準備した準備期間に入ってるお陰で2月に入ってからずっと休み期間だ。あとは卒業式を残すだけなんだが、そういう事もあり今年は例年よりも忙しくない。……チョコ？知るか！

「あゝあ……。暇だ……。何か面白い事は無いもんかねえ……。」

「大利く！お客さんよろ！」

「はーい！今行くー！……客？誰だろ。」

クラスがよく遊ぶ連中か、はたまた昔からの幼馴染（男）か。どちらにせよ俺の事を茶化しに来たヤツらだろう。そう腹を括りながら玄関へと向かう。

「はいはい。誰ですかー。」

「ハーン！ヒロトシ！元気がしらー！」

どうやら俺の当ては外れたらしい。俺の目の前にはイケメン高身長オネエが意気揚々とこちらに挨拶を投げかけてくる。……しかしイケメンは何をやっても映える。ただの挨拶なのにイケメンオーラが溢れ返って眩しさすら感じるほどだ。

「おーギャリー。家に来るなんて珍しいじゃん。何かあったか？」

「んもー！今日は何の日だったか忘れたなんて言わせないわよ！」

「バレンタインだろ？今まで俺とは縁もゆかりもなかったから忘れ気

味だわ。」

「そう！St. Valentine's day！平たく言えばお世話になった人に花束渡したり外でご飯を食べたりする日ね！」

「へー。で？そんな日に俺に会いに来てなにをするのさ。」

「察し悪いわねえ……。そんなんだからモテないのよ。」

「余計なお世話だよ。」

今日のギャリーはなんだかいつも以上にテンションが高い気がする。しかし今日来た理由は本当になんなのだろうか。なにか約束をしていたわけでもなければ俺が呼んだ訳でもない。

そういうしているうちにギャリーは俺の手を取って外へと連れていこうとする。

「ほら！ヒロトシ！行くわよ！」

「ちよつ待って！せめて着替えさせてくれ。すぐ済ませる。」

「ん〜……まあ仕方ないわね。アタシもアポ無しで来ちゃったわけだし。でも早くしてよ？もう二人共待ってるんだから。」

「あー。イヴとメアリーも共犯なのね。……了解。なるはやで着替えしてくる。」

ギャリーは俺の言った《なるはや》の意味がわからなかったらしく頭を捻らせている。……なるべく早くの略だよ。ちよつばやの方が良かったか？

5分くらい経っただろうか。着替えを済ませ荷物も持って俺は玄関へと歩を進める。流石にどこに行くか分からない状態だった為カジュアル系の服に着替えてきた。これで先程までの灰色のスウェットよりはマシになっただろう。

「ごめん待たせた。一応親にも出かけてくるとは言ったから大丈夫

「……だと思う。」

「これくらい大丈夫よ。さっ！直ぐに向かいましょ！」

「あいよ。……とところで今日はどこに行く予定。一切聞いてなかったけど。」

「ふふっ！ヒ・ミ・ツ！」

そんな話をしながら俺達はギャリーの乗ってきた車へと乗り込む。車を運転してここまで来たってことは今日向かうところで飲酒はしないつもりなのだろう。それがお酒の提供をしていない所へ行くのか。そんな一抹の不安を胸に秘めながら行き先の分からぬままにそれでも車は走っていく。

「着いたわ！ここよ！」

「ここって……イヴン家？どうしてここに？」

「あら？何も聞いてないの？この間イヴがヒロトシに会いに行くからその時に今日は空けといてって伝えるって言ってたのに……。ちよつとアンタ。イヴになんかした？」

「いや……。ちよつとイヴをからかって遊んでたらすぐ帰った……。」

「ちよつとやりすぎたんじゃないの？……まったくもう！手のかかる子たちなんだから。」

はい、すみません。心の中で謝罪の言葉を伝えながら俺はギャリーから目を背ける。そんな俺が何かおかしい所があったのか、俺の後ろでギャリーがクスクスと笑っている。そんなことをしていたら中からメアリーが顔を出してきた。

「ちよつと〜！早く来てよく！じゃないと始められないじゃん！」

「あら。ごめんなさい。ヒロトシだったらいい反応をするんだもの。つい弄っちゃったわ。」

「ついで弄られるこっちの身にもなってくれよ……。」

「そんな事よりも早く家の中に入りましょ？これ以上メアリーを待た

せたら暴れだしちゃうわ。」

「へいへい。それじゃあ行きますか。何するかまだよくわかってないけど。」

そんな愚痴とも取れる一言をギャリーは華麗にスルーを決めてイヴの家の中へと進んでいく。出来ればご家族の方には会いたくないなあ……変な方に勘違いされたら嫌だなあ……なんてことを思いつつ俺もギャリーの後を追いつつのつそのつと家の入口へと向かう。

「ハイ！ヒロトシを連れてきたわよ〜！」

「おっそーい！トシを迎えに行くだけでどんだけかかっているの！もう待ちくたびれたよ〜！」

「まあまあ。お兄さんも色々あるんだよ。」

「ごめん。今日集まる事とか何するとか全く知らずに来たんだけどこれはなんの集まり？」

「……。えっ？」

「ごつめーん☆アタシの独断でまだヒロトシには言っていないの〜！」

そうおちやらけた表情でギャリーはなんでもない事かのように言い放つ。と言うか俺が何も知らないのってギャリーの独断だったんだ。なんという奴。

そんなことを知らなかった2人はキョトンとするが何かおかしいことに気づいたのか、メアリーがギャリーの事を少し睨んでいるかのような目付きになる。

「もーギャリーー！なんでトシには言わないでおくのさ〜！」

「そっちの方が面白いし、それとニホンって女性が男性にチョコレートあげる日なんですよ？じゃあヒロトシは何も準備してないだろうからこれから準備しろって言ったってロクなの準備できないわよ。」

「あー、なるほど。確かにトシはプレゼントのセンス無さそう。」
「おい。ギャラリーは兎も角メアリー、それは聞き捨てならないぞ。俺はセンスが無いんじゃないやなくてセンスの悪いだから。いわばロマン派と印象派のようなものだから。俺とメアリーのセンスの違いからおこる勘違いだから。」
「いやトシ。必死すぎて口調変わってるよ……。それにその例えはロマン派と印象派の画家さんに失礼だよ。トシそんなに絵は上手くないじゃん。」

……何故メアリーが俺の絵の上手さを知っている？そう思ったが美術館の中で普通にワンポイント的に書いていたのを思い出す。しかしそうなる俺とメアリーは壊滅的にセンスが合わないもの同士となる。……イヴには可愛いって褒められたんだけどなあ……。

「ほらほらーそんなに言い争ってないで本題に入りましょ？ヒロトシにはさつき言っただけど、今日はバレンタインデー！となればやることは1つ！愛を育むこと！でもみんな特定の人はいないみたいだし今年は『友愛』を育てましょ！」

「ゆうあい？ギャラリーそれって何？イヴは何かわかる？」

「ううん。わかんない。お兄さんはわかる？」

「あー……簡単に言えば友達としてもっと仲良くなろうよってことだと思う。『友』への『愛』情で友愛。」

そこまで言うそれぞれ三者三様の反応をする。ギャラリーは頷き、イヴは納得している。この中で一番友愛の心が足りないと思われる肝心のメアリーはと言うととても怪訝な目でこちらを見ている。いや俺が言い始めた事では無いからこちらを見られても困るのだが。そんなことを露ほども知らないギャラリーは言葉を続ける。

「それじゃあ事情の知らなかったヒロトシは貰う係に専念してイヴとメアリーはプレゼントの準備をしましょ！」

「うん。ちょっと待っててね。」

「トシ。私のセンスの良さに驚かないでよ。」

「ハイハイ。そんなこと言っていないでさっさと準備しな。何持ってきてもケチつけてやるよ。」

「むく！そんなこと言っているとあげないから！イヴからの私を貫うから！」

「ちよつそれは反則。イヴのくれるものとメアリーがくれるものは関係ないだろ。」

「ふーん！そんなの知らないもーん！」

そう言つてメアリーは自分の準備に行った。反応がなかったイヴとギャリーだが、既にここを離れて準備に行つていたようだ。まあいつも通りのやり取りではあるので仕方ないとは思うがなんというか寂しい気もする。そんなことを思つてたらこちらに近づいてくる足音がする。誰か戻つてきたようだ。メアリーはさっき言つたばかりだからイヴかギャリーかのどちらかだろう。

「おまたせ。待ったかしら？」

「いや、メアリーが結構ギリギリまでここにいたからそんなに待つてないぞ。」

「それは良かった！じゃあ早速渡しちゃうわね。ワタシからはこれよ。」

「これは……万年筆？」

「ええ！これなら普段も使えるでしょうし、丁寧に使えば本当にすごく長持ちするもの！嵩張らないし、ヒロトシには万年筆を使いこなせる素敵な大人になって欲しいって願いも込めてこれにしたわ！」

「おお……。もしかしたら万年筆を見るの生まれて初めてかもしれない……。ありがとうギャリー。大切に使うよ。」

「ええ！そうして頂戴！ヒロトシならそれを使いこなせるくらいかっこいい大人になれると信じてるわ！」

そんな会話をしていると、再びこちらに向かう足音が聞こえる。しかしその音はどたどたと慌ただしくイヴでは無い事は明確だ。……メアリーは落ち着くことが出来ないのだろうか。これからが不安になる。

「トシ！待たせたかもしれないけど私は謝らない！」

「いやそこは素直に謝れよ。」

「そんな事よりも！これ！私からのプレゼント！」

「これは……キャラメル？」

「うん！調べたらそんなに難しくないっばかったからコレにしよって！ちゃんとバレンタインに送る意味も調べたんだから！」

まさかメアリーがお菓子を作るとは思ってた俺は驚きを隠すことは出来なかった。しかもキャラメルと来たものだ。本人は難しくなかったと言っているが俺からするとすごい大変な作業だっただろう。

「ふふっ。メアリーったらすごく張り切って作ってたもの。しっかりと味見もしているし、ちゃんと美味しいものが出来上がってるわよ。」

「へー……。なあメアリー。」

「な、何？これでもケチつけるの？」

「ありがとう。味わって食べるわ。」

俺がそう言っただけで頭を撫でると少し不安そうだったメアリーの顔が一瞬で破顔し喜びを顔に出している。正直今日送る意味の方は知らないが、それを抜きにしてもいいものを貰えた気がする。なんて思いながらメアリーの笑顔を見てると向こうも気づいたのか、頭を撫でていた手を振り払っていつもの自信満々の顔に戻る。

「そんなの当たり前でしょ！私がお菓子を作るなんてそうそう無いんだから！……ありがとう。」

「……ん？何か言ったか？よく聞こえなかった。」

「何でもない！バーカ！」

本当は聞こえていたがここで「どういたしまして」と返すのがなんか照れくさく感じてしまった俺はあえて聞こえないふりをする。俺もメアリーもお互いにお互いを助け合った仲だからこそ、弱いところを見せて心配させたくないのだ。だから何時も素直に「ありがとう」を言えずに巫山戯てしまうが、こういう日くらいは素直になっても良いだろう。

「ちよつとおふたりさん？いい雰囲気のところ悪いけどイヴの準備が終わったっぽいわよ。もうすぐ来るわ。」

「い、良いふいんきってなによ！私とトシがそんなふいんきになるわけないじゃん！」

「まあいいわ。素直なヒロトシなんて珍しいものも見られた事だし……イヴ！入って来ていいわよ！」

「むう……。お兄さんとメアリーがいい感じだった。そういうのはわたしのいる前でやって。もつとしっかり見たいから。」

「イヴは入ってきて早々何を言ってるんだ……。」

俺とメアリーの間で普段はあまりこういうことが無いからかイヴは部屋に戻ってくるなりもう一度今のやり取りを見たいと言ってきた。しかしそんなことするのは恥ずかしすぎてまあ無理だろう。

それにやっつてと言われてハイソウデスカと簡単に出来るものでもない。こういうのはタイミングがシビアなのだ。なのでイヴには諦めてもらうしかない。

「そんなようわからんどうでもいい事よりもイヴのプレゼントってなんだ？」

「……今度絶対にわたしの目の前でやって貰うんだから。」

「その夢は諦めなさい。」

「いや。あきらめない。」

まあなんとも頑固な性格だ事。まあ忘れるまで待てば大丈夫か。適当に約束をしておこう。メアリーも乗ってくることは無いだろう。……ないと信じたい。

「あーわかったわかった。今度な。メアリーが褒められる事をした時にまたやってやる。」

「ホント!?楽しみにしてる!」

「はあ……。あのやり取りの何がいいのやら……。」

「あ、お兄さん。これが私からのプレゼント。それとメアリーにも。」

「おー?こりやマカロンか。やつぱりこれにしたんだな。」

「わく!綺麗な色く!ね!ね!メアリーこれ食べていい?」

「うくん……。お夕飯が待ってるんだから少しだけよ?ご飯が入りませんなんて言ったら許さないわよ?」

「ハイ!……トシは今食べるの?」

「いや、家帰ってからゆつくり食べるよ。」

「ふーん、そっか。」

その含みのある返事はなんなのだろうか。俺がいつどこで食べても良いじゃないか。

それよりもイヴはなぜ俺とメアリーにしか渡してない?もしかしてメアリーだけは違うものなのか?……気になる。こつそり聞いてみよう。

「……なあイヴ。もしかしてメアリーだけプレゼント違う?」

「う、うん。」

「ほーん?何にしたのさ。ほらほら言ってみて。」

「……キャンディにした。ほら話したでしょ!この話終わり!」

「キャンディねえ……。なんか意味があるって事だ。まあ応援はする。あんまり気張りすぎずに頑張れ。」

「……うん。」

「ほれ。じゃあササツと渡してきな。あんまり考え過ぎると時間が無くなつて渡せなくなるぞ?」

「……行つてくる。そこで見守つててね?」

「おう、任せとけ。」

そう言うといヴはギャリーの元へ小走りで駆けていく。その一部始終を見ていたメアリーが俺の元へ来る。どうせくだらないことを聞きに来るのだろう。

「ねえトシ。イヴつてギャリーの事が好きなの?」

「さあ?俺にはわかんないな。ただギャリーだけ渡す物が違ったから感謝の度合いが違うか、それともベクトルが違うか。どちらかだと思ふぞ。」

「ふーん……。まあいいか。イヴもギャリーも良いやつだもん。きつとどう転んでも大丈夫ね。」

「ああ、あの2人ならきつと大丈夫。……ところで俺は良いやつの中に入つてんの?」

「入つてる訳ないじゃん。それは『じいしきかじよ』だよ。」

「このやろつ。そんなこと言うやつはこうだ。」

「あー!ちよつとく!髪の毛がぐしやぐしやになる〜!」

「ふはは、辞めて欲しかったらごめんなさいと言え。」

「だが私は謝らない!」

結局俺達はいつもみたいにワチャワチャしてこの話は終わった。しかしこの雰囲気がとてつもなく心地よい。あの美術館に迷い込む前はどんな友達と遊んでいてもこんな感覚は感じなかったのに何故だろうか。そんなことを思いながら俺はメアリーの髪の毛をワシワシと乱暴に撫で渡す。

「……メアリーもヒロトシもブレないわねえ……。まるで構われすぎ

た猫と飼い主みたいだわ。」

「そう？わたしは面倒見のいいお兄ちゃんと素直になれない妹に見えるよっ。」

「ふふっ！そっちの方がしっくりくるわね！……それでアタシには何をくれるのかしらっ？」

「……これ。ギャリーにあの時もらったからお返し。」

「……あらーキャンデイじゃない！しかも手作りだわ！凄いわねイヴ！」

「ママに手伝ってもらったけど基本はわたしが全部作ったから……。受け取ってくれるっ？」

「勿論よ！こんな綺麗なキャンデイ、食べちゃうのがもったいないわ！」

「そう？良かったあ……。」

イヴは安堵のため息を漏らすと渡す時以上に緊張した面持ちでギャリーの方を見つめる。それに気づいたギャリーはまだ何かあるのかと少し身構えながらイヴの出方を伺っている。

「それ……！ちゃんと今日渡す意味分かってるから……！」

「……。」

「じ、じゃああつちでメアリーと遊んでくるね！お兄さん呼んでくる！」

イヴはそう言うのと踵を返してギャリーの元から去っていく。一方ギャリーは笑みを顔に張りつけたまま動かないでいる。少しすると大利がギャリーの元へと来るが、その異常な光景に大利は頭を傾げる。

「おい、ギャリー？どうした？イヴに嫌いとも言われたか？」

「……寧ろその逆よ。当回しだけど告白されたわ。」

「……マジンっ？」

「……マジも大マジよ。」

そこまで言うとはギャリーは膝から力が抜け、崩れ落ちる。ギャリーのこんな姿なんてなかなか見ないのでビックリしたが、そうなるのもまあわかる気がする。

9歳と20歳。

11歳も歳下の女の子から告白されたのだから。

「……で？返事はどうすんの？」

「こんなのどうすればいいのよ……。」

「言っとくけどちゃんと考えて言わないとキレるから。俺の妹分を軽い気持ちで泣かせたら殴るからな。」

「……あなたそんな熱い男だったのね。気が付かなかったわ。……でもそうよね。相手が幾つであれちゃんと返事を返してあげないと失礼よね……。」

「そういう事。まあ急がずゆっくり答えを出せばいいさ。慌ててもいいことは無いしな。」

「……アンタほんとに歳下？アタシよりしつかりしてるんじゃない？」

「なんかあの美術館に行つてから周りからも性格が少し変わったつて言われる。でもそれってギャリーとイヴ、メアリーと会ったからだろう？ならそれはきつといい変化に違いないから大丈夫。」

「……これじゃあ今までガールフレンドがいなかった理由が分からないわね。今のアンタ、男としてすごく魅力的よ。」

「男にそんなこと言われても嬉しくない。」

「ふふっ、そうよね。」

「それに……。」

それに今の俺はこの3人がみんな元気に仲良く過ごしてくれればそれで満足なんだ。それ以外の幸せは今の俺には背負いきれないから。零れ落ちてしまうから。だから彼女とかそういうのは要らない。

なんて、少しカッコつけすぎたかもしれない。

「それに……なによ？そこで止めたら気になるじゃない。」

「ん？……秘密。」

「あー！それさっきのアタシの真似!?その態度癪に障るわ!」

「狡いのは大人の特権だからな。……な？イヴ。」

「……うん!」

次の為の小休止

ノートの前へと移動してきた俺達はここで一旦休憩を取ることにした。先程携帯を出した時にカバンの中に4本ほど飲み物があつたことを思い出したので、今回は家から持ってきた水筒ドリンクを取り出した。中身は市販のパックで作った麦茶が入っている。しかし俺だけ飲むのは流石に気が引けるのでイヴちゃんにも俺の持っている飲み物の中で飲みたいものはあるのか聞く事にした。飲む飲まない以前に返事ができるような状態ならいいのだが。

「イヴちゃん。お茶とスポドリがあるけど飲む？」

「……。」

「そっか。じゃあ飲みたくなったら言ってね。何時でもカバンから出すから。」

俺の問いかけに対してイヴちゃんは返事はおろか意思表示すらなかった。これは相当にやばい自体なのではないか？しかしこんな時にどんなふうにも声をかければいいのかなんて分かる訳では無いし、そんな現場に遭遇したことすら無い。いくら絵画とはいえこんな近くで殺人紛いな事が起こることなんて想定もしていなければ心構えなんてできているわけが無い。俺も彼女も少し浮つきすぎていたのかもしれない。

無言で重苦しい空気に耐えられずノートの付近をうろちよろとしていると、ふと額縁に入った真っ白な紙が目に入る。先程ノートに書いていた時にも視界にチラチラと入ってはいたのだが、よく見てみると髪の真ん中に赤い点のようなものが見える。先程は特に見えていなかったのだが、認識してしまうとどうしても気になってしまう。

赤い点の正体がなんなのかどうしても気になってしまった俺は件の額縁の近くへと近づいていく。そこには数字の9が赤い文字で描

かかれていた。これで黄色の4に引き続き2つ目の数字をゲットしたのだが、これの使う場所がまだわかっていない。それにこの2つで謎が解決するのも怪しい所がある。

そんなことを考えていると、イヴちゃんが俺の服の裾を少しだけ引つ張ってきた。

「ん？イヴちゃんどうした？」

「お兄さん……ごめんなさい。わたしのせいであんなことになっちゃって……。」

「んー。それって本当にイヴちゃんのせいなのかな？」

「えっ……？だってわたしがあの問題をクリアしなかったらあんなひどいことは起きてなかったんだよ……？」

「でも俺も同じ答えを出してるからきつとイヴちゃんが分からなかったとしても同じ結果になってたと思うな。それに……。」

「それに……？」

「ああいう結末にしたのは彼女達絵画達だ。イヴちゃんは何もしていないんだからそんなに自分を責める必要は無いよ。」

そこまで言うといヴちゃんの体が再び小刻みに震え始める。今度は何事かと身構えると、なんとイヴちゃんの双眸から涙がポロポロと零れ始めた。

「えっちよつ大丈夫？体のどこか痛む？それとも俺と一緒に嫌だとか？いやいやそんなことよりなにか拭くものあつた気がする。ちよつと待ってね今タオル出すから。」

「お兄さん……ありがと。」

涙とは一切無縁の生活を過ごしてきた俺は、イヴちゃんの突然の落涙に驚いてしまいつい早口で捲し立ててしまった。しかしイヴちゃんの聞こえるか聞こえないか位の、しかししっかりと心の籠った感謝の言葉を聞いた俺はそれまで慌てふためいていた心の内がその瞬間に穏やかなものへと変わっていくのを感じつつイヴちゃんへ向き

直って口を開く。

「どういたしまして。それとこちらこそありがとね。」
「こちらこそどういたしまして！」

イヴちゃんはふふふと笑いながら涙を自前のハンカチで拭いてニコリと微笑む。その笑みはとても優しく、穏やかなものだった。

人形

「それじゃあまだ行っていない人形の奥に進もうと思うけど行けそう？無理はしなくていいからね。」

「大丈夫だよお兄さん。わたしのせいでいつまでも休んでいられないもん。」

「そっか。イヴちゃんは強いね。じゃあ頑張って進んでいこっか。」

イヴちゃんの調子が戻ってから少しだけ休憩をとった俺たちはそう言って再びもうひとつの部屋へ移る。人形の吊るされている気味の悪いエリアを何かないかと思渡す。俺が背伸びせずに触れられそうな人形はおよそ3つほど、イヴちゃんとなると1つが限界だろう。それに、俺の触れることが出来そうなる3つのうちのひとつは手がギリギリ触れられるくらいの高さで細かく調べられるかどうかと聞かれたら落とさない限り無理だと答えるくらいには高い位置にある。

人形以外には特に見えるものもないし、とにかく2人で調べられるものからまずは調べていく。2人いけば見逃しも少なくなるはず。そう思った俺は手前から3つ目の赤い服を着た人形を調べるために気味の悪い空間を勇み足で進んでいく。

いざ人形の前に立ってみると、やはりと言うべきかあまり綺麗やかっこいい、可愛いと言われるようなものではなくどちらかと言うと不気味や気持ち悪いという言葉が出てくるようなものだった。

「イヴちゃん。なにか分かったことはある？この人形の事じゃなくてもなんでも言ってみてね。」

「うーん……。あ！あつちにドアがあるよ！」

「え、マジ？……あつ本当にある。人形にばかり気がいつてて気づかなかったなあ……。」

「お兄さんどうする？先にあのドアを見に行く？」

「どうしよっか。恐らくあの扉でさっきの数字を使うんだらうけど、あと幾つ数字があるか確認の意味も込めて見に行こうか。」

そう思い移動しようとした次の瞬間、ひとつ奥の人形がなんの前触れもなく突然地面へと落ちてきた。プラスチックのような硬い素材でなかったためあまり音もしなくて気づかずに過ぎ去るところだったが、何かが落ちるところが視界の端に入ってしまったので気づかざるを得ない状況になってしまった。

しかし何故だろうか。今回はあまり驚かなかった気がする。そこそ止めてしまったものの何か起きそうな気はそこはかたく感じていたからだろう。しかし、あれはなぜ落ちてきたのだろうか。もしかしてあの人形にも何か数字が書いてあるとか……いやないか。

「……お兄さんどうする？人形が落ちてきたけど……調べる？」

「いや、先に扉の方を調べよう。どうせ驚かすだけのギミックだと思う。」

「そうかなあ。わたしはこの人形に何かありそうな感じがするけどね。」

「うーん……イヴちゃんがそう言うなら何かありそうだな……。じゃあ先に人形の方を調べよっか。」

「そうしよ。これのせいでドアが開かなかつたらまたもどってこないで行けなくなるし。余計な手間は増やしたくないでしょ？」

「……本当、急に遅しくなったね。イヴちゃん。」

つい先程まで弱々しく体を震わせていたとは思えない程強い精神をお持ちになったようで、言葉の節々に力を感じる。しかしこの力強さがもし無理している結果なのだとしたら。そしてこれから何かしらのきっかけでその無理が祟ってしまったら。俺はイヴちゃんの心を支えることは出来るのだろうか。

そんな事も出来ないとなるとなんだか歳上として恥ずかしくなってくる。こんな幼気な少女に無理をさせて俺は何をしているんだろう。そんな考えばかりが頭を過ぎってしまう。俺はなんて無力なんだろうか……。

「お……ん。…兄…ん。…お兄さん!!」

「っ!?ど、どうした!なにか襲ってきたか!」

「ひう!……ビツクリしたなあ。お兄さんがブーツとして呼んでも無視するから大声出したただだよ。まったく、この人形に何があるかお兄さんもいつしよに見てよ?」

「あ、ああ。ごめんごめん今見るよ。」

こんな事を今考えていても何も進みはしない事を遠回しに指摘されたような気がしてなんだか申し訳ない気持ちと、実は心を読まれているのではないかなんて恐怖の気持ちが入り交じったこの感情を俺はゆっくりと解消していく。

イヴちゃん本人からしたら急に黙ってしまった俺を気にかけてくれたのだろうが、今回はタイミングが悪かったように思える。そういう意味では本当に申し訳ない事をしたと思っっている。

そんな事を考えながら俺は人形を手にとって何かこの謎解きを攻略する為のフアクターとなり得るものは無いか組まなく全身を観察する。

「……ん?ねえイヴちゃん。ここのこれってなんか数字に見えない?」

「えっ?……あつホントだ!81…いや18かな?どっちか分からないけどぬってあるね。」

「文字が小さいから見逃すところだったよ。赤地の服に緑の糸だったからまだ分かりやすかったけどね。」

「お兄さんスゴいね!わたし見つけられなかったよ!」

そう言うといヴちゃんはその幼さの残る可愛らしい顔に満面の笑みを浮かべる。まるで自分が見つけたかのごとく喜ぶ様を見ていると何だか俺も嬉しくなってくる。

そしてそれと同時にこんなに人のことを思える優しい子の表情が

再び曇らないように何とか俺に出来る事をして支えてあげなければ。そんな風に考えながら念の為に人形をもう一度注意深く調べる。

「……この人形はもうこれ以上無さそうだね。特に気になるところはもう無いし。イヴちゃんはまだ見る？」

「うん。わたしももういいかな。こう言うのって1つのものにヒントはひとつしかないってよくあるしこれも多分そういうものだと思う。」

「そっか。じゃあ改めて扉の方に向かおうか。何事もなく開いてくれればいいけどね。」

「多分何かなぞときがあるよね……。まだ黄色の4とかこの緑の……81?18?とか使っていないもん。」

「まあそうだよねえ……。まあ気楽に行こうか。ここで思い詰めても何も進まないからね。」

「……お兄さんがそれ言うの?ついさっき思いつきり深く考え込んでたのはだれだっけ?」

「……仰る通りでございます。其れについては申す訳もございません。」

そんな気の抜けた会話をしながら扉の前へと移動を開始する。扉までの距離はそんなにある訳では無くすぐに着いてしまうが、そんな間の何にも追われていない時間位は気を抜いても許されるだろう。

扉の前に着くとなにか扉に違和感を持つ。それもそのはず、扉に暗号のようなものが描いてあるのだ。

“ × + ||? ”

少し黄色い丸が見つづらい気はしたがまあわかったのでよしとしよう。それにしてもここに来て算数か。

サツと携帯にメモしたものを念の為見てみると “黄色の4” “赤の9” と書かれている。それにさつき判明した緑の数字が81か1

8のどちらなのか判明すれば答えも直ぐに導き出せるだろう。

こんなことに時間をかけるのも嫌なので電卓アプリを開こうとするも何故か起動せず。何度電卓マークをタップした所で一向にアプリが起動する素振りすら見せない。

……こんな訳の分からない世界なんだ。そりや都合の悪い物は使わせないか。ならなんでメモアプリは使えたんだ？電卓がダメならメモも使ったらダメなものだと思っただが……。

「お兄さんどうしたの？……SmartPhoneだっけ？それ見ながら固まっちゃって。」

「いやね。電卓機能があるからそれ使おうとしても携帯が反応しなくてさ。多分この美術館に迷い込んだ時に使えなくされたのかも。」

「え〜！じゃあこの計算を自分の頭の中でしないとイケないの？これは大変だ。」

「じゃあイヴちゃんは18だった場合の計算をしてくれるかな？俺は

81の計算をするからさ。」

「わかった！がんばってみる！」

そう言っただけ俺達はお互いに計算をし始めた。とは言っても俺の方は繰り上がり自体はそんなに多くないため直ぐに終わるだろう。そんなことを思いながら思考の海へと俺は潜って行った。

リンゴの木

元々逆さに吊るされていた人形には18又は81の文字が縫われていた。吊るされていた状況で読むべきなのか、それとも普通に頭が上にある状態で読むべきなのか分からないままなのでとりあえず両方のパターンの計算をしようとなつたのはいいのだが、電卓が使えないとなるとなかなか面倒だ。しかし何事も成さねば成らぬのだから兎に角こんな簡単な計算なんてちやっちやと終わらせて次に進まなければ。

81×9……729か。それに4を足せばいいんだから733。そんなに難しくない計算で大助かりだ。まあこれくらいの四則演算はこなさないと同級生のヤツらに笑われてしまうだろうしそれよりも高校生としては当たり前前の結果だろう。

「イヴちゃん。そっちはどう？計算終わった？」

「え!?お兄さんもう計算し終わったの!?早すぎだよー!」

「まあこれが大人だよ。イヴちゃんもきつとこれくらい計算が早くなるから大丈夫。」

「うーん……わかった。私が計算終わるまでもう少しだけ待つてね。」

「はいはいー。ゆっくりで大丈夫だからね。先に俺のやつ入力するからさ。」

「うー。じゃあお兄さんの入力が終わるまで待つてる。」

そう言うとき少しムスツとした表情をしたイヴちゃんがこちらを見てくる。まあ確かにこの入力が終わってしまったえば計算をする必要はなくなるわけだからそりや待つか。そんな事よりも早く入力をしなければ。正直正解ではない気がするがそれでも可能性が有るのなら出来うる限り試していかないと後悔をすることになるかもしれないから。

「733……。ダメだ。入力しても反応がない。これじゃないみたい

だ。」

「そつかあー……。わたしじゃ時間がすごくかかるからお兄さんが代わりに計算して?」

「わかった。少し待っててね。」

正直イヴちゃんは自分でやると言うと思っていたので頼まれたことに少し驚きはあったが、まあ頼まれたからにはしっかりと仕事をこなすことにしよう。

まず 18×9 は $90 + 72$ にして 162 。それに4を足すから166になる訳か。

とりあえず今導き出した答えを扉に入力をする。もしこれでもダメならもう一度両方とも計算し直して間違いがないか確認しなければならぬ。面倒すぎるので勘弁願いたいところだが、まあそれもこれも入力結果次第だろう。

「……あつ。開いた。」

「もう開いたの?お兄さん頭良いね!さすが大人!」

「まあ現役の高校生だからね。これくらいの計算はできないと先生に怒られちゃうから。」

「ふーん。高校生も大変なんだね。わたしも高校生になる時にはお兄さん見たいに頭良くなってるかなあ?」

「イヴちゃんならきつとなってるよ。……よし、それじゃ扉の先に行こうか。イヴちゃんが行ける?」

「いつでも行けるよ!」

イヴちゃんもこう言っているので早速この扉の先へと進む為に扉に手をかける。おそらくこの先にはあの唇に与える何かが置いてあると思うのだがそれが一体何なのか。それを確かめるべく俺はゆっくりと扉を開けた。

「これは……木か？それも小さいな。」

「ねえお兄さん。目の前の木にだけリンゴがなってるよ。」

「そうだね。もしかしたらあれを唇に与えるのかな……。イヴちゃんあれ取れそう？」

俺はそう言っただけリンゴを指さす。あの木は十中八九オブジェだろう。まあこんな屋内に、ましてや土すらないような場所に本物の木が生えているなんて事は有り得ないのだから。となるとあの木になるリンゴも本物では無いのだろう。こんな偽物で何とかなるのか分からないが試してみるしか方法はないか。

そう考えていると、どうやらイヴちゃんがリンゴを取ることが出来たようだ。何かを持って此方に戻ってきた。木に付いていた赤い果実がなくなっていることからその手の中にあるのはリンゴだろう。この部屋は以上だろうか？一応一周回って何もなければ確認だけしておこう。今まで触れてこなかったが目の前に大きな絵画もある事だ。少しくらい見えていても大丈夫だろう。

「この部屋には何かは何か無いのか確認の為に一周しよっか。確認不足で戻ってくるのも嫌だし。」

「そーだね。……お兄さん、さつきみたいにぼーっとしないでちゃんど見てね？」

「あー……善処します。はい。」

「むく。なんか信じられないなあ。」

イヴちゃんに信じられないと言われて少しだけショックを受けたが、今までの己の行動を鑑みるとまあ妥当な判断だろうと思える節もあるのが辛いところ。しかし今思い出してみると美術館に、正確には“こうなる前の普通の美術館”に着いたあたりから俺はなんだかいつもよりおかしかつたし、さらにその前の家にチケットが届いた日から“何かがすっぽりと抜け落ちた感覚”が拭えないのだ。その虚無

感がなんなのか分からない限りどんな事でも深く考えてしまうと思う。

「まあ多分大丈夫だと思うよ。根拠は無いけどね。」

「理由もないのに言い切っちゃうのつてすごいね……。」

「いや、断言してるつもりないんだけど……まあいいや。この部屋をササツと見て唇の所に行ってみよ。」

兎にも角にもこの部屋に何もないかどうか確認を早く終わらせて次の部屋へと進もう。そう思った俺は会話も程々にゆっくりと歩みを進める。

入ってきた扉からも見えていた木になっているリンゴの描かれた大きな絵画があり、タイトル欄には『木に生ったリンゴ』と書かれている。なんて安直な名前なんだろうとか少し思いもしたが、特段気にすることも無いと思い再び歩き始める。

部屋を1周歩いてみたが、木のリンゴを取ってしまった今絵画と木のオブジェ以外何も無い事が分かったので扉の前まで戻ってきたその足でこの部屋から出ることに。これで今行ける所が唇の所以外全て踏破してしまったので取り敢えず来た道に戻ることにする。

猛々しいらしい唇もこれでこれからの指針となるようなものを俺達に指し示してくれればいいのだが……。

ギロチン

この人形の吊るされた部屋から隣の部屋に戻るために黒い手が出っぱなしになっている廊下を通ることに。この黒い手さえ引つ込んでくれればもつと通りやすくなるのだが、まあそんな事が有り得ない事は百も承知なので当たらないように注意して進む。

そうして通路を進み始め中間あたりに着いた次の瞬間、元々出ていた黒い手とは逆側からもう一本黒い手が出てきた。しかしこれも三回目という事もあり、正直そんなに驚くことは無かった。それよりも黒い手に当たらなかつた事に安心を覚えている。

「イヴちゃん、今の大丈夫だった？」

「わたしは大丈夫。それよりもお兄さんこそ大丈夫？お兄さん怖がりだから今のもびっくりしたんじゃない？」

「んー。それよりも当たらなくてよかつたって気持ちの方が大きかつたかな？それにほら、これももう3回目だし。」

俺がそう言うといヴちゃんは納得したようでそれ以上何も聞いてこなかつた。それにしても情けない所を何回か見せたせいかわ伊ヴちゃんの中で俺はビビりに認定されてしまったらしい。なんとも不名誉だがこれも身から出た錆、甘んじて受け入れなければ。

なんだかんだその後は何も無く通路を抜けた俺達はノートの方には行かず、そのまま唇のあつた壁の方へ向かつていく。

「ほい着いた。取り敢えず話し掛けますか。唇さんや。ご機嫌いかが？」

「はらへった くいもの よこせ」

「やっぱりこれが必要だったね。」

「その くいもの よこせ」

「どーぞー！これしか無いけどいっぱい食べてね！」

イヴちゃんがそう言つて木のリンゴを唇の口元へ持つていくと、唇はバリバリムシャムシャと木材なんてこともお構い無しにリンゴを丸かじりしていく。

リンゴの芯も残さずに平らげた唇は満足気な声色でこちらへと話しかけてくる。

“うまい これ”

「へえ。それって美味いんだ。という事は普通にリンゴ味つてことなのか?」

「そうかもね。でもよろこんでもらえてよかった!」

“おまえら きにいった こことおす

おれの くちのなか くぐつていけ”

唇はそこまで言うとは先程までの閉じていた時とは比較にならないくらいに大きく口を開く。その広さは本人が言う通り俺達を通れるくらいには広がっている。そんな光景に驚きつつも進むべき道を開いてくれた事を感謝する。

「それじゃあお兄さん行く? ずっとここに居るのも唇さんに悪いし。」

「そうだね。早速通らせて貰おうか。唇さん、ありがとね。」

いくらこちらに喋りかけてくるとはいえ無機物と思われるものに出して感謝を伝えるのは何だかむず痒いものがあるが、これもイヴちゃんへの情操教育の為と思つて割り切ろう。尤も、9歳ならそういう事をしている大人をバカにする生意気なやつも居そうなものだがイヴちゃんならきつと笑わずに、むしろ一緒に言つてくれる。多分。

口内を抜けた先はまだ黄の間らしく、一本道のようになっていた。

壁にはギロチン台の描かれた絵画が何枚も飾っており、奥に行くにつれてギロチンの刃が徐々に上に上がっている。それを見ていると何だか、絵画の中ではなくコチラに落ちてきそうな予感がしてしまう。そんな考えを頭の片隅に置きながら俺達は前へと進む。

少し進んだその時、イヴちゃんが足を止めて何かを言いたそうにこちらを見てくる。何事かと俺も足を止めて振り返るとイヴちゃんはゆっくりと口を開いた。

「お兄さん……。この先嫌な予感がする……。」

「やっぱり。じゃあ何時でも逃げられるようにしておこうか。万が一何が起こっても大丈夫な様にね。」

「わかった。……わたしは後ろを見ておくね。」

「よろしく。じゃあ前に進もつか。ここで休憩したくないし。」

そう言っただけでまたゆっくりと歩き始める。時折、互いに何か変わったことがないか確認しながら進んでいくと、終点近くに下へと降りる階段が見つかる。しかしその階段の前に例の絵画があり、そこに今までは見えていたギロチンの刃が描かれていなかった。

そこで嫌な予感が俺の中で爆発的に拡がっていくが、歩みを完璧に止める訳にも行かず俺は上を注意しながら歩いていく。すると絵画の前を通ろうとしたその瞬間にチェーンのジャラジャラという音が突然聞こえてきた。

「イヴちゃんッ!!」

「え? キヤッ!」

俺はイヴちゃんを抱き抱えながら絵画の方へと横飛びをした。その次の瞬間になにか重いものが落ちてきたような音がしたが、それが何なのか確認する前に壁に頭をぶつけてしまい俺は意識を失ってしまった。

T i p s : 9年後の君へ

あれから9年の月日が経った。あの2人とはあまり会えてないけど彼女とは時折連絡を取りあって近況を報告している。そこに彼女が居ないのは少し悲しいけれど、なんでも彼女を養うために奔走しているのだとか。例の美術館から連れ出した責任として保護者の代わりとして頑張るのはいいがあまり無茶をしてこちらを心配させて欲しくない気持ちもある。未成年の身としては強く言えないけれど。

そんなこともありなかなか会えない2人だけど、今日という日は別。だって私達3人があの美術館で出逢えた日なんだから！

「あらイヴ！お久しぶりじゃない！どう？元気にしてた？」

「お久しぶりギャリー！私は元気だったよ。そっちこそ無理してない？メアリーから聞いたよ？毎日遅くまで仕事してるって。」

「あら……心配かけちゃったかしら。でもアタシはあの子の親代わりだもの。アタシがしっかりしなきゃ。ね？」

「もう……。だからって子供に心配かけてたら元も子もないでしょ？メアリーもきつと申し訳なく思ってるよ？」

「うーん、そうかしらねえ……。あの子の為を思うとやる気が出てくるのよ。」

そう言うギャリーの表情はとても無理しているようには見えないとてもいい笑顔で、私は少しその表情に見蕩れてしまった。

「ギャリーごめん！ちよつとお手洗い混んで……イヴ！お久しぶり〜！こうやって顔を合わせるのいつぶりだろう！」

「メアリーあんたねえ……。アンタ達ほぼ毎日電話してるじゃないの。それに御手洗なんて大声で言うんじゃないわよ、お下品なんだから。イヴからも何か言っちゃってちょうだい。」

「お久しぶり、メアリー。私はメアリーのそういう所、らしくってとて

もいいと思うよ?」

「ほらー!ギャリーが融通きかないだけなんだよー!私の知り合いみんなこう言ってくれるもん!」

と、ここから2人の口論が始まる。まあ口論と言っても本気のものではなく2人とも楽しんでやっている、所謂お遊びのものだ。何時ものやり取りとも言えるこの一連の流れを見ていた私は、懐かしさと共に何故だか悲しみを覚えている。

私は心の中のそれを表に出すまいと必死に耐えて蓋をしようとしたのだが、溢れ出してしまった感情は濁流となり私の頭を駆け巡る。ダメ……抑えられない……。

「ねえ!イヴはどっちの味方?!私?それともギャ:リー:え?ちよ!イヴなんで泣いてるの?嫌なことでもあった?」

「もしかしてアタシ達なんかイヴの気に触るような事言っちゃったのかしら!?ああん!もう!アタシったらそれに気づかないで!……本当にゴメンなさいね?」

「違う……違うの。私にもなんでか分からないの。」

私がそう言うと2人の頭の中にはクエスチョンマークが浮かんだようで、お互いに目を見合わせて頭を傾げている。私にもなんでこの感情が湧いてきたのかよくわからないけど、これを無視しちやいけない気がする。

少しして落ち着いた私は、なんだか身に覚えのない記憶が頭の中に増えている気がすることに気づく。あの美術館の記憶ですら「ちやんと」思い出せたというのに一体何なのだろう。これは記憶はあるけど思い出はない……。『同じ美術館』の記憶なのに何故か違うもののように感じる。自分自身がなんだか薄気味悪く感じ、背筋に悪寒が走る。頭が痛くなり気分がどんどん悪くなっていく。ここは何処なのだろう。本当に現実の世界なのだろうか?私は本当に「わたし」なのだろうか?呼吸が荒くなり、思考が働かなくなっていく。あの

人…は誰…なん……………。

「——ヴ！イヴ！すっかりしなさい！聞こえてる!？」

「…………あれ…………今、私…………。」

「よかった！あんた、急に泣き出したと思っただら顔色が悪くなったいくんだもの。すごく心配したんだから……イヴ、急にどうしたのよ？今まで今までこんなこと無かったじゃない。」

「わかんない…………。何が何だかもわからないの…………。あの美術館で知らない記憶があるの…………。そこには…………ここにいないもう1人の人がいて…………。でもその人は見た事なくて…………。それで…………。」

そこまで言って私は口を閉ざす。だって彼は…………メアリーの代わりに彼処に残ったのだから。

イヴは一体どうしたのだろう。今までこんなことは無かったのに何故今になってこんなことに？それにイヴの言っていることがよく分からない。あそこの脱出の際、私達3人以外に人間は居なかった。それは私が私である以上、そこに間違いなどあるはずが無い。『ワタシ』は元々そういう存在だったから。

…………少しやりたくないがイヴの為だ。使える手はなんでも使つてやる。

「ギヤリー。ちよつと携帯貸して?？」

「…………それはいいけど何すんのよ、こんな大変な時に。くだらないことなら後にして頂戴。」

「ちよつと連絡したいところがあってね。スグ終わるからちよつと借りるよ。」

「あ、ちょっとメアリー！せめて何をするのか言いなさいよー！アンタ聞いてんのー！」

いちいちうるさいギャリーは置いて私は早速とあるところに電話をかける。正直出る出ない以前にかからない可能性も有る上に、もしかかっても私の要件を真面目に聞いてくれるかも分からない。しかし、そんな相手だからといってかけない訳にはいかない。

「さっさと出てよ……。」——「パパ。」

「なるほど？つまりはその見覚えのない男がああ美術館の探索の手助けをしている記憶が急に思い起こされた、と。」

「うん……。見た感じアジア圏の人っぽかった。でも私はアジアに旅行に行ったこともないしアジア圏の人と会ったことも無い。それに向こうの有名人って感じでもなかったの。」

「うーん……。アタシもそういうのを思い出していれば何かしら言えたんだけど……。どうもアタシは何ら変わってないのよねえ。……つて言うかメアリーはどこまで行ってんのよ。アタシの携帯持ってなにしているのかしら。」

全く。あの子は時折突拍子もない行動をとることがあるけど今回もその類いかしら。何にせよさっさと戻ってきて欲しいわ。……それにしても今年はとんだ記念日になっちゃったわね。今夜のディナーの予約、キャンセルする事態にならなければいいけど。

「……ねえギャリー？」

「ん？イヴどうかした？」

「今日はごめんね。私のせいでこんなことになっちゃって。」

「やあねえ！イヴが謝ることなんてないのよ！今回はちよつと間が悪かっただけだもの！そんなに気にしちゃダメ！」

「でも……。」

「アンタは気にしすぎなのよ。アタシ達にそんな遠慮はいらないのよ？それにイヴにはいつも助けて貰ってるからこういう時くらいは頼りにしてちょうだい。」

アタシがそういうとイヴは頭を傾げるが、イヴに伝わらなくてもいいの。いつもアンタ達のことを考えて頑張る活力を貰ってるなんて知るはずがないものね。それに……

（イヴはアタシ達の希望だもの。あんたが落ち込んでるところをいつまでも見ていたくはないわ。）

「おまたせく。イヴ、今の調子はどう？」

「メアリー……。うん、今は落ち着いたかな。メアリーは……。」

「あ、ちよつとメアリー！アンタどこほつつき歩いてたのよ！あたしの携帯まで持っていて何がしたいのよ！」

「ん〜。パパと連絡取りたくてね。」

メアリーがそう言うのと2人の空気は凍りついた。彼女は今なんて言った……。？。パパ？一般的に父親に分類される人が呼ばれる名称である。パパと？

「ええ〜〜!!!」

「メアリー……。ゲルテナさんと連絡取れたの……。？でも大分前に無くなってなかった？」

「2人とも私をどういう存在か忘れてる？一応パパの描いた絵画なん

「ただ。それにあの世界に2人……特にイヴを呼んだのは私よ？これくらいちよちよいのちよいよ！」

「アタシ、改めて同居人が人外なんだって認識したわよ……。いくらなんでも規格外すぎよ……。」

メアリーはドヤ顔で2人を見ているが、生憎と2人ともそれを気にかけている余裕はないようだ。それも致し方ないだろうが、メアリーはそれが気に食わなかったのかドヤ顔がみるみる膨れっ面へと変貌していく。

「ちよつとおー！もつとなんかないのー！私これでも頑張ったんだからー！」

「いや、なんかもうやつてる事が凄すぎてアタシにはなんにも言えないのよ……。」

「私もかな……。でも死んだ人と喋ることが出来るなんてなんだかシャーマンみたいだね。」

「ギャリーの携帯で電話しただけだからなあ……。あ、携帯返すね。」

メアリーはなんでもないようにそう言いながらギャリーに携帯を渡す。それを聞いていたギャリーは開いた口が塞がらない様で思考がフリーズしてしまった為、メアリーはギャリーの上着のポケットに携帯を入れる。

「でもなんで急にメアリーはゲルテナさんに電話をしたの？」

「何でって、そりゃ勿論イヴの身に起きたことがなんなのか聞く為だけど？あの親バカ、電話を出てすぐは私の話を録に聞いてくれなかったけど粘りに粘ってようやく聞き出せたよ。」

「え？……え？？」

ギャリーに続きイヴも話についていけなくなっているのか思考停止しているように見受けられる。メアリーとしては普通の事を話し

ている気持ちなのかもしれないが、イヴとギャラリーからしたら思考が追いつかない程度にはありえない事が起きているのである。

メアリーはそんな2人などお構い無しにゲルテナとの会話から出た結論を早々に口にする。

「イヴ。結論から言うとその記憶はパラレルワールドの物らしいよ。パパが別の世界から誰かをあの美術館の世界に連れてきたからそのせいである筈もない記憶が出来ちゃったんだってさ。」

「パラレル……ワールド……デジャビユってことなのかな……。と言うかその言い方だとあの人はゲルテナさんの気まぐれに巻き込まれた人？」

「ん〜。そこら辺は言葉を濁されちゃったんだけど、なんか本人が望んであの美術館に入ったらしいよ？とんだ物好きもいたもんだね？あははっ！」

メアリーは満面の笑みでそう言い放つ。しかしイヴにはひとつ懸念があった。それは、そのパラレルワールドの最後の記憶は、その男性一人が不気味な美術館に残って私達3人が外の世界に出る“なんてふざけたものなのだから。

「ねえメアリー。そのパラレルワールドに干渉とかは出来ないの？あの記憶が本当に起きるのなら私はそれを止めたいの。」

「イヴ、それは無理だよ。今までの結果がどうであれ私たちは“未来に向かって生きるモノ”。そんな存在が過去への干渉をするのはご法度だよ。」

「そっ……か。そうだよね。ごめん。」

「それに！まだその世界は不確定らしいの。要は現在進行形でその物語が紡がれている。だからイヴが見た記憶は数ある脱出方法の一つでしかないし、そんな結末の定まっていな世界に干渉したら何が起こるかわからなくなる。」

普段のメアリーでは考えもつかないような難しい話を聞いていると、漸くギャリーがフリーズ状態から戻ってくる。一応今までの会話は聞こえていたらしくすぐさまこちらの会話に入ってきた。

「それで？イヴはそのパラレルワールドをどうしたいのかしら？アタシとしてはイヴにそんな怖い真似をして欲しくないわね。」

「ギャリーが心配しなくても私がやらせないから安心して。それにイヴ1人だったら干渉することは出来ないから大丈夫だよ。」

「あら、そうなのね。ならそれは良いとして記憶の方は放置でも大丈夫なのかしら？」

「それも大丈夫。パパ曰く、その記憶は可能性がちよつと本気を出しただけらしいから。だからイヴだけ記憶があるんだってさ。」

メアリーはそういうと言うべきことは無くなったのかふと一息を入れる。その呼吸とともに3人の間に張っていた緊張感が少しづつ霧散していく。

「それじゃ問題も無くなったことだし早くここを離れましょ！何時までもしよげてたらつまらないもの！こんな記念日くらいパーツと遊ばないと！」

「うん！そうしよそうしよ！……イヴ早く行こ？」

「うん、行こっか。」

そう言つて3人は歩き出すが、少し進んだ所でイヴが1人立ちどまる。いち早くそれに気づいたメアリーは何があったのかとイヴの方へ振り返るが、特段何かあったようには見えなかった。

「イヴ大丈夫？まだ調子悪いならもう少しだけ休もうか？」

「……ねえ2人も。私ってここにいいのかな……？」

その質問の意図が読めなかったのか、ギャリーとメアリーは互いに

視線を合わせる。そうしたのも束の間ですぐにイヴの方へ向き変え
ると2人は満面の笑みを咲かせる。

「そんなの決まってる事じゃない。ねえメアリー？」

「ほんとにね？ギヤリー。そんなこと気にしなくていいのに！」

「じゃあ……ここに居ていいの？」

「もちろん！」

ゆめ

「……おや？君がここに來たつて事は無事に『彼女の世界』に辿り着いたんだね。それならばひとまずはおめでとうと言っておこうか。」

気が付くと俺は謎の空間で佇んでいた。辺りはまるで闇が覆い尽くしてしまつたかのように黒く壁のようなものも見当たらない。そして目の前には料理や家事の時には使わないような厚い生地のエプロンを身につけた初老の男がこちらを見ながら全て見透かしているかのように優しく微笑んでいた。

「……お前は誰だ、ここは何処だ、今は何時だあそこは何なんだ俺に何の用だイヴちゃんを何処にやつたアアアア!!」

「まあまあ、少し落ち着きなさい。ここで喚いたところで事態は何も変わりはないよ。と言つた所で私の言う事を信用することは出来ないだろう。だから君から質問を受け付けよう。ちなみに名前はまだ明かせない。君が何も思い出してないからね。」

……思い出す。あの変な美術館に着く前から感じていたあの何かがポツカリ空いた感覚のことだろうか。もしそうだとしたらこいつは俺を此処へ招いた張本人なのだろう。通りで普段なら期待とも思わない美術展に來てしまう訳だ。どういう原理を使ったのかは全くてんで分からないが。

「じゃあ此処は何処なんだよ！俺はこんなところ知らねえぞ！」

「此処は……まあ君の夢の世界と言えはわかりやすいかな？実際には精神の奥にある普遍的無意識に存在する『ボク』という『認識されている身体』を使つて君の意識に上がつてきたんだけど。……おつと、話を戻すよ。そういう訳だから君が強く思えば此処は空にでも地中にでも、はたまたあの美術館にだつてなることは出来る。まあもつとも、見た目だけだけどね？」

……てんで意味がわからない。こいつは何を言っているんだ？こは夢の中？ならこいつは何なんだ？夢は記憶の整理をしている時の断片的なものを切ったり貼ったりしたものだとかで聞いた覚えがある。しかし、俺の記憶にこんな老人と会った覚えは全くない。この人も切って貼ってで作られた夢の人物なのかと言われても、それらしい様には見えない。第一こんな生地のエプロンは見た覚えはない。精神がなんちゃらと言っていたけど、そんな小難しいこと俺なんかに理解出来るわけが無い。

「……此処が本当に夢の世界ならなんで俺は此処にいるんだ。俺は寝た覚えはない。」

「君はここに来る直前の出来事を忘れたのかい？それを思い出せば自ずと分かるはずだ。」

ここに来る直前……。確かあの黄の間を唇を通って抜けて……。そうしたらギロチン台の絵が何枚も並んで……。それで……。

「あ、ギロチンの刃が落ちてきたんだ。それで横に避けて……。」

「そう。それで壁に頭をぶつけて気絶したって訳なのさ。あ、因みに落ちてきたことに気づいたところから1歩下がれば避けられたよ。」

こいつは本当に何を言っているんだ。俺が気絶した経緯については、まあ言うことは無いがその後になんて言った？「1歩下がれば避けられた」？なんでこいつにそんなことが分かるのか。というかそれ以前にあんな状況下でそんな冷静に判断できるかつ！

「……はあ。お前が俺の夢の中の住人なのはわかった。でも何で出てきたんだ？正直こんな事をする意味がわからないぞ。せめてこんな黒一色の世界じゃない方が良かったんじゃない？」

「うーん。こつちの方が非現実感が増して信用されやすくなるかと

思っただけけど……。今更だけどこの世界とアトリエだったらどっちの方がいいと思う？」

「いやその二択ならまだアトリエの方がいいと思う。……なんでアトリエしか選択肢がないんだ？ぱっと思いつくだけでも山とか海とかあつただろうに。」

「私にとってアトリエはとても馴染み深く、思い出深い場所なんだ。だから世界を創るならアトリエしか考えてないのだよ。」

そう言いながら目の前の老人が指をパチンと鳴らすと辺りはアトリエの中のようなごちゃごちゃとした室内が展開される。

「真つ暗が気に食わないみたいだから次からこの世界で会おうか。今回は軽い顔見せみたいなものだからそろそろ終わるけど次会う時には記憶が戻ってる事を願うよ。」

「あ、そうだ！お前は何かを知ってる！俺に一体何が起きてるんだよ！この何か足りない感覚は一体なんなんだ！」

「記憶に関しては『彼女の世界』に到達出来た以上必ず戻ってくる。ただ夢から覚めてしまったらこの記憶は無くなるけど、再びこの夢にたどり着いた時に思い出すと思うよ。それじゃあまた今度。」

「ちよっ！まだ聞きたいことは山ほど……!!！」

俺は抵抗虚しく意識がどんどんと無くなっていく。聞きたい事がまだあるのにも関わらず、そんな思いなどお構い無しにどんどん周りが暗くなっていく。

そして夢から覚めていく――。

「やれやれ……。若いっていいねえ。私も昔はあんな感じだったのかねえ……。——おっと、彼女が私を呼ぶなんて珍しい……。こんな老体にムチまで打って働かせるつもりなのかねえ？ねえ……。メアリー？」

おはよう

—お……さ……、……に……ん、おに……。

声が聞こえる。途切れ途切れでなんとやっているのかはよく分からないが、鬼さんと聞こえるような気がする。そんな声を聞きながら俺の意識はゆっくりと覚醒状態へ誘われていく。

「おにいさん!!!」

「おうわあ!!」

「やっと起きた……。頭を強く打つてたから心配したんだよ？」

頭？俺はなんかしたのか？頭なんて打つような事をしたような覚えは……。

「あ！ギロチ……つてえ！^{痛え}後頭部めっちゃ痛てえ！」

「お、お兄さん大丈夫？バラの花びらも大分散っちゃったしここで少し休けいする？」

「痛てて……いや、すぐに進もう。どれくらいか分からないけど意識が無かった時間イヴちゃんを待たせてるからね。」

「わたしの事は気にしなくてもいいのに……。でもわかった。お兄さん立てる？足下ふらつかない？」

「イヴちゃん、随分と頼りがいのある発言をありがとう。でも心配しなくても大丈夫だよ。」

イヴちゃんは何時からこんなに余裕のある発言ができるようになったのだろう。少なくともこのギロチンギミックの前ではそのままで余裕があるようには見えず、自分の事で手一杯の印象が見受けられたのだが。

でもまあ気遣ってもらえる事は嬉しいことに変わりないのでありがたく好意自体は受け取っておこう。おそらく手を借りることはな

いと思うが。

「とにかく早く行こうか。こんな所、早く出ることには越したことはないからね。……ギロチンの刃はまた落ちてくるのか？」

「あ、さっきの大きいやつは落ちてこないと思うよ。さっきあの落ちたところの近くを何度か歩いてみたけど、一度も落ちてこなかったもん。」

「……なかなか危ない事するね、イヴちゃんも。次からは俺がやるからもうそういうことはやっちゃダメだよ。」

「ハイ。もしませーん。」

……また機会があつたら確実にするだろう返事を返して来ているのは確信犯だろう。でもこの情報はとてもありがたい。これならそんなに肩肘貼らず、確認程度の注意力で事足りるであろう。そういう意味では幼少期特有の怖いもの無しな精神は心強いものだ。無茶な事はやめて欲しい所だが。

「それじゃあ先に進もうか。待たせちゃってごめんねイヴちゃん。」

「ううん、気にしなくていいよ。仕方ないことだもん。」

「ありがとう。……さて、ここからまた気を引き締めていきますか。」

そうやって俺達は階段を下へ下へと下っていく。階段の中腹ら辺から壁や床の色が黄色から赤へと徐々に変わっていく様子を見て、奇妙な感覚を覚えながらそれでも足を止めずにどんどんと進んでいく。

階段を降りきり下の階に着くと、そこは目が痛くなるほどに赤い廊下へと繋がっていた。

「うーん……何もないね。絵もないし像もない。」

「ここはきつとただの通路なんだと思うよ。だからさっさと通っちゃおうか。」

「そうだね。……ん？あそこ今誰か通らなかつた？何かがすごい速度で過ぎていった気がするんだけど……。」

イヴちゃんがそんな事を言っているが俺には見えなかつた。俺が見ることが出来なかつたのは見慣れない赤一面の場所で目がチカチカしていたのか、それともさっきまで寝ていたせいなのか。どちらにせよ何かしらの影があつたのなら警戒しなければ。

「ちよつとそれは怖いね。少し注意して進もつか。」

「そうだね。わたしも今度はお兄さんの助けになるように頑張るから！」

「その言葉だけで嬉しいよ。だから無理したらダメだからね？」

俺はそう言いながらイヴちゃんの頭を撫でる。こんな小さい子に心配かけてしまった事に後悔をしつつ、それでもこの子を守る為なら幾らでも命を賭ける覚悟を決める。

そんな事を思いながら俺達は前へと歩みを進める。その先に希望がある事を信じて――。

朱い部屋

階段を降りた先でイヴちゃんが何か動くと影が見えたと言うので、なにか出てくるかもしれないと警戒をしながら赤い廊下を渡ってきたが俺達を襲ってくるような存在が何一つとして出てこないまま次の扉の前へとたどり着いてしまった。

何も出なかった事に拍子抜けしつつも、警戒は緩めないまま扉の近くにあったノートへと足を運ぶ。机の上にあるペンを持つてからなにか出るかもしれないとペンを持ったまま辺りを見回したりもしたが、何も出てこないことを確認して漸く警戒を解く。

「ふう……。とりあえずここまでは何も出なかったね。こんな世界だし幻覚を見せられたか、それかただ驚かす為のギミックだったのかもね。」

「うーん。わたしもほんとに一瞬しか見えてなかったから見間違いだったのかも。倒れたばかりなのに体力を使わせちゃってごめんなさい。」

彼女はそう言うところらに頭を下げてきた。……この子は何かを恐れているのだろうか？ウツぎたちの部屋あの部屋を出てからそう思えるほどにこちらに頭を下げてきてきている気がする。俺になのか美術品になのか、それともこの狂った世界そのものになのか。謝っている対象ははっきりと分かってはいないが、これがもし俺が原因なのであればきつとイヴちゃんは意図して彼女が迷惑をかけてしまったと思っっている行為をしている訳でないと思うのだが。

「イヴちゃん。一回謝るのやめようか。」

「えっ……？でも——。」

「何を怖がってるのかは知らないけど、イヴちゃんが頭を下げるような事はしてないんだから謝らなくて大丈夫。もしこれ以上謝るなら俺怒るよ……。」

「……。」

俺がそこまで言い切るとイヴちゃんは俯いて黙ってしまった。……もしかして強く言い過ぎただろうか。でも俺としては今のイヴちゃんよりも会ってすぐ位のイヴちゃんの方が素だと感じた。出口がどれだけ奥にあるか分からないこんな所でずっと気を遣うのは俺でもキツイのに、俺より小さい子にさせていい訳が無い。

「……少し休憩しよう。あそこの壁、なんか違和感あるしちよつと見てくる。」

「……わたしも一緒に行く。ひとりにしないで。」

「……分かった、一緒に行こうか。」

そう言う俺達は来た道を少しだけ戻った。壁も床も同じ朱一色のこの空間で1箇所だけ違和感の覚えた壁の前へと着くと、俺は壁をまじまじと見始める。

「……お兄さん、ここなの？かべしかないけど？」

「此処だよ。なんかここだけ音の反響の仕方がおかしい気がするね。奥に道がありそうだなって思ってた。」

「なんかよくわかんないけどすごいね。」

「もしかしたらすり抜ける壁かもしれないから気をつけてね。……」

「おっ、やっぱりここみたいだ。それじゃあ行こっか。」

「えっ？行くなって目の前かべ……。」

うだうだと言っているイヴちゃんの手を引っ張って目の前の壁に一直線で歩いていく。壁にぶつかると思ったその瞬間、俺達は暗闇で囲われた場所にたどり着いた。なにか空間があるとは思っていたが、横に手を伸ばした感じ、細めの廊下くらいだろう。目の前も暗闇で見えないはずなのに、何故かどのような形の空間なのかわかる気がする。

「まだもう少し奥がありそうだな……。イヴちゃん、先に進むよ。此処だとイヴちゃんの事見えないから俺の手をしっかりと掴んでてね。」

「うん……。」

言葉少なく会話を済ませた俺は早速前へと進んでいく。途中右に曲がらなくては行けなかったが、そこは口頭で指示を出して何とかなった。そうして進んでいくと、漸く終点に着いたようだ。一面朱い小部屋へとたどり着いた。目の前にはとても大きい、不気味な絵が飾ってある。

「……【魂を啜る群衆】か。随分と悪趣味な絵を描くんだな。ゲルテナってやつはよ。」

「お兄さん……この絵こわい……。」

「早くここから離れよっか。此処にはこれしか無いみたいだし。」

そう言い残して俺達はこの場を足早に去る。そんな俺達をこの絵画はじっと見つめている。まるで俺達の魂すらも啜っているかのような視線であった事は俺達には知り得ない事だろう――

あうん

あの暗闇の通路も抜け、無事に扉の前まで戻ってきた俺たちはその足で次の部屋へと向かう事に。先程の事もあり、あまりいい空気とは言えないがそれでも進まない事にはなんの進展も起こり得ないと思つた俺は色々と思う事はあれど、今はそれらを全部無視をして扉に手をかける。

扉を開けた先にはとても大きい青色の像がそびえ立っていた。……これは一体なんなんだ？見れば見る程なんだか分からない。おそらく人型……だと思われるのは確かなんだが、それならば腕で支えているあの膨らみはなんなのか。片手は頭を抑えているように見えるから少なくとも腕は組んでないことが分かる。

……もしかして、胸？え？大きすぎない？ゲルテナってもしかして巨乳が好み？そういえば無個性もスタイル自体は悪くなかった気がするし……。知らない方が良かった雑学ってこういう事を言うのかな……。

「なんか気が抜けるなあ……。……【うん】ねえ。口を噤んでるしなかどつかのお寺の像見たいに阿吽でセットとか？そんな単純じゃないか。」

作品名から何となく思い浮かんだ阿吽の像はとても厳つい見た目だった筈だと記憶していた為、何の気なしにその考えを一蹴する。そして他にもなにかないかと辺りを見回すと何やら赤いオブジェが展示用の壁の奥にそびえ立っている。壁に何が飾つてあるのかも気になる所ではあるが、それよりもあの赤い物体がなんなのかという方が気になる。

「お兄さん、今言つてた“あうん”って何？」

「え、阿吽？えーっと……。？を成すもの？いやでも阿吽の呼吸って言

力士像って種類だったはず。今で言うSPとかその類……なのかな？そこはよくわかんないけど。」

「ふーん。なんかすごいね。わたしの身近にはキリスト教しか無いからなんか新鮮。」

「やっぱり西洋の方ではキリスト教が主流だよな。」

なんだか宗教の話になってしまったが、この部屋に入る前のあの重い雰囲気は無くなったので少し気が楽になった。しかし、こんな大きい展示物を本当にゲルテナが手懸けたのか……。それよりもあの現実世界の展示物よりも多すぎではなからうか。そんな事が頭を過る。

「あっ…あそこの絵画、美術館に飾ってあった！確か「赤い服の女」って作品名だったよ！」

「えっ？……っ?!あの絵画なんか生きてる感じしないか？他のものよりも生気が溢れているように感じる……!」

そこには赤い服に身を包んだとても端麗な女性がバストアップのみ描かれていた。その目は俺の気の所為か、じっと此方を……と言うよりはイヴちゃんの手元にある2輪の薔薇を見つめていた――。

閑話：ホワイトデーif

「さてギャリー。私達は先月、ヴァレントウアインドウエーにてイヴとメアリーからプレゼントを貰った……。そうだね?」

「……ヒロトシ頭でも打ったのかしら?病院に行く?もし怖いのなら着いてってあげるわよ。」

「私の事はどうでもいいから質問に答えたまへ。ギャリー君?」

「まあ貰ったわね?……イヴの事はこんなくだらない雰囲気の人に考えたくは無いのだけど。」

「そんなことは分かっている!それよりも……私にお返しの品は何がいかが教えてくれたまへ!」

俺はそう言うのとギャリーに向かって指を突き付ける。何だかこんな話をする事自体が照れくさく感じてしまい、ちよつとだけギャグテイストを含ませて質問を試してみた。そんな事情を知ってか知らずか、ギャリーは大きいため息を着くとこちらに向かってつかつかと歩いてくる。

……歩いてるだけでもイケメンは様になっていてなんだかムカつく。

「ねえ?ヒロトシ。アンタ人に頼み事をする時にそんな無礼な態度でお願いをするのかしら?」

「あの……なぜ突き出した人差し指を握るのでせうか……?」

「それはね……?こうする為よっ!」

「あだだだだ!痛い痛い!ギブっ!ギブうううっ!!」

ギャリーが俺の人差し指に鯖折りを決めて十秒ほど経ってからゆっくりと握る力を弱めていく。そうして握っていた手が指から完全に離れたその瞬間に指を思いっきり振って痛みを和らげる。そんな姿を見てさらに呆れた顔をしたギャリーが此方へと視線を投げってくる。念の為また襲われぬように痛みを我慢しつつ指を抱えるよう

に守っていると、このままだと話が進まないと思ったのかギャリーが口を開く。

「全く……普段の態度と全然違うじゃない。一体どうしたのよ？理由が理由なら病院に連れていくわよ。」

「ごめん、なんか気恥ずかしくておかしなテンションになってた。今まで同級生から義理を貰った事はあるけど年の離れた子から貰ったことは無いから何を返せばいいのか迷いに迷った結果さっきのテンションになった。」

「アンタ随分寂しい人生をすごしてきたのね……。それとも二ホンのお国柄ってやつなのかしら？まあいいわ。そういう事ならアタシに任せなさい！」

正直そんなに寂しいなんて思った事は無いのだが、ギャリーの住んでいる国では皆が諸星あたる宜しく愛をばら蒔いているのだろうか。イタリア人並みに愛情がありそうで何よりだ。別に煽っている訳では無い。

でも俺はどう足掻いても奥ゆかしさが売りの日本人である為、あまりそういう機会に恵まれてこなかったのだ。というか貰ってない訳では無いぞ！“年の離れた子から”貰ったことがないだけであって友達からは普通に貰ったことあるからな！

「……まあ寂しいとは思った事無いからそこは別にいいんだけど。イヴとメアリーにどういう路線のプレゼントをあげれば喜ばれるかなって思っただけ。」

「うーん……。あの子達ならなんでも喜んでくれると思うわよ？特にイヴなんてアンタからのプレゼントなんて言ったら飛び跳ねて喜ぶんじゃない？アンタ、イヴにプレゼントした事ないでしょ？」

「うぐつ。ギャリーは痛いところを着くなあ。あんまりプレゼント送った事ないから何送ればいいかわかんないんだよ。友達へのホワイトデーのお返しは適当にチョコ渡しとけばよかつたし。クリスマスマ

スは……ね？」

「ね？って何よ、ね？って！どうせそんなのアンタが面倒くさがってパーティに参加しなかつただけでしょうが！アタシには分かるんだからね！全く……どれだけ出不精なのかしら……。先が思いやられるわ。」

そう言っただけでギャリーは頭を抱える。俺としては特に問題のあるところは無いのだが、私的陽キャの頂上に君臨しているギャリー様からしたらまるで底辺の俺の行動は信じられないらしい。……馬鹿にはしてないよ？うん。

「とにかく！今からショッピングモールに行きましょう！色んなお店を見てどんな物がいいか目星をつけておかないと！もしいい物が見つかったらその場で買っちゃってもいいしね！」

「じゃあ近所のジャコ……じゃないんだよな今。イオンに行こうか。彼処なら服に本に家電、ゲーセンに宝石店、極めつけに病院も入ってる何でも屋だから何かしらお眼鏡に叶う物があるだろ。」

「そこ色々あり過ぎじゃないかしら……。寧ろないお店の種類の方が気になるわね。」

「メンズエステも有るけど寄ってく？もし寄るなら俺はゲーセンとかアニ○イトで時間潰してるけど。」

俺がそう言うのとギャリーはなにやら考え始めてしまった。やはりオネエ足るもの美容に関心があるのか、きっとそのメンズエステが気になってしまったのだろう。生憎と俺は美容とかそんなに興味が無いので、お店に入るなんて選択肢は無いのだが俺の目の前にいるオネエは何かを迷っている様子。……迷うのは全然いいんだけど急に首を振るのはやめて欲しい。びっくりするから。

「こ、今回はヒロトシのお返しを見に行くんだもの。アタシの事は二の次三の次よ。だからヒロトシもしつかりと見て頂戴。この期に及

んで適当に選びましたは許さないわよ?」

「そんなこと分かってる。それに2人にはこれまで世話になったんだからどんな形であれ恩返し出来る事自体俺にとつてまたと無い機会なんだよ。……もし巫山戯るとしても本気で巫山戯るさ。」

「それ・が・ダ・メ・な・の! いい!? ちゃんと真面目に相手の喜ぶ顔を思い浮かべながら選ぶのよ! わかった!」

「はいはい、分かっているって。ギャリー、俺を信用してくれよ。こんなにやる気を出してるんだから絶対にいいものを選べるって。な? 大丈夫大丈夫。」

「今日のアンタ程信用出来ないものはないわよー!」

わよーわよーわよー……

「よつメアリー。お久しぶり。元気そうだなによりだ。」

「よつトシ! お久しぶり! そっちも元気にしてた?」

「そりや勿論。……あれ? ギャリーとイヴはまだ来てないのか? てつきり3人とも揃ってるかと思つてたんだけど。」

辺りを見渡してもイヴとギャリーが見当たらない事に気づいた俺はメアリーにそこん所の事情を聞いてみる。するとメアリーは呆れたような喜ばしいようななんとも言えない表情でこちらに向き直つて言葉を続ける。

「イヴの件で決着つけに行ってるよ。……あれが決着つて言いたくはないけどね。」

「その反応って事はもしかして保留を選んだ感じ? まあ一般的には妥当な判断だな。それが100%正しいとは言わないけどさ。」

「えーそう? 私はもつと自分の気持ちに正直になってもいいと思うん

だけどなあ。つて言うかあのなんとも言えない甘酸っぱい雰囲気を醸し出すのやめて欲しいんだけど！一緒にいる私の方がムズムズする！」

「まあまあそう言わずにさ。……どうやら事が済んだみたいだから問い質してみようか。」

そういう俺の視線の先にはなんだかやりきった顔をしたイヴと、何とも言えない表情をしたギャリーが此方に向かって歩いて来ている姿が確認できた。……イヴの表情から察するにきつと彼女の都合の良い方に物事が進んで言ったのだろう。

2人が到着した瞬間にメアリーがイヴと話を始めたので2人の邪魔にならないようにギャリーと話を始める。

「なあギャリー、イヴになんて返した？イヴはあんな表情してるけどまさかお付き合いする感じ？」

「……取り敢えず保留にしたわ。これから先中学高校と進んでいく中で、それでもアタシの事が好きでいてくれるのであればつて。」

「おー……なんというかドラマとか小説とかでありそうな展開だな。それで？イヴはなんて返してきたんだ？」

「……『わたしは何時までも貴方を好きでい続ける。だから高校卒業するまで待つててね』つて。アタシから高校つて単語を出した手前その結論に行き着くのもわからなくはないんだけど……。」

「それはまあ己の発言を恨むしかないな。それにギャリー自身の心の整理もそれくらいの期間があれば出来るだろう？だったらお互いの心の準備期間だと割り切るしかないな。ガンバ。」

まあイヴがそこまでギャリーを待つてくれるのか否かも問題のひとつとしては存在するが。アニメの影響だが、なんか吹っ切れた女つて此方のことを度返しにしてグイグイ攻めてくるイメージがある。あれがもし現実の人でも有り得ることならば、俺は恋愛はしない方針でいいだろう。そこら辺の判断の基準にさせてもらおう為にもイヴとギャリーには色々頑張ってもらおう。

少ししてから此処で随分と立ち話をしていることに気づいた俺は、3人に対して口を開く。

「さて、そろそろ移動するぞー。ここですつと立ち話つてのもアレだし何処かゆつくり出来る所に行こうか。」

「さんせー！私ご飯食べたい！お腹減った！」

「ハイハイ。でも今は中途半端な時間だからカフェでちよつとつまむくらいにしてくれ。後でしゃぶしゃぶのお店予約してるからそこで腹いっぱい食べられなくなるぞ。」

「えー！しゃぶしゃぶ!?……ううう。分かった、我慢する……。」

メアリーは目先の幸せと後の幸せを天秤にかけた結果、後の幸せを取ったようだ。なんとも彼女らしくて可愛らしい選択だななんて思いながらほか2人の様子を伺う。

……あの2人はなぜ甘酸っぱい雰囲気醸し出しているんだ。この短時間で何があった。いちいち何があったのか聞くのも憚られるくらいには何度もラブコメ的空気を出してきた2人だが、ここまで短い時間で2人の空間を作るのもなかなか珍しいことだ。

……さてはここに来る前に話した内容をイヴに念押しされたとかか？それでギャリーが照れてしまった的な？前に幼馴染から借りたラブコメ漫画に同じような展開があったけどそれを現実で見ることが出来るとは思ってなかった。ここまで完全に俺の妄想だけど、そういう事なら野暮なことは聞かないでおくか。

「はあー！楽しかったあー……トシ！今日はありがとう！ゲームセンターもしゃぶしゃぶもすつごく楽しかった！」

「アタシも凄く楽しかったわ！今日の事を相談されてたけど何処に行

くかとかは聞かされてなかったから心配だったけど杞憂だったわね。」

「おう。2人とも楽しんでいただけたようで何よりだ。……イヴはどうだった？さつきから何も喋ってないけどつまらなかったか？」

「ううん。すごく楽しかったよ。でも、いくらバレンタインのお返しとはいえここまですてもらっていいのかなって……。」

……これはカルチャーショックの類だろうか。それとも良くも悪くも遠慮がちなイヴが出てきているのだろうか。何方にせよその心配はないと伝えなければ。それにまだホワイトデーは終わってない。

「……バレンタインデーのお返しは3倍で。この国は男の甲斐性を示す為かそんなジンクスがあるんだ。だからこれくらいはできるって甲斐性をバレンタインデーにくれた2人には見せておかないと思ってきてき。」

「おー、トシが男らしい。これは明日は槍でも降るかな？」

「おいメアリー。それ以上言うとうと髪の毛ぐしゃぐしゃになるまで頭を撫で回すぞ。」

俺がそう言うとうとメアリーは頭を庇いながらイヴの後ろに隠れてしまった。そんな行動をとるのであれば初めから怒られるような事を言わなければいいのと思ってしまおうが、そこを言ってしまうのが彼女の良い所であり悪い所だろう。

まあそれは置いといて俺にはまだもうひと仕事残っている。正直2人が喜んでくれるのか不安であるが、そこはギャリーのセンスを信じよう。監修をしてくれたのだから全く責任を取らない事は無いだろう。

「さて……今日最後のイベントだ。イヴ、メアリー。ちよつとこっちにきてくれ。」

「……撫で回さないよね？した瞬間にトシの腕を噛むから！」

「あはは……さすがのお兄さんも今それはしないとと思うよ？」

「するなら予告しないでいきなりするから安心しろ。」

「まずあの乱暴なのをやめて欲しいんだけど！ねえトシ聞いている!？」

ギャーギャー騒いでいるメアリーをスルーして俺はプレゼントの渡す準備を進める。プレゼントを買う際、メアリーに渡す物はふざけようか考えた時もあったがあの日俺はちゃんとふざけずに貰った事を思い出して諦めた。そんな事を思い出しながら俺はプレゼントを2人に渡す。

「こつちがイヴでこつちがメアリーだ。ほれ、受け取りな。」

「え、いいの？お兄さんありがとう！……何が入ってるか見てもいい？」

「勿論いいぞ。メアリーも確認してみな。」

「言われなくても……わあ！可愛いへアゴム！バラのコサージュが付いてるのね！」

「うん！すごく可愛い！……あれ？赤と青と黄色はあるけど白はないの？」

やはりバレてしまった。まあこの3色を揃えておいて白がなかったらすぐ気付くか。しかし俺的にはこの3色が大正解であり、他の色を足すつもりもない。この選択はそんな俺のエゴな訳で2人には申し訳ないがそれを受け入れてもらうしかない。

「あーお店に白色のものが見当たらなかったんだよ。別の店に行って探すのも考えたけど白ならまあなくてもいつかなって思って、だからその3色しか無いんだ。」

「……ヒロトシ。アタシはこの事はまだ怒ってるんだからね？その事を忘れないでよ。」

「解ってるよ。だから貸し一だつて言ってるだろ？」

「……？2人ともなんの話してるの？私たちにわかるように話し

てよ。」

「なんでもないよメアリー。……さて今日したかった事は全部終わったしそろそろ帰るか。今日は3人とも泊まってくから母さんがめっちゃ喜んでたぞ。家に着いたらイヴとメアリーはもみくちやにされるかもな?。」

俺はそう言つて家路に着く。その後ろを3人は三者三様の反応をしながら着いてくる。その光景に何故だか懐かしさを覚えながら家への道程をゆつくりと楽しんで歩いていく。またいつかこんな風に3人で遊べる事を天に祈りながら――。

敗走

なんなんだあの絵画は。俺も普通の美術館の時に目にはしたが彼処まで人間らしいタッチで描かれてなかった記憶がある。それなのに今日の前にある絵画は、まるで生きた人が額縁の中に佇んでいるかのようなリアルさでは無いか。……あれはマズイ。近づいては行けない気がする。

しかし危惧している俺の事などお構い無しにイヴちゃんは『赤い服の女』の元へと近づいていく。

「イヴちゃんっ！……その絵画に近づかない方がいいと思う。なんと言うか……あまりにリアル過ぎる。今にも動き出しそうだから他の作品から見ようよ。」

「……やだーわたしこれ見る！お兄さんは着いてこないで！」

先程のあの険悪な空気を何とかしなかったのが仇となったかっ——しかし今過去のことを悔いても仕方がない。今俺に出来ることをしなければ。考えろ……今の俺には何が出来る。

絵画の前に先回りする？いや、それはかえってイヴちゃんがムキになって意地でも見ようと行動するだろう。

……ならばしれっと後ろから着いていく？—それをしたら走って絵画の方へ逃げるから意味が無い。

ならば無理にでも抱き抱えて離れさせる？—俺は馬鹿か。そんな事をしたら今崩れかけている信頼関係が戻らないものになる。もっと慎重に行動をしなければ。

「きゃあああ!!」

「っ！イヴちゃんっ！」

イヴちゃんの悲鳴を聞いた俺は、何かを考える前に体が動いていた。……しかしなにか悲鳴の前に聞こえたような気がするのは何故

だろうか。なにかガラスのようなものがパリンと割れる音が……。

イヴちゃんの元へと着いた俺は、そこで動いているものを見て警戒心を高めると共にやっぱりかという気持ちで頭の中に溢れてくる。だってそこで動いているものは『赤い服の女』なのだから。

「イヴちゃんっ！立てる!？」

「こ、腰が抜けちゃってムリかも……。」

「じゃあちよつと手荒の方法で行くよ！我慢してね！」

「えっ?……きやあつ！」

俺はイヴちゃんの両脇に手を入れるとそのまま体を起こし、その流れのままお姫様抱っこを持ち替える。短時間でイヴちゃんを2度も抱き抱えることになるとは思ってなかったが、そんなことよりもお互いの身の安全の方が大事だからそこは我慢して欲しい。

「イヴちゃん……っ。バラは2輪とも持つてる……っ?？」

「うん持つてるよ……あの赤いお姉さんそんなに速くないみたい。距離が離れたよ！」

「了…解っ！さっきの廊下まで戻るよ……っ！」

「わかった！」

息も絶え絶えに何とか扉の所まで戻ってきた俺達は急いで部屋を後にする。足を止めてイヴちゃんをゆっくりと下ろすと今までの走った疲れが一気に押し寄せてきて、過呼吸気味になってしまった。距離は短かったとはいえさすがに人1人担ぎながら走るのは無理があつたか。

そんな俺を心配してくれたイヴちゃんはおずおずと俺に話しかけてきた。

「あの……お兄さん大丈夫?すごく息が切れてるけど少し休む?」

「ハアツ……そうして貰えると……ハアツ……助かるかな……。」

「わかった……。」

正直今の俺にイヴちゃんの様子を気にする余裕はあまり無い。高校生とはいえ帰宅部の俺がこんなに走るなんて体育の授業位しかないのに無茶をし過ぎただろうか。バッグの中にあるスポドリを一気に飲み干したい気持ちはあるが、飲み物自体無いこの世界でいつ出られるかも分からないのに貴重な水分を無駄にってしまうのはいくらなんでも気が引けるのもう少し落ち着いてから飲むかどうかは考えよう。

しかし先程次の部屋に向かう扉の存在が確認できたのは大きいだろう。流石に開いているかどうか分からない今の状況で入ろうとすることは出来なかったが、またこの赤い服の女のいる部屋に戻る際にあいつの位置を確認しつつ開けられるかどうか試してみるとするか。

「ハアツ……ハアツ……ふうう……。よし、そろそろ行こうか。」

「えつ、まだ息整ってないんじゃない？本当に大丈夫？」

「大丈夫大丈夫。これくらいいつも通りだから。」

普段から出来るだけ楽をしてきた俺にとって何ひとつとしていつも通りではないが、これくらい嘘はまあ許容範囲内だろう。実際もう既に動ける程度には回復したし、喉の渇きもそんなに騒ぐほどではない。これならもう一度イヴちゃんを担いだ状態で『赤い服の女』と競争が出来そうだ。

「それじゃ行こうか。」

「う、うん……。お兄さん、無理しないでね？」

「大丈夫だって。そんなに心配しなくても俺は頑丈だから。……あ、そうだ。この部屋だけ俺の薔薇返してくれない？さっきイヴちゃんを抱えるまで見向きもされなかったから、もしかしたら薔薇に反応するタイプかもしれないし。」

「え？……渡したら今まで以上に無茶しそうだからヤダ。」

なんとも俺に対して信用が無すぎやしないか？俺そんなに無茶した覚えはないんだけどなあ……。それに今までの行動のどれかが無茶に入るのなら、これからもっと敵対する絵画や彫刻が増えた際になにも出来なくなってしまう。こんなイカれた世界がいても簡単にクリア出来る訳が無いと考えるとこれから先はもっと難しくなっていく事だろう。……。無茶をしても無茶している様に見えるよう行動しなければまだ口うるさく言われてしまうのだろうか。それだけは勘弁願いたい。

そんな会話も程々に俺達は先程戻ってきた扉の前へと体を向ける。深く呼吸をして肺から心臓、心臓から身体中へと酸素を行き届かせる。……。よし、なんら問題はない。これならまたあいつに追いかけられたとしても余裕で逃げられるだろう。

「開けるよ。走る準備はしておいてね。」

「わかった。……。あ、あとこれ渡しておくね。ホントは嫌だけど仕方ないことだもん。」

「ありがとう。……。これで準備万端かな？なら今度こそ出発するよ。」

俺はそう言って目の前の赤い扉を再び開ける。そして今度こそ奥の部屋を突破出来る事を祈りながら足を1歩踏み出した――。

再探索

扉をゆつくりと開けると、あいつはどうかやら近くには居ないらしい。少し離れたところからズツ……ズツ……と引きずる音が聞こえる。見える範囲をゆつくりと見渡してみると、どうかやら元いた場所の近くに戻った様だ。これなら対角線上にいるあいつにバレずに正面にある2枚の絵画の近くは調べることが出来るだろう。……何故だか片方の絵は黒一色しか見えないのだが、気にしたら負けだ。

「出来る限り足音の出ないようにゆつくりと歩こう。あそこの絵のところまで行くよ。」

「……………」

小声で俺が話しかけると、それを聞いたイヴちゃんは無言でコクコクと頷く。なんだか先程の変な空気が無くなったようで少し気が楽になる。しかしここは既にあいつの索敵範囲なのだとしたらあまり気が抜けてしまうのも問題だ。そう思った俺は再び気を引き締め直す。ゆつくりと前へと歩みを進める。

『うん』の陰に隠れて『あ』の方を覗いてみると、あいつは何やら探し物をしているように見える。ずっと下を見て這いずっている様で、こちらには未だに気づいていないみたいだ。

「よし。向こうはこっちに気づいてないみたいだから早くあつちに行こうか。」

「そうだね。でも早く行くのも大切だけど何よりバレないようにしないとね。お兄さんはそそっかしいからちよつと心配だなあ。」

「はは……。これからはイヴちゃんに心配かけないように善処するさ……。……それよりもあいつが今向こうを向いたから移動するよ。」

そう言つて俺達は極力音を立てないように歩きながら2枚の絵画

を見据える。

無事何事も無く絵画の元へ着くと、遠くからでは黒一色にしか見えなかった絵の全体像がようやく頭になった。何と黒一色だと思っていた絵画の中に緑色の線が1本入っているではないか。……だからなんだと言うのだろうか。黒字に緑の線が入っているからといって何かが変わる訳でもなし、俺はその絵画から視線を外し題名を確認する。

『心の音』ねえ。じゃあこれは心電図のモニターを写したもののかねえ。」

そう思い、再び絵画を見る為に視線をあげると、“ドクン”という音とともに絵画に引かれている線が一度波打つ。……は？今何が起きた？今まで色んなことが起きてきたが、まさかこんなことが起きるとは思っておらず目が点になってしまった。

イヴちゃんの方を向くと、どうやら彼女も予想外だったらしく驚いた表情で絵画を見ている。しかし何時までもここでこの絵を見ている訳にもいかないので少し思う所はあるが次の絵画に行こうか。

そう思い、もう1枚の絵画の方へと移動する。……どうやらもう1つは『タバコを吸う紳士』というタイトルらしい。先程のものとは違いしっかりと絵画らしい絵画になっている。しかし、なぜこんな疲れ切っているような男性を描いたのだろう。なんて思いつつも、このどちらの近くにも何も見つからなかった鍵に関するヒントが『赤い服の女』があつたところから出来るだけ遠い事を祈りながら俺はじつとタバコの煙を見続けていた――。

走る

ズツズツと赤い服の女が近づく音が聞こえた俺達は少しでも遠ざかる為にもう一度心の音の方へと移動する。あまり遠くまで離れたとは言えないが、段々と奥に行つて後ろから以外は見えなくなる構造をしているのでまあ隠れるにはいい所だろう。

それよりもこれからどうやって逆側、つまり動く前の『赤い服の女』が飾つてあつた所へと辿り着くかである。取り敢えず俺が囷になるのは確定事項だが、果たして薔薇を持たないと本当にあいつは反応をしないのか。そこが先ず気掛かりな所だ。もしこれで見向きされないようであればこの類の敵から1人は狙われなくなるって言えるだろう。なら一緒に行動する時には俺が持つていけばイヴちゃんが襲われなくなるし、イヴちゃんが安全なところにいるならば俺が偵察に行くことも容易になるだろう。となれば今俺のすべき事は薔薇を持たずにあいつに対峙することか。

「よし。ちよつと隙を見て『うん』の陰に隠れてて。俺ちよつと誘導出来るか試してくる。」

「え!?それは危険すぎるよ!絶対ダメ!」

「大丈夫大丈夫。じゃ、ちよつくら行つてくるね。」

そう言つて俺はイヴちゃんの返事も聞かずに今いる所から飛び出して赤い服の女の元へと歩いていく。正直俺の考えが合つていて欲しい所だが、そう上手くいくだろうか。そんなことを考えながら歩いていると、視界の端に赤い服の裾のようなものが見えた。急いでそちらを向くと何やら赤い服の女が行くあてもなくズルズルと歩いて(?!)いる。

念の為近くにイヴちゃんが居ないかだけ確認をしたら、俺はその足を『推定名も無き女性』へと向けて進みだした。

「その赤い服のお姉さん。ここつてどこか分かりますか?お恥ずか

しながら俺迷子になっちゃって……。」

……”

「うーん……。もしかして喋る事ってできない感じですか？じゃあ……あそこの扉ってどうやったたら開きますか？」

……”

「困ったなあ。……ていうかなぜジリジリと近づいてくるのでしょうか……。？そんな怖い顔をしてたら綺麗なお顔が台無しですよ？」

”ジャ——！”

「うおあ！？急に襲ってくるのは禁止でしょ！イヴちゃん！今から大回りしながら入口の方へ行くからその内にこちら辺見といてー！返事しなくていいよー！」

それだけ矢継ぎ早に言う俺は付かず離れずの速さで心の音の方へ歩き始める。……薔薇を持ってなくても追いかけてくることが立証されてしまったことに少しだけ面倒くささを覚えつつ後ろから追いかけてくるあいつの方をちらりと見遣る。どうやらしつかりと俺に着いてきているようだ。

心の音の辺りまで来た俺は再び大声でイヴちゃんに現在の状況を取り敢えず伝える事に。これで何か見つけてくれていればいいのだが。

「此方現在『心の音』前にいまーす！其方でなにか見つけたら2回手拍子お願いしまーす！」

それを言った直後にイヴちゃんが向かったであろう方向から手拍子が2回返ってきた。どうやら何かを見つけたようだ。

「見つけたの鍵ー？もしそうなら手拍子2回お願い！」

向こうからは手拍子が2回。どうやら次の部屋に向かえそうである。しかしここで気を抜いたらこいつに捕まってしまう可能性もある。

る。そうになったら何をされるかわかったものでは無いので絶対に捕まらないようにしなければ。

「それじゃあ今入口の方に向かってるから頃合になったら合図出す！だからすぐ走って鍵を空ける準備よろしく！」

そこまで言って再びゆっくりと誘導を始める。後ろの額縁が重いのか移動速度は俺の徒歩程度の速さで助かった。先程はいそいで離れることだけに集中していた為気にしていなかったが、そう言えば立たせる為にそこそこ話していたのに捕まっていなかったことを思い出し納得をする。

少し移動して入口前まで辿り着いた俺は後ろから着いてくる赤い服の女を見て鍵を開けてもらうなら今しかないと思ったので、再び腹に力を入れる。

「イヴちゃん！GO！」

その瞬間に向こう側からパタパタと足音が聞こえてくる。足音が止みカチャカチャと何かを弄る音が聞こえてくると思ったら次の瞬間にはガシャンと鍵の開く音が聞こえてきた。

「すぐ行くから扉開けたまま待って！」

そう言っただけ俺は踵を返し、次の部屋へと向かう扉へと猛ダッシュをする。するとどうだろうか。今までのノロノロとした動きは嘘だったかのようなスピードで赤い服の女はこちらを追いかけてきたではないか。驚いてしまった俺は足がもつれそうになったが何とか持ち直してそのまま走り抜ける。

幸いな事に初めからそここの距離をとっていた為扉の近くまではあまり距離が近づく事なく走る事が出来た。しかしそこで少し安心してしまっただけか再び足がもつれてしまい再びそうになる。

「うおつとお!?あぶね!イヴちゃん!扉閉める準備イ!」

「う、うん!わかった!」

イヴちゃんがすぐ閉められる位置に着いたことを確認した俺は気持ち的に今まで以上のスピードで走り抜ける。これほど全力で走ったのはいつ以来だろうか?それほどまでに久々だった為か何度か足がもつれてしまったが何とか最後まで走れたようだ。扉が閉まっていることを確認して一息つこうとしたその瞬間に扉の向こうからドンドンと強い力で叩く音が聞こえる。もしかして扉を破ることが出来るのかと身構えたが2度も全力疾走をした俺の体のどこにも力が入らない。そんなこんなでビクビクしていたものの扉が破られることは無かった。

喉の潤い

「ハアツ……！あいつツ……！速すぎるだろツ……！」

「お兄さん大丈夫……？」

「ごめんツ！ちよつと休憩ツ！」

膝に手を当てて立っているのも辛くなった俺はそう言い終わると同時に勢いよくその場に座り込んだ。いくら体力のあまりある高校生男児と言えども普段の出不精が祟ったのか、それとも荷物を背負ったままだったのが行けなかったのか。間髪入れず2度も全力ダッシュをしたからすぐく疲れた。流石にここまで走ると喉もカラカラになってしまったので、美術館に入館する前に買っておいたスポドリをカバンから出して一気に飲みたい気持ちを抑えつつ、とりあえず一口口に含ませる。

「お兄さん、わたしものどがかわいちゃった。何か飲み物ない？」

俺があまり多いとは言えない水分を少しずつ飲んでいると、イヴちゃんを少し緊張が解けたのか飲み物を要求してきた。

しかしあげるのはいいとしても残りが紅茶、お茶、それと家から持ってきた麦茶位しかない。……選んでもらった方が早いか。

「今俺が飲んでるもの以外だと紅茶、緑茶、麦茶の3つがあるけどどれがいい？」

「……？むぎ茶ってなあに？わたし飲んだことないかも！」

この質問が飛んできたということはどうやらイヴちゃんの住んでいる地域には麦茶は無いらしい。日本以外で飲まれているという話もあり聞かないので、恐らくは日本発祥の飲み物なのだろう。ぜひ飲ませてあげたい。……しかしコップの分りになるものが見当たらない。俺が普段使っているワンタッチで開けられる水筒を持ってき

た為、この水筒のまま飲ませるのはあまり宜しくない気がする。かと言ってこの好奇心をそんな理由のみで無碍にするのも気が引ける。どうしたものか。

「……イヴちゃんは因みにコップの代わりになるようなものは持ってないかな?」

「急になんでそんな質問するの? 持ってないよ。」

「だよねー……。普段俺が直接口を付けてる水筒だからさ。他人の水筒に口をつけるのはあんまり気持ちのいいものじゃないかなって思ってる。」

「わたし気にしないよ? それよりもむぎ茶ってやつを飲ませてよ! はやく飲みたい!」

「イヴちゃんが気にしなくても俺が気にするの!」とは言えず、俺はおずおずと愛用の水筒をイヴちゃんに差し出した。確か1.5Lは入る水筒を持つイヴちゃんはなんだか背伸びをしている子供のようで微笑ましかったが、その水筒の持ち主が俺だという事を意識する度に罪悪感というか背徳感というかが俺の中で増幅していく。なんだかいけない事をしているような……

「お兄さん、そんなにじーっと見られたらちよっと飲みづらいよ……。」

「あ、ごめん。なんかイヴちゃんがそのサイズの水筒を持ってるのってなんか微笑ましいなって思ってた。ゆっくり飲んでね。」

俺がそう言うといヴちゃんはムツとした顔を崩さないままに水筒へと口をつける。一口二口と麦茶を飲み進める事にイヴちゃんの顔は難しい顔へと変貌していく。……。どうかしたのだろうか。もしかしてイヴちゃんの口に合わなかったのだろうか。烏龍茶よりは癖がなくて飲みやすいと思っていたのだが。

「これ……なんかよくわかんない味してるね。苦いようで苦くない、香りはそんなにすごく強いわけじゃないけど風味はふくよかで……。美味しいけどなんかモヤツとする味〜！」

「そうかなあ。俺は昔から飲んでるからか気にならないけどね。あとこのお茶ってミネラルを多く含んでるらしいから水分補給にはもってこいなんだよね。」

「へえ〜そうなんだ。このお茶ってすごいんだね。……んっ。お兄さんありがとう！美味しかったよ！」

イヴちゃんの口にあってくれたようで何よりだなんて思いながら俺はイヴちゃんから水筒を受け取ってカバンの中に戻す。俺の体も先程までの疲れが取れて少しだるさが残るのみとなって、まあ動けるだろうくらいには回復した。ここまで来ればもう部屋を探索するくらいならば大丈夫だろう。

「よし。じゃあ喉も潤したしそろそろこの部屋を探索しようか。本棚が多いし分担する？それとも一緒に見る？」

「う〜ん……。一緒に見よ！わたしが読めない文字もお兄さんなら読めるかもしれないし！」

「わかった。じゃああつちから見ていこうか。」

そうやって俺達は手前の本棚の列を順に見ていくことにした。

本

この小さな書庫のような部屋を探索しようと意気込んだのはいいものの、どこから手をつけようか。本棚も全てそこまで大きくはないが、そのすべての内容を把握しようとするのなら時間がだいぶ持つていかれる事は必至だろう。出来うる限り今知りたい情報のみを知る事が出来ればいいのだが、まあ無理だろう。何故か分からないが急がなければいけない気がするので取り敢えず背表紙のタイトルだけをパーツと流し見するか。

「右と左どっちから見に行く？とりあえず手前から見ようとは思ってるけど。」

俺がそう言うといヴちゃんは頭をひねって考え出す。

「うくん……どうせ全部の本だなを見ることになりそうだし手前も奥も右からでいいと思うよ。」

「分かった。じゃあ早速見に行こっか。」

そう言つて俺達は一番右端の本棚の前へと移動した。早速本棚にある本の背表紙を見ようと思つたら何やら本の中に紙切れが挟んであるらしく、不自然にぴよこんと飛び出ていた。その本を手にとってみると、どうやら今はどうでも良さそうなタイトルになっている。

そんな事はお構い無しに本から紙切れをスッと抜き出して両面を確認する。するとそのあまり大きくはない紙切れいっぱいにてかどかと

「たのしい？」

と書かれていた。今すぐ破り捨てたい気持ちを何とか抑えてイヴちゃんに見えない様に上着のポケットの中へと忍ばせる。

「ねえ、今お兄さん何かをポケットの中に入れてなかった？」

どうやらバレない様にしていたにも関わらずバレてしまったようだ。俺に隠し事の才能は無いのだろうか。仕方が無いので適当に誤魔化しておこう。

「あー……テストの範囲をメモした紙が何故か出てきたんだよ。だから別にいつかなって……。」

我ながらなんとも無理のある言い訳だと分かっているが今の俺にはこんな言葉しか思い浮かばなかった。何とも凝り固まった頭の回転の遅さに自分で嫌になる。

「うー……嘘っぱーい。それって本当なの〜?」

怪訝な目でこちらを見てくるイヴちゃんを気にしないようにしながらも俺は本の背表紙を見て気になるものがないか確認していく。ただ返事をしないのはどうかと思いきや適当に返しておく事にする。

「マジも大マジ。本当のことしか言っていないよ。……それよりもこの本棚に気になるものはもう無いから隣の本棚に移ろう。」

「あ、うん。わたしも手伝うね。」

何とか話を誤魔化すことに成功した俺はそそくさと次の本棚の前へと足を進める。なにか興味を引くタイトルが有ればいいのだが……。

そう思ってから10分程経ち、気になる本が現れないまま4つ目の本棚の確認を開始する事に。ここまで成果がなく気分の落ちていた俺はこのブロックにはあの紙だけで、残りの3ブロックに1つずつあるのでは無いかと高を括っていた。

「……あ、お兄さん!これなんてどう?」

上の方を見ていた俺に下の方を見ていたイヴちゃんがそう声をかける。本のタイトルは『ゲルテナ』と言うらしい。

「おお……イヴちゃんよく見つけた！……んん。早速読んでみよう。」

「お兄さんってそんな声も出たんだね……。」

何やら驚かれているが、そりや俺は感情の無いロボット人間って訳では無いから喜んだり悲しんだりするわけで。今までできる限り冷静でいようと心掛けていた事が仇になったか。

「そりやあ俺だって人間だからね。感情の起伏位は当然ありますとも。イヴちゃんには俺が機械に見えたかな？」

そんなことを言いながら俺は本を読み進めていく。が、あまりいい情報は無さそう。これは言わば作品集といえはいいだろうか。俺たちがここに来るまでに見てきた作品が一堂に会している。それもこの「奇妙な美術館の展示物のみ」がこの本に掲載されている。見つけてくれたイヴちゃんには悪いが正直どうでもいい情報だろう。

「うーん……この本は単なる作品集だね。しかも今まで見てきた作品しか載っていない。」

「さすが機械人間お兄さん。すぐにそういうことも分かるんだね。」

……機械人間お兄さんとは一体なんなんだ。確かに機械に見えるか聞いたのは俺だがまさか本当にその雑なネタ振りに乗ってくるとは思わなかった。そんな事を思いつつも今の俺には返す言葉が思い浮かばなかった為、大変申し訳ないがスルーさせて貰うか。うん。

「この本も本棚もあまりいい情報が無さそうだから次の本棚に移動し

ようか。次のブロックには向こうの部屋に行く方法が分かればいいね。」

これで誤魔化されてくれればとても有難いのだがイヴちゃんの事だ。きつとこんなお粗末な誤魔化しなんぞ具つぐさに反応をして俺を追い詰めてくるだろう。

「あ、うんそうだね。早く行こっか。」

……まださっきの言い争いが尾を引いているのか、これ以上の追求はなかった。元はと言えば俺が巻いた種とは言え、何とも悲しい気持ちになる。まあこれも時が何とかしてくれるだろうと俺達は通路を挟んだ向かいの本棚へと歩き始める。

涙

ほんの小さな蟠りを残したまま俺達は本の背表紙を次々と確認していく。それでも大概は「色彩のいろは」や「風景の書き方」等の少なくとも今の俺達には全く無用の本ばかりが陳列されている。

この本棚も確認をし終わり未だ本棚とにらめっこをしているイヴちゃんを待っている、ふと隣の本棚が視界の端に映りそちらを向く。するとほかのホントは何やら毛色の違う本が一冊俺の思考の中に飛び込んでくる。

『キャンパスの中の女たち』

一体この本はどんな事が書かれているのだろうか。彼女達の行動原理か、はたまたモデルとなった女性の事なのか。前者なのであればそれはありがたい情報なのだ。が果たして如何なものか。そんな仄かに淡い期待を寄せつつ俺は本を開くと、『赤い服の女』の説明文の後にこう付けられていた。

「『この女性は すぐに人のものを欲しがる

目をつけられると 大変厄介である』

『なんせ彼女たちは 自分が満足するまで

執拗に 追いかけてくるからである』

『どこまでも どこまでも どこまでも……』

『弱点があるとすれば 彼女たちは自分で

扉を開けることが できないことだ』

「うん知ってる。」なんて言葉がまず初めに頭に思い浮かんだ。そりやここでこうしてのんびりと本を読んでいるのだって彼女が扉を開けられないからだし。

しかしこれでひとつ確証を得られたのはでかい。これで今後アイツに襲われた際に無駄な事を考えずに扉を探す事だけを目指して逃げればいいって事だ。

「なるほどねえ……。こりやいい情報だわ。」

俺がそう零すとイヴちゃんは何事かとこちらに顔を向ける。そして俺が手に持っているものを見た次の瞬間には顰めっ面をしてこちらを睨んでいるように見える表情をしていた。一体何がそんなに彼女のカンに障ったのだろうか。

「えつと……なんでそんな怖い顔して俺の方を見てるのかな？ちよつとそんな表情を向けられるような心当たりがないんだけど……。」

俺がイヴちゃんにそう言うといヴちゃんは眉間に更に皺を寄せて頬を膨らませる。正直とても微笑ましい光景に見えるのだが、ここでそんな事を言ったら口を聞いてくれなくなりそうなので黙っておく。

「お兄さん！それ！」

“それ”と言いながらイヴちゃんは俺が持っている本を指さす。確認の為本を少し持ち上げて俺も指をさして首を傾げると彼女はゆっくりと大きく頷く。この本が一体なんなんだと言うのか。そう思っていると再びイヴちゃんは口を開き始める。

「その本はどこから取ったの！」

「え？今イヴちゃんが見てた本棚の隣からだけど……。」

一体何故こんな事を聞かれているのか。俺の頭の中にははてなマークがいくつも浮いているのだが、そんな事はお構い無しにイヴちゃんは話を進める。

「何でわたしを待ってくれなかったの！」

「いや、まだその本棚の確認で大変そうだったから待ってたんだけどつい目がそっちの方を見ちゃったんだ。……なんかゴメンね？」

俺がそう言うとは何故かイヴちゃんの目に涙が溜まっていく。急な事にびっくりしてしまいどうしていいか分からず体が硬直してしまった俺を気にも掛けずイヴちゃんは感情のままに口を開く。

「やっとなたしもお兄さんの役に立てるって……お兄さんと一緒に何か出来るって思ってたのに……。なのにいつもお兄さんだけ先に行っちゃって……」

ヤバい。ついに泣き出してしまった。こんな時どうすればいいんだ。そうだ俺の昔とかドラマとかで子供をあやしてるシーンを思い出そう！昔はどうだったドラマはどうだった……そうだ！抱きしめて頭とか背中を撫でてたな！よし！早速実行しよう！

俺はイヴちゃんに視線を合わせるように膝立ちになって優しく抱きしめる。その時右手はイヴちゃんの頭を落ち着かせる様に、あやす様にゆっくりと撫でる。……この後はどうすればいいんだ？……取り敢えず心から謝ろう。そして一緒に頑張ろう的な事を言おう。

「ごめんねイヴちゃん。そんなつもりはなかったんだけど寂しい思いをさせちゃったね。これからは俺も気をつけるから一緒に頑張って脱出しようね。」

そう言いながらも右手はずっとイヴちゃんの頭を撫でている。……世の中の子供のいる方々はこういうことを普通にしないといけないんだから大変だよなあ。俺の両親もこんな事してくれただけ？……母さんにはされた気がするけど父さんはないな。まあ俺が男だったってのもあるだろう。

幾分か経ち涙の収まったイヴちゃんは俺の腕の中でモゾモゾと動き始めた。正直頭を撫でるのも疲れてきた頃合いだしもう良いかと思いき抱きしめていた力を弱め離れようとするとは何故かイヴちゃんは俺にしがみついて離れようとしなない。

「……イヴちゃん？俺そろそろ膝立ち疲れたなーって思ってるんだけど……。」

「……もつとあたまなでて。」

そう言いながら頭を俺の肩に押し付けてくる。これまでの精神的疲労が爆発したのかあってからここに来るまでのどの時より甘えてきている。しかしまあイヴちゃんは小学生なのだし今までがしつかりし過ぎていた気もするのでこれくらいは許容範囲内だろう。

しかし頭撫でるだけなら背表紙の確認もしながらできるだろう。そう思った俺は徐におもむろイヴちゃんを抱き抱える。今回は頭を撫でて欲しいというオーダーがあるのでお姫様抱っこでは無く普通に抱っこをしている。これなら頭を撫でながら調べる事も出来る。なんならイヴちゃんも一緒に調べる事も出来なくはないだろう。

「さて。じゃあどんどん気になる本を探そうか。」

イヴちゃんが頷いたのを確認した俺は隣の本棚へと体を向ける。元あった場所に『キャンパスの中の女たち』を戻すと、もうひとつ隣の本棚へと1歩2歩と歩みを進める。次の本棚にも何かあることを信じて……。

始まりの

あの後手前側の本棚を軒並み確認したのだが特に気になるような本は見当たらず、入ってきた所とは別の扉も念の為開くかどうか試すももちろん閉められている。

閉められている扉の壁沿いにもう2ブロック本棚がある事からおそらくこの扉を開けるヒントくらいは何処かに残っているだろう。そう思つてまた右側の本棚から見始める。

「……ん？」

「お兄さんどうしたの？」

「ん？いや、隣の本棚に『世界の美術館』っていう本があるからもしかしたらお互いの拝観してた美術館が記載されてるかもなあつて思つただけだよ。」

俺はそう言つて『世界の美術館』を手取る。厚くはないがかと言つて薄すぎる訳でもないその本は某旅行雑誌の様なごちゃごちゃとした表紙ではなく、とてもシンプルなおそらくいちばん有名な絵画のアップと雑誌のタイトル、それにちよつとした見出しのみとなつており非常にわかりやすい表紙となっている。が、表紙の見出しを見る限り美術館の紹介と言うよりは美術品の紹介が主な掲載記事のように感じる。

パラパラと雑誌をイヴちゃんに捲つてもらつと、前半はやはり作品の詳しい説明を載せている。名前までは知らなかったが俺でもテレビ等で1度くらい見た事はある作品の説明が載っていたが、今はどうでもいい。そのままページを捲ると有名な日本内外の美術館がいくつかピックアップアップされていた。

「やっぱり美術館の紹介もあるんだね。最初は作品の説明しか無かつたから不安になつちやつた。」

『名は体を表す』っていう言葉もあるからね。一つや二つ位は紹介し

ないとダメなんじゃない？それにどの美術館にどの作品が普段展示されているのか知らないと思えないしね。」

「確かに！見たい作品があつてもどこに飾ってるか知らないと思えないもんね！」

「そういう事。」

イヴちゃんは俺の言った事を復唱しただけだったが、何だか子供らしくて微笑ましく思えた。しかし俺が言った事が正しいかどうかは分からないから、間違っていない事を祈ろう。

幾つか紹介されている美術館を一つ一つ確認したが、どうやら俺がここに来るキツカケになった所は紹介されていないらしい。他の号には載っているかも知れないが、生憎とここにはこの一冊以外に『世界の美術館』と言う雑誌は見当たらない。

念の為に作品紹介のページも1つ2つ見てみると、今まで美術全般に触れてこなかった俺でも何処が凄いかわかりやすく説明されている。さすがプロの仕事と言うべきか。思ったよりも面白く感じたから全部読みたい気持ちが少し湧き出てきたが、こういうものは元の世界に戻ればいくらでも見られると自分に喝を入れて雑誌を閉じて貰う。

「イヴちゃんページ捲ってくれてありがとね。元に戻して次の本棚を見ようか。」

「うん！次はどんな本があるかな？ワクワクするね！」

「そうだね。俺としてはそろそろ次の部屋に行きたいかな。鍵とか本の間挟まってるのか分かりづらいのは勘弁して欲しいけど。」

「でもわたし達ならきつと見つけられるよ！だってここまで来れたんだもん！」

「……そうだね。色々あったけどここまで何も無く無事に来る事が出来るんだ。その力を信じないと、ね。」

イヴちゃんの言葉はすぐく力を貰う。これならどれだけ歩き回っ

ても全然疲れなど感じなさそうである。そんな風に少し変なテンションに陥りつつも俺達はウキウキで次の本棚に向かうのだった。

うっかりさんとガレット・デ・ロワ

あの後本棚を2つほど確認したが鍵の在処やこの美術館の謎は疎か、『世界の美術館』の別の号すら見つからないままに俺達のヒント捜索はいよいよ最後のブロックへと突入する。

正直この状況は非常に良くない。主に俺の精神的に。もしこれでもここにも鍵かヒントに準ずるものが1つも見当たらなかった場合、この部屋の本を全て片っ端から見ると今まで来た道をUターンする羽目になる。ここまで進めたということはここからも進める事なのだと思うのだが、如何せん最後の1つにかけるということは出来る限りしたくない。

最後のブロックとはいえあと4つ本棚はある事だしさつさと見つかってくれば御の字なのだがそんなに上手くいくのかどうか。まあ成るようになるだろう。

「イヴちゃん。ばつと全部の棚を見てみてなにか気になるものある？
まずはそれを確認してみようか。」

「え、いいの!? わたし頑張るね!」

「イヴちゃんがやってくれると俺も助かるよ。少しでも気になるものがあったら教えてね。」

「うん! まかせて!」

イヴちゃんのなんとも頼りになる返事を聞きながら俺もぼんやりと本棚を眺める。本を見ると言うより本棚の輪郭をぼーっと視界に収めながらイヴちゃんが一生懸命本を探している様子を見ておく。イヴちゃんのことだから大丈夫だとは思いますがあまり本を傷つけるようなことがないようにしなければ。

「お兄さん! 見つけたよ!」

「ん? 何見つけたの?」

「絵本! なんかこの本だけ表紙が赤かったからこれかなって!」

そう言つて彼女が手渡してきたのは真つ赤な表紙の1冊の絵本。しかもただ赤いだけじゃなくまるで演劇の舞台などでよく見るような緞張とんちようのような見た目をしている気がする。緞帳とんちようがどんな開き方をするのかは分からないが。えつと……本の名前は……

『うつかりさんとガレット・デ・ロワ』？動く絵本ねえ……何も起きなければいいけど。作者は……これなんて読むんだ？ “x x x x”
？うーん……読めない。まあ絵本だし害はなさそう……かな？」

「お兄さんさつそく読んでみようよ！」
「そうだね。さつそく読んでみようか。」

そう言つて絵本を開く。その瞬間に俺の目の前が本棚から謎のクレヨンで書いたような舞台の前へと変貌する。何が起きたのかわからないうちにドラムロールが鳴り響き目の前の緞帳とんちようのようなものに文字が浮び上がる。

“うつかりさんとガレット・デ・ロワ”

そう浮かび上がったと思つたらすぐに消え、緞帳とんちようの幕が開く。そこには4人の人が描かれているが男か女かは判別できない。

「お誕生日 おめでとう！」

「ありがとう！」

「今日は あなたののために」

「ガレット・デ・ロワを 作ったの！」

「なにそれ？」

「このパイの中に コインが入っていて……」

「食べたパイの中に コインがあったら……」

「その人は幸せに なれるのよ！」

「おもしろそう！」

「でしょ？」

「じゃあ 切り分けるよー」

……俺は一体何を見せられているんだ。喋っているのは手前の2人だけだし背景は真っ黒。更には絵が本当に子供が描きましたってクオリティなもんだから全く面白みを感じない。というか切ってる時は幕を閉じるんだな。

……なんか結末がわかった気がする。そう思った途端に嫌な予感が増してきた。……とりあえず続きを見よう。

「さあ 好きなの選んで！」

「いただきますーす!!」

そういうと再び幕を閉じる。やはり子供が書いたものなのだろうか腕も動かなければこういう細かい描写も動いたりしない。躍動感がないのだ。まあ可愛らしい作品だ……ここまでは。

「もぐもぐ……」

「あっ……！」

「どうしたの？」

「なにか 固いもの……」

「飲み込んだじゃった！」

「あはは うっかりさーん！」

「きつとコインだ！」

「どうしよう……」

「コイン小さいから 大丈夫よ」

「じゃあ 片づけてくるね！」

……きつと彼女が飲み込んだものはコインでは無いのだろう。だがそれをどう取り出すか。なんか見てはいけないものを見ているようで精神が参ってくる。一体なんだってんだこの作品は何を伝えた

いのかでんで分からない。

そう思っているとまた幕が開かれる。どうやら次は別の場所らしい赤い扉の前に母親らしき人物が立っている。……赤い扉？あつ……。

「ママ どうしたの？」

「書斎のカギを 知らない？」

「しよさいのカギ？」

「それならいつも そのこのテーブルに……」

「……あれ？」

「コインだ……」

「このコイン たしか……」

「パイの中に 入れたハズなのに……」

「もしかして……」

「どこ行ったのかしら……」

「お父さんに 怒られちゃうわ」

「どうしよう……」

そういうとケーキを切り分けたナイフが地面に落ちた。……ここから先は見たくない。しかし身を瞑った所でこの映像は何故か見えなくなることは無い。一体なんなんだこの世界は。そう思ってるうちにもう何度目か分からないがまた幕が開かれる。

「わたしってば うっかりしてたわ」

幕が閉じられると同時になにかがきられるときによく使われているようなザシユツという効果音が鳴る。俺の思考回路はもう「ですよね〜」という言葉しか思い浮かばなかった。なんというか……お誕生日の子不憫過ぎないか？こんな救いのないストーリーはあまり好ましくないんだが……。

「カギ みつけたよ！」

「今ドア 開けるね！」

閉じた幕から顔を出した彼女はそう言い放つと目の前が先程の本棚の前へと戻りどこからか何かの音がした……。きつと鍵の開いた音なのだろう。しかしここを進む前に1つしなければならぬ事がある。

「イヴちゃん。もし今を見てたのならあんなったのはイヴちゃんのせいでは無いからね。あれは作者がそうあるべしと書いたものなんだ。気に病む事じゃない。」

「うん……。ありがとう……。」

「……すぐに行く？それとも少しだけ休んでから行く？俺はどっちでもいいよ。」

「すぐに行く。なんかここに止まってたらさっきの思い出しちやいそう。」

「わかった。じゃあ進もうか。」

俺たちはそう言う空気のまま先程は鍵のかかっていた扉を開ける。次の部屋は一体何が待っているのだろうか。

永遠の恵み

扉を開けた先はまだ赤かった。ギロチン後の廊下からずっと赤い部屋だったせい目が凄く疲れている。そろそろ赤い部屋は勘弁願いたいなんて思いながら当たりを見渡す。入ってすぐ小部屋のようになっているせいであまり見るところもないのだがこれはこれで助かるというものだ。

部屋の奥には何やら今までのものと少し雰囲気の違いの花瓶とノートが確実に置いてある机、それと花瓶の描かれた絵画が飾つてある。それに左右に何やらありそうな道があるように見える。まあ兎にも角にもこの部屋自体は今のところ平和な事がわかるのが救いだらう。

「イヴちゃん。ノートが有りそうだしなにか書きに行く?」

俺がそう言うと彼女はまた元気なさげにくくりと一度頷いた。やはり先程の言葉だけじゃイヴちゃんの中の罪の意識を拭い去る事は出来なかったのだろうか。しかし俺たちを潰そうとまざまざと襲ってくる奴らに屈してしまうのはあってはならない事態な訳で。ちよつとここらでメンタルリセットが出来そうな癒されるものがあるればいいのだが……。

そんな事を思いながらノートの前へと移動した俺達は、ここでもノートに歩んできた軌跡として名前を残す。……ここにはどんな絵を描こうか。ギロチンか、『あうん』か、はたまた『赤い服の女』か。……よし、『あうん』にしよう。あれならトラウマなんて刺激されないだろうし、何よりも『赤い服の女』よりも幾分かは描きやすいだろう。

「……よし。はいイヴちゃん。次どうぞ。」

「うん。」

ペンを受け取るイヴちゃんはやはりどこか元気がないような気がする。声に張りがないというかなんというか……。とにかくあまり

芳しくない精神状態に見えてしまう。あまり無理はさせないようによく様子を見ながらこれから動かないと行けないなんて考える。

そうこうしているうちにイヴちゃんもノートへの書き込みを終えてこちらへと戻ってきていた。

「書くのはもう大丈夫？じゃあ念の為花瓶に花を入れてからこの部屋を出ようか。」

俺はそう言つてイヴちゃんを花瓶の前へ行くように背中をポンと軽く押す。押された事に気づいたからなのかイヴちゃんはこちらを少し心配そうな表情で見つめてくるが、俺はなんの心配も要らないと笑顔を浮かべる。

「じゃあ入れるね……。」

そう言つてイヴちゃんが花瓶に2本の薔薇を差すと、前回花瓶に入れてから変化のなかった花卉が少しだけ増える。しかし、これが限界なのかそれとも水の入ってる量が少ないのか前回よりも増えた量が前回よりも少ない……気がする。

「イヴちゃん。その花瓶ってまだ水入ってる？」

「えっ？……うん。まだ入ってるよ。」

イヴちゃんがこちらを訝しげにこちらを見ながらそう答える。しかしまだ水が入っているのなら1度確認してみたい事がある。そう思い立って俺は花瓶から白い薔薇を手にとって息を整える。あまりしたくはないが確認しておけば身構えておく事は出来るだろう。

「……お兄さん？そんなに身構えて何するの？」

「んーちよつとね。気になることがあつてさ。」

なんの心配もかけないように軽い調子でそう言うと、あまり時間をかけるのも良くないと思い花卉を1枚自分の手で勢いよく引きちぎる。その瞬間に身体中に痛みが広がるかと覚悟していたが、実際にはなんだか体の内側が少し痛い位でなんだか拍子抜けをってしまった。

何の気なしにもう1枚ちぎってみるとその体を感じる痛みは強くなる。成程。これならなんできつきの黒い手の時と今の1枚目で痛みの度合いが違ったのかがわかった。それなら出来る限り触れたくないのは変わらないが1回や2回程度なら耐えられる程度の痛みしか来ない事がわかった。これは大収穫だなんて思いながら薔薇を花瓶の中にもう一度入れると、ちぎった2枚分のみ花卉がふえる。つまり俺の白い薔薇は今の枚数が上限なのだろう。これもまたいい情報だ。

「ふう……。イヴちゃん、この薔薇の花卉がちぎられると体が痛くなるから気をつけてね。じゃあ次の部屋に行こうか。」

俺が今まで隠してきた情報をサラリと言うとイヴちゃんは目をぱちくりさせてこちらを見ている。

「ええー！ー！！！」

急にそんな大切な情報を教えられたイヴちゃんの叫び声が部屋中に響いた。

人影

イヴちゃんの興奮も冷めやらぬままに俺は入口前では確認できなかった所を確認する。が、通路のようになっていて両端には扉しか見当たらない。いくら見渡しても絵画や彫刻なども確認できず、この部屋にはノートと花瓶、それに『永遠の恵み』という絵画しかない事が確認できた。

さて、ならば次は “どちらの扉に入るか” を決めなければ。どうせ今までの経験上両方行かなければ先には進めないだろう事が憶測とはいえ分かっているからあまり気負いはしていないがそれでも二度手間は御免だ。どっちが最初に入るべき部屋なのか見極めなければ。

「……よし。こっちの部屋から向かってみようか。イヴちゃん、そろそろ行くよ。」

俺はそう言っただけで絵画を正面にして右側の部屋の方へと体を向ける。何故だかよく分からないが、俺の思考が “こちらへ行くべきだ” と告げていた……気がする。こんな時に信じてやらないでいつ信じるんだと自分自身を奮い立たせイヴちゃんへと声をかける。

俺に声をかけられたからなのか漸く正気に戻ったイヴちゃんは俺の事をすごく心配そうな表情で見つめてくる。

「えつと……お兄さん体はもう大丈夫なの？ さつき花びらを取ったけど痛くなかったの？」

「え？ あー……痛かったよ。でも我慢できないほどじゃなかったし回復もさせたからね。今はもう大丈夫だよ。」

俺がそう言うのとイヴちゃんは少し安心した顔を見せる。しかし直ぐにしかめっ面になり俺の事を睨んでくる。……しかしイヴちゃんがどんだけ怖い顔をした所ですごくかわいいとしか思えないのはやはり可笑しいのだろうか？

そんなのほほんと緩んだ気持ちをキュツと締め直し2本の薔薇をイヴちゃんの手に持たせると、改めて俺は今から向かう方向へと視線を送る。するとそれまで怒ってたイヴちゃんも俺の視線を追うようにそちらを見始める。

「それじゃあつちに行ってみようか。扉が開くといいけど……。」

「そろそろ元の世界に帰るヒントとか欲しいね。」

「確かに。」

そこまで言うとなんは顔を見合わせて笑い合う。なんだかんだここまで色々あったけど結果的に仲良くここまで来る事ができているのは喜ばしい事だ。泣いて笑って喧嘩して、それでも仲良く前へと進める俺達は傍から見ると兄妹に見えるか、それとも仲間に見えるのか。そんなくだらない事を考えながら扉へと俺達は歩き始めた。

扉はどうやら開くようで蝶番がキィキィと小さく鳴きながら奥の部屋へと迎え入れる。すると部屋……というよりは廊下の様な空間に入っただけの所に背丈の大きな何かが倒れているのが確認出来た。あれはこの世界の美術品だろうか。それにしても羽織っている上着に年季が感じられる。今まで見てきた美術品は何回も着ていないままで新品の様な服装の出で立ちだったが、この人……？に關してはその限りではないみたいだ。

俺がそんなことを思っているうちにイヴちゃんは目の前の倒れている人影に向かってトテトテと歩いている。大丈夫なのだろうか……。あ、つんつんし始めた。めっちゃやられてる人辛そうだな。一応止めようか。

「イヴちゃん、その人苦しそうだから辞めてあげて。他に気になる所は無いかな？」

俺がそう聞くとイヴちゃんは倒れてる人影の周りを観察しながらぐるぐると回る。すると彼女は何かを見つけてくれたようだ。何かを手の辺りから拾ってこちらへと戻ってきた。

「おかえり。何かいいものは見つかった？」

「うん！鍵があつたよ！お兄さんに預けてくね！」

そう言うといヴちゃんは俺に小さな鍵を渡してきた。今まで拾ってきた鍵よりも一回りほど小さい鍵だ。なぜ俺に渡そうと思ったのか理由は定かではないが取り敢えず預かっておく事に。するとイヴちゃんは何やらソワソワと落ち着かない様子でこちらを見てくる。何事かと俺もイヴちゃんを見つめて少し首を傾げると我慢出来なくなったのかなんとも可愛らしい笑顔で口を開いた。

「向こうのドアの先を見てくるから待っててね！」

「あつ！行ってもいいけど絶対無理しちゃダメだからね！危険を感じたらすぐ戻ってくるんだよ！」

「はい！」

俺がそう言うも、イヴちゃんは気にも止めずに向こうの扉まで走っていく。しかし少し開けて奥の部屋を少し見た所でいそいそとこちらへと戻ってきた。

「イヴちゃんなにか見つかった？」

「なんにも無かった……。なんか最初に追ってきたマネキンみたいなのが立ってるだけだったよ。」

そういう彼女は思っていた物がなかった為か少し不貞腐れていた。あまり余計なものがないのであればそれは喜ばしい事なのであるが、イヴちゃんとしてはあまり面白くなかったのだろう。少しずつ会っ

てすぐの雰囲気に戻ってきているのはいい事だけど少し怖い考え方も知れない。

「じゃあもう1つの扉を開けに戻ろうか。この人のバラもあるかもしれないし急ごう?」

「そうだねっ!早く行こく!」

そう言っつて俺達は入ってきた扉を戻っていく。タイムリミットは近い事を薄々感じていながらもものんびりとした足取りで進んで行った。

青い薔薇

再び花瓶の置いてある部屋まで戻ってきた俺達はその足で真正面にある扉へと歩を進めていく。扉の前まで来てドアノブの所を確認するが、鍵穴が存在しない。もしかと思いいノブを捻って扉を開けてみるとキィ…という音を立てて扉が開いてしまった。

「あれ？鍵ってここに使うと思ってたけど違うのか。…：なんか嫌な予感がするなあ。」

「このカギを使った先に何かおそってきそうだね。ちよつと怖いかも。」

そんなことを話しながらも扉の先へと入っていく。すると廊下のような風貌ではなく美術品を飾っていきそうなちよつとした段のある部屋になっていた。それに廊下が奥にまで続いていて、足元には青い何かが落ちていているように見える。

…：なんだあれは。そう思い謎の扉の近くに近づいてみると落ちていたのは青い花卉の様に見える。もしこれがあの倒れていた人影のものだとしたらかなりまずいことになっている。そう思い花卉の続いている先に行ってみると、そこには何か絵画が飾ってあったであろう空間があった。作品のタイトルは…：

『青い服の女』…：これはやばいかも！花卉の前にあった扉に入るよ！」

「えっ？？」

「恐らくあの人の花で遊んでる奴がこの中に居る！」

そう言いながら扉の前まで戻っているとイヴちゃんは緊張感のある顔で俺の後ろを着いてくる。扉の前に着きノブを回そうとするも回りきる前にガチツと止まってしまふ。やはりと言うべきか鍵が案の定かかっていたので急いで先程受け取った小さな鍵を取り出すと

ノブの上にある鍵穴へと差しして回す。

鍵穴から小気味よくカチリとなると同時に勢いよく扉を開ける。するとなにか鼻歌のような音が部屋の奥から聞こえてくる。

「……イヴちゃんはここで待ってて。すぐに奪い返してくるから。」

「えっでも……。」

「大丈夫。すぐ戻ってくるからさつきみたいにここ開けて待っててね。よろしくっ！」

そう言い捨てて俺は部屋の奥へと出来る限り物音を立てずに進んでいく。

『青い服の女』の姿を補足すると、何故か相手もこちらの方を見つめている。もしかして向こうの索敵範囲に入ったか……？もしそうだとしたら相手の持っているであろう青い薔薇を奪取するのに花卉の1枚や2枚は覚悟しておかなければならないかもしれない。

「ふう……。よし、行くか。」

ひとつ深呼吸を挟みここに来てからいつもより緊張気味の心臓を落ち着かせて1歩1歩ゆっくりと近づいていく。向こうはどうも俺が気になるらしく、花は弄らずに俺の方をじっと見つめている。……そろそろ限界か？

そんなふうに思いながら1歩前に足を出す。すると『青い服の女』は『赤い服の女』と同じ様にどこから発しているのか分からない、まるで人間とは思えない雄叫びを上げて俺に向かってくる。あまり早い速度ではないがやっぱり襲われる感覚は慣れない。

部屋をぐるぐると周り薔薇を取れそうなチャンスを伺う。すると部屋を回って歩いてる訳でなんだかんだすぐに拾える位置に。逃げながら青い薔薇を拾うと相手の速度が早くなる。

「やっぱりそうなるのね……！やめてくれよ……！」

そう言つて俺は扉に向けて走り出した。あちらさんも負けじと俺に向かつてきているがそんな事気にする間もなく部屋を走り抜ける。すれ違う際に1度体に触れられたのだが、その時に薔薇の散る時の痛みが体中を襲う。しかしこの程度先程確認していた為全く動じることなく動く事が出来る。

何とか部屋の入口付近まで戻った俺はイヴちゃんが心配そうな顔をしているのを見て力が入る。あんな小さな子に心配されているんだ。ここで頑張らなきゃどこで頑張るんだ。そう自分に言い聞かせて全力で走り抜ける。

俺が扉を出た瞬間にイヴちゃんが扉を閉め始める。相手の向かつてくる速さもなかなかのもので閉めるのが間に合わないのでは無いのとは思ったが何とか間に合ったようだ。閉めた瞬間に扉を強く叩く音が響き渡る。それもすぐに収まり俺達は安堵した。

次の瞬間、部屋の窓ガラスを強く叩く音が。……待ってこれってあれ割られたら俺たちピンチじゃないか?そんな心配を現実にしてやるよと言わんばかりに『青い服の女』は窓ガラスを突き破ってこちらに向かつて向かつてくる。

「ヤバっ!イヴちゃん逃げるよ!動ける!?!」

「う、うん!走れるよ!」

「なら走るよ!」

そう言つて俺達は『青い服の女』に背を向けて扉に向けて全力で走り始めた。速さはそんなに早くない為逃げることは容易に出来るのである。これは足が1番遅い人に合わせて速度を変えているのか?よく分からないが嬉しい誤算だ。さっさと出しておおう。そう思い少しだけスピードを上げて扉に着くと早々に扉を開けてイヴちゃんを待つ。

間もなくしてイヴちゃんも無事に扉をくぐったのですぐに扉を閉める。何とか五体満足で逃げきれた。ざまあみろってんだ。

邂逅前の一息

何とか青い薔薇の花弁が全て千切られる前に『青い服の女』を撒いた俺達は三度花瓶の置いてある部屋に到着する。しかしあの花瓶の中の水が多いとはいえそろそろ無くなるのではないかと内心ヒヤヒヤしている。確かにこここの花瓶の後ろには青い花瓶の書かれた絵画が飾っており、そのタイトルは『永遠の恵み』ではあるがそれが本当にこの花瓶の事を指しているのかは分からないのだ。

なんてことをウンウンと悩みながら取り敢えず1番傷ついている青い薔薇を花瓶へと差す。するとみるみるうちに花弁の数が増えていき、あつという間に1輪の綺麗な青い薔薇へと変貌する。……まだ水は残っているのだろうか。俺はそう思っただ花瓶を持ち上げて少し振るとちやぶちやぶと水の音が聞こえてくる。

「……これって本当に無限に使えるのかも。その可能性が出てきたなあ。」

「えっ？ そうなの？ じゃあこれを持って進めばヨユーじゃない？」

「あー多分それは無理だと思うよ。そんな狡い事をこの美術館が許してくれると思わないからね。」

「えく……いい案だと思っただのになあ。」

そう言っただイヴちゃんは深いため息とともに大きく肩を落とす。確かにいい案だと思うがそんな甘い考えなど初めから見通していると思う。こんなゲーム性のある美術館を創り出す奴なんだ。チートなど許しはしないだろうし、もし仮にチートを使用したところで何が起るのかわかったものではない。追っ手が増えるか1回のダメージ量が増えるか、はたまた即死級のトラップを配置してくるかもしれない。

ならばそんな危険が襲いかかってくるかもしれないような馬鹿な真似はせずに堅実に一つ一つクリアしていく方が確かな道だろう。千里の道も一歩から。遠回りこそ一番の近道である。それを心に刻

みつけて進んで行こう。

「あっそうだ。イヴちゃん。俺達の薔薇も念の為もう1回回復しているか。もしかしたらさっきの追いかけてここで花卉が散っちゃった可能性もあるからね。」

「そうだね！すごく早く走ったから花びらもどっか飛んでったかも知れないもんね！」

「そうかもね。次何かから逃げる時はそこも気をつけて走らないとね。」

「うん！」

なんか色々間違っている気がするがそれのどこが間違っているのか言葉に出来ないし、何よりそれを言ってもまた変な雰囲気になるのも勘弁願いたい。

少し甘い考えなのかもしれないが、それくらいの空気がちょうどいいよく分からない俺達の旅路は今どのくらいまで差し掛かったのかふと頭をよぎる。中腹か佳境か、はたまたまだまだ序盤なのか。そんなくぐらぬことを頭に思い浮かべてクスリと笑う。擦くすぐったいつたいというくぐらぬというか、そんな感覚を覚える。

「お兄さん急に笑ってどうしたの？何か面白いことでもあった？」

「いや、何でもないよ。ちよつと思ひ出し笑いをしてただけだからそれよりもそろそろ倒れてた人に薔薇を返しに行こうか。」

「あっそうだった！あの人すごく苦しそうだったけど大丈夫かなあ？見に行かないと！」

イヴちゃんはそう言うと言葉をむんずと2輪掴み取って先程人影が倒れていた部屋へと戻っていく。そんな姿を見て苦笑を漏らしながら俺はゆつくりとイヴちゃんの後を追って部屋へと入っていった。

第三章　さんりん 顔合わせ

イヴちゃんに遅れて部屋に入ると、どうやらまだ例の人物は目を覚ましていないようだ。初め見た時に比べても唸り声を上げていなければ身を悶えさせていない為、やはりあの薔薇はこの人のものだったのだろう。

しかし今の状態が先程より改善されているのならばこのまま寝かせておく方が危ないのかもしれない。今まで扉を越えてくる追跡者^敵がほぼ居なかったとはいえこれから、今から全く出ないという保証はどこにもない。と言うわけで今すぐにも起きてもらおう事にしようか。

「イヴちゃん、その人起こしてあげて。ここで寝ても脱出は出来ないからね。」

「うんわかった!」

イヴちゃんが元気よくそう言うと、倒れている人の傍に膝をつき肩をゆさゆさと揺らす。すると元々眠っていたわけではなかったのかすぐに反応が。

「……………うーん……………あら? 苦しくなくなった……………ん?」

「倒れてたけど大丈夫?」

「うわっ! な……………今度はなによ! もう何も持ってないわよ!!」

イヴちゃんが心配しているのを気にも止めず倒れていた人物は勢いよく後退して強い拒絶を見せる。

きっと先程まであの『青い服の女』に追われていたから仕方ない事なのだろうけれども、それでも傍から見ているあまり気持ちのいい光景ではなかった為自分にされた訳でもないのにムツとしてしまうの

を抑えられないでいた。

「ちよつと待っててください。俺達は貴方に何かしようとは考えてないですよ。」

顰めた表情を崩さずに両手を上げて無抵抗の意志を見せる。するとおそらく男であろうその人物は今まで見えていなかった俺の存在を漸く認識し、立ち上がったイヴちゃんと俺に何度も視線をぶつけてくる。

「あ……あれ？アンタ達もしかして……美術館にいた……人!？」

「うん！」

「多分そうですね。」

「ああ良かった！アタシの他にも人がいた！」

そういうと彼は凄く安心した表情でこちらに近づいてくる。それにしても俺の聞き間違いだろうか。一人称が私のように聞こえたのだが。

確かにすぐく礼儀正しく規律を守るのが好きそうな人が私というのは分かるが目の前にいる彼はどう見ても気さくでいざと言う時は規律なんか破ってしまいそうな人相をしている気がする。

まあこの人がどんな趣味を持っていてどんな口調で喋ろうが俺に指摘する資格などないだろう。よほどやばいことを口走らない限りは我関せずの心構えで行こう。

そう考えているとその間に2人で話が進めていたらしく、情報共有が既に終わっていた。こりややらかしたなあ……。

「そっか……じゃあアンタもなんでこんな事になってるのかは分からない訳ね……。」

「そうなの。だから2人でここから出ようってここまで頑張ってきたんだ！」

「へー！アンタやるじゃない！男の子してるわね！」

「あー……ありがとうございます？というかお互いの名前も知りませんしこちら辺で自己紹介でもしませんか？」

先程情報共有している時に自己紹介していたかもしれないが俺は聞いていない為、恥を忍んで1つ提案を試してみる。するとどうやらここまでの道程を話すのに夢中になっていたらしくイヴちゃんもまだ彼の名前を知らないようだ。

彼もその事に気づいたらしく「あら」と一言小さく漏らすとこちらに向き直り自己紹介を始める。

「アタシはギャリーっていうの。そういうアンタ達は？」

「わたしはイヴ！そしてお兄さんは……お兄さんなんて名前だっけ？」

「イヴちゃん……。ンンツ。すのうちひろとし 則内大利って言います。ヒロトシで構いません。」

「ヒロトシにイヴって言うのね。子供だけじゃ危ないからね…アタシも一緒に付いてってあげるわ！行くわよイヴ！ヒロトシー！」

そう意気揚々と俺たちを連れ立って先へ進もうとするギャリーさんのやる気に相対して、ちよっと前の部屋にもあった舌を左右にずつと動かしている絵画が先に進ませまいと唾のようなものを勢いよく吐いてくる。

1度その行為を見ていた俺達にとつてはやっぱりという気持ちしかなかったが、初めて見たギャリーさんはそうでは無かったらしなく「ぎゃーっ」と後ろにのけ反り、倒れながら叫び声をあげていた。

唾のようなものを履かれただけですごくいいリアクションをするなあと思っているとイヴちゃんがこちらを見ながらにやにやして「お兄さんみたい」って言っているのが聞こえてしまっただけ怖いものがあまり得意ではない自分に嫌気がさす。

「い…今のはちよつと驚いただけよ！本当よ！」

「そんなに言い訳しなくても大丈夫ですよ。気持ちは分かりますから。」

そんなフォローにもならないようなフォローを入れながらイヴちゃんから驚いている時の俺がどう見られているのかを再確認する。しかし傍から他人のビビり倒している姿を見ると、これはまあなんとも情けなくて目を逸らしたくなる。

そんな自己嫌悪に思考を投じていると、ギャリーさんがなんだか驚いた表情でこちらを見つめている。……俺は何か変なことを言っていたのだろうか？

「あの……どうかしました？そんなに見つめられても何も出来ないんですが……。」

「いや……アンタって意外と優しいのね。さっきはしかめっ面だったから勘違いしてたわ。」

「あー……それは申し訳ないです。少し考えることがあったもので。」

「アンタも大変ねえ。無理だけはしちやダメよ？」

「……ありがとうございます。」

ギャリーさんのおかげで考えることが増えたんだけどなあなんて考えつつも、そんな事は口に出す事でも無いので適当に当たり障りのない返事を返しておく。

3人に増えたこの珍道中。これから一体何が起こるのか。それらは全て神のみぞ知る……なんてね。

く無個性と初めての追いかけっこ前く

ただの彫像のはずなのに今にも動き出しそうな雰囲気醸し出している。宛ら俺たちに注意喚起を促しているようだ。しかし、今のところなんの害も及ぼしていないこの彫像をずっと気にし続けるのもなかなか難しいものがある。そう思った俺はおもむろにその彫像の右手を触ってみる。が特に何も起きずがっちり握手を交わしてしまった。

「うーん……。この彫像は俺たちを襲ってこないのか？」

「お兄さんさつきからどうしたの？急に決意表明したりこのマネキンさんの手を握ったり。何かおかしいよ？」

「あーうん。色々と気になることがあってね。」

「ふーん。」

ふーんで終わっちゃうんだ……。そう思いながら俺は無個性の手をじつと見つめる。手のシワもしっかりと入っていてなかなか人の手を再現しているように思える。

それに元々美術展として生まれてきているおかげか指先まで美が凝縮されている……。様な感じがする。あまり美術に明るくない俺でもすごい作品だって思える1点だった。

「……お兄さんいつまで手を握ってるの？そのお人形さんの事好きなの？」

「うーん……。なんと言うかすごく綺麗だなって思ってた。頭のとっぺんから足の先まで寸分の狂いなく計算され尽くした美がここに表れてる気がしてね。つい魅入っちゃった。」

「ふーん？……。良かったねお人形さん！お兄さんすごくきれいだって言ってくれてるよ！」

「えっ……っ？」

イヴちゃんが何故か無個性に対してそう言っているのに違和感を覚えてもう一度無個性の方に向き直る。すると、

照れたように体をクネクネとよじらせた無個性がありもしない頬を抑えているではないか。

なんとも言えない光景を目にしてしまった俺はもう何も考えたくない。視線を空に漂わせ現実逃避をするが、そんなことはお構い無しに無個性は俺の腕に抱きついて甘えてくる。

すっかり襲われるなんて考えもどこかに行ってしまった、もう成るようになれと俺は匙を投げる。

「お兄さんお似合いだよ！美男美女のカップルだね！」

「イヴちゃん……変な事言わなくてもいいよ……。もう何が何だかさっぱりわかんないよ……。」

俺が頭を抱える中、イヴちゃんと無個性はとても上機嫌な雰囲気。漂わせていた……。

く嘘つきたちの部屋にてく

嘘つきたちの飾ってあった部屋へと続く扉を開け放つと目の前には通路へと戻る扉以外何も無い。それではこちら側の壁だろうか？それとも両奥の壁か？

そんなことを思いながら振り向くとそこにはまるで血のように紅いペンキをその体や額縁に滴らせているナイフを持った5枚の絵画とズタズタに引き裂かれて元はどんな絵だったのかすらわからなくなってしまうた1枚の絵画があった。

「……やだ。やだ！やくだ！！いゝやゝなゝのゝゝ！！」

「っ!?大丈夫イヴちゃん！きつとあの人も無事だから！」

「みゝんゝなゝなゝかゝよゝくゝなゝいゝとゝいゝやゝなゝのゝゝ！！！」

そう言いながらイヴちゃんは大粒の涙を流す。そんな姿を見た俺は八つ当たりになるのかもしれないが、イヴちゃんをあやししながら6枚の絵画に対して睨みつけてしまった。

あまり態度の宜しくない事は重々承知しているのだが、少々面倒臭い対応を迫られている以上これくらいは許して欲しい。そんな気持ちを知ってか知らずかなんだか絵画達も少しだけ慌てているような空気を見せ始める。

そんな空気になったのもつかの間、何やら嘘つきたちが動きを見せる。少しずつ赤いインクが消えていき、茶色の服を着た女性の切られた痕も修復されていく。そして彼女達の上部に大きな文字で“ドツキリ大成功”と浮かび上がっていく。

……確かに俺もあまり態度が宜しくないとは自覚していたがまさかここまで対応してくれるとか神店員かよ。そんなことを思いながらイヴちゃんをもう一度彼女達の方へと顔を向けさせる。

「イヴちゃん見てみ？何とかなつたみたいだよ？」

「えっ……っ……もおー！そういう悪ふざけはダメなんだよー！」

「まあまあ。きつと彼女達もそうしてくれって誰かから言われたのか

もしれないし許してあげて。」

「むう……。今回はいいけど次からはやっちゃダメだからね！絶対だよ！」

プンスコと怒りながら絵画達を叱りつけているイヴちゃんを見ていると先程まで泣いていたとは思えなくて、そんなコロコロと感情が変わるのって子供っぽいなあなんて思いながら微笑ましくその光景を少しだけ後ろから眺めていた。

く赤い服の女が追いかけてくる直前く

「うおお!?急に襲ってくるのは禁止でしょ！イヴちゃん！今から大回りしながら入口の方へ行くからその内にこちら辺見といてー！返事しなくていいよー！」

それだけ矢継ぎ早に言う俺は付かず離れずの速さで心の音の方へ歩き始める。……薔薇を持ってなくても追いかけてくることが立証されてしまったことに少しだけ面倒くささを覚えつつ後ろから追いかけてくるあいつの方をちらりと見遣る。どうやらしつかりと俺に着いてきているようだ。

心の音の辺りまで来た俺は再び大声でイヴちゃんに現在の状況を取り敢えず伝えようとしたその時、ふと赤い服の女の後ろで何かが動いたような気がして視線を少しだけ上げると何やら足音を消してこちらに向かってくるイヴちゃんが。

え？この子何してるの？そんな事を思っているとゆっくりと着実にこちらへと近づいてくる。

「えいー！」

「……イヴちゃん何してんの？俺ビツクリしてんだけど？」

「え？だってこの人なんか後ろに倒したら動けなくなりそうだったも

ん。」

そう。イヴちゃんは後ろから額縁を引いて倒したのだ。それのせいで赤い服の女はいま床から胴体が生えているような感

じになってしまっている。急にそんな状態になって今まで呆然としていた赤い服の女も流石に今の状況をわかり始めたのかその場でもがき始める。が、しかし残念ながら上半身しかない為いくらもがいた所で傾く事はあれど先程のような体勢に戻る事は早々に出来るはずもなく。意図せずになんともシユールな絵面になっている。

「でもこれで安全に探索できるね！行こっ！お兄さん！」

「……俺が『うわようじよつよい』って奴なのかな……。」

そんなことをつい呟いてしまいながら俺はイヴちゃんの後をゆっくりと追っていく。

ギャリーという人

隣の部屋に着くと、イヴちゃんが先程言っていた通りに見た事のない無個性が扉の前を陣取っているのが見える。

周りに泣き頭動かすようなギミックがないか視線のみで確認してみるも何か謎解き出来そうなものはおろか扉以外に何も見当たらない。

こいつらはいつ動いて襲ってくるか分からない為あまり近くに行きたくないがどうしたものか……。

「なにこれ邪魔ね……。イヴ、ヒロトシ、ちよつと離れててくれる?」「えっ?……いやギャリーさんあまりそいつに近づかない方がいいですよ。そいつ急に動いて襲いかかってきますから。」

「もう。ヒロトシは気にしすぎよっ……と。」

彼は特に何を気にする事もなくネクタイだけを身につけた男型の無個性を移動させる。その姿は先程睡のようなものを吐かれた際に尻餅を着くほど驚いていた人物と同一人物だとは全くもって思えない。

しかしこいつが動かなかったからいいものの、もし動いてきた時はこの人はどう立ち振舞ったのだろうか?これから今みたいに自分達で無個性を動かすこともあるのかもしれない事を考えるとそこら辺を考えるのもいいのかもしれない。

「よし。これで通れるようになったわ。それじゃ行きましょ!」

「うん!お兄さんもほら!はやくいこ!」

「あ、うんすぐ行くよ。」

イヴちゃんに腕を引かれながら扉をくぐると、そこは先程までの赤い部屋から一転して一面灰色の部屋へと変化していた。部屋の内装もシンプルながらいかにも謎解きがありそうな部屋となっている。

しかし床から生えている手は何やら寂しそうな雰囲気を醸し出していてこちらを襲おうとしている空気は感じられないし、壁には悲しそうな顔をしている新郎新婦の絵画が飾ってあるところも見ると指輪を無くしてしまったとかなのであろうか。

まあ何はどうであれ今現在出来る事といえば謎解きなど知った事かと虱潰しに床に指輪が落ちていないか探す事くらいだろう。こういうような部屋ならおそらく次の部屋へと続く扉は相手いると思うので確認を試してみる。

「……やっぱり開いてるか。イヴちゃん、ギャリーさん。この部屋で今出来る事も少なそうですし先進みましょう。」

「……気味が悪いくらい部屋の壁の色が変わったのによくまあ平然としていられるわね。」

「ここまで来るのに壁の色ががらっと変わる事なんてよくあったんで慣れました。ね？イヴちゃん。」

「うん！黄色とか青とかすごかったよ〜！」

「アンタ達案外凶太い性格してんのね……。アタシ一人だったら絶対に無理だわ……。」

そんな事を言つてギャリーさんは俺達に尊敬の念を送る。大人でこういう風に他人の功績を認められる人って少ないと何かで聞いた事があったから少し驚いた。

俺もこんな風に人を認められる人間になっていきたいものだなんで思いながら次の部屋に足を1歩踏み入れた。

いつものが通じない

花嫁と花婿が飾ってあった部屋を足早に抜けるとそこその広さがありそうな部屋に繋がっていた。目の前の通路のようになっているところの奥には絵画が2枚ほど飾っているように見える。

手前には通路のような道を挟んで左右に1つずつ扉があり、左側にはもう1つ通路があるように見える。ここはどれだけ入り組んでいるんだ。そう思いながら右側の扉の近くにあったノートの方へと歩いていく。

「ちよつと……。アンタ達何してんのよ？ノートに何か書いたところで何も変わらないでしょ？」

「あーこれまで何となしにノートを見かけたら何かしら書いてきたんで癖になっちゃってるんですよ。ギャラリーさんもどうですか？続けるうちに楽しくなってますよ。」

「そうだよーギャラリーも一緒に書こつ！」

「うーん……。2人ともやってるならアタシも書こうかしら。アンタ達は何を今まで書いてきたの？」

「大体は名前と前の部屋で印象に残った物の簡単な絵とかですかね。ね？イヴちゃん。」

「うーん！」

そんな会話を続けながらも俺はペンを止めずに滑らせる。今回も何を書くか迷ったが、ここは新しい仲間も入った事だし薔薇を描く事にした。ここに青いインクのものであればそれで書いたのだが、まあ無い物ねだりはよしておこう。

そんなこんなで俺が書き終わるとイヴちゃんペンを渡す。しかしイヴちゃんはペンを受け取ってもすぐに書き出すことはなく色々と考えているような素振りを見せる。何かあったのだろうか。

「うーん……。ギャラリーが先に書いて？わたしまだ何書くか決まってるな

いの。」

「あらそうなの？でもアタシも何を書けばいいのか分かってないのよねえ……。まあいいわ。ヒロトシの書いたものを参考にさせてもらうわ。」

「えっ俺っすか。うーん……。俺のがお手本になればいいですけど。」

ギャリーさんがイヴちゃんからペンを受け取りながらそんなことを言ってくるもんで少しだけ慌てながらもあまり波風を立てないような無難な返答をする。

しかしそんな事聞いていないと言わんばかりになんかのリアクションも無くギャリーさんはノートを書き始める。あまりにも華麗にスルーされたのもう一度念押しで言っつてやろうかと思いましたが、やった所で面白くもなければ返つてくるのは変なものを見るような視線だけだろうから止めておく。

ギャリーさんが書き終わるとイヴちゃんにペンを渡しイヴちゃんの1歩後ろにいた俺の元に歩いてくる。

「アンタ意外と可愛いもの描くじゃない。アタシ少しだけビックリしちゃったわ。」

「まああれ描き始めたのもイヴちゃんに少しでも楽しんでもらう為なんで。こんなクソツタレな世界の中でも楽しい事がないと心が壊れちゃいますよ。」

「まあ確かにねえ。アンタしっかりお兄ちゃんしてるじゃない。」

「……………どうも。」

ギャリーさんはこんな事を言っているが、実際に兄つてこんな感じなのだろうか。今まで一人っ子で従兄弟や近所にも兄のような人はいなかったからよく分からない。

しかしまあ悪い事をしている訳でも、やっている事に対してお叱りを受けている訳でもないのでもそこまで深く考える必要も無いだろう。

そんな会話を俺達がしている中でもイヴちゃんはまだまだ描き続

けている。今回は今までノートを書いてきた中でも最長記録が出ているかもしれない。

何を書いているのかやっぱり気になりながらも、ギャリーさんがいる中で後ろから忍び寄って見に行くのもなんか気が引けたのであまり気にしないように待っている、それまでなにか考え事していた素振りを見せていたギャリーさんが俺に口を開く。

「ヒロトシ、これから背中を預け合う仲間になる訳だしそんな畏まった話し方をしなくてもいいわよ。それに命の恩人にそんな畏まられたらコツチも肩身が狭いし……ね?」

「いやギャリーさんは年長者ですしそれにまだ知り合ったばかりですから。」

「んもう、そんな事気にしなくていいのよ。アタシがいいって言うてるんだからもっとフランクに行きましょう?」

「……分かった。これからは敬語無しで話させてもらうよ。呼び方は今までのままでいい?」

「名前は好きなように呼びなさいな。アタシはちよつとした事じゃ怒らないわよ?」

「分かった。じゃあギャリーって呼ばせてもらうわ。これからもよろしく、ギャリー。」

「ええー!こちらこそよろしくねヒロトシ!」

そんなことを話していると、漸く書き終わったイヴちゃんが俺達がいる所に駆け寄ってくる。先程の俺達の会話が聞こえていないのか先程と変わらないテンションでこちらに話しかけてくる。

その会った時と変わらない様子に少しだけ安心しつつもこれから襲いかかってくる脅威からこの子だけでも守ってあげないとまた嘘つきたちの部屋の時のようになってしまうなんて考えながら俺はイヴちゃんの頭をクシヤリと一撫でした。

瞳

「さて、とりあえず見える位置に扉がひとつあるけど先に入る？それともこの部屋の探索を先にする？」

「アタシは先にこの部屋の構造を見ておいた方がいいと思うわ。追われた時にどう逃げるか考えられるしね。」

「わたしはどっちでもいいよ〜！2人に任せる！」

短い時間とはいえのんびりと休んだ俺達は漸く重い腰を上げるとここからどう動くか相談を始める。しかしギャリーが新しく仲間に加わって安心しているのか、イヴちゃんはこちらに判断を委ねてしまっている。

ただそれだけならイヴちゃんなりに信頼出来る人が見つかったって事で喜ばしい事なのだが、生憎とここは何が起るかわからない謎の美術館のような場所。俺とギャリーに頼りきりのまま進んでいったらもしこれから3人がバラバラで探索する事になってしまったらどうなるのだろうか。そんな事を考えてしまったが最後、俺はイヴちゃんの事がすごく心配になっていた。

しかしギャリーが変にイヴちゃんを守ろうとしているとしたら反対されてしまうかもしれない。これが教育方針の違う両親の間で起り得る教育論争か……なんてくだらない事を考えつつも次はイヴちゃんにも考えてもらおう術をひねり出していく。

といってもそう大きな事は出来ないだろうからまた何かみんなで決める事が出てきたらその時にイヴちゃんに聞く事になるだろう。

「じゃあとりあえずこの部屋を一周ぐるつと回ってみよつか。何か見つかるといいけど。」

「ちよつとヒロトシ！そんな弱気なこと言ったら見つかるものも見つからないわよーもつとシャキツとしなさいーシャキツとー！」

「シャキツとシャキツと〜！お兄さんシャキツとだよ〜！」

「はいはい……。」

俺はそう適当に返事を返しながら歩き始めると2人とも俺の後を追うようにして歩き始める。突き当たりまで進み右に向き直るとなんだか嫌な予感のする道へと歩き出す。他の道があるならここは後回しにしたいが、進んできた道的にこの道以外に行くには少し戻らなければならぬ。多少戻って他のところから回った所で、ここも通らない訳には行かないのでとりあえず通ってみる事に。

すると次の瞬間何故か無数に並んだ瞳が不規則に床からこちらを見つめてきている。なんだかとても気味が悪く不気味な光景で少し足がすくんでしまったのだが、俺よりもビビっている人がいてくれたお陰でそこまで驚く事はなかった……と思う。

「うおっ……！なんだこれ！」

「きゃー！なにこれ気持ち悪い！」

「目がいっぱいだ〜！これすご〜い！」

「なんで床に目があるのよ……！あとなんでイヴはそんなに楽しそうなのよ！」

ギャリーの悲痛な叫びもお構い無しにイヴちゃんは床の瞳の登場にキヤツキヤしている。この子は本当に怖いもの無しなんだろうか。それとも無理にテンションをあげるために見かけたもの全てにこなりアクションをしていくのか。どちらにせよ再びイヴちゃんの緊張の糸が切れてしまう時はかなりマズイ状態になるのかもしれない。

そう思いながら唯一赤く充血している瞳を無視して俺は先へと進む。まるでこの先に何があるのか知っているかのような全能感に身を任せながら1歩1歩ゆつくりと進んでいく。

迷路

部屋をぐるりと一周してみた所、普通の扉が2つに何やら青い顔の描かれている扉が1つ確認できた。1つは出発前でも視認出来ていたのだが、もう1つは少し奥まった場所にあつた為見えていなかったようだ。探索する箇所が増えるという事はその分脱出するまでの工程が増えるという事。なんとも面倒な事態である。

そんな俺の様子を気付かずにギャリーとイヴちゃんは元々見つかっていた扉へと入っていく。2人から離れすぎないようにすぐに後を追って扉をくぐると目の前が高い壁で視界と行く先を封じられている所へと出てきた。一瞬ここで行き止まりになっているのかと思つたが目の前の壁に『ラビリンズ』と書かれており、壁の無い方をよく見ると部屋の奥の方へと行けそうな道がある為文字通りラビリンズ^迷なのだろう。

しかも奥からは何やらハイヒールのような靴で歩いているようなコツコツと高い音が重なる様に響いている事から何体かの無個性がこの狭い部屋の中を徘徊している可能性が高い。聞こえてくる音の速さからしてそこまで歩く速度は速くなさそうだが囲まれたら逃げるのはほぼ不可能になるだろう。

なんと言つても俺とギャリーですらすれ違う事が出来ないくらい狭さの細さの道幅なんだ。こんなくそ狭い通路でアイツらと会つてしまつたら回れ右して来た道に戻るしか無いだろう。

「ここは気を引き締めないとやばいな……。ギャリー、ここはどうする？先にもうひとつの扉に行つてもいいけど。」

「……………ここに入つちやつたんだしまずはここを見て回りますよ。ここに何も無かつたり囲まれそうになつたら全力で逃げるつて事で。」

「了解。イヴちゃんもキツかつたら遠慮なく言つてね。すぐ戻つて休憩挟むから。」

「分かつた……。大丈夫だよね？」

「きつと大丈夫だよ。俺達を守るから安心して。」

「うん……。」

もう何度目かのあまりあてにならない励ましが俺の口から出てくる。イヴちゃんがこれを聞いてどう思ったのか分からないけど多少は気が楽になったことを祈ろう。

そんなことを思いながら俺達は慎重に迷路を進んでいく。こういう迷路は左手法を使うとすぐ脱出出来るとか聞いた事があるが、別にこの部屋から今すぐ脱出したい訳では無いので今回は右側から確認していくことに。何やら中央の方から歩く音が聞こえてくるのでそれから遠ざかるように歩いていくと文字の書いてあるキャンバスが、名称が分からないけどキャンバス専用の足に乗っているのが発見される。

「ギャリー。あのキャンバスを乗せてるものの名前ってなんて言うか知ってる?」

「え?……ああイーゼルの事ね。あれはイーゼルススタンドって言われているわね。でもそれ以外は知らないわよ? 語源とかはここから出た後で自分で調べなさいな。」

「へー。あれってイーゼルススタンドって言うんだ。初めて知った。ありがとせんきゅー。」

「あんだねえ……。今は気を張ってないといけない時なんだからあんまり気の抜けるような事を言わないでちょうだい。」

「ごめんごめん。でも『赤い絵の具から まっすぐ南へ』って書かれてるけどそんな物あった?」

「とりあえず1つはあったけどもしかしたらいくつかあるのかもしれないわね。どちらにしても1回この部屋の全体を見て回りましよう。」

俺とギャリーはそう話すとき来た道を引き返さずにそのまま進み続ける。果たして俺達はここの部屋の謎を無事解く事は出来るのだろうか……。

ボタン

とりあえずは今まで通り書いてある事を信じて探索する事を決めた俺達は、そのまま外周をぐるりと回るように進んで行こうと進行方向に体を向ける。

すると次の角は入り口で端から端を確認した時よりも近くにあり何やら不思議な感覚に陥る。

「お兄さん、なんか入り口より両端が短くない？向こうで周りを見回してた時はもっと長く感じたんだよね。」

「あ、イヴちゃんもそう思う？俺も今少し違和感を感じてたんだよ。」
「え？そんなに違うかしら。アタシにはそんな短くなつたようには見えなんだけど。」

「まあここで話しても仕方ないしとりあえず進んでみようか。なんか足音も気持ち近づいてきてるしね。」

「そ、そうね。こんな所に長居しても仕方ないし早く出ちやいましょ。」

「さんせーい。」

イヴちゃんのそんな気の抜けた掛け声とともに俺達は足早に先へと進む。そして突き当たりを曲がると直ぐにもう1つ奥に行ける道が見つかる。

とりあえずそこに入つてみると、どうやら柱を中心に小さな部屋となつているらしい。柱の周りを一周してみると1ヶ所だけなにか文章が書かれている。

『迷路を抜け出す コツ……』

壁に片手を つきながら 進んでいけば

いつかは ゴールに たどり着ける』

なんともどうでもいい情報が書かれているものでなんとも言えな

い気持ちになつていると、なにか感じたのかギャリーが口を開く。

「ゴツはいいんだけど……。天井低くて参っちゃうわ。おまけに変なのウロついてるし。2人とも挟み撃ちにならないように気をつけなさいよ?。」

「確かに足音が複数聞こえるから挟み撃ちは気をつけないとね。イヴちゃんももし囲まれたら俺達を盾に使っちゃっても構わないからね。」

「もうそんな事しないよ〜!」

なんてわちやわちやししながら歩き始めると、ふと足元に見慣れない色が目に入る。それが何なのか確認する為に視線を下に下げると何やら赤いインクをぶちまけたようなものが足元にある。しかも濡れている訳ではなく、しつかりと乾ききっているらしくその上を歩いても水音は全くたたない。

しかし、南は一体どちらだろうか。先程のキャンバスには赤い絵の具から真つ直ぐ南へなんて書いてあったが他の方位がどつちなのか分からない以上南へ向かうのは難しいだろう。

とりあえず辺りを見渡すと何やらそれっぽいところが入り口のあ
る方向にあるのでそちらに向かう事に。

突き当たりまで歩いていくと、俺たちの歩いてきた通路の前だけ少しだけ壁が奥に入っていて人1人なら入れそうな窪みができている。じつとそこを眺めていると何やら足音のいくつかはこちらに近づいているように響いているのが感じられる。

「……イヴちゃん。なにかこの壁に違和感ない?小さいことでもなんでもいいから見つけたら教えて欲しいな。」

「う〜ん……。あつ!なんかボタンみたいなのがあるよ!押す?」

「じゃあそれ押しちゃって。ギャリーはそっち見ておいて。俺はこっち側見ておくから。」

「わかったわ。……アンタ指示出すの上手いわね。少しびっくりしちゃったわ。」

「そんな事ないよ。それよりも集中してなにか来ないか見ておいて。どっち進むかあいつらで決まるからね。」

そう言っただけを少しづつ進みながらクリアリングしていくと、なにか壁に書かれているのを確認する。何が書かれているのか確認してみると訳の分からない文章が書かれていた。

「迷路は 好きですか？」

「いや好きなわけあるか……。こちとらこの攻略を渋々やってるんだよバーカ。」

そんな一言を残して俺はイヴちゃんのいる方へと戻っていく。ギヤリーはあまり動いていないのかイヴちゃんと話していた。

「こっちは何もいなさそうだからこっちから行こう。2人ともすぐ行ける？」

「ええ。アタシはいつでも大丈夫よ。」

「わたしも大丈夫！すぐ行こー！」

「そうだね。直ぐにこの部屋から出ようか。」

俺がそう言っただけを先頭を歩き出すと2人は後ろから着いてくる。先程イヴちゃんが見つけたボタンは一体何に作用したのか。それがこの部屋のことなのか部屋の外のことなのか気になることはあれどこの部屋に居たくないから気持ち早足でこの部屋の扉まで歩いていく。

隠されていた部屋

ラビリンス部屋から出た俺達はあのスイッチが何の変化を齎したのか見える範囲で確認する。するとノートのある辺りの壁になんとか違和感を覚える。

さつきと比べて少しだけくぼんでるところがあるように見える。

「ねえ2人とも。なんかノートらへんの壁に違和感感じるからちよつと見に行ってもいい?」

「あら?違和感なんて感じるかしら?イヴはどう?なにか感じる?」

「うーん?あんまり何かを感じることはないかなあ……。お兄さんよく分かるね。」

「何でだろうね。俺もよくわかんないや。まあ何となく感じただけだから何も無いかもしれないしあんま俺の感に期待しないでね。」

そんな話をしながら歩いていくと、やはりと言うべきか先程はなかった扉がそこに出現していた。ラビリンスの部屋の外から動く音はしたものの、他にはあまりになんの予兆もなかったものだから少し驚きはしたが何とかそこまでびっくりした態度を見せないままではいられた。

それにしてもこの扉はあのボタンを押した産物なのだろうか。タイミング的にはその可能性が十分にあるのだが、もし別のものが例のボタンによって変化していたらどうしようかなどと考えてしまう。やはりもう一度あの部屋に戻って見た方がいいのでは――。

「お兄さんきつと大丈夫だよ。」

「は……。?あーイヴちゃん?何が大丈夫なのかな?」

「お兄さんが何を心配してるのかよくわかんないけど、きつとそれは考えすぎだと思うな。この美術館はもつと単純に考えても進めると思うよ?」

……この子には一体何が見えていて何が聞こえているというのだろうか。確かに俺は今悩んでいる素振りを見せていたのかもしれない。だがそれにしても俺の考えていた事を見透かしていたかの如く労いの言葉をかけてきた事に関して、今までの気の使いようも相俟って小学生には思えないくらい鋭い観察眼を持っていると感じざるを得ない。

と言うよりも俺がわかり易すぎるのだろうか……？どちらにせよこの子は将来大物になりそうな予感をひしひしと感じている。

「……そうだね。もう少し肩の力を抜いて見るよ。イヴちゃんありがとね。」

「ううん大丈夫だよ！お兄さん色々一人で頑張っちゃうから少しくらいわたしに頼ってくれてもいいんだよ！」

「あら、イヴにばかりかっこいい所はあげないわよ。ヒロトシ、アタシにだって頼ってくれてもいいのよ？大人の知恵を貸してあげるわ。」

「2人とも……ありがとう。これからは頼りにさせてもらうよ。それじゃあここでじっとしてても進まないしそろそろ中に入ってみようか。」

そう言つて俺は扉のノブに手をかける。扉の奥に入るとそこはどろやら展示ブースのようになっていた。ワイングラスのような椅子やまるでマリモに手足が生えたような見た目の謎のもの、チェストアップの彫像などがいくつか並んでいた。

「なんか色々展示されてるな……ここになにかありそうだから少し探してみよっか。」

「うん！わたしがんはる！」
「うーん……そうかしら？アタシはそんな感じしないわね……。まあ少し暗いけど目を凝らして見てみるわ。」

そんなことを話してゆつくりと展示物を見回していく。しかし、や

はり暗い上に何がどこにあるなどの情報もないのでまあ見つかる訳もなく。とりあえずこの部屋を後にしてもうひとつの扉の方へとその足を進める事に。

次の部屋には何があるのか。そしてあの目玉の床はどんなギミックが隠されているのか。そんな事を考えながらこの部屋最後の普通の扉へ向かっていった。

目次

俺達は今現在入れる最後の扉の前に立ち止まると何の気なしにふと右側へと視線が向かっていく。そこには何やら口をパクパクとさせながらまるで斜眼の様な瞳をギョロギョロと常時動かしている謎の青い壁のようなものがある。気味が悪くて先程部屋の探索をした時は3人してスルーしてしまったが、あいつは一体何なのだろうか。

「……あのさ、さっきスルーしたあの青いのに話しかけてみない？今まで動いてるやつって敵だったりギミックだったり何かしらこの美術館に意味があったからあいつにも意味がきつとあるんじゃないかな。」

「えっ。アタシあいつの傍に行きたくないんだけど。なんか気持ち悪いじゃない。」

「ギャリーそういうこと言っちゃダメだよ。人を差別するような事を言っちゃダメってママが言ってたもん！だからギャリーもそういう事言っちゃダメ！」

「……分かったわよもう言わない。それにしてもいいお母さんじゃない。アタシは親からそんな事言われた記憶がないもの。」

「へー。やっぱり家庭によって言われる事は違うな。うちは人に優しくなさいつて馬鹿みたいに口酸っぱく言われたよ。……じゃあ一回あいつと顔合わせしておくか。」

俺たちの足が例の青い顔に向かって動いていく。するとあいつもこちらに気づいたのか何だか動きが早くなった……気がする。

近くまで行ってみると案の定と言うべきか、見ていてあまり気持ちの良くないと感じる。とりあえず話しかけてみようと半歩ほど前に出ようとする、その行動を読んでいたのかあいつから口を開く。

『えへへへへへへへ。はな……おはないなあ……。』

「はな。」

『そのお花くれたらここ通してあげるよ……。えへへ。』

「いややらんが？」

『えへへ……。お花ちようだい？』

ダメだ。こいつは全くこつちの話を聞いてなどいない。それにこの世界で命と同等の重さである薔薇をあげてしまったらそれはもう死んでいるのと同じだろう。それにどうせ花をあげたところでどうせろくなことに使わないだろうしここはお断り一択だな。

「悪いけどこの薔薇はやる訳にはいかないな。諦めてくれ。」

『ねえおねがい……。ちよつとだけ。におい嗅ぐだけだからさあ……。』

「絶対にノー。」

『ちよつとぐらいいいじゃん……。えへへ、へへへへへへへへへへ！』

あはははははははははははははははは!!』

「キャッ！いきなり何なのよ！気味悪いわね！早く離れましょ！」

ギャリーがそう言っただけ俺達はその場をそそくさと離れるが、あいつの笑い声は俺達が扉に入るまで続いていた。

急いで元々入ろうとしていた扉の前まで戻ってきた俺達はその足で扉をくぐる事に。

扉の先には幾つものイーゼルとその上に飾ってあるキャンバス。それと沢山の丸椅子が無造作にちりばめられて置かれている。全てのキャンバスに目薬の絵が描かれており、奥の壁にも目薬の大きな絵画が飾ってある事から恐らくこの部屋には目薬が置かれているんだろう。そう思いとりあえず奥に進もうと丸椅子を跨ぐと足をあげるが丸椅子の手前くらいで謎の壁に阻まれて跨ぐことが出来ない。

「……丸椅子が跨げない。なんか壁があるっぽいからギャリーもちよつと試してみて。」

「アタシ？良いけどアンタが跨げないなら多分アタシも無理だと思うわよ。」

「お兄さん、なんでわたしにはやってって言わないの？」

「えっ……。イヴちゃんもやりたい？ やってもいいけどイヴちゃんス
カートなんだから気をつけてね……？」

「うん！」

なんかよく分からないがイヴちゃんがやる気を出しているので
やってもらう事に。とりあえずここから進む方法を探さなければ。

サボり気味

何故こうなったのか分からないがとりあえずみんなで椅子の上を跨いで進めない事を確認した俺達は、次に動かす事はできるのかを確認していく。動かすにも色々方法はあるがまず初めに持ち上げて運べるかどうかを試してみる。

「ふっ……いづんぐんぐん……いんぐう……。ああ……動かん。うんともすんともならん。」

「うーん……持ち上げるのも無理となると後は引きずって運ぶしか無くなるのかしら？それとも1人だとダメとか？そんな指定があったら少し面倒くさいわね。」

「よく分かんないけどすぐ出来る方を試してみればいいんじゃない？何ならわたしがやるよ！」

「じゃあイヴちゃん、ちよつと椅子を引っ張ったり押ししたりしてみてくださいる？動くかもしれないからあんまり力入れなくていいよ。」

「はあ〜い！」

なんとも元気な掛け声と共にイヴちゃんは丸椅子と向き合う。俺がさんざつぱら持ち上げようと頑張るも終ついでそ1度も持ち上げる事の出来なかつた椅子をゆつくりと押し始めると、なんと普通に動くではないか。一体今まで俺が頑張ってきた事はなんだったのか。なんてくだらない事を考えながらそのままイヴちゃんの動きを見つめる。

とりあえずイヴちゃんに椅子を何度か押し引きしてもらった結果、押せるけど引けないことが分かった。つまり椅子が角に言っしまつたらそれはもう動かないという事になる。こういうパズルはあまり得意では無いのでイヴちゃんとギャリーに任せよう。これこそ適材適所ってことで一つよろしかったら。

「あー……これ詰んだ？目標物の確認は出来たけどここからどう向かうよ？逆サイドから向かう？それとも配置が元に戻る事にワンチャンかけて1回外出してみる？」

「嫌よ……ここまで頑張ったんだもの！まだこつち側を粘るわよ！ね！イヴー！」

「え？向こう側からやろうかなって思ってたんだけどダメだった？さすがに外に出るにはまだ早いけど。」

「えっ……。あつそうなのね。じゃあ向こう側に向かいますよ。」

「ギヤリー……あんまりしよげんなよ。今はアレでもきつとこれからいい事あるって。な？」

「やーね！そこまで落ち込んでないわよ！そんな事より早く向こう側のパズルを解くわよ！」

どうやら適材適所作戦は見事に失敗したようだ。いや、この一回で失敗と言い切るのはあまり宜しくないのかもしれない。しかし正直この2人なら行けると思っただけに少しだけガツクシと来てしまった感じだ。まあ何もしていないやつが何を言っても馬鹿言うなという感じなのだが。

然しギヤリーはすごく弄りやすい。ここまで叩けば鳴る人は自分にはあまり会った事が無い。これならきつと精神状態を良好に保つ為に役立つってくれるだろう。まあ主に俺のって枕詞が付いてしまうがきつと彼は許してくれる。なんだかんだ言っただけで面倒見のいい人だから。

「……何とか着いたね。お兄さんが言ってくれた所を間違えてたらまた一からやり直しだったかもしれないって考えるとやっぱわたし達は3人で頑張らないとダメだね！」

「そうね。ヒロトシは次からサボろうなんて考えないで頂戴？じゃな

いとずっとこの訳の分からない美術館から出られないかもしれないわよ?。」

「あーはいはい分かりました分かりました。次からはしつかりやらせて頂きますう。」

「なーんか誠意があまり感じられないけど……まあいいわ。それじゃあ取るもの取ってこの部屋から出ましょ? さっさとこんな訳の分からない所から出て新鮮な空気を吸いたいわ。」

何とか1回(?)の挑戦で目薬を入手できた俺達は通ってきた道を引き返してこの部屋から出る。ああいうパズルは苦手だし、しかもどういうふうに配置されているのかも分からない状態なのだからよくやった方だろう。

扉を出て取り敢えず目薬を必要としてそうなの充血した瞳のところまで向かう事に。あの充血くんがこの目薬で治ってくれば何かヒントをくれるかもなんで少し打算的な考えも持ちつつ俺は歩いていく。

瞳の導き

瞳の沢山敷かかっている所に辿り着いた俺達は一目散に赤く充血している瞳の元へと歩いていく。沢山の瞳の中の唯一のソレは一体全体まだ赤いままなのか。実はあの個体だけは動く事が出来てこの部屋の中を逃げ回っているのでは無いかなんてあまり嬉しくない可能性も考えたが、そんな事はなく先程と同じ所でこちらの事をじいつと見つめてきている。

俺達3人の中でイヴちゃんが1番瞳を近くで見ているので一応先程手に入れた目薬を渡すが、イヴちゃんは目薬を持ったままその瞳と対峙している。

「……ちよつとイヴ。なにしてんのよ?」

「ん?何となく見てただけだよ。なんかこのおめめが可愛く見えてきちゃったんだ。」

「え?!?!ねえちよつとイヴ、アンタ熱でも出てるんじゃないわよね?それとも1回休憩挟もうかしら。……ヒロトシ!アンタもちやんと考えなさいよ!イヴがあんな事言ってるのよ!」

「いや、趣味は人それぞれだし……。イヴちゃん、ギャリーが言ってる事は気にしないでいいよ。ちよつとこの雰囲気慣れてくて参ってるみたいだし。」

「……そうかな?わたし何かおかしな事言っただけ?大丈夫?」

「大丈夫。イヴちゃんは何もおかしな事は言っただけだし、自分が苦手だからって騒ぎ立ててるギャリーの行為も特段おかしな事じゃないんだよ。だってイヴちゃんを心配して言ってるんだから。ね?」

「うん……。」

イヴちゃんは少し俯きがちに頷いたのを確認した俺はギャリーへと向き直る。いくら理解が出来ないとはいえ、あそこまで取り乱して否定するのはさすがに見えていて気持ちのいいものではない。

「で？ギャリーは一体何様なのさ。今ギャリーへ偉そうに高説垂れる俺も大概だけどさ。別にイヴちゃんやんがどんな趣味趣向を持っているような迷惑を被っていない限り俺らには関係の無い事だろ？それを何も考えずに頭ごなしに否定するとかダメだろ。」

「で、でもあんな目を可愛いだなんて気が触れたと思ってもおかしくないでしょ!？」

「それでも否定するのは違うでしょ。だいたい付き添いがいはいえ9歳の多感な時期の子がこんな空間にいる時点で気が触れるのは時間の問題だし、もしそうなった場合は先ず安心させる事が最重要案件だろ……多分。」

「それは……そうかも知れないわね。ごめんなさい、少し気が立ってみたい。」

どうやらギャリーも落ち着いたようでこちらに頭を下げてきた。俺に頭を下げるのは違うだろうと思ったが、俺の後ろにはイヴちゃんがいる訳だしまあおかしくないかと考え直す。そんな光景を見たイヴちゃんはどうしていいのか分からず俺の後ろでオロオロとしていたが、そんなことをお構い無しに俺の前へと背中を押して連れてくる。俺はイヴちゃんにそつと耳打ちをする。

「もしイヴちゃんが怒ったり悲しんだりしてないのならギャリーを許してあげて。でも自分に嘘をつかなくていいからね。」

「……わかった。ギャリー！わたしはあなたを許しますっ!」

「っ!?本当に!?」そのかわり!」……そうよね。悪い事したら罰が下るわよね。OK、覚悟は出来てるわ。」

「そのかわり、もしまたわたしが変な事を言ったら、次はもつとやさしく言っほしいな。」

「も、勿論そうするわ!神に誓って!」

「ならいいよ。許してあげる!」

とりあえずあまりギスギスせずに済んだ事を素直に喜ぶべきか。

しかし何も進んでいない事を考えるに余計な出来事が起きてしまったのだから喜ぶ事でもないか。それよりもイヴちゃんは早くこの充血くんに目薬を刺してあげて欲しい。そうすればきつと充血くんも充血の苦しみから解放されてさぞ喜ぶ事だろう。

「イヴちゃん。そろそろ充血くんに目薬をさしてあげようか。この子もきつと早く充血を治して健康的な瞳に戻りたいと思っっているはずだよ。多分。」

「あつそうだね！いつまでも充血したまんまだと辛いもんね。わたし達が助けてあげないと！」

「そうそう。そうした方がきつといい事が起こるよ。情けは人の為ならずなんて言葉もあるくらいだし。」

「あら。なんだか要領を得ない言葉ね。それってどういう意味かしら？」

「えっと、人に親切にしていればそれが自分にも返ってくるって意味だったはず。まあ人には優しくするものって事だね。」

「へえ、良い意味の言葉じゃない。」

そんな会話をしていると、イヴちゃんの持っている目薬の準備が出来たらしく蓋を開けてこちらを待っている。少し申し訳なさを覚えつつも俺はイヴちゃんに目薬をさすよう身振り手振りで促す。それを確認したイヴちゃんは充血した瞳に向けて目薬の中身を数滴落とす。

液体が瞳に着いた瞬間からみるみるうちに赤みが取れていき、次の瞬間にはほかの瞳以上にキラキラとしたものへと変貌した。キラキラしている原因は恐らく落とした液体が反射しているからだろう。そんな瞳が次の瞬間急に目をつぶりどこかへと移動を始める。

それがどこに行くのか追っていくとただの壁を横についてその壁をじっと見つめている。よくよくその壁を見るとどうやら少し他の壁と色が違うようだ。少し押ししてみるとどうやら隠し扉となっているようで奥に部屋を発見した。

「まるで忍者屋敷みたいだな。」

「？忍者屋敷ってなあに？」

「こういう隠し扉とか罾がいつぱいある家の事だよ。そこに忍者って職業の人が住んでたら忍者屋敷って言われるんだ。」

「へえ。世の中には色んな家があるんだね！」

なんとも気の抜けるような会話だが先程の件もあるし少しは大丈夫だろう。そんな事を考えながら俺たちは少しだけ隠し扉の前でだべっていた。

踏み出し

3人でのだべりも程々に隠し扉の奥を覗くと、どうやら細長い部屋のようなだ。しかしよく観察してみてもそれ以外の情報が無く、本当に何も無い空き部屋のようになっている。俺の視力は悪くない筈のだが見当たらないという事はここにもなにか隠し扉のようなものがあるのか、それとも小さい物が落ちているのか。それくらいしか俺には思い浮かばなかった。

「俺には何も無い部屋にしか見えないんだけど2人はなにか見える？」

「アタシも特にこれといって見えるものは無いわねえ……。やっぱり入って見ないと分からないのかしら？」

「わたしもなんにも見えないや。でも何かありそうな予感はあるよ！」

「じゃあここにいても何も分からないし中に入ってみようか。一応罠がある可能性も頭の片隅に置いておいてね。」

「それは勿論よ！アタシ達はこんな所でくたばってたまるものですか！絶対に脱出してみせるんだから！ね！」

「うん！みんなで脱出してみんなで遊びに行くんだから！」

「え？それは初耳なんですけど？しかも2人とは住んでる国が多分違うから簡単には会えないと思えますけど？」なんて思ったが、それを口に出す事によってイヴちゃんのもチベーションが下がるのはあまり宜しくないと思いき、既すんでの所で口を固く閉ざす事に成功する。

そんな俺のことはお構い無しにお出かけの内容を2人はどんどんと決めていく。今からそんな事を決めた所でここでの記憶が残るかすらも怪しいのになんて自分でも感じる位にひねくれた思考回路に自己嫌悪を抱きつつも俺は二人の会話に軽く相槌を入れていく。

「……おふたりさん。そろそろ部屋の中の探索に移らない？イベントごとの計画段階が1番楽しいのはわかったからさ。」

「……あら。ちよつと盛り上がりすぎちゃったわね。ヒロトシの言う通り早くこんな所出て3人でお茶にでも行きましょ？」

「さんせ〜！わたしもママのご飯が食べたくなつてきちゃった！」

「イヴちゃんお腹空いた？カロリーメイトで良ければ後であげるから今は頑張つて。」

「Calorie Mate？聞いた事ないけどそれってなあに？」

「キャ……？なんで俺のわかるような単語だけネイティブな発音に聞こえるんだ……？……えつと、クツキーみたいな？栄養食だった筈……。」

「Cookie！私食べてみたい！ちようだいちようだい！」

「あはは……また後でね。今はこの部屋を調べないとだからさ。」

俺はそう言つて部屋の中へと視線を戻す。いくら見た所で確認出来るものは変わらないことは重々承知しているのだが、それでも見るのを辞められないのは何でなのだろうか。

それでもうだうだ部屋の外から眺めていても何も始まらないので、2人がじつと部屋を睨みつけている中俺は部屋の中へと足を踏み入れる。後ろで2人が何か言っているのを無視してズンズンと進んでいくと、部屋の真ん中辺りの床で何やら赤いものがきらりと光るのを確認すると一直線にそれに向かっていく。

「これは……ガラス玉？綺麗には綺麗なんだけどこれが使おうところなんてあったか……？」

「ちよつとヒロトシー！そんなところでしゃがみこんでどうしたのよー！もしかして気分でも悪くなつた!?早く戻つてきなさい！」

「きつとそんなんじゃないか見つかつただけだと思ふよ？ギャリーは心配しすぎだつて。」

「そんな事言われたつて心配なのは心配なの！あー！あの子が行く前に私が行つて来ればよかつたわ！」

「ギャリー声でかいなあ……。ここからそこそこ離れてるのに普通に聞こえてくるって興奮しすぎだろ。」

心配性なのはいい事なのだが、高々しゃがんだだけでここまで言われてしまうとさすがに度を越している気しかしなくて流石に対応が面倒になってくる。

これ以上面倒臭い対応を押し付けられても困るのでササツとガラス玉を回収して足早に2人の所へと戻っていく。

「こんなの見つけたけどどこで使うか分かりそう?」

「あら、随分と綺麗なガラス玉ね。……もしかしてこれを拾うためにしゃがんでたの? そうと言ってくればあそこまで心配しなくて済んだのに……。もう! しつかりしなさいよね。」

「あーはいはい次からは気をつけるよ。そんな事よりもイヴちゃんは何かこれの使い方思い浮かびそう?」

俺の心無い対応にギャリーがギャーギャー騒いでいるがその一切を無視してイヴちゃんにガラス玉を見せる。イヴちゃんは流石に無視できなかったのかギャリーとおれを交互に見ながらオロオロとしていたが、なにか思い浮かんだのかそのものを口にする。

「これ、蛇の目じゃない?」

感情の後ろ

何はともあれイヴちゃんの言う蛇の絵画の前まで歩いてくると、そこそこ大きい額に入った神秘的なまでに白い蛇の絵画が俺たちの前にひよっこりと現れる。何度どのような角度で見たとおかしさを感じさせないその絵画は、目の所をよくよく見てみるとまるで紙のような質感ではなくコンクリートの壁のような色と質感をしているように感じられる。

「白い体に赤い瞳……。確かアルビノってこういうカラーリングだっけ。生物は選択してないからよく分からん。」

「そんな事より目の所にガラス玉を嵌めてみましょう？きつと悪い事は起きないだろうし。ほらイヴ、アンタの持つてるガラス玉を早く嵌めちゃって。」

「わかったあ！いくよ！えい！」

イヴちゃんがそう言ってガラス玉をポツカリと空いた蛇の眼窩^{がんか}へと嵌め込む。すると次の瞬間すぐ右側からガタンと何かが落ちる音が聞こえてくる為、ビツクリしてついそちらに体を向けてしまう。

どうやら隣に飾ってあった額縁が落ちてしまったようだ。もしかするとまた壁に何かあるのかと思っておそらく落ちた額縁がかかっていたであろう場所をじっくりと見てみるが少しだけ色が違うとかは無い。一応念の為壁をノックするように叩いていくがどこかの音が少し変なような事も無い。

そこまでわかったところで次は落ちた絵画を見ていこうと視線を向けると、絵画の裏側に何か文字が書いてある。

「『大きな木の後ろに……。』か。2人ともなにか心当たりある？」

「大きい木といえなくちびるさんの所の木が思いかぶなあ。でも遠いからちがうかも。」

「うーん……アタシはあのオブジェの部屋の一番奥にあった人形みたいな木かしらね。あまり大きいとは言えないけどアレも木の一種に入るでしょ。」

「あー確かに。じゃあまずはオブジェの部屋に行つて違つたらりんごの部屋に戻ろうか。ギャリーは分からないかもしれないけどさ。」

ギャリーが最年長者としている中でなんで俺がまとめ役のようになっていいのか全く分からないがまあそんな事はどうでもいい訳で。取り敢えずオブジェの部屋に戻る為に後ろに振り返る。

俺達がオブジェの部屋に入ると、そこはいつも通りに点滅するライトで仄暗い封行きを醸し出している。先に進むのを躊躇わせるなんとも言えない雰囲気を見無視して先へと進んでいくと、なんだか手と足が生えているようにも見える木が見えてくる。

“大きな木の後ろに……”と書いてあったのはいいが木に雨も後ろもあるものなのか。取り敢えず作品名が読める方を前として考えよう。そう思いこの木—— “感情” の裏側と思われる場所に回る。するとなにやら木の中にきらりと光るものを発見する。

「これは……指輪？ 確か花嫁と花婿がこの部屋のひとつ前にいたよな。とりあえず返しに行くか。」

「そうだねーおよめさんも困ってるだろうし早く行ってあげよー！」

「ふふっそうね。こんなところで油売ってる場合じゃないわね。」

こんな不気味な所に居ながらもものほほんとした空気に包まれた俺達はゆっくりとした足取りで花嫁と花婿が待っている部屋へと進んでいく。

ブーケトス

指輪も手に入った事で確実に物事が進むと確信した俺達は念の為警戒をしながら悲しげな雰囲気醸し出している新郎新婦の飾つてある部屋へと戻ってきた。前回ここに来た時は素通りをして何も調べてなかった為新郎新婦の絵と「悲しき花嫁の」と言う前提条件のある黒い両手がある事しか分かつている事は無い。

しかしこの部屋の広さ的にはこれ以上何かあるとは思えないし、何かあつた所でどうせ大したことでは無いのだろう。それよりもこの黒い手に指輪をはめたら何が起こるのかという事の一択だろう。ここも特に悪い事は起きないとは思うのだが、それでも警戒をしない訳にはいかないだろう。

「ねえギャリー。けっこん指輪つてどつちの手につけるんだっけ？わたくし薬指につける事は覚えてるんだけどどつちにつけるのか忘れちゃつた。」

「あらイヴ。そんなの……そうだわ！イヴ当てずっぽうでいいから当たってみてちょうだい！当たったらいいものをあげるわ！」

「ほんと!?じゃあわたしががんばる！むむむ……うん決めた！右！きつとこつちが正解！」

「うーん残念、正解は左よ！ちなみに右手の薬指に指輪をつけるのは恋を叶えるなんて意味もあるのよ？だからイヴも好きな人が出来たら右手の薬指に指輪をつけるといいわ。」

「そうなの？外れたのは残念だけどいい事聞いた気がする！ありがとうギャリー！」

「んもう！これくらいどうつて事ないわよ……ていうかヒロトシ、さつきから一言も喋つてないけど大丈夫？体調が悪いなら指輪をはめる前に少し休憩を挟みましょ？」

「あ、いや……なんか少し警戒をしていたのが馬鹿らしくなってきたなつて。」

2人の繰り出す光景に毒気と緊張感を盛大に持つていかれながらも、最後の警戒心はくれてやるものかと豆乳を搾ったあとのおからのようにボロボロな緊張感にムチを打ち、イヴちゃんがいつ指輪を填めても大丈夫なように備えておく。

しかし1度崩れてしまったものを元に戻すことは難しく、いくらハリボテを立てたところでハリボテは所詮ハリボテ。どうせ何が起きたところですから対処することは難しいだろうと思ひ直し、俺も気を弛めて少しでも体を休める事にシフトチェンジする。

取り敢えず何の気なしにぼーっと2人をみていたらどうやらようやく指輪をはめる気になったらしく、黒い手の左手の薬指をふにふにと触っているイヴちゃんが居る。何をしたかったのかよく分からないが止める理由もない為放置して指輪をはめるのを待つ。

するとイヴちゃんはポケットから遂に指輪を取り出しておらずと指輪を薬指に入れていく。すると新郎新婦の表情が悲しげなものからにこやかな明るいものへと変貌しこちらを見つめてくる。そして次の瞬間、新婦が持つていた花束をこちらの方へと投げかけてくるではないか。

「ブーケトスか……。イヴちゃん、その花束を持つてくれる？」

「え？別にいいけど……。なんで？」

「うーん……。何となくかな。でもきつと新婦も俺ら男よりイヴちゃんに持つて欲しいと思うよ？」

「そうね。それにブーケトスって言ったら取った人が次結婚出来るなんて迷信もあるものね。アタシはまだ結婚なんてする気ないしヒロトシにはどうせ相手なんて居ないでしょうし。」

「……ちよつとギャリーさん？それは言い過ぎじゃないですかねえ？俺だつてちよつと本気出せば1人くらいはきつとお相手が見つかる……と思ってるんだぞ。多分。」

「お兄さん……。少しは自分に自信もつても大丈夫だと思うよ？それにお兄さんいい人だからきつといい人が見つかるよ。」

「イヴちゃん……。そのフォローは逆に傷つくんだ……。嬉しいけども

う大丈夫だよ。」

なんだか俺だけ傷ついてしまった感が否めないがまあそんな事は些事なので放っておいて、これであの青いやつにあげる為の供物が準備できたという事になる。という事は嘘をついてなければあいつの奥に行く事ができるという事で。ようやくこの灰色の部屋から次に進めるといふ事に少し心が弾みながら俺達はこの部屋を後にする。

擬態

幸せなお二人のいる部屋からそそくさと出てきた俺達はその足でお花にとんでもない程の執着を持っているあの青いやつに再び相見えることに。正直イヴちゃんの情操教育的にあまり宜しくないタイプの人格の持ち主だと理解してはいるが、それでもブーケなんてこれ以上ないヒントも貰っている事を理解していない訳では無い。

俺達がいくら足取り重く歩いてきた所でそこまで長くない道のりの為、すぐに着いてしまった。あちらは俺達の気持ちなど知らないと言わんばかりにどこを見ているか分からないままニヤケているその小憎たらしい表情を見せつけてくる。正直あまり話しかけたくはないがここで自分の好き嫌いを出しても先に進めない事は理解しているので俺の心の中にお釈迦様が居るイメージを持って穏やかに話しかける。

『えへへへへへへへへへ。はな……おはないいなあ……。そのお花くれたらここ通してあげるよ……。えへへ。』

「やっぱり対応は変わらないか。この花キチがよ。……イヴちゃんさつき貰ったブーケくれる？それで通してもらおうからさ。」

「えー！こんなにキレイなお花あの子にあげちゃうの?!?うう……せめてもう少し待ってくれる?」

「え?まあ俺はいいけど……。なんで?」

「だってこんなにキレイなお花ホントはわたしの部屋に飾りたいくらいだもん。でもそれは出来ないだろうし、それにあの子にこのお花を渡しちゃうんでしょ?だったらもう少しこのお花を見てたいなって……ダメ?」

「それなら別に大丈夫じゃない?こいつがどれだけ待ってくれるか知らないけどまあ渡さなければいいだけだしね。」

「ホントに!?やったあ!」

イヴちゃんはそう言うとうっとりとした顔で新婦から受けとった

ブーケを愛でるように見つめている。俺には正直花の良さというものは分からないが、育ちが良さそうな感じもするし俺みたいなガサツなやつには分からないような何かを感じているのだろう。

幾許かの時間が経ち俺達は図らずも各々で体を休める形となっていた。と言っても2人が花の話でワイワイ話しているのを俺が傍からぼーっと見ているだけなのだが。しかし何時までもここでのんびりしている訳にも行かないので俺は重い腰を上げてようやく行動に移す。

「お二人さんそろそろ行かないか？このままだといつまで経っても一向に進みやしないぞ。」

「あ、お兄さん。待たせてごめんね。それじゃあ行こう！」

「ついつい花の話で盛り上がりつつちゃってねえ！アタシも満足したわ！」

「それなら良かった。じゃあイヴちゃん、ブーケをくれるかな。ちよつとあいつに渡してくるからさ。」

「はいどーぞ……渡す時気をつけてね？」

「そりやもちろん。俺も痛い思いはしたくないからね。」

そう言つて俺はイヴちゃんからブーケを受け取ると青いアイツの方へと向き直す。こちらを向いてずつと『えへへ……お花ちょうだい？』と言いつづけている事がとても不気味だが、ここを通してもらう為には誰かがしなければいけない事で俺がその役を買って出ただけの事。……ギャリーに丸かけ忘れればよかった。しかし口から出した言葉はもう戻らないので腹を括つて俺はコイツにブーケを向ける。

「ほれ、好きにしていぞ。」

『えへへへありがとう……。……いい匂いだなあ……。えへへ。』

「ああそうかいそりやよかった。じゃあここを通し……て……。」

『それじゃいただきます。』

その言葉と共にコイツはすごい音を立ててブーケをバリバリむしゃむしゃと食べてしまう。その言動と行為に俺は言葉を失ってしまった。あまりに突拍子もない行動だったし、まさか花を食べるとは露にも思っていなかったのでもっと以上に驚いてしまった気がする。しかしあいつはこちらの事など気にもとめない様子で話を続けていく。

『あーおいしかった。えへへへ。』

「えっ……？あ、ああそれは良かったよ。満足してくれたようで何よりだ。」

『ありがとうありがとう。約束だからね、ここ通すよ。』

「ここって……何も無いじゃないか。一体何をする気だ？」

俺がそう言っただけなのに警戒レベルを少し上げるが、そんな事お構い無しに己自身の言いたい事やりたい事をやっている為あまり意味が無い事を薄々感じとっている。そんな事を知ってか知らずかコイツは自分自身を扉のような模様へと変化させる。

『このドアで奥に行けるよ。それじゃあね、えへへへへ。』

「……嵐のような時間だったな。マジで頭の整理が追いつかない。」

「ブーケ……。お花が可哀想だなあ……。」

「でもブーケが無かったら誰かの薔薇を差し出さないとイケなかったかも知れないって考えると少しホッとするわね。」

「おおう……。急に怖い事を言わないでくれギャラー。」

そんな会話をしながら俺達は少しの恐怖を胸に抱えながら次の部屋へと向かう。

小部屋

扉となった青いアイツを抜けるとそこは何やら小さい小部屋になっていた。部屋の中には入ってきたものとは違う扉と絵画が3枚飾ってあるだけで他には何も見当たらない。飾ってある絵画もうち1枚はまるで子供が一筆書きで書いたような何かにか見えないうな出来で何が描かれているのかすら分からないが、題名を見る限り「アンバランスな箱」が描かれているらしい。

そんなどうでも良い絵画は放っておいてあと2枚の絵画へと視線を向ける。1枚は「預かりし真心」という作品で白い背景にハートが浮かんでおり、それを上から取ろうとする手が描かれている。まあもつとも俺には取ろうとしているように見えているだけであって、いやこれは守っているんだという声もありそうだがそこはそれぞれの感性ということだ。

「この絵は何なのかしらね？箱には見えなくはないんだけど……そう
だ、溶けてる氷みたいね。」

「ええ〜そうかなあ？わたしにはジャパニーズコタツに見えるよ！」

「あら確かに。ねえ、ヒロトシにこの絵は何に見えるのかしら？」

「子供が書いたセミ……かなあ。」

「……アンタなかなか渋いセンスしてるわね。」

「そうか？まあ毎年セミの鳴き声を聴きながら夏を過ごしてるし土地柄じゃないかな。」

「セミの鳴き声なんて聞こえるかしら？アタシは聞いたことがないわ。イヴは聞いたことある？」

「わたしもないよ！お兄さん特殊能力もってるの!?!すごい！」

何やらイヴとギャリーは虫の鳴き声を聞いた事がないという話題としては盛り上がるが別に今必要ではない情報が知ることがわかった。それよりも俺は最後の絵画を目に入れようと視線を動かす。しかしそこにはタイトルの書いてあるプレートはあれど絵画も額縁も

何も飾っていない。ただの壁がそこにあるだけだ。それに唯一あるプレートにも何も書かれていない先程この部屋に入ってきた時には何か飾ってあったように見えていたのだがあれは気のせいだったのだろうか？

「なあ2人とも。さつきここに入ってくる時にここに何か飾ってなかったか？」

「え、どうだったかしら……。うーん……。アタシは覚えてないわね。」

「私も覚えてないかな。……。お兄さん大丈夫？疲れてない？」

「さすがにそこまで疲れてないよ。それと急に変な事聞いてごめん。」

なんだろう。この部屋はなんだか色々とズレている気がする。俺と2人の認識の違いもあるけどそれ以上の何かが……。

『本当にもう……。これは辛いなあ……。』

……。ツ!?この記憶は一体なんだ。全く身に覚えの無い記憶なのに部屋の家具の配置や色合い的に俺の部屋のものだし聞こえた声は俺の声だ。しかし今の記憶は少しおかしいところがある。

パソコンの液晶を見ながら言葉を発しているはずなのに画面には何も表示されていなかったのである。何かを見て辛いと言っているのになぜ俺の視界には『辛い要素となるものが無い』のだ。

一体今のはなんだったのか考えながら目線を再び見えない絵画の方へと向けると先程はあった題名のプレートすらもなくなっていることに気づく。一体何が起きているのか。さつきの身に覚えの無い記憶は一体何なのか。色々な事が頭をよぎりながらもここで立ち止まっている訳にも行かず、俺は2人に声をかける。

「そろそろ次の部屋に行こう。ここで止まっても何も起きないからね。」

「確かにそうね。次の部屋へ早速向かいましょ。」

「次の部屋は何があるかなあ。……わたし少し嫌な予感がする……かも。」

「イヴそれ本当？具合が悪くなったら早く言いなさいよ？」

「うん……今は大丈夫。それよりも奥の部屋から嫌な予感がする気がするから気を張ってた方がいいかも。」

「わかった。油断をしないようにしましょう。ギャリーも気をつけといて。」

「何が何だかよく分からないけど……わかったわ。心構えはしとく。」

「よし、じゃあ行こうか。」

俺はそう言って入ってきた扉ではない方のもうひとつの扉のノブに手をかけてゆっくりと開けていった――。

マネキンの行列

イヴちゃんが感じた嫌な予感を警戒しつつゆっくりと扉を開けていくとそこは何も言えない程に生首のマネキンがズラつと並んでいる廊下へと繋がっていた。壁にも顔がアツプで描かれているとても大きい絵画が飾ってあり、奥にも同じような大きさの額縁があと2つ飾ってあるのでおそらく3枚とも同じようなものが掛かっているのだろう。

一応目の前にはノートとペンが置いてあるがこんな雰囲気の中で書くかどうか少し迷ったがこんな所で迷ってる時間も勿体ないし自分で決めた事だから破りたくないという事もあったから足早にノートと対面する。そしてササツと名前と今回の印象に残ったもの（今回は指輪を描いた）を書き終えると俺は振り返る。

「2人とも書く?」

「いやアンタ……なんて言うか図太いわねえ……。」

「わたしは書くよー。」

「え、イヴも書くの?アタシこんな不気味なところ早く出たいんだけど……。」

「じゃあギャリーは先に行ってもいいよ?わたし達は書き終わったら追いつくからー!」

「イヴちゃんそんな意地悪言っちゃダメだよ。イヴちゃんだってそんな事を言われたら悲しくなるでしょ?」

「お兄さんママみたい……。」

「ヒロトシの今の言い方は完璧にママだわ……。」

「ちよつと待って俺高校生なんだけど?というかその前に男なんだから言うなればパパなんだけど?」

2人の「ママ」発言に少し憤慨を覚えながらも自分自身確かにそれっぽかったななんて思ってしまった事に少しだけ変な気持ちになり、その思考から離れるようにイヴちゃんの書いている姿をぼーつと

眺める。せつせと書いているその様子を見てるとなんだか宿題をしている妹を見守っているように感じられて少しほっこりしている。とギャラリーが隣でニヤニヤとこちらを見ているのに気付いたがそんな事を気にも止めずに俺はイヴちゃんが書き終えるのをゆっくりと待った。

イヴちゃんも書き終えて、ついでにギャラリーのちゃっかりと書き終えた後俺達は次の扉へと歩き出す。しかし全ての生首のマネキンが通路を挟むようにズラつと並んでいて、尚且つそれが全て俺達の通らざるを得ない道の方向を向いているのである。正直二の足を踏んでしまう気持ちもあるがそんな弱い感情を押し殺して歩を進める。

すると2枚目の絵画にさしかかろうとする辺りで何やらその2枚目の絵画から視線を感じる。なんだろうとその絵画を見てみると何やらこちらに目の黒いところが向いているように見えるではないか。一応1枚目の方を振り返って見てみるがそちらは変わらずに真正面を見据えている。何やら気持ち悪い感覚を覚えながらも気のせいだろうと思いついでそのまま真つ直ぐ進んでいく。

そうしたら念の為にその絵画の正面を過ぎた辺りでもう一度見返してみると先程と変わらずにこちらと視線のあっている絵画があるのだ。正直そのまま目的の扉まで走り抜きたい気持ちで一杯になったが、何とか衝動を押さえ込んで心を落ち着かせる。しかし立ち止まってしまったのが原因で2人とも視線を投げつけてくる絵画を見てしまう。

「キヤーツ！アイツこつち向いてるわ！気持ち悪いッ！」

「わたしあの絵から嫌な感じがする……。お兄さん早く行こ……。？」
「そうだね。早くここを通っちゃおうか。一応あつちは見てくるだけっぽいけど念の為にね。」

俺がそう言って歩き出すと2人ともビクビクしながらあとを着い

てきた。よく自分より強く感情を出している人を見ると自分は落ち着くみたいな事を聞くけどその気持ち今回よくわかった。自分より驚いているびびり^{ギャリ}がいたから俺は自然と落ち着く事が出来た。少し性根の腐った落ち着き方である事は否めないがまあそんな事はバレなければどうという事は無い。

ラビリンスの部屋からここまで特に襲われる事がなかった事に少し安堵を覚えつつ、そろそろ何かが起こりそうな雰囲気を感じ取って心身ともに疲れてきているところに鞭打って進んでいく。

束の間の平和

視線を感じながらも扉をゆっくりと開けると俺たちの視界一面に何も無いただの壁が映し出される。辺りをキョロキョロと見渡すと一応左右に何かがあるようなシルエツトが少し見えるからこの壁の奥にも部屋は続いているのだろう。

左か右か、どちらから行きたいか2人に問いかけてみると帰ってきた返答は案の定どちらでもいいというものだった。正直なんとなくそう返ってくるのは予想していたがだからといって俺がどちらに向かいたい決めていた訳では無いのでなんとも迷う所。

「ヒロトシ、そんなに悩むのなら直感に任せちゃいなさいな。どうせこの部屋も満遍なく回ることになるんだからどっちから行っても変わらないのでしようし。」

「うーん……そうだな。そうしようか。まあ元はと言えば2人が俺に投げ出したからこんな悩んでるんだけどな？」

「お兄さん、そんなしかめっ面をしたって怖いだけだよ。もっとスマイルスマイル！」

そんな2人の言い分を聞きながら俺はため息をひとつ小さくつけた。これがクラスのヤツらだったら強く言い返すところだが、相手は成人済のオネエと小学生女兒というなんとも訳の分からないメンツという事もあつて強く言い返せない状況にあつた。

とりあえず何となく右側の方が安全な気がしてそちらに向かってみると突き当たりにはやはりと言つていいのか部屋の奥に行ける道があり、すぐ目の前には色違いの無個性が4体並んでいる。おそらく入口から見えていたなにかのシルエツトはこの無個性の腕の辺りだったのだろう。

何度か4体の無個性の前を行ったり来たりしてみても動く様子はなかった為、ひとまずは安心してこれらの前を通って奥へと進む。すると個室の入口と思われる扉が見えてくる。その横にノートとペン

が置かれているのを確認し、前の部屋で書かなくても良かったなんて少し思ってしまったが今更そんなことを考えたところで後の祭り。それならばと取り敢えず名前だけ書くことに。……ノートの前に立った瞬間にノートのすぐ横にある窓になにか横切る影が見えたのはきつと気のせいだろう。

「こんな近くに有るんだったらさつき書かなくても良かったじゃない……。それになんでここでもヒロトシは書くのよ。さつきも書いてたじゃない！」

「えつと……俺はノートを見たら必ず名前は書くって決めてるから。ジnkクス見たいな？」

「変なジnkクスねえ……。じゃあイヴはなんで書いてるのかしら？まさかヒロトシと同じなんて事ないわよね……？」

「？わたしはお兄さんが書いてるからまねしてるだけだよ？」

「ヒロトシ……。アンタのせいなのね……。」

「俺のせいとは人間きの悪い。俺はあくまで自分のためにやっていただけで強制してる訳では無いんだから。だから誰のせいとかはないでしょ。」

「ぐぬぬ……。間違った事を言っていないだけにこれ以上強くつよく言えないわね……。」

そんなあんまりな言い方をするギャリーは放っておいて俺達はノートにここを通過した証を残していく。イヴちゃんを待っている間目の前の個室の扉が開くかどうか確認してみるがやはり開く訳もなく。イヴちゃんもすぐに書き終えてしまったのでとりあえずこの部屋の散策を続ける事に。

この部屋は何か起こる予感がする。そんな予感が拭えないままに俺は2人とともにこの部屋を巡る。その予感が当たっているのか否か、そんな事俺達に分かる訳もないまま脱出の為の歩みを止めることなく進んでいく。

枚数

「それにしても広いわねこの部屋。今まで通ってきたフロアの中でも一番広いんじゃないかしら？」

「確かにそうかも。わたしもこんな美術館になってからここまで広い部屋に入った記憶ないもん。」

「確かにここまで広い部屋は探索してないなあ……。なんだか探索が大変そうだ。」

俺達は部屋を探索しながらなんでもない事を話していると、絵画を飾る為なのか壁がいくつか聳え立っている。その壁には無数に『赤い服の女』と同系列の絵が飾つてあるが、今の所動き出す感じはない為ゆっくりと探索を進める事が出来ている。……あ、1枚だけ違う絵が飾つてある。まあ後でじっくりと観察しよう。しかし今は大丈夫だけどこの部屋を出る時にはこの何枚かは動くんだろうなと考えるだけで気が重くなるのはご愛嬌。

そんなことを考えながらもずんずんと進んで行くと行く手に扉がひとつ現れる。奥にも道は繋がっているが、扉ひとつ分狭くなっている。一体何なのか気になりつつ目の前の扉のノブを動かしながら押したり引いたりしてみる。しかし開く様子が全く無い為取り敢えず後回しにして探索を再開すると、なんの現象も起こることなく小部屋の裏まで回ってくる事が出来た。

「あら、なんだかんだ何も無くここまで来れたわね。それにしても……この扉は一筋縄では開いてくれなさそうね。」

「この部屋にある女の絵の数を答えよ」と……“入力せよ”？入力せよって書いてあるけど何を入力すればいいんだろうね？」

「うーん……4桁のものは見た覚えがないなあ。まあ女の絵を数えながらヒントも探していこうか。」

「そうねえそうする他無いわよねえ。ま、気を強く持つて頑張りましょうー。」

ギャラリーがそう締めると俺達は来た方とは逆の方へと歩き始める。ある程度歩くと壁には4枚の女の絵が飾っており、その向かいには先程見た無個性のいた方へと繋がっている道がある……のだがなんだから向こう側から見ていた道より一本少ないのは気のせいだろうか。何となくそちらが気になり、この女の絵の数を数え終えているのもあったのもう一度無個性のいた方へと目的地を変える。

再び無個性の前まで戻ってきた俺達はそのまま方向転換をして道を確認してみるとどうやら勘違いでは無かつたらしく、向こうでは壁のあったところに道があるではないか。

「おお、これはちよつと気になりますな。俺はこの道の先に何があるか先に確認したいんだけどイヴちゃんとギャラリーはどうよ？」

「アタシは先に女の絵の枚数を数えちゃったほうがいいと思うわ。面倒なことは先に終わらせたいたいもの。」

「わたしはどつちが先でもいいと思うな。でもこの先に何があるかちよつと気になるかも！」

「じゃあ妥協案としてちよろつとこの道を覗いて何があっても見たらすぐに絵の枚数を確認しに行くつてのはどう？」

「それでいいわ。」「わたしもそれでいいよ！」

「じゃあそういう事で、早速行きますか。」

そう言つて向こうに無い道の入口をそうつと覗くと、突き当たりには扉が1枚そこにはあった。1体この部屋には何枚の扉があるのだろうか。そしてどれがこの部屋より先に行ける扉となっているのだろうか。少し気になりはしたが先程の約束を破る訳にもいかないのひとまずは先程と全く同じルートを辿つて絵の枚数を数えながら扉を開けに行くことになるだろう。

「あつこの絵美術館でも見たよ！でもなんでここにこの絵があるんだろうね？女の人の絵ばつかりのこの部屋に飾る意味つてあるのかな

？」

「そりやなんかのヒントなんじゃない？それかこの絵実は脅かし要員だったりしてね。まあしつかり見て見ますか。」

「そうねえ……ん？この絵からなんか視線感じないかしら？ん……うわっ！」

「ギヤリーどうしたの？そんなに驚くところあつた？」

「ゴイツ目が光ったわ！こんなの驚かない訳ないじゃない！」

「いやそれにしてもビビり過ぎだろ……。まあ俺も人の事言えた義理じゃないけどさ。それよりも早く数えちやおうか。4桁の方もわかった事だしね。」

俺がそう言うと2人とも先程より驚いた表情を見せてくれる。それを見て満足した俺はそそくさと他にも絵画が無いか探す為にその場を離れると、今まで通り2人は後を着いてくる。しかし表情はどういう事か早く説明をくれと言わんばかりにこちらを睨みつけているのは……まあ致し方ないのか？

バチバチ

女の絵の数を数え終わり扉の前へと到着した俺は、2人からの冷たい視線を浴びながらも扉に数えた枚数を入力していく。すると目の前の扉からカチャンと鍵の動かされた音がする。まあこれが合っていないければまた数え直さなければならなくなる為、一発で当たったのは御の字という所か。

まあしつかりと数えているんだからこれで合ってなかったらもう俺の頭は働かない重りみたいなものと言っても差支えの無いもので成り下がっている事だろう。

「それで？こっちの扉はまあ一緒に数えたからアタシも分かったけどもう一つの4桁の方はどういう答えなのかしら？アタシ達にも分かりやすいように答えてもらおうじゃない。」

「もらおうじゃない！」
「いやイヴちゃんもそんな言い方しないでいいんだよ？それに難しい事は何にもないさ。」

イヴちゃんが仁王立ちをしながらギャリーの言った言葉を復唱している姿がとても可愛らしく見えたのだが、その体勢を淑女になろうとしているイヴちゃんがするのは如何なものかと気になりながらもそこに深く突っ込まずに話を続ける。それに難しいことは何一つとしてなかった。だって――。

「隣の扉の答えは吊るされた男ハングドマンに全部書いてあったんだからね。」

「吊るされた男に？あの絵になにか特別なものなんてあったかしら？」

「……あれ？確か胸のところに数字が書いてあった気がする！もしかしてその事？」

「その通り！しかもご丁寧にデジタル時計みたいなくついた数字なんて文字で書いてるもんだから読みやすくして仕方がないってもん

や。」

「……アンタちよつとキャラ変わってない？ いやまあ出会ったばかりのアタシが言うのも何なただけだよ。」

「正直こういう謎解きで俺一人だけがわかってる状況ってなかなか無いから少しテンション上がってる。」

俺はニコニコと今までに無いくらいに笑顔を自分の顔に貼り付けてギャリーへと答える。こんな事もこれからは少なくなるだろうしふざけられる時にふざけておきたい男心なんてものもある。そんなくだらない感情に多少振り回されながらも俺は説明を続ける。

「あの服には4桁の数字がゼッケンみたいな物に書かれていたんだけどさつきも言ったようにカックカクだったんだよ。んでそこには5629”って書いてあった。」

「あら、それじゃあその扉のパスワードはそれって事ね。たったそれだけの事で何ここまで勿体ぶってるのよ全く……。」

「ん？でも吊るされた男って吊るされてるんだからその数字って反対になってるんだよね？本当にそれで合ってるのかなあ……。」

「そう！イヴちゃんの言う通り吊るされた男は所謂逆立ち状態な訳だ。ならばそれを解消するためには彼を立たせてあげればいい。くるつと180度回して……ね？」

「んもう！勿体ぶりすぎなのよ！つまりアンタは何が言いたいの！早く言いなさい！」

「おお……もう少しこの感じを楽しませてくれないじゃん。さつきも言ったけどこんな機会滅多にないんだからさ。それにこういうのもちよつとは楽しいでしょ？なんかの作品みたいだよ。」

「わたしはすごく楽しいよ！お兄さんが楽しんでるのがとつても伝わってくるもん！」

「アタシは焦らされてイライラが溜まってわよ……。」

とても楽しそうなイヴちゃんと少し疲れているようなギャリーが

対照的でなんだか笑いが込み上げてきそうなところだが、ここで笑ってしまつたらきつとギャリーが今以上にへそを曲げてしまうことは目に見えている。ここもあまり深くは気にせず話の続きを喋っていく事にしよう。

「まあそんな訳でおそらくあつちの扉の答えは“6295”になる筈だよ。考え方が間違つてなければね。」

「なんだか難しくてその数字が出たのかよく分からないけどお兄さんすごくいい！」

「イヴ……アンタって子は……。ヒロトシあんまり気を落とさないでね。アンタが間違つてもアタシは笑わないから。」

「いやギャリーのフォローの仕方の方が俺の精神的にくる物があるんだけど。ていうかまず間違つてる前提で話を進めないでくれ。」

まだ打ち込んでいないのにもう既に外れたかのような扱いをしてくるギャリーに少々思う所もあつたがこれ以上言った所で空気が悪くなる位しか変わる所は無いだろうと考え、俺はそのまま口を紡ぐ。そんな俺の考えを知つてか知らずかギャリーもこれ以上俺を慰めて来ようとはしてこなかった。……これでまだ言つてきていたら俺は大きな声で止めていたかもしれない。

「それじゃあ入力してみようか。言つとくけど絶対に合ってるからギャリーはしっかりと見とけよー。」

「あら言うじゃない。ならお手並み拝見といこうかしら。」

「お兄さんとギャリーがバチバチだ……。」

たまにはこんな雰囲気も良いのかもしれない。

お誘い

俺はなんとも誇らしげにギャラリーの方へと向き直ると彼はとても悔しそうな顔を隠す素振りも見せずには此方を睨んでくる。……うん、確かに対立してた時は売り言葉に買い言葉だったけど俺としてはパスを打ち込み終わって結果が出た時点で少々終わってる話だし、ちよつとイキってドヤ顔を見せたけどそこまで根に持つようなことだとは思ってなかったからただただ驚いている。あまり大きな年齢の差は無いのかもしれないけど仮にも高校生相手に大人気ないぞギャラリー。

まあ取り敢えず両方とも鍵が開いたという事でどちらから先に探索するか考えるがどうせ両方とも入る訳だしそれならばどちらから入ってもきつと同じだろうという事で、まず先に開けた右側の扉から入って色々を見て回る事に。

「この部屋には何があるかねえ。……めばしいものは何も無いか。まあ花瓶があることがわかったただけ御の字って所かな。ギャラリー、あの張り紙なんて書いてある？」

「わざわざアタシに聞かなくてもいいじゃない……。全く、見てくるからちよつと待ってなさい。」

『作品にはお手を触れぬよう　お願いいたします　万が一　美品や作品に何らかの損害を　与えた場合は　あなた　をも　賠償　させていただきます』

「……所々の文字が抜けてるけど、あまりいい内容が書いてある訳では無いわね。まあ物とか壊さないように行きましょ？」

ギャラリーはそう言うところに戻ってくる。その時の表情は流石に今まで通りに戻っていたが、俺と交わす言葉の節々にはまだ不機嫌さが滲み出ているのは俺の気の所為なのだろうか？

あとこの部屋に残っているものはそんなに大きくない本棚がひとつくらいだろう。この部屋の家具の少なさを見ると、なぜこんな

部屋が存在しているのかがわからなくなる。まあ今まで通ってきた部屋にあつた小部屋全てに意味があつたかと聞かれるとちよつと首を傾げざるを得ないが。

「お兄さん、わたし本棚見てくるね。だからお兄さんとギャラリーは休憩してて。」

「いや流石にイヴちゃん1人に任せる訳には行かないよ。俺も手伝うからぱぱつと終わらせちゃおうか。」

「流石にこの大きさを3人で物色とかは出来なさそうね。アタシはのんびりと待つてるわ。2人とも頑張つてちょうだいね。」

ギャラリーからの言葉を背に受けながら本棚を覗いてみると、そこには背表紙に何も書かれていない本がズラつと並んでいた。その中にもなにかないだろうかと再び探し始めると1冊だけ背表紙にタイトルの書いてある本が見つかる。

「えーつと……『楽しい毎日』？これは何について書いてあるんだか……あまり欲しい情報はせられなさそうなタイトルだ。」

俺はそう思いながらゆつくりと読み進めていく。

『美術館は ちよつと不気味な遊園地 おかしなものが たくさんあるのよ』

『ここで遊んでいると あつという間に 1日が 終わってしまうの』

『とつても 素敵でしょう？ だからあなたも ここにいれば？』

『大丈夫 みんなが いるから』

あー……またこういう奴ね。これもどうせいヴちゃんに向けて書かれたものだろうけど残念ながら本人は外に出たがっている上に、俺的には今まで楽しい事が一回もない事からきつとイヴちゃんは今でも帰りたいと思つているんじゃないかと考えている。

とりあえず2人が本を読んでいる間部屋の壁になにかギミックや隠しメッセージがないかを念の為確認してみるが、やはりそんなものはある訳もなく。俺達は早々に隣の部屋へと向かうのだった。

直前

俺たちが隣の部屋へと入るとそこにはイーゼルに掛けられたキャンバスと机が一つ置いてあった。キャンバスには花瓶が描かれており、机の上にも同じような花瓶が置かれている事からここにいた人物は恐らく花瓶を描いていたのだろうが、如何せん花瓶の置かれている位置が少しおかしい。普通観察しながら描くのであればキャンバスのほぼ正面辺りに被写体を置くはずなのに今現在机の置いてある場所は描き手のほぼ真横であり、模写をするにあたってどう考えても適していない位置にある。

この美術館の物は基本的にガツチリと固定されていてどれだけ力を入れたところで動かない事もざらにあるのだが、もしかするとこれはキャンバスと机のどちらかは動くようになっていてという事なのだろうか？

「お兄さん、ここになんかよくわからないけどくぼみがあるよ！ここまで机を運んで来れそうかなあ……？」

「きつといける……んじやないかな。さつきあった椅子の部屋みたいに引き摺って運ぶのなら行けそうだね。」

「さつきのヒロトシミみたいに持ち上げようとしちやダメよ？上に花瓶も乗ってるし危ないからね？」

「もう！ギャリーもお兄さんもわたしを子供扱いしすぎ！わたしだっでもう立派なレディなんだからね！」

「ふふっそうね！アタシったらうっかりしてたわね。ごめんねイヴ。」

「ふふん！分かってくれたらそれでいいよ！お兄さんもわたしの事レディだっと思うよね？」

なんとも子供らしく可愛らしい質問がイヴちゃんから投げかけられた。そういう事を他人に聞いている時点でそれはレディにはなり得てないので無いかと思ってしまうが、まあ子供の可愛らしい部分だしこの事について返す言葉は決まっている。俺が今すべき事は

目の前のレデイイヴちゃんの納得するような言葉を献上するだけだ。なんで少しカッコつけすぎただろうか？

「勿論イヴちゃんは立派なレデイだよ。だからこそ雑務は俺が今までやってきたんだよ？レデイにそんな事は似合わないからね。」

俺はそう言つてイヴちゃんの頭を優しく撫でる。なんとも気持ちよさそうなイヴちゃんの顔が表に出てきているがそれに気付いたのかすぐ先程までのしかめっ面に戻つてしまう。

「ほあ……。お兄さんはわたしの事なでれば解決すると思つてない？そんな事でわたしはごまかされないからね！」

「そつか。じゃあもう頭を撫でて欲しくないって事でいい？俺は喜んでくれればいいなつて思つてやつてただけどなあ。」

俺がそう言つてイヴちゃんの頭から手を退かすとイヴちゃんは悲しそうな顔を浮かべながら俺の手の動きを目……。というか顔全体で追つていた。その動きが何となく猫のようで愛らしく、撫でてしまいたい衝動に駆られたが直前に間接的なもう撫でません宣言をしているので彼女から撫でてと言われるまではノータッチを貫こうと思う。

「お兄さん……。頭撫でて。優しくお願いね？」

「ハイハイ分かりましたよマイレお嬢様デイ。」

「あら、ヒロトシつたらイヴを随分とたらしこんでるのね。イヴも気を付けなさいよー？将来こんな男について言つちゃダメだからね！」
「たらしこんでるなんてギャリーのそれは言い過ぎじゃないか？俺はイヴちゃんを妹的な感覚で可愛がつてるだけだぞ？」

「なんでお兄さんみたいなのについて行つちやダメなの？お兄さんみたいな人ならきつと優しい人だよ？」

「……。なんかどうかアンタ達にはアタシが付いてないと何しでかすかわかつたもんじゃないわね。」

ギャリーの言う事に俺達2人は訳も分からず頭を傾げた。俺達が知らない所で何かおかしな事でもやらかしてしまっていたのだろうか？

そんな事を思っていると、ギャリーがいつの間にかイヴちゃんの言っていた窪みに合わせて机を動かしていた。あたかも俺達……というか俺が悪いような言い方をされてしまった気がするが何か、俺はいけない事でもやってしまっていたのだろうか？イヴちゃんを妹みたいに可愛がつてるだけと言ったがそもそも俺には妹はいない為此の距離感が兄妹として正しいのかも分かってないもんだからそこら辺がギャリーの琴線に触れたのかもしれない。

ギャリーが所定の位置に机を動かすと次の瞬間にどこかから、少なくともこの部屋の扉では無いところから鍵の動かされた音がしたのが確認できた。今までの流れからして別の部屋の鍵が空いたんだろうけどその候補としては3つある。

「さて、恐らく今のでどこかの扉の鍵が開いた音がしたけどどこから行く？俺たちの入ってきた扉側からかそれとも逆側からか。」

「真ん中のあの小部屋からじゃなかったらどつでもいい気がするわね。どうせどつちから行ってもまだこのフロアの完全攻略が終わった訳じゃないし……。なんかアタシ嫌な予感するのよね。」

「そんな事よりもさっきの鍵が開いた音の後ろでガラスの割れるような音が聞こえた気がするんだけど私の聞き間違いかな？」

ガラスの割れる音。それが意味しているのは恐らくあいつらの活動が始まったということだろう。出来れば一生動かないままでいてくれた方がこちらとしてはありがたかったのだが動いてしまったのなら仕方が無い。気を引き締めていこう。

「さて、嫌な鬼ごっこの始まりだ。」

鏡の間

先程嫌な鬼ごっこが始まりだなんてカッコつけたはいいものの、部屋の外に出てすぐそこに居るとも限らないのでそろりと扉から頭を出す。するとそこは入る前と対して特に何かが変わった様子は見られずとりあえずは安全のようだ。しかし少し離れたところから何かを引きずっているかのような音が聞こえてくる為、完全な安置という訳でもなさそうだ。

「さて、イヴちゃんの聞こえた通り絵画が何枚か動き始めたのは分かったけどここからどう動こうか。といってもさっきの音が空いてない3つの扉のどれからなったのかを確認する事が第一優先事項だと俺は思ってるんだけど2人は何かある?」

「うくん……今のところ手がかりがそれ以外ないからそうするしかないわね。イヴは他に気になることはある?」

「わたしは特にないかな……。あ!今動いてる絵が何枚あるのか気になる!」

「あー確かに。じゃあ鍵の開閉チェックと一緒に適当に確認しようか。まあ何枚動いてようが逃げ切れれば勝ちなので深追いは禁物で。」

「うん!じゃあすぐにでもここから出よ!もしかしたらこの部屋の前を囲ってくるかもしれないし!」

「おお。イヴちゃんがすげえ頼もしい。ギャリーもこれくらい頼もしければ俺も気が楽なんだけどなあ。」

「ちよつと。聞こえてるわよ。」

「知ってる。」

そんなくだらない言葉の応酬をしながら俺は音が出ないようにゆっくりと扉を開ける。先程と特に状況は変わっていないようで扉の前に追っ手の影は見えない。しかし先程顔だけ外に覗かせた時よりも近づいてきているような気がする。というかすぐ左側の通路に

赤い服の女が見えているのが普通に見えるし向こうもそれに気づいたのかこちらに向かつてきている。速度はとても遅いけれども追って来ているという事実には少し緊張感の増した俺は早々に追っ手とは逆側へと歩みを進める。

とりあえず入口近くの扉を確認しに行くも外れ、近くにノートがある小部屋の扉も開いてはおらずなんとも面倒な事に最後に残った扉は先程赤い服の女のいた場所の奥にある扉のみとなってしまう。しかもあちらからは未だに引きずる音が聞こえてくる。いくら相手の追ってくる速度が遅いとはいえそれに安心出来はしない。何せ相手はいきなり速度を上げてくる事があるという事が分かっているから。

扉の近くまで来た俺達は相手の動向を見つつ扉が開いているか確認をしに行こうと思っていたのだが、如何せん相手の位置が悪い。こちらに気づいたような素振りを出していないのにも関わらず何故か少しづつとはいえこちらに近づいてくるのだからそりや警戒してしまうのも仕方ないだろう。

「……よし。 匭作戦使おうか。 イヴちゃん。 さつきと同じ要領で扉の開け閉めを任せてもいいかな？」

「え？ それはもちろん大丈夫だけど……。 お兄さんまた無茶するの？ そういう事ならわたしは手伝わないよ！」

「まあまあちよつと落ち着きなさいなイヴ。 まだ無茶するとは決まった訳じゃないんだし少しは信じてあげてもいいんじゃないかしら？」

「お兄さん気を抜いたらすぐ無茶をするんだもん……。 私がちゃんとみはってあげないときつとやりすぎちゃうー！」

「あはは……。 なんて俺はそんなに信用されてないんだろ。 そんなに無茶した覚えはないんだけどなあ。」

「……ギロチンの時と初めて赤い服の女と追いかけてこした時は？ あれは無茶じゃないの？」

「あれは……。 まあ否定は出来ないかな。」

「ヒロトシ、 口でイヴに負けてるようならアンタに匭はさせないわ。」

少なくとも今回はね。今回はアタシが代わりにやってみるからアンタ達はさつさと鍵が開いてるかどうか確認してきなさい。じゃー!」
「ちよっ! 走らない方がいいぞ! あっちの足の速さが上がるから!」

俺のその言葉が聞こえたのか、彼は片手をヒラヒラとさせながら赤い服の女の方へと歩いて相手の興味を引いていく。

「じゃあ早速俺達も行動を起こそうか。ギャリーの負担をこれ以上大きくしても申し訳ないしね。」

「そうだね。早く確認して中に入っちゃお!」

俺達は急いで扉の前に向かうとその勢いのままノブを捻る。するとほか2つの扉と違い途中で止まることもなく難なく回りきったのでこれ幸いとそのまま扉を開け放つ。そしてそのまま扉の奥の安全確認を目視で行うが、部屋の中には鏡が1枚扉奥の真正面の壁に埋め込まれているのみで特にこれといって何かある訳でもない。そこまですべて確認をし終わるとまずイヴちゃんを扉の中に入れてそれを追って俺も中へと入る。そして扉を抑えてギャリーが何時でも入れるようにしておく、俺は大声でギャリーに呼びかける。

「ギャリー! 扉を抑えて待つてるからいつでも来ていいぞ!」

「了解!」

「いや声遠いな。どれだけ遠くまで逃げたんだ?」

「本当にね。……あ、またパリンって音した。もしかして2枚目が動き出した?」

「ギャリーもよく叫んでるなあ。……やっぱり俺が行った方が良かったんじゃないか?」

「ダメ。」

「どうしても?」

「絶対ダメ。どうしてもダメ。」

どうやらこういう事は許して貰えないくらいには無茶をしてしま
うように思われているらしい。そつちの方面になんとも信頼のない
俺はガツクリと肩を落とすと、こつちに向かってくるで分かろう
ギヤリーが早くここに着いてくれる事を祈りながら俺はイヴちゃん
からお小言を言われるのであった。

追跡者の違い

「だいたいお兄さんは一人で頑張るすぎなの。確かにわたしは頼りないかもしれないけどもう少しわたし達を信じてくれてもいいんじゃないの？」

「いや、俺はそんなに頑張っていないんだけど……。いやはい。俺は頑張るすぎました。だからそんなに睨まないで。」

大して怖いものではない……。というかとても可愛らしい睨み顔をこちらに向けてプリプリと怒っている。しかしそんなイヴちゃんの不機嫌ですオーラは可愛らしいものではなくしつかりと居心地の悪いものとなっており、微笑ましいような申し訳ないようななんとも言えない気持ちになってくる。俺の良心もそれに伴ってなんとも言い難い気持ちを持ち始めてきて流石にのほほんとしていられない。

そんなこんなで俺が怒られている間でも勿論時間が流れている訳で。ギャリーが近付いている雰囲気を感じられ、俺は急いでイヴちゃんのお説教モードを終わらせる為に説得を開始する。

「イヴちゃん。足音とか引き摺る音が近付いてきているからそろそろギャリーを助ける準備しないとだから1回落ち着いて？ね？」

「むう……。今度からは1人で無茶しないって約束できる？」

「そりや勿論幾らでも約束するよ。これ以上怒られたくないし、それにイヴちゃんも頑張るんだもんね？」

「うん！」

とりあえずイヴちゃんの怒りを収めてもらったところでギャリーが角からひよこつと姿を現した。ゆつくりと、けれどしつかりとした足取りの後ろにはしつかりと赤い服の女がついてきていることから誘導の方は無事成功したと言って良いだろう。それに少し気になる事もある。

「ギャリー！そこからダッシュでここまで来てくれ！全力疾走でよろしくー！」

「はあ!?アンタさつきと言ってる事違うじゃない！走ったらコイツも早くなるんですよ!?!」

「この距離ならいくらトレーニングしてない奴でも最高速度のまま走り抜けられるだろ！知らんけどー！」

「アンタねえ！そういう事はもう少し確証を持ってから言ってみようだい！……まあいいわ！カウントをちょうだい！走ってやるわよ！」
「了解！スリーカウント行くぞ！……3！2！1！GO！」

その合図とともにギャリーは全力疾走を始める。隣にいたイヴちゃんは俺の事を何言ってるんだこいつと言わんばかりの目でこちらを見つめてくるが俺が確認したかったのは正しく“これ”である。今回で追われるのは2回目だけど前回の部屋とこの部屋の赤い服の女の違いを確認したかった。だから本当は俺が囷をしたかったが、まあ止められてしまったものは仕方がない。たとえ獲物が変わってもきつと追いかける方は変えないだろうと俺は腹を括る。

しかしギャリーが全力疾走をしても赤い服の女は決してそれまでより早い速度で追いかけてくることはなく、今までギャリーを追いかけていたその速度のままこちらへと向かって来ていた。

「ほいお疲れ様。まあ走る意味無かったっぽいけどな。」

「ハア……ハア……アンタねえ……！それなら普段運動しなくなった社会人に走らせんじゃ無いわよ……！」

「まあまあ。これでこの奴ら……というかあいつはどれだけ早く走ってもあいつのスピードが早くなる訳じゃない事が分かったんだからギャリーが走ったのも無意味じゃないって。」

「そんなの結果論じゃないのよ……。全く調子がいいんだから。」

「まあまあギャリー。なんかあったんだからお兄さんの事そんなに責めないであげて。わたしからもいっぱい言ったからさ。」

「仕方ないわねえ。……まあそんなに怒ってなかったけど。」

なんだか俺はギャリーからおもちやだと思われていそうだなと感じながら、会話も程々に部屋の中をしつかりと見渡した。しかし見れば見るほど鏡しかなく、扉が閉まっていた所で何かが変わる訳でも無かった。しかし、この部屋で唯一壁に架かっている鏡からは何かよく分からないけど感じるものがある。それがいいものなのかそれとも悪いものなのか、そこまでは分からないけど一度鏡を覗いてみる価値はあるな。

鏡

俺が部屋の奥にある鏡に注目しているとイヴちゃんとギャリーもそれに興味を持ったのかじつと見つめ始める。しかし遠目から見ても何も起きない事に気づいたのかイヴちゃんが歩き出したかと思ったら鏡の前でじつと鏡の中のイヴちゃんと見つめあっていた、

「イヴちゃん……何をそんなに見てるのかな？」

「ん〜？今の身だしなみがおかしくなっていないか確認してるの。ママにどんな時でも身だしなみはちゃんとしておきなさいって言われてるから！」

「そうよね！イヴも女の子だもの、いつだって可愛くいたいものね！全くヒロトシったら女心も分からないなんて……彼女に愛想つかされるわよ！」

「彼女なんて居ねえよ！てかいた事すらねえよ！」

「あら意外。アンタなら過去に1人や2人付き合った経験とかありそうなものだけど……ないのね。まあそれなら納得だわあ〜。」

「言い方が絶妙にイラつくな……。それに彼女なんか居なくても俺にはゲームとネット環境があればそれだけで万々歳なんだよ。」

俺がそう力強く言い切るとギャリーは小さく溜息をつき、イヴちゃんは特に何を気にする事も無く鏡を見ながら手ぐしで髪をとかしたり前髪を整えたりしている。なんとも女の子らしいと言えば良いのか、同級生がよく教室でコンパクトミラーを片手にやっている姿と酷似している。まあ違うところを上げていくとするのならば、大なり小なりあれど同級生の連中は化粧をしていたがイヴちゃんはまだそういう事に手を出していない所だろうか。

そんな事を考えていたらなにやら後ろからチャリと扉のノブをひねる音がする。何事かと勢いよく後ろを振り返るが変わった場所なひとつもない……と思いきや入口前に不気味な方かの両端に置かれていたあの白い生首の彫像がいつの間にか置かれている。特に他

に変わったところは見当たらないなど考えているとギヤリーが生首に動かす為に近づいていく。

「何よこれ……いつの間に入ってきたのよ……ふんっ！……あら？ふんっ！！……ビクともしないわ。全く参っちゃうわね。」

「え？マジか。ちよつと俺も試していい？……あーなるほど。確かにこれは動かんなあ。跨ごうにもなんか壁みたいな何かがあつて無理っぽいし……こりや閉じ込められたな。」

「え!? 2人ともそれって大丈夫なの!?!」

「まあ何かキーとなる事を見つければこいつも動くだろうから大丈夫だよ。今までもそうだったし急に変わることはそうそうないと思うよ。」

「うーん……ほんとにそうならいいんだけど……。」

イヴちゃんが何か不安がっているがもうここまで来てしまった以上何を不安がつてもどうにもならないし進むしか道はないんだから不安になつても仕方がない。そう考えている俺はもう1度3人で鏡の前に立つてみたら何か起こるのか試して見たくなり、2人を呼んで鏡の前に再び戻っていく。

「……えっ?」

「ほー。こう来るのね。」

「なんでお兄さんはそんなに冷静なの?」

「ぎゃーっ!! なっ、なによコレ!」

「あつ壊そうとするなよ! これを壊したら何が起こるか本当にわからんからー!」

「だからなんでそんなにお兄さんは冷静なの?」

イヴちゃんがさつきから俺になにか言ってきているがそんな事は無視をして俺は話を続ける。さつき器物破損は俺たちの何かを持つて賠償させますと書いてあったし出来る限りリスクは避けておきた

いとギャリーに熱弁をした所、何とかわかって貰えたらしくいつの間にか振り上げていた足を下げさせる事に成功する。

「ヒロトシありがと。アンタのおかげで余計な事をせずに済んだわ。」
「いやいや。ギャリーがそうしたくなる気持ちも分からなくはないから。俺がもしこれから同じように暴走しそうになったら止めてくれよ?。」

「そんなのもちろんやるわよ!アタシ達にかかればヒロトシなんてちよちよいのちよいなんだから!ね?イヴ。」

「うん!わたし達に任しといて!」

「こりや心強いな。これなら俺がどうなっても大丈夫そうだ。」

「でもアンタも何も無いように努めなさいよ。アタシは誰かの犠牲に生きていたくはないから!わかった?」

俺の臉がいつもより大きく開くのが自分でも感じられた。それくらいに今のギャリーの言葉には驚いた。そこまで気を使われては俺もその声に答えたいのだが、この先どうなるかは俺にも分からない。だからギャリーには悪いがこう返させて頂く事にする。

「ああ、善処するよ。」

遠回り

ギャリーは俺の返答にあまりいい顔はしなかったものの俺の発言から何かを感じたのかそれ以上俺に詰め寄る様な事はしてこなかった。それはきつとギャリーも今後何かあつた時には俺にするなど言っているような無茶をするかもしれない事を考えてのことなのかもしれないがそこはギャリーのみぞ知ることなのだろう。そんな事を考えながら俺は生首のマネキンが動いて再び通れるようになった扉の前の様子を少し開けて確認する。

「うーん……何か襲ってくる絵画が増えたっぽいな……。引きずる音がさつきギャリーが囿をしている時よりも増えている気がする。」

「えっそれは面倒な事になったわね。……正直こういう場合ってみんなバラバラに行動した方が案外安全だったりする時もあったりするんだけど……。今回は固まって動きましようか。」

「え？一人一人で動いた方が安全なんですよ？じゃあみんなバラバラで動こうよ。」

「やっぱりどう動くかって時と場合によるのよ。これがもし10人以上とかの大人数だった場合はツーマンセルやスリーマンセルで行動した方が圧倒的に安全かつ効率的に行動できるんだけどアタシ達は3人。少人数なんだからわざわざ別れて行動しなくても大丈夫なのよ。」

「ふーん。なんだかよく分からないけどわたし達が一緒に動いても大丈夫って事はわかった！」

「……まあその認識でいいわよ。間違っってはな事だしね。」

ギャリーがちよつと落ち込んだ風にそう返答するとそれを知って知らずかイヴちゃんは嬉しそうに外の様子を確認している。その姿を見ていると、せつかく敵が増えたとかわかった時に自分の中で引き締めた緊張感がゆつくりと解かれていくのが自分で感じとれた為俺は早々にこの部屋を出る事を決意する。

「じゃあ早速外に出よう。ここにいても何も始まらないし前にアイツらはいてそこから大きく動かないっぽいからね。」

「そしたらここを出てどこに向かうのかしら？何か当てはある？」

「ないからまたこの部屋歩き回る。」

「ええ!?!お兄さんそれは危険なんじゃないの？」

「でもまあそうするしかないじゃん？さっき開いてなかった扉が開いてたらラッキーだけど音が無かったから多分開いてないだろうし今まで入った部屋は隅まで見尽くしたし。」

「まあ確かにそうねえ……。そう言われるとヒロトシの言う通りに虱潰しに探すしかアタシ達には残されてないわね。」

「だろ？じゃあそんな感じでよろしく。」

俺はそこまで言うとは扉をゆっくりと開け放ってアイツらのいる部屋を肩で風を切りながら進んでいく。その後ろから怪訝な表情を隠さないまま2人が着いてくるがそんな事など俺にはお構い無しに先導して歩いていく。別に隠し事をしてる訳では無いが強引に話を終わらせてしまったせいか何となく顔が合わせづらい状況に陥ってしまった気がする。

まずこの部屋を調べてみようという事でアイツらの居ない方へ居ない方へと歩いていくと、何も見つからないまま半分程を確認し終わってしまった。引きずる音が聞こえる位置もずっと同じ方向からなのでアイツらの位置もさほど変わってないのだろう。しかしあと確認していないところという赤い服の女のいる方向しかないのだから困ったものだ。

「……ねえヒロトシ。今から行くこうとしてる方からアイツらのいる音が聞こえるけどここからどうすんのよ。アタシがまた囿になろうかしら？」

「うーん俺が言ってもいいんだけど、というか俺が行きたいんだけどどうせダメって言うんだろ？じゃあギヤリーに行ってもらうしかな

「いんじやないか？」

「わたしが行っても良いんだけど……2人的にそれはダメなんだよね？ だったらじゃんけんで決めちゃっていいんじゃない？ わたし的には2人とも無理はして欲しくないから行かないでって言いたいけど……それは無理なんでしょ？」

「いや無理じゃないけど……安全マージンを取るなら欲しいかなってところだね。あまり危険な橋を渡りたくないしアイツくらいなら囮役もそんなに危険じゃないからね。」

「……じゃあ3人で行こつ！ 赤信号みんなで渡れば怖くないの精神で！」

イヴちゃんはそう言うのと俺達の腕を掴んでニコニコしながら進み出す。その笑顔に絆された俺達はこれから起こり得る可能性を何も考慮せずイヴちゃんについて行った。その事が俺の中で明るみになるのはもう少し後の事だった。

囿

俺達は少し進んだところでなにやら緑色のものがズルズルと引きずる様な音を出しながら動いているのが確認できる。恐らく赤い服の女系列なんだろうが、さつきギャリーと追いかけてここを繰り広げた赤いヤツよりも動きが速い気がする。赤い方が速いのではなかったのかとロリコン疑惑のある某大佐に聞きたい所であるが、きつと答えてくれるのはさん付けされているギャグ漫画の方の大佐か、または宇宙からやってきた某オタクガエルくらいだろう。

そんなくだらない事を考えている間にも緑色のそいつは何かを探しているのかえっちらおっちらとその場をぐるぐる忙しなく動き回っている。となるとあいつはあそこら辺に何かを落としたのか、それともなにか探している振りをして俺達を陽動しようとしているのか。どちらにしても空いてなかった扉は変わらず閉まっていたし、あいつのいる所になにか落ちていないか確認をしない事にはこの部屋を組まなく探索した事にはならないだろう。こんなに何度もひとつの部屋をぐるぐる回るとはまだ思ってたから少し気疲れのような感覚があるがそんな物は気にせず ゆっくりと近づいていく。

「……あつあそこでなにかキラって光ったよ！」

「了解。じゃあそれがなにか確認して必要そうだったら頑張って取ろうか。」

「囿はアタシに任せてアンタ達が落ちて見ものの確認と必要ならば回収をよろしくね！じゃっ！」

「あつー！ちよつと待っ……一人で突っ走りすぎんなー！イヴちゃん、後で俺に行ってくれた事ギャリーにも言っつてやっつて？あいつも俺に似たところがあるっばいからさ。」

俺がそう言うといヴちゃんはその可愛らしい顔をほころばせて大きく頷く。しかしやはり囿がいるのは探索がしやすくなるし俺とギャリーのどちらかを囿にして探索するのはやはり有効な手だとい

う事を再確認して俺はギャリーと交互に囿になる事を視野に入れながら探索を続けていく。

「あつなにか落ちてる。……お兄さん！カギ見つけたよ！」

「イヴちゃんナイスっ！じゃあ近いし小部屋の方から開くか試して見ようか。」

「うん！きつと開いてくれるから早く行こっ！」

イヴちゃんはこちらをニコニコと数秒見つめるとそのまま扉の方へと駆け出していく。その姿を見ながら俺もその後ろ姿を追いかけて歩き始める。

イヴちゃんより少し遅く扉の前へとたどり着いた俺はこちらを少しムツとした表情で見てる彼女に内心慌てながらもそれを表に出さないよう頑張つて表情を作る。しかしなんでまっていたのだろうか。

「イヴちゃん。俺が来る前に鍵を開けて待ってても良かったんだよ？別にすぐく遅くなるわけでもないんだし、それにギャリーが頑張つて追いかけてっこしてるんだしさ。」

「わたし一人でなにかするのってどんな事でも寂しいんだもん。それだったらどれだけ時間がかかっても誰かを待ちたいなって思ってるよ。」

「そっか……じゃあ仕方ないね。よし、それじゃあ早速鍵が使えるか試してみようか。」

「任せて！」

イヴちゃんはそう言うはずと握っていたであろう鍵を持ち直してノブ上の鍵穴へとゆっくりと入れて捻る。するとカシャンと音が聞こえてきたので扉を開けてみるとキィキィと音を立てながらも開いてくれた。

をギャリーに伝えなければ。

「ギャリー！ノート横の扉が開いたからこっちに来て！」

「わっ。……もくお兄さんったら大声出すなら先に言つてよね！びっくりしちゃうじゃん！」

「あつごめん。さつきもやった事だから大丈夫だと思つてたよ。」

「いいよ許してあげる！」

「ありがとうね。」

その一言で俺達の間から会話がなくなつてしまつたけれど、その時俺達の間で流れていた空気感は別に悪いものではなかつた事はここに残しておこう。

籠城

いくら緑のアイツが赤いやつよりも速いとはいえ逃げ切れない程速い訳でなく、成人男性の歩幅ならば早歩き程度で振り切れる速さである為イヴちゃんなら兎も角としてギヤリーならば余裕で振り切れるだろう。寧ろこれでダメージを食らって戻って来たのなら少しギヤリーを^で揶揄^ぶう事にしよう。そんなことを考えながら待っている。とギヤリーがしつかりと触れられないくらいの距離をとりながら危なげなくこちらに近づいてきているのが確認でき、揶揄えなさそうな事に少しだけ残念に思いながらも手を挙げてこちらに誘導をする。

「ふう……アイツはやつぱりさつき赤い服の女よりも速いわね。引き付けてすぐ位に2, 3回危なかった時があったわ。相手の実力を見ずに判断するのはやっぱり良くないわね。」

「いやいやそんな余裕ぶちかます場面じゃないでしょうよ。」

「ギヤリー！次こんな事したら怒るからね！すつごく怒るからね！」

「わかったわよ。次からはちゃんと2人に相談してから行動する事にするわ。」

「ああ、そうしてくれると助かるよ。それに俺も囧とか力仕事は手伝えるだろうからそういう所も協力し合おうぜ。」

「今までも十分に助けて貰ってたんだけどねえ……。まあその時は頼りにさせてもらおうわね。」

部屋へと入っていきながらそんな会話をしているとなにやらイヴちゃんが息を飲むのが視界に入る。一体彼女は何を見てそんな反応をしたのか気になり視線の先を追ってみるとそこには誰だかわからない男女が並んで立っている絵画が飾ってある。考えるにあの二人がイヴちゃんのご両親の可能性が高いのだろう事が見てとれる。

「どうしたのイヴ？」

「この絵、わたしのパパとママが描かれてる……。」

「え!?!この絵の人イヴのパパとママなの?へえ……確かにイヴに似てるかも。」

「確かに似てるよな。男の人の目元とかイヴちゃんそっくりじゃん。」
「でもなんでこんな所にそんな絵があるのかしら?」

「パパもママも一緒に美術館に来ただけど……こんな絵どこにも飾ってなかった。それにお家でも見た事ない……。」

そう言うイヴちゃんは何やら悲しげな顔を少しだけ伏せている。もしかしたらイヴちゃんは自分の両親がこの世界で何かあったのでは無いかと心配しているのではないか。俺にはそんな風に酷く心配している様子に見える。そんな心配が心から溢れてしまったのか小さな声で「パパとママはどこにいるの?」とぼろりと零す。俺はそれに対する答えを何も持つてはいなかった。

「……ごめんなさい。それはちよつとアタシ達には分からないわ。でも大丈夫よ!きつとどこかにいるって!」

「うん……。そうだよね……。」

「イヴちゃんはこのソファで休んでて。俺とギャリーはこの部屋の探索するからさ。」

「うん……。そうするね。」

イヴちゃんが背もたれにもたれ掛かる事が出来なさそうなんとも座りづらいソファに腰掛けるのを見届けると、俺達は部屋の中を探索し始める。しかしイーゼルに置かれたキャンバス1つ以外に特にめぼしいものは見当たらなかった。

それにキャンバスに書かれている文章も

「疲れたのならゆっくりお休み?」

もう苦しむこともなくなるから」

となんとも不吉な文章になっていてなんとも嫌になる。とりあえず外に出て何か変わった所があるのか確認する為に2人に声をかけて外に出ようとする。しかし鍵の閉めていない扉は何故だか開く事

はなかった。

「あれ……。ギャリー、イヴちゃん。どっちかこの鍵閉めた？」

「えっ嘘でしょ？ 鍵は開けっ放しの筈だけど……。」

「わたしも閉めてないよ。」

そんな話をしていると扉の奥から壁や扉を叩くような音がひっきりなしに聞こえてくる。

「な、何この音……。外から？」

「扉も開かないし恐らく扉の前になんか居るな……。2人ともいつどこから何が来るかわからないから警戒して。」

「わかった……。」

「アタシ本棚動かして来るわ。ガラスを割って入ってこられたらたまらないもの。」

「任せた。俺は扉が破られないか見ておくよ。イヴちゃんは部屋の真ん中で音が聞こえる方向を教えて！」

「わ、わかった！」

俺達はこの窮地を無事に脱することは出来るのだろうか。こんな状況に身を置いた俺はそんな事などわかる余地すらないのだった。

行くも地獄止まるも地獄

取り敢えず扉を背中で抑えながら部屋の状況を確認する。イヴちゃんは俺達の伝えた通りに部屋中をキョロキョロと見渡しながら音の出処を確認していて、ギャリーは3段ある本棚を動かしてどうにかこうにか窓ガラスを塞ごうとしているのが確認できる。しかし、3段のうち上2つが空のせいなのか、慌てて棚の上部を押してしまい倒れてしまっている。これでは窓ガラスを塞ぐ事は出来ておらず、もしアイツらが台に乗ってガラスを割ってきたら先程の薔薇を奪還した時のようにこちらに入ってくるのだろう。

なんて考えながら視線を本棚から窓ガラスの方へ向けると、そこには既にこちらに来ようとガラスに手をかけて割らんとするアイツらの姿が映っていた。

「ギャリー！逃げてえ！」

「えっ!?急にどうしたのよイヴ！何がどうしたって言うの!?」

「窓ガラスの前にアイツらがいる！ガラスを割るつもりだぞ！そこにいたら怪我をするから直ぐに離れろ！」

「はあ!?それを早く言いなさいよおおおおお!!」

ギャリーはそう言うが早いか全力で後ずさりをしてその場から離れると、丁度そのタイミングでアイツらはガラスを割ってこの部屋へと侵入してきた。運がいいのか悪いのかギャリーの目の前で割られたガラスはついぞその破片が俺達の元へと届くことは無く、怪我をする事は無かった。

しかしこの狭い部屋にアイツらが入ってきたという事は既にここはセーフゾーンではなくなったという事で。早急にこの部屋から脱出を試みたいところではあるのだが、なんともいやらしい事に未だに扉の前にはアイツらが居る気配はするしアイツらの入ってきた窓もまだガラス片が窓枠に残っている事から、応急手当できるものが無い現状危険すぎる。

そんな打つ手無し of 所謂 “詰み状態” に陥った俺達だったが、次の

瞬間今までとは比べ物にならない程に大きな音が壁から聞こえてきた。何事かとそちらを見るとアイツらの1体が壁に大穴を開けて部屋へと入って来るでは無いか。

「はあ!? そんなんありかよ!」

「ヒロトシ! こっからどうするのよ!」

「私はあの穴位ならそんな苦もなく通れるよ!」

「ナイスイヴちゃん! それで行こう! ギャリー! 一番槍行ってこおい!」

「アタシっ!? あくもう! 仕方ないわねえ!」

ギャリーは腹を括つたのか目の前の追っ手をすりと避けて穴へと一直線で進む。しかしいくら大きい穴とはいえ成人済みの男性が難なく通れるほど大きい訳もなく、体を丸めてよちよちと歩く姿を見ているとこんな状況なのも相まって遅いと叫んでしまいそうになる。しかしいくらいつもより小さい歩幅とはいえ2歩3歩も歩けば壁なんてものは通り過ぎる訳で、すつくと立ち上がるとギャリーは外の様子を一言でわかりやすく伝えてくる。

「ぎゃーっ! 外も阿鼻叫喚じゃない!」

「イヴちゃん! ギャリーの元に向かって! 俺も直ぐに向かうから!」

「わかった! お兄さんも早く来てね!」

「了解!」

イヴちゃんが穴の方へと向かうのを感じた俺はアイツら2体を相取りながらできる限り彼女が無事壁の向こうまで行けたのかチラチラと確認する。

少ししてイヴちゃんが無事に部屋から出られた事を確認した俺はその場で2人に対して大声で呼びかける。

「2人とも穴の前から離れといて! 今からそっちに向かう!」

「わかったわ！怪我はしないようにしなさいよ！」

「そんなの分かってる！いいからどいてくれ！」

「一体何する気なのよ！危ない事はしないで頂戴！」

「あーもう！いいから早く！」

漸くギャリーが穴の前からどいてくれた事を確認した俺は穴の方へと全力疾走をする。壁の残骸が逃走の邪魔をしてくるが、そんな事は気にしないままに俺はスライディングで穴へと突入する。その際に砂埃の様な細かい粒子がその場に舞い上がり、足の先にあつた瓦礫が速度をがくんと落としてくるがそんな事など気にしてはいられない。兎に角穴を通る為だけを考えたスライディングは何とか成功し、大きな怪我もなしのままに俺も部屋から出る事ができた。

「ふう……何とかなったな。……うわっ！目の前の扉2つとも塞がれてんじゃん！」

「そうなのよ！しかも動いてる作品の量も今までと比にならないくらい多い感じがするのよ！」

「確かに歩く音とか引きずる音が半端なく聞こえてくるな……。これ逃げ切れる？なんか無理な気がしてきた。」

「アンタが諦めないで頂戴！アタシ達のリーダーでしょ！」

「待て！いつから俺がリーダーになった！俺はそんなものになった覚えはない！」

「2人とも！そんなことより早く逃げようよ！わたしは作品に捕まりたくないよっ……！」

「……っ！よし！じゃあとりあえず固まって行動するぞ！それで全ての扉を確認！異論は!？」

「なし！」

「よし！じゃあ行動開始！」

その掛け声とともに俺達はセーフゾーンを探しに今まで以上に危険地帯となったこの部屋を探索する事になった。依然続くピンチか

ら無事に逃げ切れるのだろうか。

逃走成功

「でも行動開始って言ったってこれからどうするのよ。まさかこんな囲まれてる状況でのんびり作戦会議なんで出来ないわよ?」

行動開始と言ったが深く考えもせず急いでここまで動いたせいで特に何も決まってる事がない事に不安があるのか考える時間が欲しいと遠回しに伝えてくる。しかしそれに対する俺からの答えは生憎とひとつしか持ち合わせていない。

「そんなん決まってるでしょ! 出口を探して驀進するのみ!」

「驀進って……! アンタまた無茶な事を言い出すわね! でもそれくらいしか突破する道はないか……!」

「爆進? お兄さん達がそんなに早いスピードで走ったらわたしが追いつけないかも……。」

「大丈夫! その場合は殿が担いで出口に向かうから! じゃあ行くよ!」

俺はそう言っただけで自分の思うままに歩き出す。そのまますぐに後ろを振り向き、後ろから2人が着いてきている事を確認出来た俺は少しずつ歩くスピードを早めていき前やら横やらから襲ってくるアイツらを避けつつ出口を探す為に走り出す。しかし今まで通った事のある扉は全てが既に封鎖されていてどこに行けばいいのか適当に走りながら迷っていると、視界の端に扉が少し空いた状態でそこにあるのがちらりと写る。

「あそこだ! もうひと踏ん張りだから頑張っただけ走れえ!」

俺はその言葉と共に扉に向かって一直線に走り抜ける。正直体力的に結構限界が来ていたのであまりスピード自体は出ていなかったと思うが、それでも扉までは直ぐに着いた事ははつきりと覚えてい

る。そうして扉を駆け抜けた俺は直ぐにUターンをして扉を閉める準備にかかる。と言っても殿のギャリーが通ったのを確認次第扉を勢いよく押して閉めるだけだが。

「はあ……はあ……こ、ここまで来れば大丈夫でしょ……。ザマあみなさい！」

「頭空っぽにして逃げてきたけど何とかな……。でももうこんな逃げ方は当分はしたくねえわ……。」

「アタシも今はもう走りたくないわ。」

そんな会話をしつつも体力の回復に務めるが、何やら先程からイヴちゃんの声が聞こえてこない。少し荒い息遣いはギャリーと2人分聞こえてくるのだがなにやら喋ろうとする感じが全くしない。そんなことを疑問に思っているとギャリーもそれに気づいたのかイヴちゃんの方へと話しかけ始める。

「さてと、それじゃあ先に……ってイヴ？どうしたの？大丈夫？」

「イヴちゃん無理しなくていいからね。もう少しこころ辺で休もうか。」

俺たちがそう声をかけるもイヴちゃんから聞こえるのは少し荒い呼吸音だけで返事は全く返ってこない。一体何が起きているのかよく分からないので兎に角大丈夫かどうか確認する為にイヴちゃんの肩を優しく掴むとその衝撃でイヴちゃんが膝から崩れる。崩れるのを慌てて自分の方へと引つ張って抱えると、彼女の荒い呼吸の正体が呻き声だという事がわかった。

「イ、イヴ!? ちょっとしっかり……ヒロトシ! どこか部屋に入るわよ! こんな所でこの子を休ませるなんて言語道断よ!」

「お、おう! とりあえず先に進もうか! 部屋があつたら直ぐに入るとして事で!」

そんな事当たり前でしょと言わんばかりにこちらを睨んでくるギヤリーは置いておいて俺達はいち早くイヴちゃんをゆっくりとできる所で休ませる為に先に進む事に。魔されているイヴちゃんを見て少し悲しい気持ちになりつつもそれを考えないようにイヴちゃんを抱えて俺たちはまだ見ぬ部屋に向けて歩き出した。

再びの邂逅

「すぐ近くに部屋があつて助かったわね……。ヒロトシは大丈夫？ 疲れてないかしら？」

あの後真つ直ぐ行つて突き当たりに部屋があつたので急いでそこに入つて一息ついた俺達はイヴちゃんを床に寝かせて起きるまでのんびりする事に。

しかし疲れからか気絶してしまったイヴちゃんは現在進行形で魘されており、だからといって起こすのも何かと忍びない気持ちでいっぱいになっていると隣から不意に俺自身の安否をにきする声がかける。

「ああ。俺は何とか大丈夫。ギャリーこそ殿だったけど大丈夫だった？」

「アタシはアンタの開いてくれた道を通つただけなもの。なんともないわ。それにしても……。イヴ、魘されてるわね。」

「現実なら或いは何とかしてあげられたのかもしれないけど……。夢の中だとどうしようもないな。」

俺達はイヴちゃんの顔を見ながら苦悶する。こんなに小さな子の為に俺がしてあげられる事の少なさに自分自身が嫌になる。

「……俺少し疲れたから仮眠取るわ。何かあつたら起こしてくれ。」

「ええわかったわ。アンタもここまでよく頑張つたわね。あたしが見張つておくからゆつくり休みなさい。」

「……サンキュー。恩に着るわ。」

俺はそう言うといヴちゃんのすぐ近くに腰を下ろし壁に寄りかかる。そして目を閉じるその直前に少しでもイヴちゃんの助けになるようにと念じながら俺は彼女の手を優しく握つた。

「やあ、さつきぶりだね。元気にしてたかい？」

目を開くとそこには何やら見覚えのある初老の男性がこちらを見つめて優しく微笑んでいる。格好も前と変わらず厚手のエプロン姿ではあったが、今回は椅子に座ってキャンバスと相對して何かを描いているようだった。何を描いているのかは見えなかつたがそれを知ろうが知るまいが何が変わることは無いだろうと俺はそこから意識を外す。

「まさか美術館ここで意識を失うと俺は毎回爺さんと会わにやならんのか。」
「それはどうだろう。流石の私にもそこは判りかねるよ。」

「ふーん。爺さんが出るかどうか決めてるわけじゃないんだな。」

「そりやあそうさ。私だつてできる事ならずつとアトリエで絵を描き続けたいんだからね。だがこの世界は走破させてくれないのさ。」

「……爺さんも大変だな。こんな男の夢に出ないといけないなんてさ。」

「それでも無いよ？君みたいな若者が今どんな会話をするのか。しゃべり方はどんな感じなのか。流行っている言葉はどんなものなのか。全てアートの通ずるものがあるからね。」

「俺にはよくわからないな。俺にアーティストは向いてないかもしれない。」

「はっはっは！そう簡単に諦めたら出来るものも出来なくなるよ？これ幸いにも君はまだ若い。色んなことにどんどんチャレンジしてみるといい。」

まるで親戚のおじさんのような事を言う目の前の爺さんは俺の事を見ながらからからと笑う。その姿に少しイラついた俺は返事もせずそのままその場にドカッと座り込む。

「ああそうだ。君に伝えていない事があつたから今のうちに伝えておこう。君をあの美術館に招待したのは——私だ。」

爺さんはそう言うと言程の豪快な笑いからアルカイツクスマイルのような爽やかな笑みへと表情が変化する。

——どうやらこの空間にいと感情の制御が一筋縄ではいかなくなるらしい。俺はその言葉を聞いた瞬間に爺さんの胸ぐらを掴み、思いつき睨みつける。

「おい、それは一体どういう事だクソジジイ。何であんな化け物ばかりが跋扈してる所に俺を呼びやがった。答えろ！」

「まあまあそう熱くなりなさんな。これは君が望んだ事に関係してるんだから私だけが悪い訳じゃないんだよ？」

「は？俺がこんな事望む訳ないだろうが。嘘もいい加減にしろよ。」

「そりや望んだ事なんて覚えてる訳ないよ。だって君、記憶が無くなつてるところがあるでしょ？その時のことだもの。」

「——なんでそう思うんだよ。俺の記憶は十全にしっかりとあるぞ？」

「嘘は行けないよ。君の夢……とか頭の中にいるんだから君の記憶くらいは見させて貰ってるさ。こういう面白そうな事はなかなか経験出来ないからね。」

なんともまあ抜け目のないジジイだ事で、俺の記憶はどこまでかは知らないが見られてしまったらしい。まあ対して何があつた訳でもない極々平凡な俺の人生なんて見たところで面白いものなどあまり無かつただろうけども。

「まあそんな事より君の記憶についてだ。と言ってもその記憶も恐らくはもうすぐ思い出せるだろう。その時まで待っていておくれ。」

「何が何だかよく分からないが、今回だけは爺さんの言う事を信じてやる。」

「ああそれでいい。……そろそろ時間のようだしもしまた会えたらよろしく頼むよ。君の旅路に幸多からん事を。」

俺はその言葉を聴きながら急激な眠気に抗う事は出来ずに爺さんに一言言い残すことも出来ないままこの夢の世界を去る。俺のまぶたが閉じる直前に何やら爺さんの口元が動いていたがなんて言っていたのかは全く聞こえなかった。

「さて……彼の仕込みも終わったし、あとは君達の選択にかかっているよ。どうか悔いのないように頑張ってくれたまえ。」

起床

今まで寝ていた頭がどんどん覚醒していき、内へと向いていた意識は徐々に体の外へと向いていく。何やら先程まで誰かと話していた気がするが、きつと何か変な夢でも見ていたのだろうか。

そんな事を感じながら覚えていない夢のせいで少し疲れた頭を動かして現状把握をしようと目を開ける。

なんだかんだそんなに長い時間は寝ていないらしく、イヴちゃんはまだ起きてきていなかった。寝る前に握った手も解かれていない事に少しだけ喜びを感じていると、イヴちゃんが少しだけ身動きをす

る。
起こしてしまつたかと一瞬体が強ばるが、イヴちゃんはそのまま瞼を閉じたまま強く俺の手を握ってくる。

「あら、随分とラブラブじゃない。アタシはお邪魔かしら？」

「冗談も程々にしとけて。きつとギャリーが握ってたら俺の立ち位置はギャリーになってるはずだから。それにイヴちゃんに今必要なのは休息だろ？」

「……そうね。この子、少し頑張りすぎなのよね。アタシ達もつと頼りになれば変わるのかしら？」

「いや、それでもイヴちゃんは頼られたいって思うんじゃないかな？……俺が寝てからどれくらい経った？」

「確かにイヴならそう考えるかもしれないわね。後アンタが寝てから大体15分くらいかしら。もう少し寝ても良かったのよ？」

「まあ俺はこれくらいで大丈夫だから。なんならギャリーも寝るか？俺はもう起きるからさ。」

「ん〜……アタシは大丈夫よ。アンタ達と比べて全然動き回ってないもの。」

これがギャリーからの気遣いからの発言なのかそれとも本当にあまり疲れていないのか実際のところはわからなかったが、本人が大大

夫と言っているのであまり強要するのも良くないと思つて俺は話題を変えることにした。

「そっか。……それにしてもイヴちゃんが魘されてなくて良かった。寝る前は酷かったから」

「あら、ヒロトシは気づいてなかったの？アンタが手を握つてからイヴは魘されずに気持ちよさそうに寝られるようになったのよ。」

「マジか……。じゃああのまま魘されてたらもつと早く起きてたかも知れないな。」

「それはそうかも。でもそんな目覚めよりもぐっすり寝て魘されずに起きる方が何倍もマシでしょ。手を握つてあげたヒロトシの功績ね。」

俺はそんな大層な事をしたつもりはさらさらないのでなんだか小っ恥ずかしいが、実際に俺のした事で人の為になったのなら普段しないような事をした甲斐もあつたつてもんだ。

そんな事をギャリーと話していると、流星にうるさかったのかイヴちゃんが目をゆっくりと開けるのが視界に入る。

「あら、少しうるさかったかしら？おはよ、イヴ。気分はどう？」

「こわい夢を見たけど途中で2人が出てきてこわくなくなったよ。」

「あらあら。やっぱりヒロトシのお陰でイヴは長く魘されずに済んだ感じね〜これ。やるじゃない〜」

ギャリーは俺の背中……はまだ壁にもたれたままだったので肩をバシバシと叩きながらニヤニヤとした表情も隠さずに俺にちよっかいをかけてくる。そんな中イヴちゃんは繋がれた俺の右手を見ながらにぎにぎとしてくる為、利き手の塞がれた俺はギャリーを止める事も出来ずにいるしかない。

「さて、じゃあイヴも起きた事だしそろそろ出発する？アタシはもう

「行けるわよ?。」

「いや、俺もイヴちゃんも起きたばかりだからもう少しだけのおんびりしようか。ここで無理してまた倒れても困るからね。」

「確かにそうね。イヴはそれでいいかしら? イヴがすぐにも行きたくないなんて言うならアタシ達はそれに合わせるわ。」

「え? うくん... わたしも少しのおんびりしたいかな。あ、あそこにノートもあるし書きたい!。」

「じゃあゆつくり書いてきな。俺達は適当に本でも読んでるよ。」

「あ、イヴ! コートに飴があつたからこれあげるわ! 後でゆつくり食べてちょうだい!。」

「ありがとうギャリー! 後で食べるね!。」

そんなこんなで皆の無事を確認出来た所で俺達はお互いにしてい事をし始める。その益体もないような事が幸せに感じるのが当たり前ではないという事に気づけたのはなんだかとてもいい事のような気がするのは何でなのかはよく分からないままに俺は本棚の方へとゆつくりと歩き出す。

探索再開

2人がノートに何かを書きながら話しているのを片目に俺は本棚へと手を伸ばす。これから生きていく上で特に役に立たなさそうな本ばかりだが、まあ情操教育を自分に施すのも悪くは無いだろう。それに美術なんていう普段触れないような部門に触れるまたとない機会なのだから食わず嫌いを起こすのは勿体ない気がする。

俺の読む本が凡そ3冊と半分を過ぎた頃、お喋りに満足したのか2人が俺の元へと歩いてきた。

「2人とも満足した？」

「うん！ギャリーといっぱい話したよ！」

「イヴったら何も無いとこんなになんて元気なのね。アタシびつくりしちゃったわ。」

「でね！ギャリーとここから出たら美味しいマカロンのあるお店に行こうって約束したんだ！」

「おお、良かったじゃんか。その時はめいっぱい楽しんできな？」

「お兄さんも一緒に行こうよ！3人一緒の方が絶対に楽しいよ！」

「ああー……うん。そうだね。」

にこやかにイヴちゃんはそう言っただけのけるが恐らく俺とイヴちゃん達2人だとまず住んでいる国が違うだろうと思っただけの俺は曖昧な返事しか返せなかった。そんな俺の煮え切らない返事を聞いて察したのかギャリーが声高に俺に声をかけてきた。

「ヒロトシー！そろそろこの部屋から出るつもりなのかしら？」

「あ、ああ。じゃあそろそろ行こうか。イヴちゃんは準備できてる？」

「うん！わたしはいつでも行けるよ！」

「それじゃあ出発しようか。多分外に追手は来てないだろうけど最低限警戒をして行こう。」

「わかったわ。並びはさつきと同じで行くのかしら？」

「そのつもり。今更変えてもなんか違和感があるから俺は先頭がいいなって。」

「なんか年下の子に率いてもらってる感じがして申し訳ないんだけど……まあアンタがしたいって言うなら任せるわ。」

「ありがとう。じゃあ早速廊下に出ようか。」

俺達が廊下に出ると先程部屋に入った時には気づかなかった階段が身の前に現れる。辺りを見渡しても来た道と目の前の階段以外に俺達が行ける所が無い為取り敢えず階段を下る事に。

階段を下りきると、すぐ横に何やら内に入れる通路がある事と突き当たりには曲がれそうな空間があること、それに通路の壁際になにやら柵が並んでいるのが見えた為この部屋も何だか面倒な事がありそうだなと少し気が重くなりつつも警戒は解かないように気をつけて探索を続ける。

とにかく行ける所には片っ端から行こうの精神でとりあえず手前の通路に入ろうと歩き出すとその通路の奥には扉が1つぽつんと立っている。

「なんかこの扉違和感があるなあ……。案の定開かないし。」

「…………このドアなんか穴空いてない？」

「あらホント。ちよつと覗いてみようかしら。」

「なら私が覗きたい！この位の高さならわたしでも覗けそうだもん！」

「どうぞどうぞ。何が見えたかは教えてね。」

俺の言葉に大きく頷いたイヴちゃんは扉に空いた穴を覗き込む。しかしそんな彼女のリアクションはなんだかパツとしないものであり、先程までの明るい様子に陰りが見えるものであった。

「イヴちゃんどうした？もしかしてあいつらでもいた？」

「ううん。なんにも見えなかったの。なんかワクワクして多分ガツカリしちゃった。」

「何も見えなかったか。じゃあもしかしたら何かが扉の前にあるのかもね。」

「なんかつままない！なんか面白い事起きないかなあ！」

そんな事を言いながら通路に戻って進路を進んでいくと、すぐに柵の置いてある所の前へと着く。

そこはどうか迷路となっているようだが、無個性が3体程中に立っていて迷路内の壁にボタンの描かれた絵画がある事がおそらくあの中から正解のボタンを押せって言うことなのだろうと考えていたが外れた場合何が起るのか分からないのと迷路となっている道が狭いから全員で入ったらまあ動きづらいただろうという事で1人で突入した方がいいと推測する。

しかし誰がこの迷路に突入するのか。それを決めるのは中々に骨が折れそうだと思いつつながら俺は迷路を眺めるのであった。

じやんけん

「……アンタ達がなんか言いたそうな雰囲気を出してるから先手打たせてもらうけど。ここはちやつちやと決める為にジャンケンで勝負を決めるなんてどうかしら?」

「それ乗った。勝っても負けても恨みっこなしの1番勝負ってやつだな。」

「わたしだって2人に負けないんだからね!」

俺達は顔を見合わせて尋常ではない雰囲気をつつかり合わせながら、誰がどう見てもたかだかジャンケンをする様な雰囲気には感じられないような剣呑な空気を辺りに纏わせて各々の準備を進める。

「アンタ達準備はいいかしら?」

「俺は大丈夫。てかたかだかジャンケンに準備なんて要らんだろ。」

「お兄さん、そんなこと言いながらやる気マンマンじゃん! あ、わたしも大丈夫だよ!」

「2人とも大丈夫ならすぐに終わらせるわよ! 最初はグー! ジャンケンポン!」

ギヤリーの掛け声と共に俺達は一斉に手を出す。結果としてはギヤリーの一人勝ちで第一回じゃんけん大会は幕を閉じる運びとなった。イヴちゃんはこの結果に満足こそしていなかったが自分もしっかりと承諾してしまった以上文句が言えないのだろう。しかしそういうところがしっかりとしている分、子供故の感情の起伏を制御しきれていないのか、わたし不機嫌ですオーラがとてつもなく溢れ出している。

しかしそれに流されてイヴちゃんも中に突入させるなんてしてしまっただ

らそれこそイヴちゃんのご両親に申し訳が立たない。なんせただでさえ何処の馬の骨とも分からないような男2人と行動を共にして

いるというだけでもあれなのに、その上でどんな要因であれ自分の愛娘に傷をつけられたとあつては心中穏やかではないだろう。

それにこの迷路だっていつどういいう状況になるかも分からないのだから花卉の枚数の多い俺達の方が攻略するという面でもイヴちゃんは待機していた方が安心できるというものだろう。

「じゃあギャラリー行つてら。帰ってくる時は出口前の本棚も一緒に調べといて。」

「わたしも迷路行きたかった……。あのボタン押したかった……。」

「アンタ達言いたい放題ね……。まあいいわ。じゃあ行つてくるから大人しく待つてなさいよ?。」

「はい。お留守番はわたしに任せて。わたしよくやつてるから得意だよ。」

イヴちゃんの闇の部分に触れてしまった感が否めないがあまり深くは触れない事にした。

そうして迷路に入っていくギャラリーを見送っていると、途中で何故だか俺の服の裾をちよんちよんと引つ張るイヴちゃんに気づく。

「イヴちゃんどうした?何か気になる事でもあつた?。」

「気づいた事じゃないんだけど、なんだかこの美術館にいるとわたしの怒りの気持ち溢れちゃうの。それがなんだか怖くって……。」

「え……さっきのアレはいつもはならないの?。」

「うん。いつもならじゃんけんて負けたら『負けたならしょうがないよね』って気持ちで終わるのにさっきはそういう気持ちにならなかったの。『なんで?どうしてダメなの?私も絶対に行きたい!』って気持ちがあふれてきて……。」

「……イヴちゃんは本当にいい子だね。俺は昔負けたら何度もゴネて俺が勝つまでやって貰ってたよ。割りとどんな事でもね。でもイヴちゃんは負けを受け止める事が出来る、充分大人だよ。」

「でもさっきはおさえられなかったよ?これじゃあお子さまだよね

「……？」

「さっきのはきつと我儘を言える相手だったからじゃないかな。何歳になっても子供のような人だっているんだ。そんな人と比べたらイヴちゃんは充分大人だよ。」

「ほんと……？」

「本当本当。でも実際問題イヴちゃんはまだ子供だ。まだまだ出来ない事も沢山ある。だから困った時は俺達を頼ってくれていいからね。」

「わかった。」

年齢的にまだ子供と言われた事にムツときたのか少し不貞腐れたようにこちらに返事をする姿を見てなんだかほっこりとした俺はイヴちゃんの頭を優しく撫でる。そうするとイヴちゃんは一瞬驚いた顔を見せるがやはり不貞腐れた顔を崩さないままにそっぽを向いた。

俺の手は払い除けられる事は無かった。

迷路

イヴちゃんの頭を撫でていると、ギャリーの向かった方向からガコンと何かが置かれるような音が聞こえてくる。何事かと思い、まずギャリーに何か起きてはいないかと視線を向けるが特にギャリー本人には何も起きていないようだ。本人も少々驚いた表情を隠せていない。

しかしそんなギャリーのなんとも言えない表情を見ていたら視界の端に違和感を感じるのでそちらを向いていると、ギャリーが入っていった迷路の入口に柵が1つ追加されており俺とイヴちゃんが迷路に入る事はできなくなってしまったのである。

それと同時に迷路の中腹あたりにいた無個性が1体ノロノロと動き始めた。

「ギャリー。無個性が動き始めたから早くボタンを押しに行った方がいいと思うぞ。」

「えっ本当!?……さっきの部屋と比べると随分とゆっくりな無個性ね。でも確かにここに止まってても捕まるだけだしさっさと正解のボタンを押ししてくるわ!」

「ギャリー頑張つて〜!」

「アタシに任せときなさい!こんなギミック程度ミスなしでクリアしてやるわ!」

なんともビッグマウスをつらつらと垂れているギャリーだが、俺にはすぐにギャーギャー騒ぎながら逃げる姿がなぜだか思い浮かんでくる。実際になりかねないその想像が容易に出来てしまう事について苦笑いを浮かべてしまう。しかし、その想像がもし現実のものとなってしまうとしたらと考えるとあまりいい気はしない。

そんな事を考えている内にギャリーは1つ目の赤いボタンの前に着いたらしく、カチツとボタンの大きさの割に随分と小さな音を部屋に響かせる。しかしボタンを押ししても柵のどこかが開くような事は

なく、寧ろ2体目の無個性が動き始めてしまった。

「ギャリー！無個性追加で動き始めたぞ！今まで以上に気をつけろ！」

「なんなのよもう！コイツらどこまでも着いてきてキリがないわね！」

「頑張れ〜！捕まらないで逃げて〜！」

「ま、任せておいてちょうだい！このくらいのピンチが何よ！ピンチって程でもないわ！」

大声で己を奮い立たせながらギャリーは無個性の間をスルスルと抜けていく。その場は何とかなったが後ろからはゾンビのような足取りでギャリーを追いかける無個性が。ゆつくりと着いてくるアイツらからしつかりと距離を取りつつ次の青いボタンの前に到着すると、脇目も振らずそれを押す。

すると柵が1箇所あったものが瞬時になくなり、そこから出る事が可能になった。しかしその開いた所から入ろうとしたが、やはりなにか見えない壁のようなものに阻まれても進むことが出来なくなっている。

出口から見えてすぐ目の前に本棚があり、どんな本がそこに入っているのか確認したかったが迷路に入っていない俺達にはそのような資格はないらしい為、諦めてギャリーに見てもらおう事に。

「あ、ギャリー。その本棚調べて。何か気になる本とかない？」

「一応追いかけてるのになんて事言うの!?アンタ中々に厳しい事言うわね！」

「パラパラっと流し読みでいいからよろしく。」

「ああもうやってやろうじゃない!……って、ここの本棚1つ以外背表紙の文字読めないんだけど!」

ギャリーはグチグチと文句を言いながら本棚へと手を伸ばす。慣

れた手つきでパラパラと読み進めていくギャリーだったが、その表情から察するにあまりいい情報は書いてなさそうであった。

無個性が近づいてきていたのもあって早々に迷路の外に出てくると、先程までなかった柵がギャリーが通り過ぎた途端にガコンと音を立てて道を塞いでしまう。これで入口と出口の両方が閉められて入れない状態になってしまった。

「ギャリーお疲れ様ー！迷路楽しかった？難しかった？」

「全然難しくなかったわ。あれくらいならアタシの頭脳にかかれば余裕よー！」

「ギャリーお疲れ様。本読んでた時渋い顔してたけど何が書いてあった？」

「願いの込められた作品には魂が宿るとかそういうのよ。……アタシここに来る前まではオカルトとかあんまり信じてなかったんだけどここに来てからは信じざるを得ない状況に合わされてばっかでもうなんなのか分からないわ……。」

「まあこの世界は異常だもんな。俺も似たような感じで大変だったよ。」

ギャリーは俺たちと合流を果たし、そのまま先へと進んでいく。後ろから聞こえるカッーンカッーンという音を背にしながら俺達は通路の突き当たりを曲がっていくのであった。

夜桜

突き当たりを曲がるとすぐにまた突き当りが見えるのでこの美術館はコの字型やエの字型の部屋……というか通路が本当に多い事を実感する。

そんな突き当たりの壁には何も描かれていないまっさらな絵が額縁に飾ってある。先程と同じようなものかとよくよく目を凝らして見てみるとただのまっさらな絵画という訳ではなく、何も書かれていないピースをはめて作ったジグソーパズルのようだ。額縁の下には『ミルクパズル』と銘打ってある。

「イヴとヒロトシはミルクパズルってやったことはあるかしら？」

「ミルクパズル？……わたしは知らないなあ。お兄さんは何か知ってる？」

「うーん……俺も聞いた事ないんだよね。何かを知ってそうなギャリー、分かりやすく説明頼む。」

「アンタねえ……アタシから広げた話題とはいえずぐに投げてるんじゃないわよ。……ミルクパズルってのはまあその名の通りミルクのように真っ白なパズルの事よ。絵がついてないから普通のパズルより難しいんですって。」

やれやれと言わんばかりに俺の事をジトーっとした目で見たかと思ったら、すぐにイヴちゃんの方へと視線を向けて話を進める。

ギャリーの話をイヴちゃんは楽しそうに耳を傾けていて、彼女の精神が安定している事に少し安心を覚える。

「ギャリー。ミルクパズルって面白いの？わたしちよつと興味あるかもー！」

「うーん……正直面白くないわよ。だって絵がついてないんだもん。好きな絵がパズルになってこそやりがいがあるってもんよね。」

「確かにそれはあるかも。好きな風景や動物とかが自分の手によつて

完成していくのが楽しい、嬉しいって感じるもんな。」

「あら、ヒロトシも楽しみ方を知ってるのね。正直アンタはこういうチマチマした作業はあまり得意じゃないと思ってたわ。」

「え、そうかなあ？お兄さんは指先を使う作業とか好きそうな気がするけどなあ。」

そんな事をのほほんと話しながら、もう『ミルクパズル』に用がなくなつた為にその場から離れる事に。すると少し歩いたところの壁が引つ込んでいてそこにノートがあつたので、先程の部屋で書けなかつた分をここで書く事にした。

「よっし書き終わった。……2人とも何見てんの？」

「あつヒロトシ！これすつごく綺麗なのよ！あんたも見て見なさいって！」

「お兄さん！このお花はなんて名前か知ってる？わたし見た事ないからわかんないんだ。」

「ん？おお、夜桜なんて風流だねー。これで20歳超えてたら酒を飲むのもオツつてもものなんだろうなあ……。」

2人が見ていた絵画は『月夜に散る夢き想い』という作品で桜舞い散る夜が描かれている……というより額縁の中で桜が舞い散る様子がテレビのように動いて映し出されている。しかしこの作品はやはり作品だからなのか俺の目にはどう足掻いても現実味の帯びていないもののように感じられる。

しかしとても綺麗な事に変わりはなく、例年見なれている桜と見えどこのようなものに見惚れてしまうのはまだ俺の感性が死んでいない事の証拠なのだろう。

「ヨザクラ？このお花はヨザクラって言うの？」

「ああいや、この花……と言うより木自体は桜って種類なんだけどそれを夜見ると夜桜って言うんだ。日本人は桜を見ながら宴会をしたりするんだよ。」

「へえ……。日本人って思ってた以上にパーティ好きなのね。もっと奥ゆかしい人ばっかだと思ってたわ。」

「そりゃ日本人だって楽しい事は好きだからな。2人の考えてる宴会とは別物かもしれないけど案外どんちゃん騒ぎなんだよ。」

「へえ〜！わたしもいつかサクラを見ながらパーティをしてみたいなあ……。お兄さん！ここから出られたらお誘い待ってるね！」

「おおう……。イヴちゃんからの期待が重い……。まあうん、できる限りは頑張るよ。」

「ホント!? やったあ!!」

イヴちゃんが飛び跳ねながら喜んでいるのを見てこれは手を抜けないなあなんて思い、自然と苦笑いを浮かべてしまう。そしてふとギャリーがどう言う反応を示しているのか気になった俺はチラリとギャリーのいる方向を見てみると何故か視線がぶつかってしまった。

不意に目と目が合ってしまったんだか気まずくなつた俺は再び苦笑いを浮かべると、ギャリーは何故だか吹き出していた。

「?ギャリーはなんで笑ってるの?お兄さんなんで分かる?」

「さあ? なにか思い出したとかじゃない?俺にはさっぱりわかんないよ。」

「ふふっ……。!なんでもないわ……。っ!お兄ちゃんは大変ねって思っただけだから……。っ!」

「いやだったら早く笑いをおさめなよ。イヴちゃんが戸惑ってるでしょうが。」

「??」

戸惑うイヴちゃんをよそ目に俺はギャリーを非難する目でにらみつけるが、ギャリー本人には微塵も効いていないように思える。しか

し、ギャリーはそのまま先に進んでしまった為なんとも閉まらない空
気のまま俺達は先に進む事となった。

言い合い

先程の幻想的な絵画から惜しむらくも離れた俺達は先へとその足を進めていく。途中に再びと言うべきか、およそ全身が入るような大きい鏡が壁にかかっていたがパツと見た感じ特に変わった事はなかった為特に何も気にしないままにそのままスルーをする。

少し進んだ所に扉が2つ、向き合っているというには少しズレた場所にある。そのうちの階段の方に戻る扉は特に何も無いのだが逆側の扉には何やら描かいてあり、何かを打ち込むパネルも付随している。絵画の方に注視をしてみるとなんだか見た事のあるような感じのする絵なのだが、この絵がどこに飾ってあってどういう名前なのかわすつかり覚えていない。

少しの間思い出せるかもと絵画の前でウンウンと悩んでいたのだがどうにも思い出すことは出来なかつたので、とりあえず今は諦めてもうひとつの扉の方へと向かう。

もう一つの扉を開くとそこは4畳ほどの広さしかなくとても小さな部屋となっていて、扉を入ったすぐ目の前には無個性が立っていてそのすぐ奥には扉がある。

「何よこの像……一丁前に通路なんか塞いじゃって。」

「ギャリー出番だよ……さっきの迷路で疲れてる？お兄さんでも移動させられると思うけど任せちゃう？」

「お？疲れたんなら変わるけど？ギャリーくんどうするう？」

「いちいちイラつく言い方するわねっ！これくらいアタシー人で大丈夫よ！ふんっ！」

ギャリーはそういうと一人で無個性を端へと押ししていく。しかしこう言う人型のものを移動させるのであれば押し引きで動かすよりも多少重くても持ち上げて動かした方が安定すると思うのだが……まあ俺も煽ってしまった手前本人には言わないでおこう。また煽ってるなんて思われたくないし。

「ふう……よしつ、これでオーケー！これでアタシもまだまだ大丈夫だって分かってくれたかしら!?元気なんて有り余ってるんだから!」
「それはもう充分わかったからそんなに熱くならないでくれ。こっちまで疲れてくる。」

「むつきー!なんなのよその余裕な態度!だったら次はアンタが動かさないよね!」

「ハイハイ。わかったから落ち着けて。ドウドウ。」

「アタシは馬じゃないわよ!さつきから失礼しちゃう!」

「……お兄さんとギャリー楽しそうだね!わたしも言い合いしたい!」

イヴちゃんがそんな事を言い出すとは思わなかった俺達は今まで言い争いをしていたのも忘れてお互いを見やる。なんとも可愛らしいご尊顔を更に輝かせながら俺達と口喧嘩をしたいと言っているように聞こえて頭が混乱してしまう。

「あー……俺達に何か言いたい事があるって事?それならイヴちゃん、どうぞ。」

「うん!まずお兄さん!この美術館に入ってからずっと一緒に来てくれてありがとう!ギャリーも重たい物を動かしてくれたりわたし達を気遣ってくれてありがとう!」

「づつ……!」

イヴちゃんのその言葉に俺とギャリーはほぼ同時に心臓の辺りに手を当ててその場に膝を着く。これはなんというかこう、中々にくる物がある。それはギャリーも同じだった様でチラリと横目で顔を見てみるととてもじゃないがイヴちゃんに見せられない顔をしていて少し引いた。もしかしたら俺も同じような顔をしていると考えると少し冷静になれた。

「……あの、2人とも大丈夫？急にうずくまったからわたしびっくりしちやったよ。」

「は、はは。俺は大丈夫だよ。ギャリーは大丈夫か？」

「何とかね……。あと少し褒められてたらアタシ堕ちてたわ……。」

「でもまだ言いたいことはあるんだけど……。言ってもいい？」

「勿論いいよ。ギャリーは気にせずと言っちゃって。」

俺がそう言うのとギャリーはこちらを軽く睨んでくるがイヴちゃん
の思っている事をぶちまける事のできる時間は作るべきだし、それが
俺達の事なのであれば話を聞く義務が俺達にはあると思う。そう
思って話を促すとイヴちゃんはこほんと咳払いをして眉間に皺を寄
せながらこちらを見つめてくる。

「さっきのはありがとうって言いたかった事だけど次は怒ってる事！
まずお兄さん！お兄さんは無茶をしすぎ！おかげでお兄さんが1人
で行動する度にわたしはすごく心配なんだから！」

「あー……なんと言うかごめん。」

「次にギャリー！ギャリーはわたしを子供に見すぎ！いくらギャリー
とすぐく年が離れてるからといってわたしだってもうそんなに子供
じゃないもん！」

「ごめんなさいね……。イヴに失礼だったわね。」

「最後に！2人とも喧嘩しすぎ！なんか少し目を離すと言いつける
気がするもん！」

「いやあれはお互いにじゃれあいやってると言いますか……。いやな
んでもありませんハイ。」

最後に関しては俺的にはそんなに言い争った記憶はないし険悪な
雰囲気になった記憶もないが、反論しようとしたらイヴちゃんがこち
らをじっと見つめてきたのでなんでだか言い返すことが出来なかつ
た。

そんな怒ったイヴちゃんは言いたい事が言えてスッキリしたのか

眉間のシワもすっかりと消えてその顔に微笑みが戻ってくる。

「じゃあごめんなさいと仲直りの握手しよ！ごめんなさい！」

「なんというか……ごめん。」

「あたしこそゴメンねえ……。」

「はい！これで終わり！じゃあ探索しよ！」

イヴちゃんはそう言つてこの部屋の中を見渡し始める。なんとなくかとても「強い子」だなあと再認識した所でギャリーがフフッと微笑む。それが気になった俺はイヴちゃんから目を離しギャリーの方へ向くと彼はすごく晴れやかな笑みを浮かべていた。

「どうした？すごくスッキリした顔じゃん。」

「いやね？あの子の事、アタシ達はまだちゃんと理解できてなかったのねって思っちゃってね。」

「確かに。俺なんてギャリーより長く一緒にいたのにこのザマだもんなあ。」

「ホント、子供の成長って早いよね。アタシビツクリしたわ。」

「俺達も成長しないと、だろ？」

「……それもそうね。お互いに頑張りましょ？」

「2人とも！こんなところに引っ張れそうな紐があるよ！」

イヴちゃんの強さを身に染みて実感した俺達はイヴちゃんの呼び掛けで探索に戻る。その際に1つ気になった事が頭の中に浮かんできた。

(ギャリーってそんな成長を感じる程長く一緒にいたか？……まあ気にしなくてもいいか。)

この素朴な疑問は勿論口に出すことは無かった。

深海の……？

イヴちゃんの見つけた紐は天井へと繋がっていてそれが何に反応するのかは全くもって検討がつかなかったが、このとてつもなく狭い部屋には道を塞いでいた無個性とこの紐以外に特に見つかるものは無い。

それならばと俺は自分の考えつく限りのありとあらゆる良くない事を思い浮かべながらその中のどれかが起きてもすぐに行動出来るように心構えをしつかりとしておく。

「……よし、イヴちゃんその紐引つ張っちゃって。ギャリーは念の為に辺りの警戒よろしく。」

「アタシにはこんな狭い所で何か起こるとは考えたくないけど……まあヒロトシの言う通り警戒はしておくわ。」

「お兄さくんもう引つ張っていきい？」

「ああ、もういいよ。グイツといつちやって。」

「グイツといくつて……。アンタ酒呑みたいなこと言うのね。まだ飲めない歳なんでしょ？」

「いや酒のことなんて何も頭になかった。カチツけど？……イヴちゃん？確かに引いていいとは言ったけどタイミングが悪いんじゃないかな？」

「だって2人が楽しそうだったからなんか寂しくて……。」

そう言われた俺達はなんとも言えない雰囲気になる。ただの雑談だったとはいえ会話に入れなかったらそりや疎外感を覚えるのも仕方ない事だろう。

今回の事を少し反省をした所で、そこでずっと何もせずにいる訳にも行かないのですぐさま当たりを見渡すも先程と変わったところは散見できなかった。

「うーん……。どこが変わったか2人は分かったかしら？アタシには

何が変わったのか分からないわ……。」

「ギャリー安心して！わたしにも違いは分からないから！」

「右に同じく。もしかしたら部屋の外に何か変化があるタイプかもね。」

「じゃあ早速外に出よっ！どっちから出る？」

「階段のある方からでいいんじゃないかしら？どっちにしても一周はするんだし、それなら桜は最後の方で見たいじゃない？」

「じゃあそうしようか。」

俺達はそういうとすぐに狭い部屋から出て辺りを見渡しながらゆっくりと歩いていく。すると、迷路へと続く道の壁に

「ゲルテナ展にある床に描かれた大きな絵のタイトルは？」

とペンキのようなもので書かれているのを見つけた。それにいち早く気づいたギャリーは嫌そうな顔を隠さずにこのひとことについて言及する。

「げ、もしかして暗号？あの大きな絵が描いてあった絵よね？2人も見た？」

「わたしは見たよ！ママとパパが壁の大きな絵を見てる時に後ろにあったから！」

「俺も一応見たな。でもここまで合ったイベントのせいで名前なんて覚えてないぞ……。」

「なんだったかしら……。確か深海のなんとかって名前だった気がするのよね。あと1文字だったのよねー。ちよっとイヴ、適当に1文字あげてくれない？」

ギャリーの言った事が正直信じられなくて、それまでは壁の文字やイヴちゃんを見ていた俺はギョロっとギャリーを見る。すると彼はアタシに任せてと言わんばかりにイヴちゃんにバレない様にウインクをパチンとやってくる。

「うーん……深海の、深海のおく……。あ、世！世じゃない！」

「深海の世……あ！そうよそれだわイヴ！……タイトル読めた？『しんかいのよ』だからね！」

「確かに聞いてみるとそれっぽい気がしてくるな……。まあ違っててもその場で適当に考えて見るか。」

俺達はそう話しながら先程の扉を使わずにもう一度遠回りをして先程の絵をついでに見に行く。ここは敵もいなくて気が楽だからもう少しこんな部屋が続いて欲しいと思う。

平和な旅

あの壁に出てきたメモから俺達が目的地としている、まだ解錠を試みていない扉まではそんなに遠いわけでもなくすぐに着いてしまった。一応もう一度あの夜桜の絵画を見はしたものの、やはり間を開けずの2度目という事もあり先程よりかは凄さというか有難みの感じ方は薄くなっていた。

そんな事もありながらも戻ってきた俺達は早速先程入った扉のおよそ向かいにあるもうひとつの扉の前に立って、扉に書かれている謎を解読していく。

「やつぱりこの絵見覚えはあるんだよなあ……。イヴちゃんよく覚えてたね。」

「わたしだけじゃなくってあのヒントのおかげだよ！あれが無かったらきつと分かんなかったもん！」

「さつイヴ！アンタが正解を出したんだから入力してちようだい！」

「えっいいの!?!やった〜！」

ギャリーの言葉にすっかり気を良くしたイヴちゃんは1歩2歩と扉に近づいて入力パネルに触れる為に手を伸ばす。そんな姿を見ながら俺はギャリーの言動を思い返して、そのすごくを感じていた。

もし俺が同じ事を言おうとしたとしても言葉のチヨイスが悪かったりしてまた機嫌を損ねてしまったかもしれないし、もしそうならなかったとしてもここまで彼女を乗り気にさせる事は出来なかったかもしれない。

……いや、イヴちゃんなら俺が言ったとしてもきつと乗ってくれていたな。今までがそうだったし。

そんな事を考えていたらどうやらイヴちゃんはパネルに打ち込み終えたらしく、カシヤンとカギの開く音が聞こえた。どうやら『しんかいのよ』は正解だったらしい。答えが合っていた事で尚更気分を良くしたイヴちゃんは扉の前でぴよんぴよんと跳ねながら喜んでる。

「やったあ！正解だったよ〜！」

「やったわねイヴ！イヴのおかげでこの部屋に入れるわね！」

「私だけじゃここまで来れなかったから2人のおかげでもあるよ！」

「〜っ！イヴったら嬉しい事言ってくれるじゃないの！」

「確かにその言葉は嬉しいな。これからも頑張れそうだ。」

イヴちゃんにそう言いながら俺は扉のノブに手をかける。さすがにまだ入った事の無い扉にイヴちゃんが先頭で突入するなんて事をさせるなんて事は俺には出来ない。何があるか分からない上にもしもが起きた場合の対処が遅れてしまう可能性もある為に、先頭は俺がギヤリーで進んで行きたいところだ。

「じゃあ入ろうか。イヴちゃん少しだけ下がっててね。」

「うん！安全を確認しないといけないもんね！」

「ヒロトシ、ちゃんと安全の確認をなさいよ！これでイヴに怪我のひとつでも負わせたならタダじゃ置かないわよ！」

「いやギヤリー、それはいくら何でも激しすぎる。それを言われると俺何も出来なくなるわ。」

「あら、冗談も通じないのかしら？ごめんあそばせ？」

ギヤリーの煽りは中々に腹が立ってくるが、ここで反応してしまつてはギヤリーの思うつぽになってしまうのでここはあえてスルーをかます事に。

扉を少しだけ開き頭をその隙間に突っ込んで中を覗く。しかし部屋の中を組まなく調べたところで見えるものは本棚と大きい絵画のみなのでまあ大丈夫だろう。

「部屋の中に特に脅威は無さそうだから入っちゃおうか。本も結構あるし中でものんびり出来そうだよ。」

「あら、じゃあここで一旦休憩かしらね。あまり疲れた感じはしない

けど……まあ気にしちやダメよ。」

「ここにはどんな本があるかなあ？わたしでも読める本があるといいなあ。」

「きつとあると思うよ。まあのんびりと探せばいいさ。」

俺のそんな言葉にイヴちゃんは「うん！」と一つ頷く。しかしここには本当に何も無いので、次の部屋へと行く為の鍵になるものが何なのか頭を捻るがろくに思い浮かばない。しかし急いで見つけた所で特に意味は無いので！こちらものんびりと探す事にしよう。

決別

まず本棚を調べるにあたって俺が左側から、イヴちゃんとギャリ―が右側から調べる事になった。向こうが和気藹々と何かないか調べている中、俺も何かめぼしいものはないかと確認していると一番左側の本棚に何やらピンク色の背表紙がほかの地味な色に囲まれていることも相まってなんだかすごく目立っていた。

「……なんだコレ。『恋文庫』？……ああこれはダメだわ。」

「ヒロトシ？そんな派手な本を持ったまま固まってどうしたのよ。」

「ん？いや……ね？」

「何よその煮え切らない反応。ん……ここから見える感じ表紙に絵とかは描いてないのね。タイトルはなんて名前？」

「『恋文庫』って名前だけでも……これはイヴちゃんには見せられないわ。これ見せたら社会的に死ねるわ。」

「えー！恋って文字が入ってるんだし恋愛ものじゃないの〜！」

「……わかった。じゃあギャリ―も読んでみて許可が降りたらイヴちゃんにも見せてあげる。」

そう言つて俺はギャリ―の元へ行つてその“官能小説”を問題の文章がすぐに見れるよう開いたまま、しかしイヴちゃんに見られないように渡す。

本を受け取ったギャリ―は真剣な表情で読み進めていくが、時間が経つにつれて顔が赤くなり体が震え出す。こいつ大丈夫か？なんて思っていたら勢いよく本を閉じて俺に押付け始める。

「こんなのイヴに見せられる訳ないでしょ!?アンタなんてもの読んでいるのよー！」

「いやだってこんな本だなんて全く知らなかったし。でもこれ他の本と比べても異質だったから何かいい情報とか載ってないかなーって開いてみたらこんな文章だもんで俺もびっくりしてたんだからさ。」

「ね〜！どんな本なの〜！わたしにも教えて〜！」

「イヴちゃんにはまだ早いかなあ。あと9年くらい経たないとね。」

「そうよ！イヴはこんな本なんて呼んじやいけません！」

「2人のけちー！いじわるー！」

そんなこんなでわちやわちやした後は再び何か気になる本がないか探す作業に戻る。しかし左側の本棚にはこれ以上の異質なものはなく、なにか気になるようなタイトルのものもなかった。

右側の本棚も例外ではなかったらしく、ギャリーが渋い顔をしながら真ん中の絵画の前に集合する。

「こっちは特になかったわ。そっちはあの後何かあった？」

「こっちも特になし。って事は……。」

「あとはこの絵だけだね……。」

そう言っただけで俺達はほぼ同時に壁にかけてある大きい絵画を見上げるように見る。その絵画のタイトルは『決別』と書いてあり、赤い地に黒く太い線が真ん中あたりから裂かれているように入っているだけの絵だ。

「なんか嫌な絵ね……。」

「わたしちよつと怖いかも……。」

「もし怖さに耐えられないようなら俺かギャリーの服でも握っててもいいよ。」

「ううん……大丈夫。」

イヴちゃんがそう言い終わるが早いか、部屋がいきなり暗くなり辺りが何も見えなくなる。

「わっ！なに、停電!?ちよ、暗くて何も見えないじゃない……！イ、イヴ！いる!?」

「うん、いるよ……。」

「そう、なら良いわ……。ちゃんとここにいてよ？なんならさつきヒロトシが言つてたようにアタシの上着を掴んでもいいわよ。」

「わかった……。」

「しかし困ったな……。あ、そうだ携帯あんじゃない。2人ともちよつと明かり確保するから待ってて。」

「アンタそんなものまで持つてるのね……。一体何しに美術館に来たのよ。」

何か色々と勘違いされているような気がしなくもないが説明するのも面倒なので曖昧に返事を返して、俺はこれならあの時電源落とさなければよかったなあなんて後悔を少しだけしながら切っていたスマホの電源を再び入れ直す。

スマホを立ち上げる途中でいきなり画面が明るくなる時に部屋の様子が見えたが、特に変わった様子は見られなかった。その後無事立ち上げ終わったのを確認した俺はちよちよいと操作をしてカメラ下のライトを付ける。

「……え？な、なによコレ……！」

「……びっくりしすぎて声出なかったわ。なんじゃこりゃ。」

「お兄さん……ギャリー……。わたし、怖い……。」

「ハア……ホントキツツイわ……。精神的に。」

「さっさとこの部屋を出るか。ここにいてもいい事は無さそうだ。」

俺達はその後一言も会話を交わす事なくこのクレヨンのような材質で助けを求める言葉を壁いっぱいにかかれた部屋を後にする。

部屋から出ると何やらこの廊下も雰囲気先程よりもなんだか気持ち悪いものへと変わっている。俺はなんとなしに振り返って後ろの壁を見てみるとそこには美術館の注意事項がでかかど書かれています、その文章はよく見ると床にまで続いていた。

「なんじゃこりゃ。」

「ここにもなにか書かれてるわね。なんかもう文字が出てきた程度な

ら驚かなくなってきたわ……。」

「あ、わかる。俺もこれくらいならなんともなくなつたわ。やっぱ人間って慣れる生き物なんだなってこういう事で実感するな。」

「えー。もう驚かないの？なんかつまらないなあ。」

「いやねイヴちゃん。俺達だって好き好んで驚いてる訳じゃないからね？それを楽しみにされても困るなあ。」

「まあそんな事はさておいて1回来た道に戻ってみましょ？なにか変わってるかもしれないわよ。」

イヴちゃんはあまり納得はしていなさそうだったけどここで立ち止まっている事に何か思う事もあったのか、反論もなく俺達の後ろからひよこひよこ着いてくる。その姿になんとも言えない気持ちを覚えつつとりあえずノートの方へと戻る為に俺達は進み始めた。

第四章 最後のピース メアリー

出てきた扉から夜桜の絵画の近くまで歩いてくると、何やらノートの前辺りから赤い足跡が点々と続いているのが見えてくる。その足跡は先程通った際にはなかったもので、どうやら俺達が今進もうとしている方向へと向かっているようだ。

「……あの足跡を追ってみる？もしかしたらさつきはなかった道が出てくるかもしれないし。」

「そうね。今までの事を考えるとこのままあれを無視して戻っても何かあるとは考えにくいものね。」

「あの足あとの先には危ないものがないといいなあ……。」

あの足跡を見てから何故だか頭の奥がズキズキと痛み始めたが、そんなものは無視をして俺は2人を先導するように足跡の向かう方へとスタスタと歩いていく。

1歩進む度に痛みが強くなっていく感覚のする中、それでも俺は歩みを止める事が出来ないままに進んでいくと先程通った際には絶対になかったと言い張れる位置に扉が出現していた。しかし俺達は壁が動くような音などは聞いていないし、だからと言って突然音もなく壁が消えるはずもない。

なんとも奇っ怪な事だと考えていると後ろから着いてきたイヴちゃんとギャリーがいつまでも扉の前で動かない事を不審に思ったのか俺の肩を叩いて来た。

「……ん？どうした？俺に何か言いたい事でもあった？」

「いやいやーいくら不審な扉がいきなり音もなく出てきたからってそこまで頭を抱えて悩む事ないでしょ！アンタの悪い癖が出てるわよ！」

「……お兄さんもしかして頭いたいのか？つらそうな顔してるよ？」

「え？……イヴちゃんはよく見てるね。でもこれくらい大丈夫だよ。じゃあ進もうか。」

「……ヒロトシ。本当にきつかったらいつでも言うのよ？アタシが先頭変わるからね。」

「ありがとうギャリー。そんなときはお願いするわ。」

上手く笑えたか分からないが心配をかけないように精一杯微笑みながら俺はドアノブに手をかける。なんだか手汗がすごく出ているがそんなものを拭く余裕さえ今の俺にはなかった。

ゆっくりとノブを回して扉を開く。すると扉の奥からなにか人が走っているような音が俺の耳に入ってきたと思ったら次の瞬間俺の腹部辺りに軽い衝撃が走り軽くふらついてしまう。

しかし後ろにイヴちゃんとギャリーがいる手前ここで倒れる訳には行かないと瞬時に足腰に力を込めて倒れないよう踏ん張る。

何とか倒れずに済んだ俺は先程の衝撃がなんだったのか視線を下に向かわせるとそこにはブロンドと言うにはあまりにも黄色が強い髪色をした少女……？が俺の事を覗き込んでいた。その瞳を見た瞬間に俺の頭痛は痛みを増して思わず頭を抑えてしまうほどだった。

「本当にもう……これは辛いなあ……。」

「そうだ。俺が書けばいいや。誰に見せる訳でもないし好きなことを書き殴ればいいんだ。」

……俺は何故ここに来るまでこんなにわかりやすいヒントもありながら気づく事が出来なかったのだろうか。ここは「I b」の世界そ

のまんまじゃないか。それに俺はなんで今のタイミングで思い出した？この子と出会ったからでは無いのか？という事はもしこれが仕組まれた出来事なのであればそれを計画実行できる人物がいるはずだ。

「ああそうだ。君に伝えていない事があったから今のうちに伝えておこう。君をあの美術館に招待したのは——私だ。」

「そりゃ望んだ事なんて覚えてる訳ないよ。だって君、記憶が無くなってるところがあるでしょ？その時のことだもの。」

「まあそんな事より君の記憶についてだ。と言ってもその記憶も恐らくはもうすぐ思い出せるだろう。その時まで待ってておくれ。」

……あのおっさんか！いくら俺の夢の中の人物とはいえそれ以外にこんな突拍子のない事をしそうな人物は思い浮かばない。それにあいつは俺がたった今思い出したこの記憶についても何か知っているような事を仄めかしていた訳で。……まあ俺の記憶やあのおっさんの存在については今は一旦置いておこう。それよりも目の前の少女——メアリーの対処をどうにかしよう。

「……ヒロトシアンタ全く動かないけど何かあったの？」

「いや、ちよつと女の子とぶつかってさ。びっくりしすぎて少し放心してた。」

「え!?!ちよつと大丈夫!?!」

「……!」

「あ、ちよつと待って。足首ひねったとかそういうのは無い？」

「あ、うん……私は大丈夫……です。」

ぶつかつた際に怪我をしてないか聞いてみたが取り敢えずは大丈夫のようだ。まあ向こうからしたら見知らぬ男の人とはあまり会話したくないのかもしれないが。まあ暗い方向に思考を持っていく必要も無いしここはポジティブに行こうか。

「ねえ、アナタ……もしかして美術館にいた人じゃないの？」

「あ……！」

「やっぱり！そうだと思ったのよね！……あ、自己紹介がまだだったわね。アタシはギャリー。でこつちの子は……。」

「わたしはイヴって言うの！よろしくね！」

「そんで俺はヒロトシ。君の名前はなんて言うのかな？」

「……………」

ギャリーのナイスパスもあつたおかげで俺達は自己紹介を出来た……のはいいのだが、やはり俺とギャリーが怖いのか邪魔なのかすぐに名前を言つてはくれなかつた。……ここは一旦イヴちゃんと二人で話を進めてもらうのもありなのか？そんなことを考えている間にもギャリーはメアリーに話しかけていく。

「アタシ達も美術館にいたのに気づいたらこの訳わかんない場所に迷い込んでしまった……。今何とか3人で出口を訊んだけど、もしかしてアナタもそうじゃない？」

「わ……私も誰かいないか捜してたの……。外に出たくて……。それで……………」

「ああやっぱり！ねえ、良かったら一緒に行かない？」

「え……………」

「女の子一人じゃ危ないわ。ここ、変な生き物とか結構いるみたいなのよ。だから一緒に行きましょう？みんなでいた方が心強いし！」

「そうだよ！一緒に行く？」

ギャリーとイヴちゃんがメアリーにそう問いかけると少しだけ彼

女は考える素振りを見せる。その姿に2人は半ばドキドキしながら聞いているんだろうけど、俺は既に答えを知っている云わばカンニング状態なのでそんなドキドキは全くと言っていいほどない。だって彼女も外に出たがっているのだから。

「うん行く……!」

「んじゃ決まりね!……あ、アナタ名前はなんて言うの?」

「メアリー……。」

「メアリーね!よろしくメアリー。」

「メアリーよろしくね〜!」

「よろしくなメアリー。」

「……うん!」

どうやら俺達のファーストインプレッションはあまり悪い方向へは行かなかったようで何よりである。

しかしこの子が加入したという事は物語としては半分辺りといったところか。細かい所は所々違ったり俺自身が忘れてしたりしてしまっているものの大まかな流れとしては大きく外れた所がないという事は喜ばしい事だ。

こういう風に一作品に俺のような異物が入ると徐々に流れが変わって最終的には全く別のエンドを迎えるなんて二次創作を漁っているとよくある話だが、この世界的にはまだ大きく変わった所はないのだと思われる。

ならば警戒するべきはこれから、二手に別れてしまうところからだろうか。まあこれからの事は未来の俺に丸投げするでしょう。どうせここで考えててもこの先何が待ち受けているかなんて100%は分からないのだから。……青人形はこっちに友好的だといいなあ。

「えと……イヴ、よろしく……。」

「うん!よろしくね!」

「……うん!」

「よーし！それじゃ仲間も増えた事だし張り切っていくわよ！」
「おー！」

「2人とも元気がいいねえ。子供は風の子元気の子ってか。」

「お兄さんもまだ高校生なんですよ？じゃあまだ子どもじゃない！」

「ありやま。こりや一本取られたな！アツハツハ！」

なんて和やかな雰囲気にも包まれながら俺達は先へと歩みを進めていく。その俺の足取りに、今はなんの迷いもありませんでした。

閑話：NG集if その2

く無邪気故の恐ろしさく

無数に並んだ瞳が不規則に床からこちらを見つめてきている。なんだかとても気味が悪く不気味な光景で少し足がすくんでしまったのだが、俺よりもビビっている人がいてくれたお陰でそこまで驚く事はなかった……と思う。

「うおっ……！なんだこれ！」

「きゃー！なにこれ気持ち悪い！」

「目がいっぱいだ〜！これすご〜い！」

「なんで床に目があるのよ……！あとなんでイヴはそんなに楽しそうなのよ！」

ギャリーがそう喚いている中、ふとイヴちゃんは手前の瞳の前にしゃがみこむとなんの躊躇いもなく瞳に対して人差し指を突きつけてその大きく開かれた瞳を突かんばかりに決して遅くないスピードで指を近づけていく。

俺とギャリーはその姿にぎよつとしながら慌ててイヴちゃんの凶行を止めるとそのまま立たせて目線を合わせる。

「イヴちゃん。何でこんな事したの？」

「だってあの目が本物なのか気になったんだもん。」

「そっか。じゃあもし本物だったらどうしたの？」

「……あやまる。」

「でも許してくれないかもよ？イヴちゃんがどんな理由であれもし目を触られたら許せないでしょ？それに、ほら。あの目だって怖かったんだよ？」

俺がそう言つてイヴちゃんの触ろうとしていた瞳を目線を向けると触られていなかったはずだがその瞳は潤んでおり、泣きそうになっ

ているのが見て取れる。

その姿を見たイヴちゃんは今更ながらに後悔をしたのか、こちらも少し泣きそうになってきている。

「あの、その……ごめんなさい。」

「謝るのは俺じゃないでしょ？ほら、ちゃんとごめんなさいして。」

「うう……、お目目さん、ごめんなさい。」

イヴちゃんがそう言うのと瞳は少し考えるように瞼を閉じるが、少しした後はその大きな瞳を弓なりにしならせて『許した』と言わんばかりに微笑んでいるような目を見せる。

「良かったね、許してくれるってさ。でも許してもらえるのが当たり前って思っちゃダメだからね。」

「そうよお。いくら謝っても許してくれない人なんてたっくさん居るんだから！」

「うん！わかった！」

何とか瞳の無事もイヴちゃんの元気も守る事が出来た事に何とか安堵しつつ、先へと進んでいく。

くハングドマンに驚きすぎたく

「あつこの絵美術館でも見たよ！でもなんでここにこの絵があるんだろうね？女の人の絵ばつかりのこの部屋に飾る意味ってあるのかな？」

「そりやなんかのヒントなんじゃない？それかこの絵実は脅かし要員だったりしてね。まあしつかり見て見ますか。」

「そうねえ……ん？この絵からなんか視線感じないかしら？ん……」

うわっ!」

「ギャリーどうしたの? そんなに驚くところあった?」

「ゴイツ目が光ったわ! こんな驚かない訳ないじゃない!」

そう言つて喚いているギャリーは大の大人とは思えないほどの狼狽えっぷりでなんだか見ているこつちが恥ずかしくなつてきそうになつてくる。

「こんなのが続くなんてアタシ耐えられそうにもないわ……! 一足先に家に帰らせてもらうわ!」

「いやここからどうやって出て帰るんだよ。いくら何でもテンパリすぎ。」

「ギャリー帰っちゃうの……?」

「ええ! イヴも一緒に帰りましょ? 早く帰つてマカロンの美味しいお店に連れてつてあげる!」

「ほんと!? やつた〜!」

イヴちゃんとギャリーはそう言つて部屋の入口の方へと戻つて行つた。そのテンションと流れについていけなかった俺は1人ハングドマンの絵画の前でポツンと呆れてしまった。

「……ダメだこりゃ。」

くもしもR指定の書物をイヴが読んでいたら

まず本棚を調べるにあたつて俺が右側から、イヴちゃんとギャリーが左側から調べる事になった。取り敢えず1番右側の本棚から順々に調べていこうと本の背表紙をゆつくりと観察していると、視界の端でイヴちゃんの読んでいた本をギャリーが奪つて閉じている姿が見

える。

「ギャリーどうした？何かヤバいもんでも書いてあつたか？」

「こんなの有害図書よ！なんでこんなものが誰でも見られるように置かれてるのよー」

「ギャリー、なんて書いてあるか教えてよ。」

「……こういうのは大人になってから読みなさいね。アンタにはまだ早いわ。」

「ふーん……。G指定はある？」

「いいえ、無いわ。アンタも読みたいと思っててもイヴの前でだけは読まないですよ!？」

「流石にそこらへんの分別はついてるさ。」

俺はギャリーから件の本を手渡されながら直ぐにそれを読もうとはせずにそのまま会話に勤しむ。それも一区切り着いた所で手渡された本を適当にパラパラと読み進めていくと、確かにこれはイヴちゃんにはまだ早いものだ。

「ゴリやイヴちゃんには早いわな。なんなら俺にも早いかもしれん。」

「え？……ああ年齢的にはそうよね。でもアンタくらいの子ならこういうの見てるもんじゃない？」

「まあそうかも。多分俺の知り合いにもこういうのが好きな人もいるでしょ。」

「お兄さんはそういうのは好きじゃないの？」

「うーん……。何とも言えないかなあ。嫌いではない……かも？としか。」

「イヴ、あんまりそういう事は聞かない方がいいわよ。はつきりと返せる人はそう多くないと思うわ。」

「うーん……。わかったあ。」

あまり納得していないような様子を見せながらも渋々頷いてくれ

た伊ヴちゃんの頭を軽く撫でてから再びなにかヒントが無いか本棚の調査に戻る。

モテモテ？

ここに来る前の抜け落ちていた記憶が戻ってきたせいかなんだか実年齢よりも歳をとったような感じをしつつも、すぐそこにある花瓶が視界に入った俺はそれに向けて足を伸ばす。

「ほれ。ここに花瓶もあるし少しだけ話そうよ。俺達はメアリーの事を知りたいしメアリーも知らない人について行きたくないでしょ？」

「……うん、そうだね。私もみんなのこと知りたいかな。」

「本当!? そんな事言ってもらえてアタシ嬉しいわ!」

「わたしも! メアリー、いっぱい話そうね!」

「……っ!? うん!」

俺から振った話ではあるが2人に美味しいところを持っていかれて謎の疎外感を覚えたが、どうせ俺は元々ここにいないはずの人物なのだとの考え方を変えてその景色を眺めている。

3人がわちゃわちゃと楽しそうに話しているのを眺めながらこれが俺の目指している一つの景色なのだと思うと、なんだか脱出ひしえしていかないのに胸にこみ上げてくるものが有るのは偏ひしえにハッピーエンドを望むが故なのだろう。

「そういえば……アタシとイヴにも薔薇があったって事はもしかしてメアリーの薔薇もあるんじゃないかしら?」

「……うん持ってるよ! 黄色いバラ!」

「あらホントね。2人ともしっかり持ってるのよ! 無くしたりしたらダメよ。誰かさんみたいに誰かに渡すのも危ないからね。それから……。」

「わーイヴのバラはあかなんだね! 私のバラは黄色だよー!」

「黄色いバラも綺麗だねメアリー!」

「うん! でも黄色も好きなんだけどピンクも好きなんだ。あと青も!」

「……人の話は聞きなさいよ。」

そんな事を話しているかどうかやら俺達の薔薇は花瓶の中の液体を全て吸いきつたらしく、花瓶を軽く振っても液体の揺れるような音は全く聞こえてこなかった。

「よし、この花瓶にもう水もないみたいだしそろそろ行こうか。あとの話は歩きながらでもすればいいし。」

「はいー！」

「は、はいー。」

「じゃあ出発しましょうか。ヒロトシ、先導よろしくね。」

「あいあい。ほいじゃあはぐれないように着いてこいよー。」

「出発しんこー！」

「しんこー……?」

「ふふつ、無理にイヴに合わせようとしなくていいのよ？アンタはアンタのペースで慣れていきなさい?」

「うん……。頑張るね。」

後ろからメアリーとギャリーの話す声が聞こえてくる事でそちらに意識を割く必要はあまり無くなったので、俺は進行方向とイヴちゃんを見つつゆっくりと歩いていく。

途中『一体どちらが正しいのか』と書かれている紙が貼られていたが、正直プレイ時にそんな張り紙があつたか覚えがなかったしこの後に起こる事も大きな出来事ならある程度覚えているので言いたい事はなんとなく分かった。

「お兄さん、この紙は見なくていいの?」

「うん、別に気になる事は書かれてなかったからね。それならササツと先に進んだ方がいいかなって。」

「そっかあ、なら良いんだけど……。お兄さん何か変わった?」

「んー……。変わったつちや変わった……。のかな。ま、俺にも色々あ

るんだよ。」

「んくよく分らないけど……あんまり変わらないでね？わたし今のお兄さんが好きだから。」

「そっか。じゃあイヴちゃんに嫌われないように気をつけないとな。」

俺がそう言うといヴちゃんは満面の笑みを浮かべてこちらを見つめてくる。そんな彼女を安心させるように頭を優しく撫でてやると甘えたがりの猫のように頭を擦り寄せて来る。

そんな行動に少し驚きはしたものの撫でる事を辞める事はせずそのまま優しくあやしていると、メアリーが何を思ったのか俺達の姿をじっと見つめてくる。

「……メアリーどうしたの？そんなに見つめられても俺は困るんだけど。」

「私も頭撫でてくれる……？」

「お、おう？別にいいけど……。俺でいいの？ギャリーじゃなくて？」

「うん、ヒロトシがいい。ギャリーはパパと似てるから別の人に撫でられてみたいの。」

「あら〜！ヒロトシ、アンタモテモテじゃない！」

「そんなんじゃないだろ。メアリーが言ってた通り身近に居ないやつに撫でられてみたいんでしょうよ。」

「んもう！こんな簡単な女心も分からないなんてアンタ今まで女つ気のない生活でも過ごしてたの？」

「余計なお世話だよ。」

俺はそんな事を言い返しながらも2人の頭を撫で続ける。しかしずっと腕の位置を固定しているせいかそろそろ疲れてきたのだが、2人はとても気持ちよさそうに目を細めていてとてもじゃないがそろそろ止めたいなんて事を言い出せる雰囲気ではない。

俺は自分自身の両腕の疲労と引き替えに2人の笑顔を手に入れたのだがいつまでこの状況が続くのかも分からないまま俺は2人の頭

を撫で続けるのであった。

嫉妬深き花

頭を撫でられていた2人が漸く満足したのか俺の手からスルスルと離れると、先程よりも澁刺はつらつとした表情を前面に押し出してやる気を見せてくれる。

そこまで元気が出たのなら腕がパンパンになるまで頑張った甲斐もあるというもののだが、ここまでずっと一緒に行動してきたイヴちゃんは兎も角何故メアリーもギャリーでは無く俺に甘えてきたのだろうか。

正直どちらか1人はギャリーの方に行ってくれば多少は俺の負担が少なく済んだだろうし、それに敵がどこからか来た時にしっかりと守る事がしやすくなったのに。

なんて事を考えながらぼけーっと元気な2人を見てみると、その態度がカンに触ったのかメアリーが眉を顰めてこちらを見つめてくる。

「———どうした？そんなに俺の事をじっと見ても何も出ないよ。」

「ヒロトシこそなんでそんな顔でこっちを見てくるの？乙女の顔はジロジロ見ちゃダメってお姉ちゃんが言ってたよ！」

「あー……ごめんごめん、ぼーっとしてたわ。」

「もう！すっかりしてよね！」

そう言いながらぶんぶん怒る彼女を見て苦笑いしか返せない俺だったが、イヴちゃんがこちらを見てムツとした表情をしているのが視界の端に写るといよいよ俺の頭の中にはハテナしか浮かばずつい頭を傾げてしまった。

「イヴちゃんどうかしたの？」

「なんでもない！」

「あら。まあヒロトシにも思う所はあるかも知れないけどイヴの事はアタシに任せなさいな。だから早く進みましょう？」

「うーん……まあ任せた。俺よりもギャリーの方がそういう対処が得意そうだし。」

「そりや伊達にアンタよりも歳をとってないわ。それじゃあ行きましょつか。」

「おう。」

俺たちがそう話している時も2人の視線は俺を貫いており、なんとも居心地の悪いまま俺達は先に足を進める。

一本道をゆっくりと進んでいくと扉が目の前に見えてくる。それに横にも道があるように見えてきたのでどちらから先に行くか考える。が、特に考えても何が変わる訳でもないしもしかしたら目の前の扉の鍵は開いてない可能性もある訳だから何も考えなくていいだろう。

「じゃあとりあえず目の前の扉に行ってみよつか。左側の道も気になるけどまあ後でいいでしょ。」

「そうね、じゃあ開けちゃいませよ！」

「あ、いやその前にノートタイムで。見つけちゃったしこれがあるならある程度安全でしょ。」

「はあ……。アンタはその行為に何を見出しているのよ。アタシには分からないわ……。」

「えく。わたしはこういうの好きだよ？メアリーはどう？」

「えっ私？……絵を描くのは好きだよ？」

その言葉にギャリーはなんだか居心地悪そうな顔を見せているがそれをスルーして俺はノートに名前と桜の花弁を書いていく。それが終わってイヴちゃんにペンを渡すとすぐ横にある扉のノブを回すがしかし回りきることなく止まってしまふ。

「ここはまだみたいだし書き終わったら横道に入ってみよつか。」

「はーい！もう少し待ってねー！」

「ねえねえ……私も書いていい？」

「勿論いいけど。ギャリーもそれくらいは待ってくれるでしょ。」

「そりや勿論待つわよ！そこまで心狭くはないわよ！」

「ギャリー、ありがと！」

「これくらいは幾らでも待つわよ。だからメアリーも好きに書いてきなさい。」

「うん！」

そう言つて2人はノートの前でわちやわちやとしているのを確認した俺は一足先に分断されるところの下見をする。

『嫉妬深き花』

今はまだ黄土色の下地に赤い点しかないこの絵画がこれから俺たちの行く末を分断する先は一体どうなるのか。もしそれが良くない方向に傾くのであれば――

俺は命を懸けてでもその運命に抗つてみせる。

赤い目

俺が絵画を見ながら決意を固めていると、思っていたよりもすぐに書き終わった2人を連れてギャリーが俺の元へとやってくる。

その2人の顔は笑顔に染まっており、それならばと先程不機嫌だったのはなんでなのかは深く考えないでおく事にした。

「2人も満足したみたいだし進もうか。それともまだ休憩しとく?」

「わたしは大丈夫だけどお兄さんの方が心配だな。頭打った所はもう痛くないの?」

「ああ、もうだいたい時間も経ってるから痛くも痒くもないよ。心配してくれてありがとね。」

「だってわたしをかばったから頭を打ったんだもん。やっぱり気になるよ。」

「え!?! ヒロトシそんなカツコイイ事したの!?! もし私が同じ状況になったら2人は助けてくれる?」

「そりゃ勿論。俺が助けられるなら助けるよ。」

「アタシだって勿論助けるわよ。アタシにだってそれ位の甲斐性はあ
るわ。」

「……ありがと。」

メアリーはそう言うのと儂げな笑顔を浮かべる。その諦めとも決意とも取れる笑顔を見て彼女の覚悟のようなものを感じ取った俺は彼女の為出かす事を思い出して納得すると同時に、ゲームをプレイした後の感情がぶり返してきて悲しい気持ちになる。

「メアリー、大丈夫だからな。君はきつと助かる。」

「え? それってどういう事?」

「さあ? まあそのままの意味かもね。」

「?……変なヒロトシ。」

「アンタってほんと意味深な発言が好きね。おかげでたまに何を言っ

てんのか分からなくなるわ……。」

「俺としてはそんなに意味深な事は言っていないつもりなんだけどなあ。」

なんて事を話しながら歩いているといつの間にか次の扉の前まで来ていたようで、結局扉の前で立ち止まって随分と話し込んでしまった。しかしこの部屋はゲームの中で2つの顔を持っていたのだが、俺は一体どちらの顔を見る事が出来るのか。少し緊張をしながら俺はゆっくりと扉のノブを回した――。

何も突つかかる事無くしつかりと回りきったノブに少し絶望しながらも、ここまで来たからにはと腹を括ってゆっくりと扉を開けていく。

扉を開けるとそこには赤く大きな目をギラギラとさせながらこちらを興味津々に見てきているように感じる絵画が1枚こちらを向いているのに加えて大量の青い人形が2列で並んでいる。

「……つたく、この絵といい部屋といいなんでこんなに気色悪いのよ！」

「えっ？ そうかな……。私はカワイイと思うけど。」

「えー!? これのどこがカワイイのよ！」

「そうかなあ……。イヴはどう思う？」

「カワイイと思うよ。こんなにいっぱいの人形に囲まれるのも初めてだからなんか楽しいかも！」

「そうだよねー! やっぱカワイイよね！」

「はあ……。もういいわ……。はやくここ調べて出ましょ。この部屋……。なんだか見られてるみたいですがよく落ち着かないわ。」

ギャリーはそう言うのと部屋に2つある本棚を調べる為に俺達から離れていく。きつと俺が2人を見守っておけという事なのだろう。2人は壁際に並んでいる人形を2人で抱いて遊んでいた為とりあえ

ず近くで調べ物していればいつかと思い人形がどんなものなのか俺も触ってみているととんでもない事が起こってしまった。

ガシャーン！

人形が落ちたのだ。しかも俺が持っていたものと同じ素材なのであれば触って見た感じ布製のもので、どう考えてもあんな割れるような音なんて絶対にならないような素材でできているのにもかかわらずだ。

いくら何が起こるかわかっているとはいえ、意識外から大きい音が鳴るとびっくりしてしまうのは仕方ない事だと自分に言い聞かせて荒れた心を落ち着かせていく。

「……見に行こっか。何が起こったのか確認しないと。」

「……お兄さん、今回は情けない声出さずに済んだね。」

「イヴちゃん、余計なことは言わなくてもいいの。それに人は成長する生き物なんだから俺だってこれくらいは出来るようになるさ。」

「——びつつつつくりした……。もう本当に勘弁して欲しいわね……。」

「私はそんなにびっくりしなかったよ？ヒロトシとギャリーってもしかしてビビリ？」

「せめて危機察知能力が敏感って言ってくれないかなメアリー。俺達だってビビりたくてビビってる訳じゃないからね。」

人を小馬鹿にしたような表情であまり認めたくない事実を言うてくるメアリーに対して攻めてもの抵抗としてそんなことを言いながら落ちた人形の元に歩いていく。すると人形の近くに紫の鍵も一緒に落ちておりそれを拾い上げる。

「鍵も見つかった事だしこの部屋は1回出て向こうのもう1つの部屋に行ってみようか。」

「ようやくこの部屋から出られるのね……。すごく長い時間ここにいたように感じるわ……。」

「ギャリー大袈裟すぎー。ギャリーって人形好きじゃないの？私はこの人形大好きなんだけど。」

「メアリー、アンタには悪いけどこんな気味の悪い人形なんてアタシは好きになれないわよ。」

「わたしはカワイイと思ったけどなあ……。」

「まあ人の感性なんて全然違うものだし仕方ないよ。それよりも次の部屋に向かおうか。」

俺はそう言って歩き出す。次に起こるイベントはどうなってしまうのか考えながら……。

分断

俺達がああの部屋を出て少しだけ考える事の出してきた俺は、今までのイベントは俺の知っているものだったのかなんて考えながらゆつくりと歩き続けていた。

すると、『嫉妬例深き花絵』の前を通ろうとした瞬間にその絵画の方から何か迫ってきている音が俺の耳へと入ってきた。

そこで分断イベントを思い出した俺は音の間こえる絵画に近づいて今どこまで近づいてきたのか確認をする。

すると流石にここまで近づいた事で3人も音に気づいたのかその正体を探るべく絵画の前へと集まってくる。

「なに……？この音、近づいてくる……。」

「みんな、後ろ見てちようだい！これなんなのよ!？」

「地面からなにか出てきた!」

「な、なんかマズイわ！みんな絵から離れて!」

「イヴ！あぶない!!」

足元から何やら緑色のものが床を突き破って出てきており今にも上にいる俺達を貫かんばかりなのが確認できた。これはマズいと慌ててギャリー側——先程出てきた部屋側に飛び退く。次の瞬間先程までいた所から蔦のようなものが先に出てきたものと同様に天井付近まで伸びていく。

ふと隣にいたイヴちゃんがどうなったのか気になって蔦の奥を見ていると、イヴちゃんはどうかやらメアリーが手を引いて避けさせたらしく2人が手を握ってこちらを見ていた。

「……………！2人とも大丈夫!？」

「あーびつくりした!」

「イヴは？怪我とかしてない?」

「うん。大丈夫だよ。」

「よ、良かった……。それにしてもこれ……。邪魔でそっちに行けないんだけど。折ったりできないかしら？……つてなにこれ、石でできてるわこの植物。どうしましょ……。」

ギャリーがそう悩んでいるとメアリーが何か思いついたような表情を見せると、それをこちらに向けて口を開く。

「……ねえイヴ。さっきの部屋でカギ拾ったよね？そのカギで……。そのドア開けられるんじゃない？もしかしたら違う部屋にこれを壊す道具があるかもしれないよ！……ねえ見てきていいよね？」

「うーん……。でも2人で大丈夫か？何が起きるか分からないぞ？」

「大丈夫よ！ね、イヴ？」

「わたし達は大丈夫だよ。ここまで頑張ってきたんだもん。」

「ほら、イヴだって大丈夫って言ってる！」

俺とギャリーはあまり2人から離れて動きたくなかったから少し語気を強くして聞いてみたのだが、それでもという2人からの熱意を受けて思わず俺達が目を目合わせてしまった。

しかし熱意はわかったものの無条件で認めるのもどうかと思った俺達は条件はどうするか軽く話し合う事に。

その間も早く行動を移したいのかメアリーがうずうずしていたが我慢の限界が来る前に急いで決めて改めてイヴちゃんとメアリーに体を向ける。

「はあ……。わかった。そこまで言うならちよつと見てきてもらおうか。」

「でもいい？何も無かったら直ぐにここに戻ってくるのよ？どうするのかはその後改めて考えましょ。」

「うん！わかった！それじゃ行こう！」

彼女達はそういうと楽しそうに奥の方へと歩いていく。その姿を

見ていると不安しか浮かばなかったが、どちらにせよもう決まって動きだしてしまった事だ。

ゲームでやった時よりも不安と心配しか考えられない自分自身に一抹の不安を覚えつつも、自分を強く持とうとイヴちゃんとメアリーが戻ってくる事を祈り始める。

その扉から戻ってくる事は無いと頭では分かっているながらも祈らずにはいられなかった。

閑話：i f

くもしも初めにあった人物がイヴでは無くギャラリーだったら

「トンネル……じゃなくて階段を抜けるとそこは美術館でしたってか。いくら訳分からん現象が連発してるとはいえさつきまでいた美術館とは似ても似つかない所に出るとかもう訳わかんねえなコレ。」

俺は1人ブツブツと言いながら階段を降りると、そこは1面赤い壁と床の通路のような所に着いた。見た感じ目の前の突き当たりと部屋の左側の壁がでっばっている所の2箇所扉があるのが確認できる。

「他に何か無いもんかね。とりあえずこの部屋に何かあるのか見てみましょうかね。」

部屋の中を歩き回ると花瓶が2つ隣合って部屋の中に置いてあり、うち片方には何も入っていなかったのだがもう片方には白色の薔薇が飾ってあった。

その花瓶の近くの壁には『バラとあなたは一心同体命の重さ知るがいい』と書かれた張り紙と『そのバラ朽ちる時あなたも朽ち果てる』と書かれた張り紙があり、意味が分からず首を傾げてしまったが深くは考えずにそのまま白い薔薇を手にとってこれからどうするか考える。

しかし特になんのヒントもなくこの部屋に佇む俺はとにかく行動を起こそうと2つある扉のうち、まず壁がせり出ている所の扉に入ることに決めた。

「そうと決まれば早速。……あれ、開かない。ええ……。」

扉には鍵がかかっているらしくノブは回りきらなかった。特に鍵も見当たらなかった為もうひとつの扉の方へと歩いていく。そして

扉を開けようとした次の瞬間、急に扉が開くのだった。

「うおあー！」

「キヤーー！」

男のような女のようなよく分からない悲鳴をあげる中性的で長身の人がドアの向こうで驚いていた。その手には青い薔薇が握られており、俺と同じ境遇なのではないかと推測する。

「ア、アンタ何者よ！こんな所にアタシを追い込んでどうするつもり！」

「ちよつと待ってくれ！俺はあんたと同じ状況なんだ！俺もなにがなんだかわからないうちにここまで来ちゃったんだよ！」

「嘘よ！そんなの信じられないじゃない！」

「本当だつつうの！俺だってあんたと同じように薔薇だってあんだからよー！」

「そんなこと言つてアタシを油断させてから襲うつもりなんでしょ！アンタの魂胆はわかつてんのよ！」

何を言つても信じてくれなさそうな彼？を信じさせる為に考えに考えた結果、俺は自分の持つている薔薇を相手さんへと差し出す事にした。それも手渡しだと受け取ってくれなさそうなので床に薔薇を置いてから数歩後ろへ下がる。

「アンタ……どういうつもり？」

「どうもこうも俺の命をあんたに預けたんだよ。そうしとけば俺はあんたに下手な事は出来ないだろう？」

「……わかつたわ。でも少しでも変な行動を撮つてご覧なさい。直ぐにこの薔薇をぐちやぐちやにしてやるわ！」

ひとまずといった形で漸く共に行動をするようになった俺達。これから仲良くなる事はできるのだろうか？

くもしも初めにあった人物がイヴでは無くメアリーだったらく

「……。うーん……はっ……あれ？俺はなんでこんな所で寝てたんだ……？てかここ何処だよ！」

先程までは普通の美術館にいたはずなのだが、気がついたらいつの間にか寝ていてしかも場所も一面紫色の通路に倒れていた。何が何だかわからなくなり軽いパニックに陥ったが通路奥の曲がり角から金髪の女の子が頭だけを出してこちらの様子を見ている。

その女の子の顔はよく見えなかったが、その金髪を見た瞬間に俺の頭は痛みを覚える。その痛みがどれだけ続いたのかはわからなかったが痛みが引いた後にはここはどこなのか、そして彼女は誰なのかをしつかりと思い出していた。

「メアリー……。え!?待ってここゲルテナ美術展!?……あー、確かにメアリーと初めて会う場所ってこんな所だった気がするな。……え？て事は俺今ゲームの中にいるって事？一体何が起きたらそうなるんだよ……。」

俺がそんな事を言っている間もメアリーはずっとこちらを見つめている。しかしその表情は段々と「こいつはマジでヤバイやつなのでは？」とでも言いたげな顔をしている。

「……メアリー、こっちにおいで？君と話がしたい。」

「……!?——お兄さんなんで私の名前を知ってるの?」

「なんでって言われたら……君のお父さんから教えてもらったからかなあ……。」

まあゲルテナと言うよりはそのゲルテナという存在を生み出した方の方が合っているのだがそんな事は些事だろう。

「私のお父さんと知り合いなの!？」

「ああ、そうなんだよね。だから君を知っていたんだ。」

「そうなんだね! ああ、怖かった。お兄さん急に大声出したり考え込んだりするんだもん。——あ、そういえばお兄さんの名前ってなあに?」

「確かに俺が一方的に知ってるだけだもんね。俺の名前は則内大利。まあ好きに呼んでいいよ。」

「スノウチヒロトシ……。じゃあトシって呼ぶね!」

そう言うメアリーはとてもイキイキとしていて人を騙すなんて考えていなさそうな、そんな表情だった。

赤色の目の人形

「……帰ってこないわね。」

「ああ……帰ってこないな。」

「こんなに遅いなんて、何かあったのかしら。」

大体彼女達を見送ってから10分ほど経っただろうか。2人が扉を開けて入っていく音を最後にその後の動向が全く掴めないほどに無音が続いていく。あまりの静けさによほど不安に駆られたのかギヤリーがちよこちよここと忙しく動き続けている。

それでも気がすまなかったのか、遂にギヤリーは大声を出して2人を呼び始めた。

「イヴー・メアリー！聞こえたら返事して！——、駄目ね……。ああ、やっぱり2人だけで行かせるんじゃないか……！どうしましよ……。」

「まあ俺らのどちらかが向こう側に行く事が出来ていればまた違ったんだろうけど……まあ過ぎた事は仕方ないわな。」

「そんな事分かってるわよ！……もう一度あの部屋、調べてみようかしら。……あんまり入りたくないけど。」

「まあそれしか行ける所ないしなあ……。さっき入った時は誰かさんが出たがったせいで探索もあまり出来なかったからなあ。」

「う、煩いわよ！いいから早く行くわよ！」

ギヤリーはそう言う俺の事を全く気にせず先程出てきた部屋へと戻っていく。

その姿がなんとも俺よりも歳を重ねているようには見えない辺りギヤリーのその人間性というものが見えてくる。なんとも頼りない感じに苦笑いを浮かべながら俺はギヤリーの背中をゆつくりと追いかけていく。

勢いで来てしまったせい扉の前で立ち止まってしまっていたギャリーの背中を押して何とか入ると、そこは先程と何も変わらない気味の悪い人形が沢山置いてある部屋となっていた。

そしてその部屋の扉の真正面——、つまり俺達の目の前の壁には大きな絵画が飾られていた。

『赤色の目』

絵画の下にある作品名にはそう書かれていた。確かに描かれている人形と同じようなこの絵はなんとも禍々しい赤い目をしているがイヴちゃんにはこれがうさぎに見えていたというのだから、俺がいた所で何が変わったなんて事もないと言われている気がして嫌になる。

「……何度見てもこれがカワイイだなんて思えないわ。」

「ん？……ああ、確かに可愛いとは思えないな。まだ俺たちが慣れてないだけなのかもだけどさ。」

「こんなの見なれたとしてもカワイイとは思えないわよ……。」

俺達はそう話しながら絵画を眺める。しかしその気味の悪い絵画をずっと眺めているのもあまりいい気分じゃなかったので、そこから離れてふたつある本棚を調べていく。

すると本棚の端の方に1冊気になる本が見つかる。

『心壊』

『あまりに精神が疲弊するとそのうち幻覚が見え始め……最後は壊れてしまうだろう。』

『そして厄介なことに……自身が“壊れて”いるのを自覚する事はできな。』

現在イヴちゃんが陥っていると思われる症状が書かれている本だった。ゲームをやっている時から思っていたが、いくら精神を病んだからと言ってここまで酷い幻覚を見る事はあるのだろうか。いくら何でもうさぎとこの人形は形の造形が違いすぎるためふと疑問を抱いたが、いくら考えても答えが出ない事は分かっている。この事について考える事をやめて他に気になる所はないか探していく。

この部屋にある2つの本棚を調べ終わった所で特になんの進展もないまま他に調べられる所があまりない事にウンザリしているギャリーが現実逃避気味に口を開く。

「めぼしいものはないわねえ……。……。ん？」

「どうしたギャリー。なにか気になるものでも見つかったか？」

「いや、なんかこの本棚あんまり本が入ってないしアタシでも動かそうじゃないかしら？」

「あー、確かにこの本棚くらいなら動かそうかも。ダメ元でやってみれば？」

俺がそう言うのとギャリーはそれに頷いて本棚を押ししていく。すると本棚は危なげなく動いていき、その裏に空いていた穴が俺達の目の前に現れた。

「あらま、動いたわ。なんでさつき気づかなかったのかしら。まあいいわ。ここから出られそうね。」

「もう少し穴が大きければ通りやすかったんだけど……。まあ通れるだけ御の字か。」

「さつきと先に進みましょう。早くイヴたちと合流しないと……。」

「それもそうだな。次はもっとわかり易かったらいいんだけど……。」

ある程度答えの知っている俺はそんな事を曖にも出さず白々しく
そう言うと、ギャリーを一瞥もせず穴の奥へと進んでいく。

俺の中にあるゲーム『Irb』の知識がどこまで通用するのか分らないが、多少でも使える事を祈りながら頭をぶつけないようにゆつくりと壁の中を進んでいった。

紐

大体あの人形のいた部屋を2つ分くらいは移動しただろうか。程々に暗い通路を通り抜けていくと行き着いたのは相も変わらず紫色に包まれた部屋にたどり着いた。

軽く見渡す限り何もいないこの部屋は何故だか何かがある気配を感じるがそれを感じられたのも少しの間で、それは直ぐに引っ込んでしまう。

「確かここって……。うわっ、気づきたくなかった……。」

「ヒロトシ、アンタ何ブツブツ言ってるのよ。なにか気になる事でもあったの?」

「え?……ああうん、なんでもないよ。そんな事よりも部屋の奥の方を見てみようか。」

「アンタって本当に話を逸らすのが下手よねえ……。まあいいけど。」
「そんな事俺が1番わかってるっての……。」

俺は1人そうごちりながら部屋の奥へと歩いていく。その途中の壁に「出口なんてない 理由なんてない」なんて書いてあったけどそんな事は無いとわかっているんで俺はそれは無視をして進んでいく。その先にあったのは床に三角の窪みと、それに左側にはそこそこ広い空間が拡がっておりそこには5つの紐が垂れ下がっていた。

三角のやつは上からイヴちゃん達が落としてくれるやつだけその為には紐を引っ張って隙間を塞ぐ板を壁から落とさないといけない。しかし紐を引っ張って落とすのは覚えていたがどの紐を引っ張って落とすのかなんて覚えているはずもなく。俺達は途方に暮れるのであった。

「ギャリー、この5本のうちどれが正解だと思う? 勘でいいから答えてくんね?」

「そんなこと急に言われても分かるわけないでしょ……? でもまあそ

うねえ……真ん中でいいんじゃない?」

「まあそれがわかりやすいか。じゃあ引つ張るぞー。」

「あつー!アタシが引つ張る場所を決めたんだしアタシがその紐を引つ張るわよ。アンタは少し下がってなさい。」

「了解。じゃあ任せたわ。」

俺はギャリーと位置を交換するとギャリーが紐を引く様を後ろから眺める事に。何度か深呼吸をして腹を括ったギャリーが勢いよく紐を引つ張ると部屋の明かりが突如として消えてしまう。

「わっウソヤダ!電気のスイッチなの!」

「ギャリーもつかい引つ張って!」

「わ、分かったわ!」

俺達は慌てながら先程引つ張った紐を引き直すと明かりが再び点いたので、何とかなったと一息つく。こんな演出があつた事を忘れていた為に自分が思っていたより驚いてしまった気がする。

「あー……良かったあ……点かなくなるかと思つたわ……。」

「確かに……。でもダメージを受けるような事が起きてないだけマシンじゃないかな。」

「それもそうね……。じゃあ次はヒロトシの番ね。あと4本のうちから選んでちょうだい。」

「うーん……そうだなあ。じゃあギャリーが引いた紐の右隣のやつにしようかな。」

俺はそう言いながら自分の言つた紐の前まで移動をする。これが正解なのかは分からないけどもなんだか当たっている気が今からしている。

「じゃあ早速引つ張るから一応少し離れてて。」

「あら、随分と自信があるのね？それともただ思い切りがいいだけかしら？」

「いや、どうせやらないといけないならさっさと終わらせたいなって思ってます。自信はないよ。」

そう言いながら俺は目の前の紐を強めに引っ張った。するとそのまま何も起きないままに10秒20秒と過ぎ去っていく。どうやら正解を引けたようだ。しかしそんな事を知る由もないギャリーは何も起きない現状を見てあたまをかしげている。

「……何も起きないわね。そんな事あるのかしら？」

「さあ？もしかしたらここじゃないどこかでなにか起きたかもしれないしなんとも言えないな。」

「確かにこの部屋じゃないなら何が起きても分からないわね……。次の部屋への扉も開かなかつたし他の紐も引っ張って見ようかしら？」
「うーん……取りあえずは待ちでいいんじゃないかな。5分10分経っても何も無いようであれば次の紐を引っ張ろう。」

「……アンタまるでなにか知ってそうな口ぶりね。一体何を知ってるのか教えてくれたりはしないのかしら？」

「俺は何も知らないし知ってたらとつくに情報共有してるよ。」

嘘をつく事に多少なりとも罪悪感を覚えながらゆっくりと体を伸ばす。どれくらいであるのオブジェクトは落ちて来るのだろう。イヴちゃん、メアリー……どうか落としてくれ。俺はそう願いながらゲームの時バラの絵が書いてあった所の床に立ちながらボーツと待っていた。

足止め

意図せず休憩時間となってしまった俺達は、何が起きてても対処しやすいように2人揃って部屋の端の方へと寄っていた。しかしそれから何が起こる訳でもなく刻一刻と時間だけが過ぎ去っていく。

「——ねえ、いつまでこうやって何もせずに待ってるつもりなの？
というか本当に何か起こるのかしら？」

「……さつき紐を引つ張った時に紐の先で何か動く感覚が指に伝わってきたんだ。だからおそらく何かしらのギミックが動いてるはず。」

「ふうん……。アンタがそこまで強く言うのならもう少し待ってみようかしら。」

「信じてもらえて何よりだよ。」

紐を引つ張ってから今までの間で考えていた言い訳が何とか通じてくれたようで俺はホッと一安心する。しかしこのまま待っていても本当に落ちて来る……と言うよりは2人が落としてくれるとは限らない。確かあの足場さえ降りてきてしまえばイヴちゃん達の方は進める事が出来てしまったような記憶がある。もし先に2人が進んでいた場合、俺たちはここで当分立ち往生するしかないだろう。

「早くなにか起きねえかなあ……。」

「本当にねえ……。——、あら？なにか上の方から引きずるような音が聞こえてこない？」

「ん？……確かに聞こえる様な気がするけど気のせいじゃない？」

「うーん。何故だか気のせいじゃない気がするのよねえ。」

なんて事を話していたら、突然部屋の上から三角柱の形を模した物が何の予兆もなく落ちてきた。ギャリーが引きずる音が聞こえると
言った時にこの後の展開的に心構えの出来ていた俺はそこまで驚く

ことは無かったが、ギヤリーは何が起るのか予測出来ていなかったのか「ぎゃー！」と大きな叫び声をあげる。

「うわっうるさっ！うるせえよギヤリー！」

「だって上からいきなりあんなのが落ちて来たのよ!?あれが当たってたら怪我じゃ済まないわよ！」

「でも俺たちに当たってないんだから一々喚くなよ!はあ……、こんながずっと続くようじゃ耳が痛くてたまったもんじゃねえよ……。」

「ご、ごめんなさい……。でもアタシも出したくてあんな大声出してのわけじゃないのよ……?」

「それにしてももうちよつと抑えてくれ……。」

俺は少々痛む頭を抑えながらギヤリーにそう伝えると落ちてきた三角柱の傍に行き俺たちの待機していたところの近くにあった三角の窪みまで押していく。持ち上げられないのは不便にも感じるが、まあできないことを嘆いても仕方ないだろう。

落ちてきた三角柱を窪みにはめると、今まで鍵の閉まっていた扉が自動的に開く。ようやくこの部屋から出られると考えるとなんと嬉しいが、この先の部屋のことを考えると余り喜べないでいる俺もいた。

「ん?どうしたのよヒロトシ。そんな所でぼーつとしてないで早く次の部屋に行きましょう?」

「おー……。それじゃあ行きますかあ。」

「随分とやる気を感じられない返事ねえ。さっ!さっさとこんな部屋出て2人と合流しましょ!」

「そうだな。早く言って合流しないとな。」

俺は重い腰を上げてギヤリーのいる扉の方へと歩いていく。その先に見たくないものがあると分かっているながら向かわないといけない

いのはなんとも気分が進まないが、だからといって進まない訳にも行かない。原作の知識がある事に少し辟易しつつ、その知識に感謝もしながら俺達は扉をくぐっていく――。

新しい仲間……？

俺達が扉を抜けるとそこはパツと見た感じ一本道の通路となっていた。奥の突き当たりには先程の気味の悪い人形が一体ポツンと床に置かれており、その隣には何やら文字が書かれている。

「あの部屋を過ぎたのにまたアイツと会うなんて……。なんであんな所に居るのよ……！」

「もしかしてなんだけど俺達を追ってここまで来たのかもよ？この美術館なら何が起きてもおかしくないしさ。」

「なんてはた迷惑な人形なのかしら……。こんなもの放っておいて先を急ぎましょ。触らぬ神に祟りなし、よ！」

「まあまあ。なんか文章も書いてあるし読んでみても遅くはないでしょ。」

「じゃあアタシはここで待つてるからアンター人で読んでちょうだい！アタシは読む気なんてサラサラないわ！」

ギャリーは突き当たりを左に数メートル進んだ先で立ち止まり、こちらの様子をチラチラと確認している。そんなギャリーをよそに俺は青い人形にそばに書かれている文字を読む。

〃こんにちは ヒロトシ

わたし ひとりで さみしいの

だから いっしょに つれてって〃

どうやらこの人形は何故だか知らないが俺達について行きたいようだ。俺としては多少気味が悪いだけだし何よりもこの後の事を考えると多少の気味の悪さなどは度外視して連れていくのは1つの手なのではないだろうか。

「ギャリー、この人形が連れて行って欲しいらしいけどどうする？俺

的には連れてくのはありだと思ってるけど。」

「ハア!? アンタ何言ってるの! そんなの連れて行ける訳無いでしょ! 馬鹿な事言ってるんで早く進むわよ!」

「あーあ……。ぐめんな人形……。くん? ちゃん? ……まあいいや。また機会があつたら一緒に行きこうや。」

俺はそう言ってる人形から離れてギヤリーの後を追う。すると何も無かった筈の通路の先になんの前触れもなく先程と同じ人形が現れる。一応分かつてはいたが念の為に振り返って先程の場所を確認してみるも人形がある訳もなく。

「ギヤリー、奴さんついてくる気満々だけどどうすんのさ。このままじやいたちごっこだぞ。」

「そんな事知らないわよ! 無視していくわよ!」

ギヤリーがそんな事を言ってるがさすがに完全にスルーをしてみようのもどうかと思うし、なんて書いてあったかさすがに覚えてなかったから気になったので横目でササツとなんて書いてあるのか読むと

“ねえ どうして つれてって くないの”

とこちらに問いかけてきているのを見て「ああ、こんなのもあったなあ」となんだか懐かしい気持ちになってくる。しかし読んでおいて何の返事をしないのも悪いと思い、俺は一言「ギヤリーに言ってくれ」と残して先へ進む。

程なくして再び突き当たりにつぶかる。ここの廊下はゲームの時と変わらずS字のように曲がりくねっているらしくなんとも面倒臭い作りになっている。

曲がり角を曲がると目の前には再びあの人形が俺達を待ち構えている。分かっていたとはいえ流石に少しうんざりしてきたのをぐっ

と我慢して人形の横に書いてある文章を読んでみる。

“なんで むしするの？ わたしのこと きらいなの？”

「……なんとも返しづらい質問をしてくるなあ。」

「この人形、今度はなんて言ってきたのよ？」

「“なんで むしするの？ わたしのこと きらいなの？” だってさ。俺は愛着は湧いてきたけどギャリーはどうよ。」

「そんなの嫌いに決まってるでしょ!? 何分かりきったこと聞いているのよー！」

「そんな事言ってるよこの先この人形になにか仕返しされるかもよ。」

「そんな不吉な事言わないでちょうだい！……もう好きにすればいいじゃない。連れていくのなら連れてけばいいわ。」

「あ、そう？ じゃあ連れてこうかな。人形さんや、落ちないように気をつけてな。」

「その人形の何がいいんだか……。アタシには分からないわ。」

ギャリーはそういうと足早に通路を先へと進んでいく。その先が俺にとってどういうものになるのかは分からないがどうにか3人を外の世界に出す。その目標をなんとか達成する為に俺はこの身を粉にする事を決めているが故にこの人形に媚びを売っておく事に越したことはない。

これがどんな変化を産むのかは分からないがやってやれない事はない。自分自身にそう言い聞かせて先に行ったギャリーを追いかけるように駆け足で先へと進んでいく。

人形の手柄

人形を連れていくと決めてからは特に何も起こらないままに次の部屋へと繋がる扉の前まで到着する。扉には鍵がかかっており多少強くノブを回したり押ししたり引いたりしてみるのがうんともすんとも言わない。

「あら？開かないわね……。ここまでに何か扉が開きそうな仕掛けなんてあったかしら？」

「いや、そんなものはなかった気がする。ここまでの代わり映えもしない廊下だったし。」

「うーん……。やつぱりそうよねえ……。じゃあその前の部屋かしら？あの部屋にまだ引いてない紐もあったしあの中のものどれか……？」

幾らここを通過する答えを知っていたとしても、その方法はもう既に試す事が出来ないものとなっている為他の方法を試すしかない。それか俺の頭の上を陣取っている青い人形がやる気を出して鍵を開けてくれれば俺らは特に何もせずに物事が解決するのでありがたい限りなのだが、当の本人は俺の頭の上でうつ伏せになりながらバランスをとって遊んでいる為それも望み薄だろう。

大の男2人がうんうんとその場で悩み惚けていると遊び飽きたのか、青い人形が俺の髪の毛をクイクイと引っ張ってくる。そのタイミングで扉付近の壁にパシャツという音と共に文字が浮かんでいる。

「さきに すすまないの？」

わたしにも できることが あつたら

いっていいよ！ てつだつてあげる！」

「ギャリーこれ！これならこの扉開くかもよ！」

「あら！この人形凄いじゃない！早速鍵を開けてもらおうよう頼みま

しよ！」

「そうだな！人形さんや、その鍵って開けられる？」

“あけられるよ　ちよつとまってるね！”

かの人形はそういうと動き始めるわけでも何をする訳でもなくその場でじつとしている。その姿を見ていて何もしていないように見えてしまうが、次の瞬間に鍵の開く音が扉の方から聞こえてくる。

俺とギャリーはその音を聞いてお互いに目を合わせる。そして俺達の目の前の鍵が開いた事を自覚すると感極まって思わずハイタッチをしてしまった。

「立ち止まってる時間が大半とはいえここもそこそ長かったしさつさと次の部屋に行こうか。」

「ええそうね！早くこの先に行つてイヴ達と合流しないと！」

「人形もありがとな。……お前さんって名前とかある？」

「確かに名前がなくっちゃ呼びづらいわね。いつその事アタシ達でつけちゃいましょうよ！」

「あ、それいいアイデア！」

俺たちはそんな話をしながら次の部屋へと入っていく。

部屋に入るとそこは見える限りはゲームの時と変わらないので部屋配置となっている。と言っても二部屋しか見えないので絶対に一緒だとは思っていないが大きくは変わっていないだろう。

「さて、ここまで来たのはいいけどここもそこそ広そうね。」

「まあいつも通りまずは一周まわってみようか。——君はどうする？俺達と一緒に行動するか？」

“わたしは　ここでまってるよ”

ふたりで　がんばってね”

人形はそう言うのと俺の頭から降りて例の部屋の前へと歩いていく。瞬間移動以外で移動できる事にギャリーは少し驚いていたがそれを無視して俺は人形の頭を一撫でする。

「おっけ。じゃあまた後で話そうな。……よし、ギャリーそろそろ行こうか。」

「……アンタって案外臆病じゃないのね。今の驚かなかったのは素直に尊敬するわ。」

「へ？……いやいや、今まで動くはずないものが動くなんて嫌という程見てきたじゃんか。ギャリーはそろそろ慣れようぜ。」

「こんなの一生懸かっても慣れるような気がしないわ……。」

なんだかんだ言っただけで人形を見てもマイナスな言葉を吐かなくなっている時点で慣れてきている証拠だと思いが、そこには敢えて触れずに軽く笑う。俺達はそんなほんわかとした雰囲気のまま部屋を回るかと思われたが、突如部屋の奥……と言うよりもすぐ近くの天井からドスンと何かが落とされたかのような音が聞こえてきて俺達の間緊張感が漂う。

「やっぱり一筋縄では行かなさそうね……。気を引き締めていきましようか。」

「今のがなんでもなければいいんだけど。まあなるようにしかならんだろ。」

何が起きたかは何となく分かってはいるけれどもやはり急にあんな音が聞こえてくると不安にもなるもの。ただ、イヴちゃんとメアリーがちゃんと進んで来ていることがわかったのでそこは少し安心もしている所。とにかく俺達も進むしかない意識を改め直して探索を始める。

絵の具玉

部屋をぐるりと一周回ってみると入ってきた所以以外にも扉が5つほどある事が確認できたので、その場でドアを開けないようにドアノブだけ回す。すると5つある扉のうち3つはドアノブが回りきらずに途中で止まってしまったので入れる扉は2つに絞られた。

因みに鍵の開いていなかった扉の中で、例のあの部屋の扉は、本当に氷に触れていると思う位には冷たかったのはギャリーに内緒だ。

「さて……2つまで選択肢を狭められたけどギャリーはどっちに入りたい？」

「どっちからでも変わらないでしょうし近い方からにしましょう？」

「おっけ。じゃあ……ふたばの扉の横の部屋から先に行こうか。」

「了解。アンタにリーダーは任せてんだからしっかりと指示を出してちょうだいね。」

「あーなんかそんな話もあったなあ。俺すっかり忘れてたわ。」

確かその話をしたのってギャラリーと合流してすぐくらいだった記憶があるが、それから今までの間に大量の敵から逃げたりメアリーと合流したり俺の記憶が戻ってきたりしたせいでギャラリーから言われるまで全くもって覚えていなかった。

やっぱり印象に残るような強い記憶を生み出す事は御茶の子さいさいなこの美術館では、リーダー云々なんて小さい出来事が負けてしまうのは致し方ないだろう。

「ちよつとく！大事な事なんだからしっかりと覚えてなさいよー！」

「ごめんごめん。ここまで色々ありすぎたからついつい……ね？」

「んもう……。これからは覚えてなさいよ？」

「ハイハイ。任せておきんしゃい。」

「……信用出来ないわあ。まあいいけど。」

そんな風に先程の緊張感も感じられない位にほんわかとした空気感のまま扉に向かって歩いていく。

扉の前に着くと青人形も気になったのか、扉の横にいて何か言っているようだ。

「ここは なにもないと おもうよ

それでも はいるの?」

「うん。自分の目で色々見て回りたいからね。——それにこの部屋からここからの脱出が始まる……でしょ?」

「……ヒロトシ、一体なんの事を言ってるのかしら? アタシにも分かるように言ってくれろ?」

「いや、なんでもないよ。そんな事よりも早速この部屋に入ろうか。」

俺はそう言って扉のノブに手をかける。そしてそのまま扉を開けると、7つの台座と壁に大きなパレットのかけられている部屋となっていた。

パレットの下には説明の書かれているであろう紙が貼ってあり、それ以外には何も無いこの部屋を見渡しているギャリーを横目に俺はパレットの方へとスタスタと歩いていく。

『七つの色彩……絵の具玉を 集めよ

さすれば 部屋は色づき

そなたの 架け橋となるだろう』

「絵の具玉……? そんなものどこにあるのかしら。ヒロトシ、アンタはどんなのか分かる?」

「いや分かるわけないでしょ。ていうか俺達ここまで一緒にいたんだからそれらしきものを見かけてたら言ってるよ。」

「それもそうよね……。まあこの部屋にその絵の具玉とやらは無いみたいだし部屋を出て探してみましょ。」

「そうだな。足元には十分気をつけて行こうか。」

そう言つて俺達は足早に部屋を出る。一応青人形の言っている事が変わっているか確認したけれど特に何も変わってなかった為そのまま1度来た道に戻っていく。

そのまま入口付近まで戻ってきたら黄色い玉が1つ床にコロリと転がっているのが確認できた。それを見つけた瞬間ギヤリーが小走りで触りに行くと、目を少し大きくして驚いている。

「何かしらこれ……。柔らかいけど握ったら割れそうだわ。もしかしてこれが絵の具玉?……ヒロトシも触ってみる?」

「いや、今回は俺はいいや。」

「あらそう?なんとも言えない感触で癖になるかもしれないわよ?——あら……消えちゃったわ。アンタも維持を張らずに触ればよかったのに。」

「まあ台座は7つあったし多分あそこに絵の具玉が移動するんだろうからまだ触る機会もあるさ。」

俺はそう言つてゆっくりと次の部屋へと歩き出すと、ギヤリーが慌てて立ち上がつてこちらに着いてくる。それをろくに確認する事もなくそのまま次の部屋へと向かっていく。

赤い霧

扉の前に着いた俺達なんだが先程一周した時も感じたのだが、まず初めに疑問に思ったのは「この部屋だけ扉の密閉感がすごい」という事である。

この部屋にはなんだかよく分からないが毒ガスのようなものが充満しているからこそこの密閉感なのだろうが、そんな事を知る由もないギャリーは少し不安がっているような表情をしている。

「ねえヒロトシ……。この部屋だけなんか異質じゃない？なんでこんなにピチツと閉まってるのかしら……。」

「確かに謎だなあ。……文字通り臭いものに蓋をしてるのかもな。」

「なくに？じゃあこの部屋の中には臭いものが入ってるって事？いやね。シユールストレミングなんて無いといいけど。」

「それは確かにやばいわ。たしかあれって世界一臭いんだっけ？ただ美術館とは関係無いし多分それは無いんじゃない？」

「……まあそれもそうね。取りあえず警戒するに越したことはないことは理解できたわ。」

「そうだな。ちよつと軽く覗いて見ようか。何があるか確認しないとだしね。」

そう言つて俺達はノブをじつと見つめる。正直このドアノブを引きたくはない。だって中は謎のダメージの食らう赤い霧状のものが充満しているのだから。

お互いに心の準備が出来ていつでも行ける状態になると、声を一言も発さずに視線とジェスチャーのみでコミュニケーションを取り始める。といつてもジェスチャーをしているのは俺だけでギャリーはそれを見て頷いているだけなのだが。

とにかく部屋に入らない事には何も始まらないと思ひ俺はドアノブに手をかけてギャリーについて来いと身振りで伝える。

決意の鈍る前に息を止めて部屋に突撃すると、やはりと言うべきか

「まあ今はそんなもの出てない訳だしどれだけ先かも分からない事を考えても仕方ない。取りあえずはその傘の使い道を考えよう。」

俺達は様々な疑問が未だに残る中、とりあえず目先の事を何とかしようと考えてる。その様子を心配そうな目をした『心配』が俺達の背中を見守っていた。

「——それじゃあ取りあえずはこれを取った事で何が変わったか見回ろうか。」

「まあそれが安定じゃないかしら。傘だってアタシ達が差すつて訳じゃあないだろうしね。」

「これでどっか変わってくれてたら有難いんだけどな。まあなんとかなるだろ。」

「……アンタって本当にお気楽主義よね。」

なんとも不本意な称号をいただいた訳だがそう思われても致し方ないのは自覚している。俺だってギャリーと同じ状況に陥って、そんな状況下で「なんとかなるだろ。」なんて言われたら同じ感想を抱くと思う。

でもここまで上手く攻略できている自信はあるし、原作と大きくかけ離れた展開も多くは起きていない。初めのあの絵画と青人形を除いて。てか今思うとあの絵画ってあんなにお喋りだったんだなってびっくりしている。だって原作の場合あの絵画自信が喋っているような描写は一切されていなかったんだから。

「ちよつとー。いつまでぼーつとしてんのよー。」

「あ……。ごめんごめん、色々思い出してきた。それじゃあ行こうか。」
「アンタってホント色々と思いつねえ。そんなにいい思い出ばかりなのかしら?。」

「んー。そういう訳じゃないんだけどなんかそんな話もあったなーって感じでなんかつい思い出しちゃうんだよね。」

「ふーん？よく分からないけど大変そうね。」

「悪いね。変なくせに付き合わせちゃって。」

俺がそう言うとギャラリーは何でもなさげに「大丈夫よ。」と言ってくれた。いくら分かっていたとはいえイケメン過ぎないか？なんてそんな事を思いながら俺達はゆつくりと歩いていく。

原作では起こらなかったこれから起こる事象に少しの期待と恐怖を抱きながら俺たちは進んでいく。きっとその先に希望が見つかる
と信じて――。

釣り針

ガスの充満していた部屋から離れた俺達は、先程一周した時となにか変わってないか確認する事にした。とは言ってもイヴちゃん達がどれだけ進んだかによってこちらに変化が出てくるものなのであまり期待しない方がいいのかもしれない。

そんな事を思いながら探索していくと、扉の上にあつた双葉は木にまで成長し、海の中のような絵画からは普通のものよりも大きい釣り針が垂れ下がってきていた。

「ギヤリー、釣り針と扉どっちから確認する？」

「うーん、できる事も少なそうだし釣り針の方を先に見てみてもいいんじゃないかしら。どうせこんな美術館何だから上で誰かが本当に釣りをしてるんでしょ。」

「あー確かにそれは有り得るかも。じゃあさつき取った傘なんて引っ掛けてみる？」

「あーそれは有りね！どうせなにか引っ掛けるか触るくらいしか思いつかないし、針に触って怪我しても馬鹿らしいものね。」

「じゃあギヤリー、その持つてる傘を早速掛けてみてよ。」

俺がそう言うとギヤリーは針に触らないように気をつけながら傘の持ち手を針に引っ掛けた。するとそれを待っていたかのように傘はスルスルと絵画の世界に入りながら上へと上がっていく。今まで見ていたドットのものとは比べ物にならないくらいの衝撃がこの絵面にはあると思うがこれを録画していた所で誰に見せたとしてもCGだと思われて終わりだろう。

傘が絵画の中から見えなくなると俺は今の状態で絵画の中に物が入るのか気になり、手を絵画の方へと伸ばしていく。その姿を見たギヤリーはギョツとして慌てて俺の手を掴んで止めてくる。

「ち、ちよつとちよつと！アンタ何しようとしてんのよ！」

「え？だってこの中に何があるか気になるじゃん。それにこの絵なら手をつ突っ込んで何とかなりそうだしさ。」

「そういう問題かしら!?!もう少し危機感を持った方がいいんじゃない!?!」

「えー。これくらい大丈夫でしょー。それにすぐそこには水の枯れない花瓶もあるしさー。いけるいけるー。」

「なんでそんなに棒読みなのよ……。まあどうしてもやりたければやればいいんじゃない?アタシはどうなっても知らないわよ。」

「じゃ、遠慮なくー。——おお、冷たくもなんか少し暖かい感じのすこの感覚……。マジで水っぽいな。ホントはこの中に頭突っ込んで中がどうなってるのか確認したいけどさすがに辞めとこうか。」

「……アンタの好奇心は猫どころかアタシまで殺されそうね。」

俺が絵画の中から手を抜くタイミングでギャリーから声をかけられる。

そのあまりの言い分に少しムツときたが、今自分のしでかした行動を鑑みて強く否定できなかつた為苦笑いで流しておく事にする。しかしこれである程度の時間稼ぎも出来た事だしイヴちゃんとメアリーは傘をあのか絵画に届けてくれただろう。

そう期待を馳せて俺達は漸く変化が確認できた扉の方へと向かった。

元々つぼみの生えていた(ように見えた)扉は、今では立派な木にまで成長を遂げていた。扉の鍵も植物の成長のお陰で解錠されらしく先程見に来た時は入れなかつた扉も今は開くようになっていた。

「さて、入ろうか。」

「そうね……。アタシなんか疲れたから早く中に入って一休みしたいわ。」

「なんでそんなに疲れたのさ。なんか疲れるような事あった?」

「アンタのせいよ……。まったくもう……。あたしにもうこれ以上突っ込ませないで欲しいわ……。」

「えー。楽しかったのになー。」

「アタシは無駄に疲れるだけで楽しくないのよ！」

ギャリーはそうやってぷりぷりと怒りながら部屋の中へズンズンと足を進めていく。俺はその後をにやけ顔を辞められないままにっいて行く。

実入りの無い部屋

部屋に入るとすぐ目の前が幅の狭い壁になっており、1つの部屋を2つに分断しているようだ。分かれている部屋はどこか変わっているか気になって視線を向けてみるが、原作と同じように入口から向かって左側は道が出来ているが右側は本棚が邪魔をして通れそうにない。

あまり大きな原作改変は起きていないようで少し安心しつつ不安にも思いながらギャリーの向かったであろう左側の部屋へと入る。

「ギャリー、なにか掘り出し物はあった？」

「絵の具玉が1つあったくらいね。本棚はまだ確認してないけどパツと確認した感じは特に何もなさそうよ。」

「そっか。じゃあ軽く本棚を確認したらもう1回見てない所がないか見て回ろっか。」

「そうねえ……。もしかしたらあの霧の充満していた部屋も霧が消えてるかもしれないものね。」

「そそ。それにももしかしたら花瓶が置かれてその奥まで探索できるようになってるかもしれないからね。」

「でも間の部屋には出来れば入りたくないわね……。ほんとにアレ何とかならないのかしら。」

俺達はそんな感じで駄弁りながらお互いに本棚を改めて確認していく。すると俺が確認していた本棚に個人的に興味の惹かれる本のタイトルを見つけてしまった。その名も『恐怖』。普段だったら特に気にする事もないであろう本のタイトルのだが、如何せんこんな不気味な雰囲気のある場所にいるもんだから恐怖とは何かみたいな哲学的な事がなんだか気になってきている。

これも雰囲気飲まれていると言われればそれまでなんだが気になつてしまったものは仕方がないので何も気にせずに本を手取る。

『一人でいると 恐ろしい

二人でいると 安心できる

三人でいると ……』

この先は何者かに破られている為に確認する事は出来なかった。ろくに情報を得る事の出来ないままに俺は本棚の続きを確認していく。

本棚が4つあるうちの2つを確認し終えて他に気になるものがない事を確認した俺はギャリーが確認し終わるのをゆっくりと待つ。

俺が待ち始めてからそんなに時間も掛からずに向こうの2つを確認し終えたようだがその表情は余り芳しくないようにも見える。

「こっちは何もいい情報はなかったけどそっちはどうだった？」

「アタシも『色彩の極意』って本くらいしかめぼしいものはなかったわね。」

「ならやつぱあの霧の部屋に入るしかないな。今度は奥まで頑張って探索してみようか。」

「じゃあその役目はアタシに任せてちょうだい。あたしの薔薇の方がアタシの薔薇よりシルエットが少し大きいしきつときつとアタシの方が危なげなく行つて帰つて来れると思うわ。」

「……ギャリーはいいのか？そんな犠牲みたいな事しなくてもいいぞ？俺も多分行けるだろうしき。」

「いいのよ。アタシもやれば出来るってところを見せないとね！それにアタシも少し休んだ方がいいわよ？少し顔色が悪くなってるわ。」

「そうか？じゃあお言葉に甘えて少し休ませてもらおうかな。……ここで待ってていい？」

「ええ……仕方ないわねえ。じゃあこの部屋で待つてなさい。その代わりアタシが戻ってくるまで部屋から1歩も出るんじゃないわよ！」
「分かっているって。少しここで仮眠をとるから戻ってきたら起こしてくれ。」

「……アタツて妙にずぶといとところがあるわよね。まあいいわ、そ

れじゃあゆつくり休んでなさい。」

ギャリーがそういつて部屋から出ていくのを見送ったら俺は部屋の真ん中あたりでゆつくりと寝転がる。その行動は自分でも驚くくらいに違和感のない感覚に少し気味の悪さも感じながら俺はゆつくりとまぶたを閉じた。

三度目の正直

俺はゆっくりと体を休める為に鞆を枕にして寝に入ったはずなのに気がつけば俺はアトリエのような場所に立っていた。そして目の前にはこちらに完全に背を向けてこちらに気づいた様子も見せず一心不乱にキャンバスに色をつけていく男性がいた。

その瞬間にこの美術館で見た今までの夢の内容を思い出し、それのお陰であの人物のなんとなくの予想が着いてしまった。

どれだけ自分が危ない橋を渡っていたのか漸く認識しつつ、過去の行動に対する後悔とあの人物の懐の深さに感謝の気持ちが湧き上がってくる。

そんな事を思つて居た堪れない気持ちになつていると、向こうも一段落着いたのかこちらに気づいてニコニコとした表情をこちらに向けながら小さく手を振ってくれる。

「やあ。今日は今までよりも一段と大人しいじゃないか。何か思うところがあるのかい？」

「あ、いや、その……。今まで生意気な口聞いてすいませんでした。爺さんの言う通り、俺って色々忘れてたんすね。」

「――、アツハツハツハツハ！そうかそうか！やっぱ君はいい子だね。しっかりと悪い事を認識して謝る事が出来てるじゃないか。やっぱ君を選んだ甲斐があつたよ。」

そう言つて爺さんは俺の頭をインクの着いた手でワシワシと撫でてきた。正直インクが髪の毛に着いてしまうのはたとえ夢の中でもいい気分はしなかったが、何故だかその手を払う気には一切ならなかった。

「それに君の記憶は私が奪つてしまったようなものだからね。君が謝る事は無いんだよ。」

「でもカッとした勢いとは言え暴言を吐いてしまったのは確かな事な

んで……。俺に出来ることがあるならなんでも言ってください。」

「うーん……。ならメアリーを幸せにしてあげてくれないか？どんな形でもいいんだ。」

「それって——。」

「おっと、私の事についてはあまり口外しないでくれ。たとえ夢の中でもね。……まあ君の思っている通りだとは思うけど。」

「……分かりました。どちらにせよメアリーもあそこから脱出させる予定だったんですから。他には何かないですか？」

俺はこのお願いについて自分の目標と被っていると思った為、他に俺に出来る事はないかと質問をぶつけるが向こうからの返答は横に1つ首を振るだけだった。

その行動を見てなんだか少し寂しい気持ちになりつつ、それを出来る限り表に出さずに適当に相槌を打つ。

そうこうしているうちにこの世界にサヨナラを告げる睡魔が俺を襲ってくる。もう少し爺さんと話していたい気持ちはやまやまのだが俺の身体はそれを良しとはしてくれないらしい。すぐにまともな喋れなくなるくらいまでには眠気に襲われていると爺さんが俺に語りかけてくる。

「ヒロトシ、君の旅路は大きな岐路を迎えることだろう。しかし考える事を辞めてはダメだよ。君のこれからに幸多からん事を。」

俺はその声を聞きながら睡魔に身を任せて意識を落としていく。ぞの先の未来を信じて——。

真実

——暗闇が徐々に明るくなっていく。音が聞こえ始め思考もゆっくりと動き始める。指を動かし首を動かし、そしてようやくゆっくりとまぶたを開ける——。

「——、んあ……。あれ、ギャリー戻ってきてたんだ……。お疲れちゃん。」

「あら、随分と眠そうじゃない。そんなんで大丈夫なのかしら？」

「多分大丈夫……。あー、上着なんてかけて貰ってスマンね。あんがとさん。」

「別にこれくらいどうって事無いわよ。それに何もかけてないまま寝てるのを見てると何だか可愛そうに思えちゃってね。」

「お前は俺の母ちゃんかよ……。」

「アンタみたいなのが子供だったら苦労しそうね。というかアタシは男なんだからそれを言うなら父ちゃんでしょうが。」

うつらうつらと頭もまともに動いていないような状態ながらギャリーと会話をしながら夢の内容を思い出せるかそれとなく確認する。

過去2回に加えて今回の夢まで全てしっかりとその時の感情まで思い出せる事を確かめた俺は改めてこの世界で誰よりも異質な存在な事を再認識する。

すると、俺が余程浮かない顔をしていたのかギャリーが心配するような面持ちでこちらを覗いてくる。

「ギャリー、そんな顔をしなくても心配するような事なんて何もないよ。まだ眠いだけだから。」

「そうかしら……。魘されてはいなかったけどもしかしたら夢見が悪かったんじゃないかしら？」

「そんなことも無い。4人で楽しく外の世界を満喫してる夢を見たよ。」

「そう……。現実にならぬようにアタシ達も頑張らないとね。」

「確かに。——で、収穫は何かあったか？」

「あ、そうそうその話をしないとイケなかったわね。アンタの言う通りあの部屋の奥に紐が下がってたわ。」

「お、その話し方なら紐を引つ張つてきたって事か。そしたら何が起こったよ。」

「隣の部屋に行けるようになったわね。ほかはどの部屋に行ってみても変わったことは無かったわ。開かない所は開かないままだったし。」

「じゃあ隣の部屋にまたなんかあるって言う事かねえ……。んで？ギャリーはもう隣の部屋は探索し終わったのか？」

「流石にそこまでのワンマンプレイはしないわ。今はアンタ待ちよ。」
「おお、そりや失敬。じゃあ早速行きますか。」

俺はそう言って立ち上がるとすぐに隣の部屋へと足を向ける。後ろから「ちよつと待ちなさいよ」と言われるがそれを全く無視してズカズカと歩いていく。

「ほーん。隣と特に何が違うとかはそんなにない感じか。かかっている絵くらいしか変わらんな。」

「もう！本をしまうくらい待つてくれないんじやないかしら!? アンタ本当に意地が悪いわね！」

「いや、すぐそこだし扉を出る訳でもないからいいかなって。」

「ホント信じらんないわ！さっきのアタシの優しさを返してちょうだいー！」

「後でな。今から本棚の中身確認しないとイケないから。」

「全く！次やったら本当に許さないから覚えておきなさいよ！」

「ハイハイ。」

俺は適当に返事をしながら左側の本棚に向かっていく。ギャリーがメアリーの正体を知る事のできる本は右側にあるのだが、ギャリー

にはメアリーが何者なのか知る権利があると思ったしこのイベントはかなり重要なものだと思っっている為ギャリーを向かわせる。

「……………な、なんで……………。え？嘘でしょ……………これ……………」

「メアリー……………?!」

閑話：1周年&UA10000突破記念・if

今日はギャリーに呼ばれてイヴの家へと向かう。何故ギャリーに呼ばれたのにイヴの家なのかは分からないが、何かが準備されているのだろうか。もしそうだった場合メアリーもほぼ必ずいる事だろうし、俺達4人に関連する何かがあるのだろう。

しかし俺自身も当事者なのだろうが、正直呼ばれる理由に心当たりがあまりない為に少しワクワクしている。あの3人……特にギャリーには口が裂けても言いたくないが。

「おっイヴ、おーつす。待たせたか？」

「ううん！わたしはお兄さんが見えたから家から出てきたただけだもん！気にしなくていいよ！」

「そうならいいんだけど。もう2人は到着してる？」

「うん！2人とももう来て準備してるよ！」

準備……？と俺は頭を傾げるがどうせ家の中に入れば分かるだろうと思いを止めてイヴの後を着いていく。

家に入ると、なんだか甘い匂いがどこからか匂ってくる。その匂いに俺の意識は少しだけ持っていかれるが、直ぐにイヴの方へ意識を戻してその後ろ姿を追っていくとギャリーとメアリーがわちゃわちゃしているのが俺の視界に入る。

「……2人ともなんでそんなにテンション上がってるの？いやテンションの意味が緊張だって事は知ってるから使い方を間違ってる事は言わなくていいんだけど。」

「なんでって……私達が出会って1周年記念の集まりでしょ？もしかしてトシって覚えてなかったの？」

「え〜!?信じられなあい！ちよつとアンタ〜！記念日を覚えてないなんて女の子に嫌われるわよ〜。」

「ギャリーは少しお黙り。でもそっか、俺達ってあの美術館で会って

からもうそんなに経つのか。時の流れは早いもんだなあ……。」「
「お兄さん、その言い方はなんか親戚のおじさんみたいだよ……。」

そんなイヴのなかなか心にグサリと刺さるツツコミを受けてなんとも言えない気持ちになりながらも気にしていない振りをして話を続ける。

「それで記念日なのはわかったけど何するつもりなのさ。俺この事について一切聞いてないし、何をやるにしても準備できてないぞ。」

「いつもアンタに頼りっぱなしじゃアタシも年長者の威厳つてものが廃るのよ。それにサプライズ的な事も1回はしてみたかったし！」

「そうそう！いつもトシに任せてたらトシ自身が全力で楽しめないでしょ？だから今回は私達の番！」

「お兄さんにはすぐくお世話になったからどんな事でもお返しが出来ればなって思ってたんだ。」

3人から暖かい言葉を貰い、少し心がなんとも言葉では言い表せる事の出来ない感じになってしまった。しかしそんな事もお構い無しに3人……と言うよりもメアリーとギャリーが話を進めていく。

「それじゃあ早速移動しましょ！アタシアレに行ってみたいのよ！おすし屋さん！」

「え〜！おすしって確か魚を生で食べるんでしょ〜？本当に美味しいの？」

「それが美味しいらしいのよ！商品の中にはデビルフィッシュもあるらしいから少し怖いけど試してみる価値はあるわ！」

「デビルフィッシュ……ああタコか。タコは確かに美味しいな。俺はそれよりもサーモンとかマグロとかの方が好きだけど。」

「ねえお兄さん、もしわたしが食べられなかったら食べてくれる？」

「あいよ。気になったら取っちゃいな。でもまあ基本寿司って2貫で1セットだからあんまり深く考えんでもいいぞ。」

「へえ……いやっぱり日本ってブルジョワジーだね！」

なんだか日本の文化がねじ曲がって伝わっている所を初めてまともにも体感したかもしれないと感じながら俺はイヴの頭を自分なりに丁寧に撫でる。

なんだか最近はいヴと会う度に1回は頭を撫でている気がするが、イヴの頭が撫でやすい位置にあるのがいけないと思う。でもこれが“Ib”ファンにバレたら殺されかねないなんて思ったりもするが、今まで外に4人で出かけて一度もバレた事が無いのできつと大丈夫だろう。

集合をしたのはいいが皆お昼を食べ終えており、結局飯にするには少し早すぎるということでアミューズメントパークに行つて買い物やゲーセン、ちよつとしたアトラクションを楽しんだ。

普段の集まりなら子供二人が楽しめるようしつかりと下調べをして色々と万全にしておくのだが今回は俺がゲストらしいのでそういった事はできる限り何も考えないようにした。

そしてついにギャリーお待ちかねの寿司屋である。とは言つてもそんなに潤沢に遊ぶ為の資金がある訳でもないのでチェーン店の回転寿司ではあるが、まあこれも紛れもなく寿司なのだから大丈夫だろう。

「おお……これがあのおすし屋さん……！日本人はやっぱり凄いわね！」

「ねえねえギャリー！レジスターの横にガチャガチャがあるよ！やつ

ていい?」

「それは帰る時にしなさい!それよりも先におすし食べるわよ!」

「ねえお兄さん。あのノートって何のためにあるの?」

「あれは混んでる時に順番待ちをする時に自分の名前を書く為のものだ。店員もあれを見て次のお客を呼ぶんだよ。」

「へえ。わたしの近くのお店では見た事ないなあ。」

「こういうお店は待つ為の椅子があるからどういう順番で並んでるのか分からなくなるからなあ。ま、たまに自分のペンネームみたいな名前を書くやつもいるけど。」

「今回は書かなくていいの?」

「今回は偶然そんなに混んでないから書かなくてもすぐ席に連れていかれると思うぞ。」

若干2名テンションの高い奴らがいるがそれは放って置く。多分席に着くとまた煩くなるだろうし相手にしない方が俺も疲れないだろう。

案の定席に着いた途端やれこのモニターはなんだだのこの黒いボタンはなんだだのと言ってくるので、他の客の迷惑のことも考えて人差し指を立てて口の前へと持っていく。

すると流石に俺の伝えたい事が分かったのか2人は少し顔を赤くして恥ずかしそうに黙る。

それを確認した俺は呆れながらもお店の説明をしていく。

「まずこのお店はこのレーンに流れているお寿司は基本自由にとつていい。で、その上にある段は注文の品が流れてくるレーンだからこの机の前で止まらない限り、と言うか俺達の頼んだ物じゃない限り取るな。注文したいならそのパネルからする。ここまではいいか?」

「アタシは大丈夫よ!」

「私達も大丈夫！ね、イヴ？」

「うん！」

「おっけ。じゃあ続きな。注文した品でもこのレーンに乗らないものは従業員がここまで運んでくるから気にせず注文して大丈夫。んでこの黒いボタンは熱湯が出る。上にコップがあるだろ？それにこのお茶の粉を入れてお茶を作る為のものだ。だから決して素手のまま押さないように。」

「えっ……そうだったのね。説明受ける前に押すところだったわ。」
「私も何も考えずに押すところだった……。トシ、教えてくれてありがと！」

「いくらテンションが上がってるとはいえ何も考えずに行動するのはどうかと思うぞ……。」

「ま、まあメアリーもギャリーもずっと前から楽しみにしてたみたいだし仕方ないと思うよ？」

「それでも限度があるだろ……。」

そう言つて2人を擁護するイヴからは何とも苦労人の空気を感じるが俺はあえて深くは突っ込まずに話を続けた。

「最後に食べ終わった皿はレーンに戻すな。ここは食べ放題じゃないから最終的に皿の合計枚数で支払い金額が決まる。だからその枚数を誤魔化した場合普通に捕まるからな。気をつけろよ。」

「なんか面倒臭いシステムねえ……。ま、邪魔にならないようにどこか机の隅に置いておけばいいのよね？」

「ま、そういう事だな。だから出来れば俺とギャリーのどちらかは廊下側のほうが好ましいな。こつちに空いた皿を渡してくれれば積んでおいてやるからさ。」

「じゃあ私はレーン側に居るー！イヴもこつちで色んなおすし食べよ！」

「うん！」

「……アタシ達ここからだとお寿司取れないわよ？」

「まあいざとなつたらもう1席どこか準備してもらうか。子供組と大

人組で別れてもいいし、ほかのやつと話したくなったら席を移動しても良いだろうしよ。」

「その時まで席が空いていけばいいんだけどね……。」

「まあ今は平日で時間もお昼時より少しズレてるから何とかなるだろ。それにあの2人なら頼めばとってくれるさ。」

「……まあそうね。それじゃあ楽しましょっか！」

「ふう……。ここまで生魚を食べたのは初めてよ。生でも意外とイケるものなのね。」

「私もお腹いっぱい！こんなに美味しい生魚初めてかも！」

「わたしもまんぷくく！お兄さん、ギャリー！ごちそうさまでした！」

寿司も十分に堪能し俺達は店を出た。お会計の際に店員さんがお皿を数えている時にはなんでだか分からないがギャリーとメアリーが目をキラキラさせながら店員さんの方を見つめているのを申し訳なく思ったりしながらも無事何事もなく会計まで向かう事が出来た。

店員さん、ウチのバカ2人が申し訳ありませんでした。そう心の中で謝っておく。

「おー。満足してくれたなら何よりだ。皆はどの寿司が1番好き？」

「私は甘エビが1番良かった！名前の通り甘くてそれでいて身はプリプリしてて……。もうサイコー！」

「アタシはタマゴね。あの卵焼きの甘さが本当にたまらなかつたわ！」

「メアリーは兎も角ギャリー……。魚じゃねえのかよ……。」

「それくらいあの卵焼きが気に入ったのよ！悪いかしら!？」

「いや……。悪くは無いけどさ……。なんと言うか男にしちゃ可愛い寿

「司ネタ選ぶなって。おこちやま舌か？」

「ムキー！」

初めての寿司という事で何が一番気に入ったかを聞いてみると、メアリーははとでも彼女らしい可愛らしいチョイスとなっていた。それに対しギャリーはなんと言うかギャリーらしいチョイスだなと思いつきながら少し弄る。

最後はイヴなのだがこの子は何が気に入ったのだろうか。

「イヴは何が一番美味しく感じた？」

「私は赤貝が一番美味しかった！あの食感とか味とかすごく美味しかった！」

「おお……意外と渋い所選ぶな。でも赤貝美味しいもんな、分かる。」

思っていた以上に渋いチョイスをしてきたイヴに少し驚いたものの、確かに貝特有のあの食感はいいものだと思う俺もいるのでイヴの意見に賛同しておく。

しかしまさかメアリーとイヴのチョイスの方がギャリーよりもしつかりお寿司と言うかなんと言うか。ギャリーがタマゴを選ぶと思つてなかった事もありそれに関する感想しか浮かばない。おのれギャリー。

「お兄さんつておすしの中で何が一番好きなの？」

「俺？俺はまあサーモンかな。なんだかんだ言つてあの味が一番俺の好きなやつだな。」

「あー確かにあれも美味しかった！トシもいいセンスしてるね！」

「お褒めに預かり光栄です。ここでのんびりしててもあれだしさつさと帰るぞー。ギャリー、車は任せた。」

「了解。ここまで回してくるからちよつと待っててちようだい。」

ギャリーが車の方へと走っているのを見ながら俺は今日1日を振

り返っていた。昼間のサプライズから始まりアミューズメントパーク、そして最後に寿司屋。行った場所は多くはないとはいえずごく楽しめた1日だったと胸を張って言えるだろう。

「ねえトシ。今日は楽しかった?」

「——ああ。すっげえ楽しかった。ありがとな、メアリー。」

「お兄さんっ!わたしは?わたしは?」

「イヴもありがと。こんなに楽しかったのマジで久々だったわ。」

俺達はどれだけ年が離れていようと、どれだけ住んでる場所が離れていようと繋がれる事を俺の中で再認識した1日になったのであった——。

本音

「メアリー……!?!」

そう言うと共にギャリーの目が大きく見開かれる。しかし後に言葉が続かないあたりだいたいぶ動揺しているようだ。

そう呆けているのも束の間、こちらへ顔を向けて何かを訴えかけてきているが俺は元々知っていた事だし、ただでさえ黙っている事の多い俺がこの事実を隠すのも忍びなくなったので俺の知っている事をギャリーの持つている本を見ずに言う事にした。

『メアリー』。製作年不明。ゲルテナが生涯最後に描かれたという逸話の持つ絵画……ってところかね。」

「!?ヒロトシ何か知っているの!?知ってんならアタシに教えてちょうだい!」

「もちろん。とは言うものの俺の知ってる事はそんなくらいだぞ。まああと強いて言うならここから出たがってるくらいか。」

「そんな事はアタシも知ってるのよ!」

「まあまあ少し落ち着けて。そんな怒りを覚えたところで事態は何も変わらんぞ。」

「誰のせいだどっ!——、はあ……確かに熱くなりすぎてたわ。一日落ち着きましょ……。」

ギャリーがキレた時は掴みかかってくるかのような勢いだっただけに少し身構えたが、流石にそんな事はしてこなかった。大人としての自制が働いたのか、それとも怒っている事を馬鹿らしく感じたのか。何にせよこの場の空気が荒んでいくのを感じながら俺はギャリーからどんな言葉をかけられるのか待つ事にした。

「……。アタシはイヴを守るわ。メアリーもアイツらと同じとわかってしまった今はもうあの子も敵にしか思えないもの。」

「そっか……。なら俺はメアリーと一緒に動く事にするよ。合流出来たらの話だけどね。」

「なんでっ……。！なんでアンタはそこまであの子を庇う事が出来るのよっ！あの子も『美術品』なのよ!！」

「——だってメアリーは『生きている』から。ちゃんと自分の意思を持って進んでるから。それじゃ駄目か?」

「生きて、る?アンタ、一体何を言っているのかしら!?!絵画が生きているわけないじゃない!」

そう言われて俺はハツとする。確かに俺たちの文化に『付喪神』という物はあるけれど、海外にそういったものがあると聞いたことは無い。似たような事例で物に悪霊が取り憑いてこちらを襲ってくるという映画などはあるが、物そのものが妖怪へと昇華するなんて事は日本の作品でしか見た事がなかった。

「……俺の国には面白い文化があるんだ。」

「急に何言ってるの?」

「まあ聞けって。——それは『付喪神』って言ってな?物が長い年月を経て妖怪……。まあ精霊みたいなものになっちゃってしまってもものなんだ。」

「……その妖怪って悪さをする存在なのかしら?」

「人間に悪さをするやつもいれば、逆に人間の味方になってくれる奴もいる。どっちとも言えないさ。——でも確かな事はその長い年月の間にいい感情を向けられていた付喪神は人間と良好な関係になっってくれるんだ。」

「……。」

俺の憶測なども含めて付喪神の説明をする。俺の言いたい事の前説なのだが伝えたい事は大まかに伝わっているだろう。だがそれでも最後まで言葉にしないと伝えたい事が伝わらないと思い、俺は言葉を続ける。

「俺はメアリーを付喪神の一種だと思ってる。それに悪いヤツなら俺が始めにぶつかった時点で何枚か花卉が散っていてもおかしくない。でもそれがないって事は俺達が目の敵にしない限り向こうが襲ってくる事もないと思うんだ。」

「まあ……確かにアンタはあの子とぶつかったのに花卉は1枚も散ってなかったわね……。で、でもあれはどうにかしてうまく誤魔化していたんじゃないかしら?」

「それはないと思うよ。それならあの青人形の部屋辺りで俺達に攻撃してきそうなものだもの。俺達油断してたしそれに逃げ場が廊下よりも少ないからさ。」

「言いたい事はわからなくは無いけどだからと言ってそんなに信じきる事は出来ないわ……。」

「まあ俺が言いたいのにはメアリーは何も悪くないと俺は思ってるって事。だって誰でもずっと同じ所に居たくは無いんだし、それに色んな経験をあの子にさせてあげたいんだ。」

俺がそこまで言うときギャリーは何かを考えるようにして黙りこくってしまふ。それを横目に俺は『聞き耳』の傍へと行き、それに向かって小声で「メアリーに向かって」語りかける。

「メアリー、俺は誰が何と言おうとお前の味方になるからヤケになるなよ。」

この声が本当にメアリーに届いているのかは分からないが、しっかりと伝えておきたかった事なのでもし聞こえてなかったとしてもまあ良いだろう。

「わかったわ……アタシはアンタがメアリーに対してする事に文句は言わない。でもアタシはいざとなったらいヴを守るわよ。」

「ああ、それで大丈夫。俺はメアリーが外に出られるように手助けす

るだけだからそつちの事も手伝うし。」

「ま、馬鹿みたいに敵対した所でいい事なんてないものね。持ちつ持たれつで行きましょう。」

俺達は下手に陰険な雰囲気にならずに済んだ事に少し安堵しながらこれからの行動をどうするか話し合う。話し合っている時の俺達は今までよりも言いたい事を言い合えた気がするのは気のせいでは無いはずだ。

ジャグリング

何事もなく話し合いの終えた俺達は何事も無かったかのようにこの部屋を後にする。

……もしこれがゲームと同じ視点ならこの部屋の外側、つまり絶対に一人称だと見えない位置に “知っちゃった 知っちゃった メアリーの秘密” と浮き出るタイミングがあの本のメアリーのページを確認した後にあるのだが、それがこのイレギュラーだらけの今回はなんて出てきたのか気になる所ではある。まあどう足掻いたところで見えないのだが。

しかしこんな事を下手に考えていたら先程のあれでまだ納得していないのかとギャリーからいい感情を持たれないのは目に見えているので深くは考えない事にした。

そんなこんなで平然を装いながらギャリーと廊下まで出てきたところでふと絵の具玉を取り忘れているところがある事を思い出した。『ジャグリング』である。

確かあの絵を調べると描かれているジャグラ―？が問題を出してきた記憶がある。そしてそれに正解すれば絵の具玉が貰えたはず……。

ああ……Ibの全てを暗記するくらいにやり込めばよかった。全てのエンドを見尽くしたくらいじゃこの程度の記憶しかできないのかと過去の俺にもう少し覚えようとしてくれと言いたくなってくる。

「ヒロトシ、アンタあの部屋出てから静かだけどどうしたのよ。まさかまだなにか思うところでもある訳？」

「いや……この美術館に来る前の俺を殴りたくなってきてさ……。はあ……。」

「いや急になんなのよ。アンタの情緒不安定にも程があるでしょ。」
「俺の事はいいから早くほかの絵の具玉を探しに行こう……。はあ……。」

「やりづらいつたらありやしないわね……。アタシも頑張るんだから

「アンタも頑張んなさいよ！」

ギャリーからそんな応援の言葉を頂いたところで俺達はギャリーを先頭に行動を始める。今まで俺が先頭で歩いてきたから少しだけ違和感を感じるが、本来あるべき姿はこうだと思ってしまう。

……というか何でゲームの時はイヴちゃんが先頭を歩いているのだろう。確かに主人公はイヴちゃんなんだろうけれど年上として、大人として、そして何よりも男としてそれってどうなのか。甚だ疑問である。

そんなことを考えていたらギャリーが立ち止まる。どうやら彼もまだ絵画を調べていない事に気づいたらしく、『心配』の前で立ち止まっている。違う、そっちじゃない。

「さっきからここら辺を通る度になにか視線を感じていたのよ。だからこの絵が怪しいなってアタシは思った訳！」

「あ、うん。そうだな。」

「だからきつとこの絵をくまなく見れば——。」

しかし何かが見つかる訳もなく。ただただ『心配』から心配そうに見つめられるギャリー。

「くまなく見れば——。」

それでも諦めずに端から端まで、限界まで目を見開いて絵画を観察するギャリー。当の『心配』は今まで以上に心配そうな眼差しでギャリーを見つめている。ギャリーももう諦めればいいのに。

「見……れば……。」

「はあ……見つからないならそれでいいじゃん。早く諦めなつて。」

「ムキー！なんでアンタはホイホイと手掛かりを見つけられるのにアタシは見つけられないのよ〜！」

「そりや今までのものは簡単なものばっかだったし。ほら、そこでいじけてないで隣の絵画も調べなつて。」

「なんでアンタはそんなに余裕そうなのよお……。」

何とも萎びたギャリーがとぼとぼ隣の絵画へと歩いていく。もし今倒れたら立ち上がることが出来なさそうなほど力なく歩いている為、なんだか少しゾンビにも見えてくる。そんな事を思いながらギャリーの後ろについて行くと、『ジャグリング』の中から声が聞こえてきた。

我 誕生 いつだ

「——はっ？ヒ、ヒロトシ……アンタ何かアタシに言ったかしら……？」

「いや？俺は何も言っていないけど。」

我 誕生 いつだ

「いやいやいや！アンタやっぱり何か言ってるでしょ！」

「いや、こいつじゃね？このフロアでこの絵だけずっと動いてるし。」

「まさかそんな訳……。」

我 誕生 いつだ

ギャリーは本日3度目となるその声を聞いてついに固まってしまふ。かと思いきや急にプルプルと震え出す。急に何事かと少し心配しているとバツと下げていた顔を上げて絵画の方を睨み始める。

「そんなのっ！わかるわけないでしょおおおお!!」

そりやそうだ。

ヒント

ギャリーは叫んだ後、『ジャグリング』からキツイ一撃を1発貰っていたが叫びたい気持ちには俺もよくわかる。何せ今までこの絵の描かれた年が分かる文献なんて1つも見えてこなかったし、なんなら見当たらなかったのだから。

「いつつたいわねえ！何してくれてんのよ！」

「ギャリー……。もう少し落ち着いたらどうよ。相手はただの絵画……。では無いか。まあ絵画なんだから少こつちが熱くなっても意味ないぞ。」

「そんな事分かつてるわよ！でもやっぱり攻撃された事に納得がいかないわ！」

「そりや俺達が正解を言えなかったからだろ？……。1万通り試す？」

「嫌よそんなめんどくさい事。あーあ、4桁のどつか一部だけでもいからすぐこの場で分かったりしないかしら。」

「そんな都合のいい事起こるかね……。——あ、待って。俺思い出したかもしれん。」

「ホントに？そんな事言つて適当な数字言うんじゃないわよ？」

「いや、4桁全て思い出した訳じゃないからあんま期待しないで。」

俺はそう言うと思ひ出した数字を今一度思ひ出す。それは最後の2桁が“23”である事。もしこれが合っているのであれば1万通りから一気に100通りにまで一気に絞られてくる。そうなればヤマカンで答えたとしてもワンチャン当たる可能性がだいぶ高くなるという事だし、ゲルテナの活動していた期間を鑑みれば最終的な候補はほぼ一択になるだろう。

ゲルテナの活動していた期間はゲーム内で明確に表記されているだけでも6182年～6248年の間。正直西暦6000年っていう途方も無く未来の話なのだが、今考えるべき点はそこじゃない。

「とりあえず今思い出した……というか思い浮かんだ数字は、23」。彼の活動していた期間と擦り合わせると623〇か6〇23のどちらかになる……と思う。」

「――、アンタよくゲルテナの活動期間なんて覚えてるわね。あんまり美術に明るくないなんて言ってたけど実はそうでも無いんじゃないの？」

「あーいや、ただの偶然だよ。初めて触れた美術品がゲルテナのもだったから深く知ろうと思っただけの話。だからほかの人の作品はてんで分からないんだ。」

「ふーん……まあいいわ。それじゃあそれを元に答えを導き出ししましょうか。」

俺は上手くごまかせたのだろうか。正直ここまで来たたらギャラリーには打ち明けてもいい気はするが、ここまで来たからこそ最後までだまっていたいというきもちもある。

それにしても爺さんよ。ヒントをくれるのはいいがそのヒントがマニアックすぎるぞ。なんで活動期間なんて普通の人覚えてないようなヒントを与えてくるんだよ。2桁の数字だけでよかったのに。

「――じゃあまず考える数字の少ない6??〇23の方から答えを探しましょうか。……でもここに入る数字ってアタシは2しか思い浮かばないんだけどヒロトシはどうかしら?」

「俺も2かなって思ってたしそれで行ってみよ。もしダメだったらまだもうひとつの方を考えればいいさ。」

「わかったわ。……『ジャグリング』！リベンジしに来たわ！」

「我 誕生 いつだ」

「6223年よー!」

「せい か い だ」

『ジャグリング』がそう言うギャリーの横に青い絵の具玉がコ

トンと何かを置く音と共に突如出現する。それに気づいたギャリ―が絵の具玉に触れるとこれまでの如くその場から一瞬で消え去る。

「よっし、これで5つ目ね。それじゃああと2つは何処にあるかしら……。」

「これまでこの事を考えたら面倒なところがありそうな気がする。案外あの青人形が持っていたりしてな。」

「あく確かにそれはありそうな予感がするわ。その時はヒロトシが相手してあげてね。アタシはまだあの人形に慣れないわ……。」

「あいよ。まあ適材適所って奴だな。そんな時は任せとけー。」

そんな事を話しながら何度目になるだろう部屋の巡回をする。すると原作ならノートの横にまず移動しているはずの青人形が元いた場所にも移動してくるはずのところにもなく、恐らく“例の部屋”の前に移動しているであろうと察する事が出来る。

俺達がただ気づかなかっただけなのか。それとも俺というイレギュラーのせいなのか。どちらにせよかの人形はもう既に絵の具玉を見つけている可能性が浮上してきてしまった。

この部屋も探索し尽くすまであと少し。

王様

部屋を見回っていくと、やはりと言うべきか未だに開いていない扉の近くに青人形が移動していた。しかしそのお腹は今まで見てきたよりもぽっこりと膨れており何かを隠し持っている事は誰が見ても明らかであろう。

「……ギャリー、一応ギャリーから話しかけてみる？多分あの子が持ってると思うよ。」

「持ってるようなのは見てわかるけどあの子はアンタの管轄でしょ？アタシは遠慮しとくわ。」

「あ、そう？じゃあ早速話しかけてくるわ。」

「……、アンタって本当に怖いもの知らずね。」

ギャリーが何か言っていたがどうせあまりいい事は言っていないだろうと踏んで、ギャリーの言っている事が聞こえる前にササツと青人形の前に移動する。

「やあ。何やらお腹がポコッと膨れてるけど何か持ってるのかな？」

「さつき いいもの ひろったよ。」

わたしの たからものに するの。」

「そっか。それって綺麗な色をした丸い玉かな？」

「うん！ ヒロトシ よくわかったね！」

やはり残りの絵の具玉のうち1つをこの子は拾っていたようだ。絵の具玉の説明が書かれていた部屋にあった台座は全てで7つ。俺達が今まで拾ってきた絵の具玉は確か……5つだったはず。となるところの子の持っているものと例の部屋の中の2つとなるので数自体は間違っていないだろう。

となるとここからはどうやってそれを譲ってもらうかがこの子とこの話の焦点になるだろう。原作のように何も言わずにお腹の中から

今となつては気が引けてしまうほどには愛着が湧いてしまった為だ。
何とか相手方に不快な気持ちさせずに絵の具玉を譲ってもらえるか、俺は頭をフル回転させながら再び口を開く。

「なあ、もし良かったらその綺麗な玉を譲ってくれないか？それともう一つがあればメアリー達と合流出来るかもしれないんだ。」

「ええ〜 どうしよつかなあ〜」

「本当にお願いだ。メアリーにも外の世界をいっぱい味わわせてあげたいんだ。」

「……。」

「確かに外の世界はいい事だけでは無いけど、それでも外に出たいって彼女の夢を叶えてあげたいんだ。」

「しかたないなあ ヒロトシは

わたしに らんぼうしなかったし

これ あげる！」

どうやら俺の思いは伝わったらしく人形の前に赤い絵の具玉が現れる。結局俺が思っている事を伝えただけだったのだが、むしろそれが良かったのかもしれない。しかしこの絵の具玉を貰ったところであとひとつ足りていないのは変わらないし、この人形のお腹の膨らみを見るにもう1つの絵の具玉を持っているわけでも無さそうだ。

となるとやはり最後に残った部屋に最後の1つが隠されているのだろう。しかし原作とは違う絵の具玉の入手をってしまった為か目の前のこの人形は一向に動き出す気配を見せない。ゲームであればこの子が急にすごい速度で動き出して扉を開けるのだが、やはりイレギュラー俺があったからだろうか。

仕方がないので俺は青人形に最後のお願いをする事にした。

「ごめん。最後にあそこの扉の鍵を開けてくれないか？」

「ええ？ いいけど

ヒロトシにとって いいことは

なにもないと おもうよ？”

「……多分最後の絵の具玉はあの部屋の中にあると思うんだ。だからお願い。メアリーの願いを叶える手伝いをしてくれないか？」

“…… いいよ

のりかかったふねだもんね

てつだつてあげる”

「——ありがとう——」

“でもやくそく

ぜつたいに メアリーを

そとにつれてつて あげてね”

「ああー任せておけー」

“それと ひとつちゆうこく

おうさまには きをつけてね”

俺はその一言で思考が止まる。王様？という事はあのIbという作品きつてのホラー演出はこの目の前の人形が起こした事ではないという事なのか。

俺はてつきり全ての人形の意識は一つで、マザーコンピューターが接続されている全てのコンピューターを動かしているようなものかと思っていたがそうではなく、全ての人形にそれぞれの意識があるという事になるのだろうか。

となると仲良くなったこの子はマイノリティの部類で青人形の総意は“外の人間は絶対にタダでは帰さない”とかだったらどうしようか……。

——まあいい。どちらにせよ当たって砕けろの精神でここまで来たんだからこれからもそれを突き通すだけだ。王様とやらに直談判しようじゃないか。

「——心配してくれてありがとう。でも俺もここまで来たら引けないからね。俺のできる事はなるだけやってみようと思うよ。」

“…… わかった。

またいつしよに

どこかにいこうね”

「ああ。無事に出れたらその時は一緒に行こう。」

「……アンタ大丈夫そうなの？話を聞いてた感じかなりヤバいんじゃない？」

話を聞いていて心配になったのかギャリーが口を挟んでくる。心配をしてくれるのは嬉しいが王様が話の聞かないやつと決まった訳では無いしおそらく大丈夫だろう。

「それじゃ俺は部屋の中に入ってくるからギャリーはそこら辺で待っていてくれ。」

「ハア!?何言ってるのよ！アタシも部屋に入るわ！」

「いや、ここは俺に任せてくれ。ギャリーには頼みたい事があるんだ。」

「……なによ。」

「多分俺が部屋に入ってからちよつとしたらあの釣り針の垂れてた絵の横の扉の鍵が開くと思うんだ。そうしたら多分合流出来ると思うから、その時はイヴちゃんとメアリーを頼む。」

「アンタ、それじゃあ——。」

「俺も……すぐに追いつくよ。任せとけて。こう見えても交渉とか得意なんだぜ？」

「……分かったわ。でも、あの二人が様子を見に来たいって言ったところまで戻ってくるからね！それまでに出てきてなさいよ！」

「了解。じゃ、行ってくるわ。」

「——ええ、行ってらっしゃい。」

正直自信なんてものは無いし無事に出てこれる保証もないが俺は俺の出来る事をやるだけだ。そう己を奮い立たせて、竦む足を無理やり前へと進めながら俺は何故か異常に冷たいドアノブを回してゆつくりと部屋に入っていた——。

メアリー

私は今まで外の世界を知らなかった。いや……正確にはパパが居る所だけが私の世界だったから知る必要がなかった。だってパパと私の世界には色んなものがいっぱいあったから。

でもそんな生活も長くは続かなかった。パパが倒れてしまったのだ。それだと言うのに私はただ見ている事しかという事実がなんとも歯がゆく、悔しい気持ちで私の心の中はいっぱいになる。これが絵画と人間の差なのだろうか。

そんな私を心配してか、私より先にパパの手で産み出されていた人達はこちらを心配そうに見つめてくる。しかしそんな目を向けられたところで私の悲しみが癒される事は無いしパパが戻って来るなんて事も無い。ただただ私が惨めになっていくだけである。

しかし、そんな気持ちも束の間私達は人間達の手でパパの家からなんだか広い所へと皆次々と運び出されていく。私達の世界では自由に関わりたりお喋りする事が出来てもパパのいた世界ではただそこに存在する事しか出来ない。

出来る事ならずとこの家で過ごしたかったのだけれどこの人間達はそれすらも許してくれないらしい。そんな事に強い憎しみを覚えながらも私達は突然の引越しを余儀なくされた。

私達が連れて行かれるのはどうやら「美術館」という所らしい。と言うのも私達を運んでいた人間達が「美術館に向かう時は〜」などと言っていた為おそらく間違いはないだろう。

しかし私達の行先は1つだけなのだろうか。もしかすると散々になつてしまうかもしれない。ただでさえパパがいなくなつてしまったのにこれでみんなとも離れてしまうなんて考えたくもない。

もしこれで離れ離れになつてしまった時には私は少しだけ倒れたパパを恨む事にした。

「美術館」という所に来てある程度経った。何とかあの家にいた皆も同じ所に運ばれてきたので少し安心をしたのは言わずもがなだろう。

そんなこんなでここでのんびりと他の仲間……『お友達』と私達の世界で仲良くやっていたが、やっぱりなんの変化も起きないこの世界は退屈だ。何をしようにも私以外はあまり乗り気でないように感じるし、それを押し通して付き合ってもらうのもなんだか申し訳ない。そんな訳で私の描いた世界を何となく青人形とぶらぶらしていると、外の世界が騒がしくなるのを感じる。何があつたのだろうか。

どうやら人間達は様々な人間を数多く呼んで私たちを見せ物にしているらしい。それをして何があるのかは全く分からないが、どうせ私達にとつてはくだらない事だろう。そう思いながら外の人間達を観察していると、私とあまり歳の変わらなさそうな女の子が両親と共に美術館に来たのが確認出来た。

私が初めて人間の子供を見た瞬間だった。その子を見た瞬間に私は外の世界に行つてあの子と、あの子の友達と目いっぱい遊んでみたい。そんな欲に駆られる。

しかしこの世界から外に出る方法なんてあるのだろうか。ちよつとほかのお友達に聞いて回る事にしよう。

話を聞き回つた感じ、外に出るとしたら誰か外の人間を代わりに入れればいけるのではないかという結論が出た。それならばあの女の子も賛と一緒にに入れてしまえば一緒に行動する事も出来るし、その時にあの子の好きな事とか聞けるからいいのではないか。

そんな事を思いながら適当に『吊るされた男』の前でじつと彼を見

つめている人間を贅としてこちらの世界に呼び込む事にした。

こいつは一体誰だ。私はコートトの来た男と可愛らしい女の子の2人しかこの世界に招き入れていないはず。それなのにこの見た事の無い格好をした男はどうやってか知らないがこの世界に入ってきているのではないか。私は驚きのあまり心ここに在らずのような返事をしてしまった気がするがそんな事はお構い無しに3人は話を進めていく。

どうやら私を連れてこの世界から出ようとしているらしい。少なくとも2人をここに呼んだ私からすれば甘い考えだなど思ってしまうが、目標は高い方がいい。私もここから出られればそれでいいので頑張ってもらおう事にしよう。

『告げ口』がああ男2人の会話を喋ってくれている。どうやらあの2人は私の正体を知ってしまったらしい。……いや、あのイレギュラーの男はここに来る前から私の正体を知っていたらしい。しかし私の記憶にはあの男の顔を見た覚えはない。もし顔に見覚えがなくてもあの服装なら記憶の片隅に残っててもおかしくないはずなのにそれすらない。

私のことを知っている人間はそんなに多くはないはずなのになぜこの男は私のことを知っているのだろうか。

……あいつは私を外に出してくれるのだろうか。もし今の発言を信じるのであれば私は彼にこの世界からの脱出を手伝ってもらえるという事なのだろうが、そんな簡単に信じていいのだろうか。でもここまで言って貰えたんだから信じてもいいのかもしれない。私はヒロトシという男を少し信じてみる事にした。

モノクロの部屋が色付き、部屋の中央に虹がかかったことで対岸の鍵を取る事が出来た。これでようやくあの2人と合流する事が出来る。そうすれば脱出まですぐだろう。そう思つて気が抜けたのか、私は何も無いところで躓いてしまった。すると私のポケットからパレットナイフがするりと床に落ちてしまう。

前を歩いていたイヴが「大丈夫？」と声をかけてきた為、私は「大丈夫だよ。」と返しパレットナイフを拾う。するとその時階段の方から誰かが駆け上がってくる音が聞こえてくる。ふとそちらを見てみるとギャリーが1人でこちらに向かつてきている。ギャリーが、1人で。

目の前が少しづつ暗くなっていく――。

交渉

部屋に入るとそこは廊下と全く変わらない紫色のみで彩られた部屋であったが、そこには大小様々な青人形がずらりと並んでいて少し慣れてきていた俺でも流石に恐怖心を拭えない程には不気味な雰囲気醸し出していた。

そして俺の目の前の壁には大きく真っ白なキャンバスが聳えていて、その中に何かいるのがわかるくらいに俺の頭が危険信号を発している。

そんなキャンバスの下を見てみるとやはり俺の考えていた通り最後の絵の具玉が1つポツンと置かれていた。先にとつてから王様に声をかけるか、それとも声をかけてから絵の具玉を取るか。ある種の究極的な2択をどちらにするか迷いながら真っ直ぐキャンバスの元へと歩いていく。

キャンバスまでの短い距離をこれでもかと言うくらい悩んだ結果

「……失礼。」

俺は先に絵の具玉を取る事にした。そうすればギャラリーが2人と合流するのが早くなるだろうし、そのまま俺の事を気にせず先に進んでくれれば俺の言う事は何も無い。

「さて……、挨拶が遅くなって申し訳ございません、王様。」

俺がそういうと部屋の空気が一気に冷え込む。実際の気温が下がった訳では無いのだろうけれども嫌な寒気がビンビンに感じている。これがあの部屋の暗がり方のタネとでも言うのだろうか。

しかし王様に一言かけた所で状況は特に変わる事もなく、ただ部屋の体感気温が下がっただけである。これは俺の出方を待っているという事でいいのだろうか？

少しこの後の身の振り方を考えたが、俺の無い頭では特にこれと
いって良い案が浮かばなかつたのでこのまま話を続ける事にした。

「お……自分は外から来た人間です。いつの間にかこの美術館に迷い
込んでしまいました。」

未だに変化はない。

「王様はこの世界から外に出る方法は知っていますでしょうか。それ
と……メアリーをここから出す方法についても宜しければ。」

その瞬間額縁を中側から勢いよく掴む青い手が出てくる。やはり
メアリー妹のような存在を出されると出ざるを得なくなるのだろうか。

ゆっくりと身体を出してきて、腕を完全に額縁の外に出してとりあ
えず話を聞ける体勢になる。『王様』。一応こちらを今すぐ襲う気は
無いようで外側に出した腕は所在無さげにプラプラとしている。

俺は『王様』が顔を出して事により今まで立っていた距離が近す
ぎた為に、『王様』が腕を出してくるタイミングでゆっくりと後ろへ
と下がっていた。

《なぜお前はあの子を狙う。あの子はこの世界でしか生きられない存
在なのだぞ。》

「何故、ですか。……これは先程付き添いの者にも言ったのですが、あ
の子には色んな世界を知って欲しいのです。」

《ほう……？？して、その心は？》

「特に深い意味は無いですよ。ただ色んな世界を見て見聞を広げるの
は子供の時にこそ必要な事だと思ってるので色んな世界に触れて欲
しいな……と。」

俺がそこまで言うと『王様』は少し頭を傾げてこちらを見つめて
くる。俺としては特に特別な事は言っていないんだけどもあちらとし

てはなにか引つかかる事があつたのだろう。

《お前……何故そこまでにあの子に尽くす事が出来る。どれだけあの子がヒトの姿に近かろうと所詮は絵画。我々と同じ存在なのだ。》

「うーん……。——王様、別世界って信じますか？」
《ムツ？——》。

俺はこれまでに俺の身に起きた出来事を掻い摘んで王様へと伝えた。勿論伝えなくてもいい事は言わなかったが。

《ふむ……。ではお主は異世界の人間であると。それを証明する事は出来るのか。出来ぬのか。》

「いや、それは出来かねますね。俺がこの場で出せるものといったらスマホと飲み物、それと情報くらいでそれが別世界の物だと王様が分かるとは限らないので。」

《まあ賢明な判断よな。ならばこれからどう我を説き伏せるつもりだ？それなりの説得力がなければ情報はやれんな。》

「それなら——」。

扉の開く音で俺の意識はハッキリとしてくる。どうやら俺は「王様」から手厚い一撃を貰って、それで少し気を失ってしまったらし

い。しかしそれでも教えて貰った情報は覚えているものだ。俺はひと安心する。

「ヒロトシっ！大丈夫!?王様に何されたの!?!」

メアリーが俺の体を揺すってくるのでゆっくり寝られないなと思いい、体を動かそうとする。しかし今の俺は身体中から尋常ではない痛みを感じていて体が思うように動かない。

体の節々が悲鳴を上げているのを無視して体を少しづつ動かすと、それに気づいたメアリーは先程まで以上に大きな声で俺を起こそうと頑張っている。

しかし何故こんなにも体が動かないのか。そこでふとギャリーと出会った時の事を思い出した。それを元に考えるならばどうやら俺はダメージを受けすぎたらしい。

「メアリー!ヒロトシは……っ!」

「お兄さんっ!大丈夫!?!」

「どうしよう……!ヒロトシ、ずっとどうなされてる……!」

「……っ!バラ!お兄さんのバラはどこにある!?!」

「あっ!イヴ!ヒロトシの足元に落ちてるわ!」

「ちよっと花瓶のところに行ってくる!」

流石イヴちゃん。俺と一緒にギャリーを助けただけあってよく覚えてるもんだ。暫くして急に体の痛みがスッと何事も無かったかのように消えたと思ったら、漸く体が自由に動かせるようになった。

とりあえず何はなくとも体を起こして3人に向き直る。ここままでしてもらって俺がするべき事は1つしかない。

「——3人もありがとう。おかげで助かった。」

俺がそういうとイヴちゃんとメアリーはわんわんと泣き出し始め、

そのまま俺に抱きついてくる。俺が困ったようにギヤリーを見ると、ギヤリーはそれがアンタへの罰よと言わんばかりのしてやったり顔を浮かべている。

その表情を見てこればかりは仕方ないと割り切り、甘んじて2人が泣き止むまで頭を撫でてあげるのだった。

つなぐ

俺のせいとはいえないヴちゃんとかメアリーが泣きついてくるので、俺はギャリーの冷たい視線を受けながら2人の頭をなでてあやす。俺の腕が悲鳴を上げ始めてからある程度して、2人とも泣き止むとギャリーが俺に問いかけてくる。

「それで？あれだけ得意気に交渉は得意だつて言つてた癖に無様に倒れてたアンタは？ちゃんと話をつけられたのかしら？」

「あ、ああ。話をつけられたよ。……まあそのせいで倒れてたつてのもあるんだけど。」

「話をつけたから倒れたつて……アンタどういう交渉したのよ。」

「いやー……、根性試しというか元気注入というか一喝というか……まあ大体そんな感じ。」

「大体つて……はあ。アンタつて本当に思い切りがいいというかなんとというか、人を心配させるのが好きねえ……まったく。」

ギャリーにそう呆れられると俺は何も言えなくなってしまう。なにせ今この現状がまさに心配させているという何よりの証拠になっているから何を言い返した所で何の説得力もないからである。

しかしゲームで元々鍵が見つからなかつた場合起こるはずだった出来事を知っているからか、こうやって物理的なダメージだけで済んでいる事に少しだけ違和感を覚える。そう考えるとほぼ同時にギャリーがパンと手を叩いて俺達の空気を変える。

「さて！いつまでもここでのんびりしてる訳にはいかないわ！ヒロトシも無事だったんだしチャチャツと先に進みましょう！」

「うん！お兄さん、行こー！」

「ほら！ヒロトシ立って！もしふらつくなら私達が支えてあげるからね！」

「薔薇も回復してもらったし大丈夫だと思うぞ？……つとと。」

イヴちゃんとメアリーからありがたい言葉を頂くが、正直2人が支えようとしても身長の違いが頭2つ分くらいあるので手を繋いでいるだけになるだろう。

それだと自分も倒れた時に怪我をさせてしまいそうで怖かったので言われた事自体をありがたく思いながらもやんわりと拒否をする。そうして立ち上がると今まで座っていたせいか案の定よたつてしまう。すると彼女達は再び心配そうな表情を浮かべて俺の手を握ってくる。

「ほらー！強がらないで私達に頼ってよー！」

「それともわたし達じゃ不安……？」

「ヒロトシ、イヴとメアリーに心配かけたくないなら2人の好意に甘えときなさい。それが一番だわ。」

「お、おう。……じゃあそうしようかな。2人とも、任せていいか？」

「私達に任せてよー！」

「お兄さんが倒れないように頑張るね！」

2人はそう言っただけの手……というよりも手首から腕にかけてをひしつと抱き抱えるように掴んでくる。そんな姿に小動物チックな何かを感じながら俺達は部屋を出て先へと進む。

イヴちゃんとメアリーの話を聞くと、どうやら2人の探索していたところに無個性が立っただけで進めない場所があったらしい。

とりあえず向かう先をそこに決めて紫の部屋を後にする。2人を腕に引っ付けながら長い階段を上がっていくとそこは危険のあまりない部屋につながっていた。……さっきまで俺達がいた部屋もなかなか平和だったけどここはそれ以上に「何も無い」感じがするのはそういう知識があるからだけではないと思う。

そんな事を思いながら俺の両隣に居る2人が俺の腕を引っ張って先導してくれる。しかしそんなに引っ張ってくれどたとえ足下がふらついてないとしても転びそうになるのであまり強く引っ張らな

いで欲しい。

「こつちこつちく！ギャリーも早く来てく！」

「んもう！そんなに急がなくても多分無個性は動いてないわよ。」

「でもここから出られるかも知れないだもん！なら早く行きたいじゃん！」

「え？……ああなるほど、アンタがそういうならそうなのかもしれないわね。まあ慌てるのも程々にね。ヒロトシが転びそうになってるわよ。」

「え？ああ！ヒロトシごめんね！ゆっくり行こつ！」

ギャリーが一言言ってくれたおかげでどうにか転ける事は無くなったようだ。そんなこんなで終始のほほんとした雰囲気のまま俺達は無個性の所へと向かうのだった。

私の道

俺達はわちゃわちゃしながらもイヴちゃん達が唯一進めなかったという無個性の所へと辿り着いた。その先は見たところ下り階段になつていくらしく、しかも先程昇つてきた階段よりも長いように見える。登つてきたばかりでまた下るのは少し気が滅入りそうになるが、そんな事を知る由もないギャリーがそう言えばと言うように口を開く。

「この無個性つて2人で押してみたりした？ 案外2人の力でも動かせたりしないものかしら？」

「二応押したり引いたりしてみたけどやっぱりわたし達だけだと無理だったよ。」

「やっぱりギャリーかヒロトシがいないと動かせないね。私も早くオトナになりたいなあ。」

「ふふ。アンタ達は女の子なんだからこういう力がある事はアタシ達男にやらせておけばいいのよ。」

「ま、適材適所つて奴だ。2人は他のところで手伝ってくればそれでいいよ。」

「むう。2人とも私達を子供扱いしすぎ！ もっとLadyのように扱つてよね！」

「てよね！」

メアリーは今までの俺達の対応に納得いかなかったのか、レディのような対応を求めてくる。イヴちゃんはその発言に面白半分に乗つかつてるだけのように見えるからとりあえず放つておいて今はメアリーの事を考えよう。

そうやつてうんうんと悩んでいると、メアリーが心配そうにこちらを覗き込んでくる。因みにイヴちゃんとギャリーはこいつはまたやつてるよと言わんばかりの目でこちらを見ていた。

「ヒロトシ大丈夫？私何か気に障るような事言ったかな……？」

「え？……ああいやそういう訳じゃないから安心して。」

「ホントに？ホントに怒ってない？」

「本当に怒ってない。ほら、2人も先に降りてるし俺達も行こう。」

「あつ……うん！」

俺はメアリーの頭を軽く撫でると、いつの間にか移動させていた無個性を横目に階段を下っていく。階段を歩いていくと程なくして壁がなくなりまるで階段が宙に浮いているかのような感覚に陥ってしまうほどに精巧に描かれた夜空が俺の視界に入ってくる。

……まあ描かれているのにもかかわらずその星々が少しずつ動いているように見えるのはきつと幻覚なのだろう。

ちよくちよくメアリーが着いてきているか後ろを確認しながらゆっくりと歩いていくと、突然シャララという音とともに流れ星のようなものが飛んでくる。少しびっくりして肩を震わせてしまったが、そんな事はお構い無しに俺達の上空を突っ切ってどこかへと消えていってしまった。

幻想的のような、しかしそれにしては手書き感満載の星だったような流れ星をあと何回か見送った後、ようやく1番下までたどり着く事が出来た。

しかしそこはどう見ても子供がクレヨンで道を描きました！と言わんばかりのものとなっていた。細い線のようなものが束になっていてそれがしつかりと密着している訳でもなく、綺麗に線が引かれている訳でもない。有り体に言ってしまうえば“雑”なのである。

ゲームで意図せぬ予習は済ませてあったとはいえ、これを肉眼で見ると道としての酷さは計り知れないものがある。とはいえ、この道を誰がこさえたかなんて分かりきった答えのおかげで俺的には安心してこの地面に足をつける事が出来る。

だって自分が通るための道を態々通りづらくなんてしないだろうから。

「メアリー、早くあの2人を追いかけてよっか。」

「うん！どっちが早く着けるか競走ね！」

「あ、おい！急に走ると転ぶぞ！」

「大丈夫だよ！だってここは『私の道だもん！』」

メアリーはそう言うのと穴や凸凹など何も無いと言わんばかりに普通に走っていく。その姿を見て俺も大丈夫なのか気になったので線の引かれていない場所に1歩踏み込んだが、俺の足が落ちる事は無かった。それをしっかりと目で見て足で踏んで確認した後にはゆっくりと走ること無くメアリーの後を追いかけて行くのだった。

sketchbook

先に走っていったメアリーを追ってのんびりと歩いていくと何やら広い所へと続いていた。その入口にはいかにも手書きで書きましたと言わんばかりに大きさも位置もガタガタの “sketchbook” という文字が壁にデカデカと書かれている。

正直これを見たところで浮かんでくる感想が、『まるで子供の落書きみたいだなあ。しかも後でしこたま怒られるやつ。』ときたものだからとても口には出せたもんじゃない。多分口にしたらメアリーが機嫌を損ねるだろう。

「ここが私の『世界』だよ！全部一人で作ったの！」

「へー。一人でここまでやるなんてスゴいじゃん。こんなに描くの大変だったろ？」

「ううん！私の望む世界が作れるんだもん、すっごく楽しかった！」

「そっか……。外に出たらメアリーは何がしたい？」

「甘いものが食べたい！食べ物はいくら望んでもいくら描いても出てこなかったんだもん！」

「なら頑張つて外に出て甘いものをお腹いっぱい食べないとな！」

「うん！」

メアリーの話を聞いて俺はやるせない気持ちになるが、メアリーは俺の感情など気にも止めずにイヴちゃんとギャリーを探しながら歩いていく。

俺だけが気まずいまま2人を探して歩いていると、この広場の中央にあるピンク色の建物の前で立ち往生していた。メアリーはそれを見つけるとイヴちゃんの名前を呼びながら全力でダッシュし始める。

足音に気づいたのか向こうの2人もこちらを向いてくるので俺は軽く手を上げる。ギャリーは俺と同じく軽く手を上げる程度だったがイヴちゃんはそれでは足りないよう飛び跳ねながらこちらに大きく手を振ってくれている。

イヴちゃんとメアリーが手を合わせながらきやいきやいしている中、俺はギャリーとこの広場について話を聞く事にした。

「この広場はどんな感じよ。ある程度はイヴちゃんと回ったんだろ？」

「そんなにガッツリは調べてないわよ？軽く見て回った程度。でもまあ一応あの絵みたいな家も中に入れそうね。扉には鍵がかかってたし1ヶ所は中に入れる状態だったわ。」

「へー……俺達は2人を探してただけだからそれは知らなかった。それじゃその入れる家に行くのが手っ取り早いのかねえ……。」

「トシーギャリー！ここは私に任せて！」

「ト、トシ？アンタ達いつの間にそんな親しげに呼ぶようになったのよ？」

「い、いや今初めて言われたから俺も少しびっくりしてる。メアリー、どうして急に渾名あだなみたいに言い始めた？」

「だってヒロトシって長いから！別にトシって呼んでもいいでしょ？」

「まあ別にいいけど……。」

俺がそういうとメアリーはラッキーと言わんばかりに「やった！」と口から零れる。しかし私に任せてとは一体どういう事なのだろうか。さつきメアリーがここは私の世界だって言っていたこととなにか関係があるのだろうか？それが何か分からない今俺には何もわかる訳もなく。

メアリーはイヴちゃんから離れて、この広場で唯一今まで見てきたのと大差ない扉の前に立つとドアノブをガチャガチャと捻って扉を押したり引いたりするが鍵がかかっているようで開く予兆すら見えやしない。

「あれえ〜？私この扉の鍵をかけてないはずなんだけど……。もしかして青人形が閉めちゃったのかな？」

「メアリー、鍵かかかってるみたいだけど他に宛はあるのかしら？」

「うん。鍵を閉めたら『おもちゃ箱』に戻すように伝えてるからそっちにあると思う。」

「じゃあおもちゃ箱の方に向かおうか。メアリー悪いけど案内よろしく。」

「任せといてよ！すぐそこだから皆は待つててくれてもいいよ！」

「メアリーの想定外の事が起きてるのならそういう訳にも行かないだろ。皆で行動しよう。」

「そうだね！それにわたしはみんなと一緒にいたいもん！」

イヴちゃんの言葉が嬉しかったのかメアリーはニヤニヤとした表情を隠そうともしないまま俺達に着いてこいと言わんばかりにずんずんと歩いていく。イヴちゃんはメアリーに寄り添うように、俺達は後ろから見守るようについて行くとそこにはクレヨンで書かれたであろう1件の民家が建っていた。

メアリーが先程と同じようにドアノブを捻ると、先程とは違い途中で止まっているような素振りもなくぬるりと動く。そのまま扉を開けて中に入っていくとそこには桃色の箱がぽつんと1つ部屋の一番奥に置かれていた。

「多分あそこの鍵はあの箱の中にあると思うんだけど……。」

「じゃあとりあえずはこの中を覗いてみようか。メアリー、箱の中になにか危険なものとかは入ってる？」

「いや、特に無いはずだけど……。私にとっては話だから皆からしたらちよつとわかんないや。」

「おっけ。じゃあ慎重に箱の中を覗いてみようか。」

「あの、本当に私に任せてくれていいんだよ？この箱の中身も私と遊んでくれる子達ばっかりだし……。」

「これくらいは俺にもやらせてくれ。ここじゃあメアリーに頼るしか進む事ができないんだからさ。」

「……わかった。じゃあ一緒に探そ！あ、イヴとギャリーは待つてて！流石に3人で見るのは難しいから！」

「わかったわ。ちゃんと鍵を見つけるのよ?」

「わたしもやりたい!わたしも一緒にさがす!」

「こちら。2人の邪魔をしちゃダメよ?」

「まあさっさと見つけるからそしたらここから一緒に出よう。今はそれで我慢してくれ。」

「ぶー!けちー!」

イヴちゃんの文句を聞きながら俺とメアリーは箱の前へと近づいていく。そして中を覗くと――

中から黒い手が伸びてきて俺とメアリーの腕を掴んできた。

「――え?」

「――きやああああああ!!」

そうして俺達は暗い箱の中に引きずり込まれたのであった。

おもちゃ箱

「くっ！体がっ！痛いっ！」

「トシごめんね……私のせいで落とされちゃった……。」

「あ？ああ、そんな事ないだろ。あんなトラップ俺もあるなんて思っ
てなかったしな。でも俺はともかくとしてなんでメアリーも落とさ
れたんだろうな。なんつーか、お前の『家族』だろ？」

「それは私もわかんないんだ。……もしかしたらここから出たいのが
気に食わないのかも。」

「そっか。……じゃあここで何がなんでもここを出るって決意を見せ
てやらないとな。」

俺がそういうとメアリーは大きく頷きながら「うん」と言ってくる。
それを見てほっこりとしながらここがどんな場所なのかと薔薇の状
態を確認する。

辺りを見渡すと青人形や無個性、他にも子供用のおもちゃが乱雑に
置かれていることから本当におもちゃ箱の中に入ってしまった感覚
に陥る。がしかし、もしここがおもちゃ箱の中なのであれば俺達が入
っても尚この広さがあるというのはおかしいように感じる。何せ
パツと見えるだけでも市民体育館のような広さがあると言っても過
言ではないほどなのだから。

因みに薔薇は先程イヴちゃんが渡してくれた時よりも花卉がだい
ぶ減ってしまった。だいたい半分ほどだろうか。そりや身体中
が悲鳴をあげるわけだ。

「……メアリー。この中から鍵を探すのか？」

「うん、いつもそうだよ。」

「その鍵に鈴みたいな音のなるものって付いてたりする？」

「いや、付けてないよ。そういうのがなくても見つかるもん。」

そのメアリーの一言に俺は俺は少し気が遠くなる感覚を覚える。そりゃこんな広い場所に落ちている鍵を探さないとイケないのだからそうなくても致し方ないだろう。

しかしメアリーは鈴なんかなくても見つかると言っているのが頼もしくもあり自分が情けなくもあり。しかしそんな俺など知らないと言わんばかりにメアリーは鍵を探す為に行動を始める。

俺は慌ててメアリーに着いて行きながら足元に目的のものが落ちていないか確認しながら歩いていく。俺のそんな様子を見ていたメアリーは苦笑いを浮かべながら「ここにはないよ。」と言ってくるが、俺は「念の為だから。」と返して床を注視しながら歩く作業を続ける。程なくしてメアリーが立ち止まるとその場にしゃがみこんで何かを拾う。まあ恐らく拾っていたものは俺達の探していた鍵なのだろう。そう思い何となく視線を泳がせるとなんだか周りの青人形や無個性達の雰囲気や鍵を探している時よりも荒々しいものになっている感じがし始める。

「メアリー……、なんかヤバイ感じするんだけど。」

「トシ……それ間違ってるよ。皆が『最終試練だ』って言ってくるもん。」

「もしかしてこいつら……今から襲いかかってくるのかないよな？」

「――、それ正解！トシ！あそこの出口まで走って！あの奥で落ち合おー！」

「了解いー！」

俺が返事を返したと同時に2人で駆け出し始める。まだ体の痛みは取れていないがそんなことを言っている場合ではなくなってしまった故に体にムチを打って俺を追いかけてくる奴らから逃げていく。既に青人形や無個性が近付いてきていてあまりいい雰囲気とは言えないが逃げ切る事は出来そうである。

そんな事を考えながらメアリーの待っているであろう出口の方へ

と駆け足で向かっていくのであった。

運命の分かれ道

出口へ向かう際に何度かブロッキングをされてしまい最短距離で向かう事は叶わなかったが何とか無事に安全地帯^{安全地帯}まで到着する事が出来た。

逃げている間メアリーの事を気にかける事が出来ないくらいには余裕が無かったので彼女はもう着いているのか気になり、辺りを確認して見るが脇道もないこの通路のどこにも見当たらないのでまだ広場の方にいるのだろう。

俺よりもこの世界の勝手を知っているから狙われたのか、それとも何か気になるものがあったのか。どちらにせよ俺はここで待っていた方がいいのかもしれないがやはり心配なものは心配なのである。そんなこんなで助太刀をしに行くか迷っていると流石に十分な時間が経っていたのかメアリーがこちらへと向かってきているのが確認出来た。

「お疲れメアリー。時間かかってたみたいだけど何かあったのか？」

「ううん。むしろなにかないかなって探し回ったんだ。」

「……まあ無事ならいいけどあんま無茶しないでくれよ？」

「この先はさっきの部屋に繋がってるはずだからここからはそんなに危なくないはずだよ。」

「さっきの部屋って……もしかしてあのおもちや箱のあった部屋の事か？じゃああの広場は本当にあの部屋の真下にあるんだな。」

「そりやおもちや箱の中なんだもん。もし真下になかったら入口から中が見えなくなるじゃん。」

「まあそれは確かに。ただこんな広いなら倉庫みたいな感じで作った方が良くもするけどね。」

「うう………私はこれがいいの！——っ！」

今の今までは普通に話をしていたメアリーだったが、何かを感じたのか突然血相を変えて走り始めた。幸いにもメアリーの向かった方

向は広場とは逆方向、つまり俺達の進行方向だった為美術品あいっらでは無いだろう。

しかしここまで原作とかけ離れた出来事が連発して起こると何が起きても不思議じゃなくなる為、メアリーが何を感じて走り始めたのかを確認したい気持ちが湧き上がってくるが一旦その気持ちを落ち着かせてメアリーを追いかける。

程なくしてメアリーが立ち止まると、そこは先程のおもちゃ箱のあった部屋のように感じるがそれにしてもあまりにも雰囲気が変わりすぎており、先程の真っ白な部屋とは真逆の様相を呈していた。しかも先程は無かった階段が出現したせいやおもちゃ箱は無くなっており、おもちゃ箱のあった場所の壁には上に登る階段と燃え尽きた茨のようなものがあつた。

その光景を見た俺はここで何があつたのかなんとなく察したが、メアリーが今何をしようとしているのか分からない以上何が起きてもいつでも止められる準備だけはしておく事にする。

「……メアリー、早まるなよ。もしこれをあの2人がやったんだとしても悪気はないと思うんだ。だから怒ってもいいけど手を出しちゃうダメだからな。」

「……分かつてるよ。私も2人のこと嫌いじゃないもん。それに私、イヴに嫌われたくないし。」

「ギヤリーには嫌われてもいいのか？」
「だってあいつ私の事見放そうとしてたじゃん。例え今は助けてくれようとしてたとしても私はそれを知っちゃってるから信じていいのかよく分かんないんだよね。」

ギヤリーの自業自得な所があるとはいえ、あまりに淡泊なメアリーの主張に少し驚いてしまった。まあ当然の意見なのは百も承知だし原作でもギヤリーの薔薇で花占いをするくらいには残酷な面を持ち合わせている事は知っていたのだが、いざそれを目の当たりにするとなんとも怖いものを感じるのをおかしくない筈だ。

「さっ、ずっと話してるのもなんだし私の部屋に入る？ トシは私が直々に招待してあげる！」

「あ、ああ。よろしく……。」

未だに戸惑いの抜けてない俺を置いてメアリーは楽しそうに俺の前を歩いていく。俺はそれをなんとも言い難い感情のまま追いかける事に。2人、というかギャリーに会った時に変な事をしなければいいがそれはメアリーのみぞ知ると言ったところだろうか。感情が爆発しなければいいけど……。

最後の休息

メアリーを追って部屋に入るとそこには部屋の中腹辺りで座りながら呑気に話をしているイヴちゃんやギャリーがいた。その様子に少し安堵しつつもメアリーの様子をちらりと伺つてみると、肩を震わせながら視線は下を向いているように見えた。

これは相当頭にきているのでは?と思ひ、とにかく2人に危害を与えないように落ち着かせようと動き出そうとしたが、それよりも先にメアリーは動き出してしまった。

「ちよつと!私も混ぜてよ!」

「……は?」

「あら、メアリーとヒロトシ!2人とも遅かったじゃない!」

「2人とも無事でよかつたあ。」

「というか私の部屋の鍵燃やしたのギャリーでしょ!また作るのめんどくさいんだからもう燃やさないでよね!」

「あら、あの茨は鍵だったのね。それは申し訳ない事をしたわ。この埋め合わせはまた今度するから許してちょうだい。」

「もく、今回だけだからね!」

……俺つてこの場に必要なのだろうか。俺が居なくてもこうなる運命だったのではないか。何故か原作知識がありながらそう思ってしまう程には自然な流れを感じた。わかりやすく言うなれば所謂「いつもの光景」に感じてしまう程の自然さだった。

「——で?ヒロトシ、アンタ達は落ちてからどうなったのよ。」

「え、ああ……。——ピンクの鍵を拾ったら大量の無個性と青人形に追いかけて回された。」

「えっ。もしかしてそれってあの時よりも多かつた訳……?」

「えつと……。少なくとも見積つて倍以上?」

「アンタ達よく逃げてこられたわね。」

「数は多くても俺達別方向から散り散りになって逃げたからある程度は分散されたんだよ。それに逃げてた場所もだいぶ広いところだったからそこまで避けるのは難しくなかったぞ。」

俺がそういうとギャリーは化け物を見るような目で俺の事を見てくる。しかし「避ける」のは難しくないのであって逃げ切るのはめちゃくちゃ大変だったのは言うまでもないだろう。

何せ数を数えるのも億劫になるほどの敵がこちらに向かって襲いかかってくるのだから波状攻撃やら挟み撃ちやらを全て避けきるのは大変に決まっている。一つ一つはすぐく避けやすい攻撃なのに数で押されると面倒なのは分かりきっている事なのだから少しは手心を加えて欲しいものだ。

「2人ともスゴいね！わたしだったら逃げ切れるか不安だよ。」

「その時は俺かギャリーが抱き抱えて走るから安心していいぞ。」

「それだとお兄さん達に負担がかかるね……。」

「そんなの気にしなくていいんだよ。役割分担役割分担。」

「まあそうならなかったんだからいいじゃない。今更ifを考えても仕方ないわよ。」

ギャリーはそういうと立ち上がって出口の方へと体を向ける。俺達が合流してからそこそこ時間も経った事だし先程まで疲れの溜まっていた体もそこそこに休める事が出来たのでタイミングも悪くは無いのだろう。

しかしここを出たら着く場所はもう1つしかない。『絵空事の世界』の前だ。そこをくぐると俺達は外に出る事が出来るのだが、メアリーをどうやって外に出してあげるのか。そこだけが今俺を悩ませる種となっていた。

「そろそろみんな疲れも取れたでしょうし行きましょ？」

「ん、そうだな。メアリーも大分疲れは取れただろ？」

「もちろん！なんなら疲れてないくらいだよ！」

「あら！それは頼もしいわね！イヴは大丈夫かしら？」

「わたしもいつでも行けるよ！」

「それじゃあ早速出発しましょ！メアリー、あとどれ位で目的地か分かるかしら？」

「ここまで来ればもうゴールしたも同然だよ。今撮ってきた鍵で開けられるドアの奥がそうだから。」

「なんだかんだアタシ達もうそんな所まで来てたのね。最後まで気を抜かないで行くわよ！」

ギャリーがそう仕切るとそのまま歩き出すので俺達はそれについて行く。ここからそこまで遠くないであろう目的地に着くまでに俺の意思は固められるのか。それをずっと考えながら俺は殿を歩いていく。

終わりはすぐそこまで迫っている。

決心

俺達はメアリーの部屋を出て先ほど鍵がかかっていたピンク色の建物へと向かっていく。その時イヴちゃんがメアリーにこの sketchbook に描かれている建物の内装はどうなっているのかとかこの中で何がいちばん上手く描けたのかなどを聞いていた。メアリーも満更でもない表情でその質問に答えていたので本人としても話したかつたんだろう。

そんな話をしながら歩いていくと俺達はすぐにピンクの扉の前まで着いたので話を続けたまま鍵を開けて中に入るとそこは桃色の壁で覆われた部屋の真ん中に階段があった。

それを下つていくと途中で壁と階段が全て黒くなり、明かりもあまり意味を成していないほどに全てが違いのないように見える。階段の一段一段さえあるかどうかよく見えないので、踏み外しそうになるのも致し方ない。

しかしメアリーだけはそんな中を苦もなく先頭のギャリーを追い抜いてスタスタと歩いているのだから恐らく彼女は空間把握能力がすごいのか、歩きなれているかのどちらかだろう。

「うわ、暗いわね……。イヴ、メアリー足元に気をつけてね。」

「私は慣れてるから平気だよ！ギャリーこそ転ばないように気をつけて歩いてよね！」

「アタシはこのくらいじゃ転ばないわよ？もし転ばせたいならもつと暗くする事ね！」

「にやにおう〜！」

ギャリーとメアリーがわちゃわちゃと微笑ましく言い合いをしているのを最後方で眺めていると、イヴちゃんが俺の側へとやってくる。

「イヴちゃんどうした？」

「転んだらいやだからお兄さんに手をつないでて欲しいなって……。
ダメ、かな？」

「それくらいなら全然大丈夫だよ。ほら。」

俺はそう言つてイヴちゃんに右手を差しのべる。彼女はその手をニコニコしながら握ると、未だに言い合いながらも先に向かつてる2人を追いかけるように俺の手を引きながら歩き始める。

2人を追いかけてながら一段一段確実に降りていくと、漸く階段の終点まで辿り着いたようだ。辺りを見渡すと階段を背にして左側にしか道がなく、その先にはなにやら机くらいの高さのものがあつた。メアリーとギャリーはそこで待っているようだ。

「2人もあそこで待つてるくらいならあんなに早く行かなければいいのよね。イヴちゃんもそう思わない？」

「ねー。それにわたしはあんなに早く降りれる自信ないもん。」

俺達はそう言いながら2人に近づいていくと、俺達を置いて先に行った当の2人はなんの悪びれる様子もなくのんびりと話しながら俺達を待っていた。

「あー！やつと来た！2人とも遅すぎ！」

「いやいや。俺らが遅いんじゃないよ。お前ら2人が早すぎるんだよ。」

「あー……確かに必要以上に急いで降りてきちゃったわねアタシ達。」

「2人だけで盛り上がったからわたし達何も言えなかつたもん。」

「うっ……。ゴメンナサイ。やつとここから出れるって興奮してたかも……。」

メアリーはそう言つて申し訳なさげに視線を下げる。するとギャ

リーも売り言葉に買い言葉でメアリーに乗ってしまった事を謝ってきた。しかし俺とイヴちゃんは別に2人を執拗に責めたい訳では無いので、2人の謝罪を受け取ってこの話を終わらせた。

「ふーん。私達ってこんな風に飾ってあるんだね。」

「あら、知らなかったのね。……いや確かに知らなくてもおかしくないのかもしれないわね。アタシ達にメアリーからの見え方って分からないもの。」

「実はあの額縁越しにしか外の世界を見れないんだよね。だから見える範囲はそんなに広くないの。」

「じゃあ外に出れたら色んなところにいっぱい行こうね!」

「うん!」

あれから移動して2階にやってきた俺達は何となくそこに飾られていた作品を見て回っていた。そこで3人が話していた会話を聞いて俺は今まで頭の中で、心の奥底で悩んでいた事に1つの決心が着いた。

「——『絵空事の世界』。ここから外の世界に出る事が出来るよ。」

「ふうん?なら早速ここからおさらばしましょ?」

「うん!そうだね!ほら、メアリーとお兄さんもいこ?」

「うん!私外に出るの楽しみ!」

「——いや、俺はここで“サヨナラ”だ。」

サヨナラ

「——いや、俺はここで『サヨナラ』だ。」

「……は？アンタ何言ってるの？」

「——あ、そういうばお兄さんだけ入ってきた美術館が違うって言うってたもんね！だからサヨナラってことなんでしょ！」

「いや、俺はここに残る。ここからは3人で仲良く脱出してくれ。」

俺がそう言うのとギャリーは怒りに、メアリーは悲しみに満ちた表情になる。イヴちゃんは未だに状況が飲み込めていないのか、まるでハテナでも浮かんでるようななんとも言えない顔をしている。

俺がみんなの表情を見ながら何も言わずにじっとしていると、何を思ったのかギャリーが俺のそばにズンズンのと通ってきていきなり胸ぐらを掴まれる。

「ちよつとアンタ、いきなり何を言い出すかと思えばここに残るう？バカ言ってるんじゃないわよ！一緒にここから出て色んなところに遊びに行こうって！マカロンも一緒に食べようって約束したじゃない！」

「ああ、そうだな。でも俺にはやらないといけない事があるんだ。」

「——ッ！ああそう！ならアタシはもう何も言わないわ！勝手に残って1人寂しくそのやらなきやいけない事をやってればいいじゃない！」

「トシ……。もしかしてそれって私を外に出す為に残るって事……？」

掴まれていた胸ぐらを乱暴に離された俺は、メアリーから間髪なくそう問われる。彼女は何となく察していたのか、それとも実は知っていたのか。この2択ならば原作を鑑みるにおそらく後者なのだろうが今はそんなことはどうでもいい。それよりもこの場をどうやって切り抜けるか。それが問題だ。

「……まあそれもあるな。」

「それもって……じゃあ他にどういう理由でトシはここに残るの？」

「一番はとある人に……、俺をここに呼んだ人に会いたいからって
言ったら納得出来るか？」

「えっ……。た、確かにトシをこの世界に呼んだのは私じゃないけど。
じゃあ一体誰がトシを呼んだっていうの？」

「あー……。じゃあメアリーだけに教えてあげる。耳貸して。」

俺はそう言って膝立ちしてメアリーの頭の位置まで体勢を低くする。恐る恐る近づいて来たメアリーの耳の横を手で覆って俺は“この世界の生みの親”の名前を口にする。

「——俺をここに呼んだのはワイズ・ゲルテナ。君の父親のような存在だよ。」

「——えっ？それ、嘘、だよ……ね？」

「俺も本人にちゃんと確認を取れてないけど十中八九間違いない。だって聞こうとしたら“多分あってるから口外するな”って言われたからさ。」

まあそれを知ったのもついさっきだけだなんて少しおどけながら言っている中メアリーは肩を震わせながら俺に1つ質問をしてきた。

「パパは……私の事なんて言ってた……？」

「——“可愛い可愛い私の娘だ”。口では言っていなかったけどあの人の目が、表情がそう言ってたよ。」

「そっかあ……。私ってちゃんと愛されてたんだね。」

メアリーは涙を流しながら晴れやかな笑顔で俺にそう言ってきた。それを見ながらメアリーの頭を撫でていると、イヴちゃんが俺に言いたい事があるのか近づいてくる。

「お兄さん……。本当にここに残るの……？」

「ああ。それが俺のなすべき事でずっとしたかった事だ。」

「じゃあお兄さんはわたし達よりも美術品と一緒にいたい……？」

「いや……。できる事なら3人とずっと一緒にいたいさ。」

「ならっ！」

「でもこの世界がそれを許しちゃくれないんだ。」

「どういう事……？」

それを聞かれるタイミングはいつか来るのだろうと思っていたが、いざ言うとなると口に出す事をはばかられてしまう。しかしそれを言わなければ誰も彼も納得できないだろうし、結局いつか知られてしまふ運命なのだからと腹を括る。

「この世界からメアリーが出る為には誰かが変わりにならないといけないんだ。」

「そんな……。嘘……。嘘だ！お兄さんの嘘つき！」

「嘘じゃない。ここから4人で出ることは出来ない。現に出口となるはずのこの絵絵空事の世界になんの変化もないだろう？」

「そんなの絶対に嘘だもん！4人でここから出るんだもん！じゃないと嫌だ……。嫌だよ！」

イヴちゃんは涙を流しながら現実を受け取られずに嫌だ嫌だとずつと言っている。しかしここでそんな事をしていても無駄に時間が過ぎるだけだしいいことは何も無い。あまりこの手は使いたくなかったが致し方ない、最終手段だ。

「イヴー！これが現実なんだ！何事も必ず上手くいくとは限らない！だから俺のできる事をする！ならイヴのできる事はなんだ！」

「やだ……。やだよう……。みんなと一緒に帰りたいよ……。」

「そうやっていつまでもグジグジしてるつもりか！俺の知ってるイヴ

はそんなに弱い女の子じゃなかったぞ！もつと明るくて活発でみんなを元気にしてくれる子だった！」

「えっ……？」

「イヴの笑顔に俺もギャリもメアリーも！みんな元気をもらってたんだ！そんな子が涙を流したら悲しいお別れになるしかないだろ！」

「でも……。お兄さんと離れ離れになっちゃう……。」

「……大丈夫だ。例えば体が離れてても心が忘れてなければ繋がっていられるさ。それに最後までイヴの笑顔を見ながら別れたいな。」

「うん……。わかった、頑張る。」

イヴちゃん……いや、イヴはそう言うど頑張って口角を上げて笑顔を作る。その笑顔は自然に出てくる笑顔と比べるとあまり楽しそうではなかったが、今まで見てきた笑顔の中で一番輝いて見えた笑顔だった。

「それじゃあアタシ達は行くわね。ヒロトシ、達者で暮らすのよ。」

「ああ。まあきつとなんとかなるさ。」

「トシ！私ぜつつつしたいにトシの事忘れないから！」

「そうしてくれると嬉しいよ。俺もお前ら3人の事は絶対に忘れな
い。」

「お兄さん！——またね！」

「——っ。ああ、またな。」

別れの言葉も程々に絵空事の世界は元あった形に戻っていき絵の中にいた3人の姿がゆつくりと消えていく。その姿が見えなくなるまで見送った俺は1人になってしまったこの空間でぼつんと立ち尽くしていた。

「やあ、待ったかい？」

「いや、それほど待ってねえよ爺さん。」

俺の目の前には夢の中で散々お世話になった初老の男性が立っていた。漸くここまでたどり着けたので色々と聞きたいことはあるがまず一つ何よりも先に聞きたいことがある。

「なあ爺さん。」

「ん？一体どうかしたのかな？」

「俺、上手くできたかなあ……？」

「——ああ。君の望む結末を君の手で成し遂げたんだ。上手くできたさ。」

「そっかあ……。じゃあさ、嬉しいはずなのになんでこんなに悲しいんだろうな。俺もうわかんねえや。」

「そうだねえ……。」

——それはきつとあの3人との時間は本物だったんだよ。ゲームでもなんでもなく、ね？——

END : 2 貴方を想って

——わたしは今まで何をしていたんだろう。ぼうつとした頭でそう考えると周りの景色も相まって何とか思い出す事が出来た。

「そうだ……。わたし美術館にいたんだっけ……。ママ達はどこにいるかなあ。」

わたしはママとパパを探すためにその場を離れる事にした。わたしが今いる2階を早足になりながら探すけど2人ともなかなか見つからない。一周して見当たらなかったからもしかして1階にいるのかなって思っけて降りて展示コーナーを探してみると、バラのオブジェの前に何やらおしゃべりしてる男の人と女の子がいた。身長差的に兄妹とかかな？

「ねえメアリー。今日のアンタ、なんか様子がおかしいわよ？今までそんな変な事言わなかったじゃない。」

「だから私は美術品だったの！それをトシに助けて貰って……。ああもう！なんで私は覚えてるのにギヤリーは覚えてないの!？」

「だって……。ねえ？ここに来てから急に“私は美術品だった”なんて言われても訳わかんないわよ。……。もしかしてこの子どこかで頭でも打ったのかしら？」

「私はどこもおかしくなっていない！……。あつ！イヴ！ねえ、イヴもギヤリーに言っけてあげてよ！」

「えーつと……。あなたは誰ですか？わたし達初対面だよ？」

わたしがそう言うとメアリーと呼ばれてた女の子はとても絶望した顔をわたしに向けてきた。……。うん、いくら思い出してみてもこの子にあった記憶がないや。

「嘘……。う？じゃああその記憶を持つてるのって私だけ……。？」

「……う？あれ？なにかポツケに入ってる……。アメ？」

「あら？それアタシの飴じゃないかしら……。やっぱり上着のポケットに入れてた飴がなくなってるわ。」

「えっ、じゃあこれ返すね？」

「いや、それはアンタにあげるわ。もしレモンキャンデーが嫌いならアタシが食べるけどどうする？」

ギャリーと呼ばれていた男の人にそう言われたので、「じゃあもうね」と言ってそのアメをじっと見つめる。これを見てると何かを思い出せそうな気がする。でも何を思い出すんだろう。このアメを見た事はないはずなのに……。

「名前？すのうちひろとし 則内大利すのうちひろとしって言うんだ。ヒロでもトシでも、今まで通りお兄さんでもなんて呼んでもいいよ。」

「そりやイヴちゃんを信頼してるからね。」

「そっか。イヴちゃんは強いね。じゃあ頑張って進んでいこっか。」

……

……

……

「——いや、俺はここで「サヨナラ」だ。」

「お兄さん！——またね！」

「——っ。ああ、またな。」

「……お兄さん。」

「イヴ今なんか言ったかしら？ってちよつと！急にどうしたのよ！」

「え？なんの事？」

「イヴァンタ今泣いてるわよ！」

ギャリー……さんにそう言われて目の下辺りをさわると、なんでか分からないけどぬれていた。それを意識してしまつたらもう自分では止めることができなくなつちやつた。

「イヴは思い出したんだね……。あとはギャリーだけだよ！」

「そんな事よりこの子を早く泣き止ませないと！ほらメアリーも手伝って！」

2人がなんか色々言い合ってるけど私はそんなことも気にしないで、流れ出る涙をママから貰つたハンカチでふき続けた。

少しして涙も止まつたわたしはあの“お兄さん”のことについてメアリー……さんに教えてもらおう。するとメアリーさんはわたしに“ヒロトシ”という人の話を聞かせてくれた。メアリーさんが言うにはわたしがその人のことを“お兄さん”と呼んでいたらしい。ということとはさつき頭の中に浮かんだ人がヒロトシさんなんだと思う。

「——で？ギャリーはここまでの話を聞いても思い出さないの？」

「そんな無茶を言わないでちょうだい……。思い出せ……。思い出すのよギャリー……。アタシだってやれば出来るの……。！」

「あ、あはは……。そこまで自分を追い込まなくても大丈夫なんじゃないかな？」

「いやーこういう時こそ自分を追い込む必要があるのよイヴ！……。アンの名前イヴで合ってるわよね？なんか言い慣れてる感じがあるわね……。」

「おっ！その調子でどんどん思い出して！」

わたしを置き去りにして2人だけで話をする2人を見て少しさみしい気持ちが出てくると同時にこんな時お兄さんならなんて言うか

なつてふと思つちやつたんだ。

『おいお前ら……。俺達をおいてけぼりにすんじゃねえよ。イヴち……いやイヴも困つてんじゃねえか。』

「——えっ?。」

「い、今誰かが何か言つてたわよね……?。」

「トシ……。」

なにか聞こえ始めた時にわたししか聞こえてないのかと思つたけど、反応を見る限り2人にも聞こえてたみたい。それに今聞こえた声はわたしに安心感を与えてくれてもう一度聞きたい気持ちが出てくる。

「でもお兄さんはあの世界に残つたんだもんね……。ここでお兄さんの声が聞こえるわけもないね……。」

「それは——ごめん。私が外の世界に行きたいって言わなければこんな事にならなかったかもしれない。」

「いや、そんなことはないと思うよ。だつてお兄さんは、やることがある。」つて言つて残つたんだもん。」

「それは——。」

「うーん……。まだ思い出せてないアタシが言うのもなんなんだけどきつとそのヒロトシつて人はアンタ達を外に出すために頑張つてたんでしょ?なら感謝だけをして後悔をしないようにしなさい。」

「えっ?な、なんで——。」

「だつて助けたのにごめんなさいって言われるのって言われた方はだいぶ悲しいものよ?。」

わたし達はそう言われてハツとする。たしかに助けた時に感謝されなかったら悲しいと思う。それに1回忘れちゃったとはいえきおくも思い出せたからもう忘れることはないと思う。

「……わかった。これからはここに居る事をトシに感謝しながら生きてく……。」

「わたしもお兄さんにありがとって思いながら毎日生きてく。」

「よし！それじゃあせっかく知り合っただし今度一緒にマカロンでも食べに行かないかしら？」

「さんせーい！マカロン食べたーい！」

「わ、わたしもいいの？」

「勿論！美味しいマカロンを提供してるお店知ってるの！そこに一緒に行きましょうね！」

「——っ！うん！」

わたし達は次会う約束をつけて別れることになった。ママが後ろでわたしを探していたから早く一緒に見て回りたかったから。でも次2人と会ったらその時はちゃんとお兄さんのことを話したいと思う。だって——

どうやら今回は1人を犠牲に3人助かったようだね。まあ彼ならそうすると思っただけ。でも私の望む終わりは誰かの犠牲に成り立つようなものではないんだ。だからヒロトシ。君にはもう少しだけ私の我儘に付き合ってもらおうよ？

同一人物な他人

—やあヒロトシ。夢見心地の中悪いが少しだけ介入させてもらおうよ？なに、悪い様にはしないから安心してくれ。まああまり気持ちのいいものは流れないから……まあそれも今後の為ってモノだ。そのくらいは我慢してくれたまえ。

—おい爺さん。あんた一体何考えてんだ？

—そりや勿論

ハッピーエンド
娘の幸せさ。

……
……
……

記憶が逆流する。時間が逆流する。光が逆流する。そんな感覚を覚える中、俺の夢はギャリーとの出会いとメアリーとの出会い、そして王様への謁見のシーンがダイジェスト方式に映し出される。しかし映し出される映像は俺が言った言葉ではなかったり、俺のつけた覚えのない行動をしている。

もっと細かくいうなれば俺は3人から嫌われるであろう行動ばかりとっていた。それに王様への謁見の際にはなんとも不遜な態度をとっていてなんの情報も得る事は出来ていなかった。

夢の中とはいえなんとも馬鹿馬鹿しい行動ばかりをとっている俺を見ているのはなかなか辛いものがある。しかし目を閉じる事が出来る訳でもなく垂れ流しになっている映像をボーツと見るしかする事が無い。そう思っていると段々意識が無くなっていく感覚に陥る。

「……っは!？」

「お兄さん大丈夫……?？」

「あ、ああ。俺は大丈夫。」

「そっか……。」

「イヴ、そんな奴ほつといて早く先に行きましよ? 先にメアリーが行って待ってるわ。」

「あ、うん……。お兄さん、先に行ってるね。」

「……ありがとな。」

イヴはそう言い残してギャリーの後を追っていき、この場には俺一人になった。先程の映像の続きなのだろうか。イヴの態度は素っ気ないしギャリーに至っては俺の事を嫌っているフシさえ見えてくる。もしかして俺の見ていたもの以外にも口論が絶えなかったりしたのだろうか。しかし俺の知っているギャリーはさっきのギャリーよりももつと大人の対応をしていた気もするし思ってる倍はやらかしているのかもしれない。

「……取り敢えず先に進むか。」

俺は独りごちるととぼとぼと先程通った道をもう一度歩いていく。さっき通った時はなんだかんだイヴと2人で歩いてきた為そこまで退屈感を感じざるを得なかった。

しかしこれは一体なんなのだろうか。俺は3人を外の世界へと出してあげたはずなのに未だにイヴとギャリーはここにいるし、今まであんなギャリーを見た事がないほどにつっけんどんな態度を取られている。

イヴにしたってあそこまで俺を心配するような仕草を見せてきた事があつただろうか。……いや、心配自体はいつもかけていたのだがこの世界に関してはその方向性が今までのそれとは違う感じがするのだ。

気の所為なのかもしれないけれどこれほどまでに気になる点がある時点で1つの可能性が出てくる。それは「俺があの世界でとらなかつた行動をとっている世界」であるという事。それもかなり馬鹿な方向に思考がシフトしている世界なのではないか。

「はあ……。この世界の俺は馬鹿なんじゃないか？　こういうところから脱出するなんて協力し合わないといけないなんて分かりきつてることだろうに。」

《ンなもん決まってるんだろ。アイツらが信用ならないからだよ。お人好し。》

「!? 誰だ！ 出てこい！」

《俺はテメエだよ、クソツタレな甘ちゃんよお。》

「はあ？ 何馬鹿なこと言ってるんだよ！ んな訳ないだろ！」

《そんな訳があるから今こうなってるんだ。そういう訳だから所有権は返してもらおうぜ？》

「はっ？ 一体何の——。」

何の事を言っている。そう言おうとした矢先に俺の体は思う通りに動かなくなり、それどころか俺の意志とは関係なく勝手に動き始める。一体何事かと驚きを蹶にしていると、そんな俺が滑稽だったのか今俺の体を動かしているであろう自称「俺」が口を開いて説明を始める。

「どうせあのジジイが何かしたんだろ？ なんの為かは知らねえけどめんどくせえ事してくれたもんだ。けどよ、俺の体に乗っ取ってもらっちゃ困んのよ。それに今更アイツらと仲良しこよし出来るような関係でもねえしな。」

《おい、この状況を説明しろ！ これは一体なんなんだ！》

「そんなもん知るか。そんな事ジジイに聞け。俺がここまで来たのはイヴの為だ。それ以上でもそれ以下でもない。」

俺は「俺」の何も知らなすぎる言い分に絶句する。俺が3人揃つての脱出を心から望んでこの世界に呼ばれたとしたら、この「俺」は一体なぜこの世界に呼ばれたのだろうか。

「ンなもんジジイが何となく呼んだんじゃねえの？ま、なんにせよ興味ねえな。」

《——まあ俺からはもう何も出来そうにないし最後まで見守つてくわ。お前のやりたいようにやればいいんじゃねえの？》

「「俺」に言われなくてももとよりそうするつもりだ。ま、せいぜい楽しんでくれや。」

《こいつ絶対なにか起こす気だろ……。》

「それは見てからのお楽しみみてやつだな。」

そんな話をしている内に「俺」はもう既に絵空事の世界の近くまで来ている事に気づく。随分と長い事話をしたものだ。

その絵の前には3人がこちらを覗いてくるように見つめてくる。と言ってもその目はあまり好意的なものでは無いことは確かであった。

「さあ、仕上げと行こうか？「俺」。」

そう言つて「俺」は3人の前に仁王立ちをし始めた。

まるで別人

仕上げをするという「俺」の言葉に嫌な予感を感じつつも、今の俺には何も出来ない事に変わりはないという現実に打ちひしがれながら事の一部始終を「俺」の中から見守る。

「ようお3人方。こんな所で一体何をしていたんですかねえ？」

「……アンタを待ってあげたのよ。イヴに頼まれちゃったしね。」

「ねー。やっぱコイツは放っておいてさっさとここから出よーよー。」
「で、でもわたしはお兄さんに今まで助けてもらったし……。」

「俺」の前でもお構い無しにこちらを罵ってくる2人をイヴが何とか止めようとするがあまり効果は見えないように感じる。それほどまで憎まれている「俺」は一体何をやったのか。先程の夢で見た行動だけではここまで露骨に嫌われるとは思えない……訳では無いけれどもまさかギャリーまで敵に回すとは思っていなかった為驚きが隠せない。ギャリーで遊ぶの楽しいのに。

「あらあら。こりゃあ俺もだいぶ嫌われたもんだなあ。」

「そりゃあんな事をしてくれたお陰で十二分にアンタの事を知れたもの。」

「お前なんかここに置いてってやるんだから！いくらイヴをここまで連れてきたからって信用なんてしてないからね！」

「わたしは……。」

イヴがなにか言いたそうにしている事を除けば三者三様に言いたい事を心置きなくぶちまけている。ここまで来るともはや他人事の域に達しているので自分の身に起こるかもしれないifを見ていると言うよりは知り合いがやっている演劇を見ている感覚になっている。

そんな事を思っていると、仕掛けの準備ができたのか「俺」が『絵

空事の世界』の方へと歩き出し始める。ギャリーとメアリーは俺が何をしでかすかてんで見当がついていないらしく、イヴを守りながらこちらを睨みつけるだけで何かをしようとはしてこなかった。

「そんなに警戒されても君達には何もしないよ。君達には、ね。」

「アタシ達にはって……一体何するつもりなのよ！」

「さあ？ま、何が変わったか分かればいいな？」

「俺」はそう言うと高らかに笑い始める。さながら悪役のような高笑いにもはや演技臭さすら感じてしまうがそんな事も気にもとめずに「俺」は笑い続ける。

その姿に気味が悪くなったのか3人は少し後退りをして「俺」から距離をとるが、ギャリーが「俺」を無視して絵画の方へ近づいていくとその大きい額縁に触れる。しかし何も起こる様子は感じられない。その様子にギャリーは頭を傾げるだけで終わるが、メアリーは違った。額縁が無くならない事に違和感を覚えたのだろう。目を見開いて絵画の方を見つめている。

「おやあ？一体どうしたんですかあ？何かおかしい事でもありましたあ？」

「お前ホントにムカつくなあ！一体これに何したんだよ！」

「さあ？俺には分からないなあ？」

「お、お兄さん！わたし達を外に出してほしいの！」

「俺」はイヴからそう言われるとほんの少しだけ困った表情を見せながら、でもだからと言って何かを言う事もなく。「俺」はその場で合図を送る。

何の変哲もない拍手の音。

ギャリーとメアリーは「俺」の出した音に警戒を強めるが、もう遅い。「俺」の後ろから無個性が2体「俺」をいつも庇える位置に陣取る。

イヴもギャリーも、メアリーでさえ言葉が出ないようだ。

「さて……無個性。やれ。」

「俺」がそう言うのと無個性のギャリーとメアリーを捕まえてどこかへと向かっていく。そして「俺」がイヴに手を伸ばしていくところで意識がゆっくりとフェードアウトしていく。

「い、いや……。いやああああ!!」

なんてイヴの悲鳴を聞きながら……。

—やあ。私お手製の夢はどうだった？少しは楽しめたかい？

—ただただ胸糞悪い三文芝居だな。せめてキャストが俺たちじゃなければもうちよい楽しめたかもしれん。

—ははっ、こりや手厳しい。でもこれであと必要なピースは一つになった。

—必要なピース？……ああ、ハッピーエンドのためのくっつけて言っただなそう言えば。

—そう。メアリーは君も一緒に外に出る事を望んでいた。そして今もそれができなかつた事を後悔している。ならば親としてはその望みを叶えてあげたいつてもものだろうか？

—この親バカが……。

—親バカ結構じゃあ次に行こうか。

—お手柔らかに頼むよ。じいさん。

俺はそう言ってもう一度意識が薄れていく。次は何を見せてくれるのか。少しだけ楽しみになってしまったのはじいさんには秘密にしておこう。そう思ったのだった。

最後のピース

あれからじいさんと色々な世界線の俺達の結末を見ていった。イヴのみが助かる世界やイヴとギャリーが助かる世界。イヴとメアリーが助かる世界もあればはたまた皆で美術館に残る世界なんてのもあったりした。しかし、1つ気になる事もある。

—なあじいさん。なんで俺はどの世界でも外の世界に戻ろうとすらしなんだ？

—それは君自身が1番よくわかってる事なんじゃないかな？違う世界線であれ君は君だ。思想や理念が大きく違う事は滅多にないからね。

じいさんがそう言うところらにニコリと笑みを浮かべている……ように感じる。というかここは一体何なのだろうか。あの3人を外に見送ってからじいさんに連れてこられたが、なんだか何も無いように感じる場所に瞬間移動させられた。先程までの世界線巡りもプロジェクターに投影しているものを見ているような感じで見ていたし、会話をしているはずのじいさんは俺に視界には入っていない。

—じいさん。聞くの忘れてたんだけどここは何処なんだ？それにじいさんはどこにいるんだ？

—ははっ、本当に今更だねえ。そこは私が突貫で作った部屋だ。まあ映画館のようなものと思ってくれればいいよ。

—突貫でこんな部屋を作るなんてお手の物ってか？あんな美術館作ってりや、そりゃこんな小部屋なんかちよちよいのちよいなんだろうけど。

—まあそんな所だね。それで私の居る場所は今までと全く変わってないよ。つまり……。

—……俺の頭の中って事か。それなら今まで口を開かずとも会話出来た理由もそれのお陰って訳か。

—そういう事だね。ま、今の私は君の別人格とでも言っておこう。いざとなったら君と代わって動いてあげるよ？

—そりやありがてえこった。ならそんな時はよろしく頼むよ、じいさん。

そんな軽口を叩き合いながらもこの部屋とじいさんの所在を聞いてとりあえずの危険が無い事にほっとしながらも、次に気になった事を質問していく。

—なあじいさん。今までの映像を見てきたのはいいが俺にこれを見せて何をしたいんだ？

—うーむ……、なんと云えばいいのか。初めに娘の幸せハッピーエンドを考えてると言つたのを覚えているかい？

—まあそれは覚えてる。けどメアリーの幸せと俺がこれらの映像を見るのに何が関係してるんだよ。

—それが大いに関係してくるのだよ。わかりやすい所で行くとゲームとかのフラグ管理だね。

—……俺の記憶から「ゲーム」を見たのか。まあその説明なら俺でもわかりそうだからいいんだけどさ。

—いやあ、君の世界は娯楽に満ち溢れているねえ。私はその時代に生まれたのならゲームクリエイターになっていたかもしれないよ。

随分と現代に染まりきった中世（であろう）美術家も居たもんだと自分の影響だと言う事を考えないようにしながら呆れていると、じいさんはそんなことも気づかずに「ゲーム」という媒体の素晴らしさを意気揚々と語り始める。

—……つまりこの様にお手軽に映像とともに物語を楽しめるモノというのはとても素晴らしいものなんだ。私の時代にもこんな画期的なモノがあれば私の芸術活動ももっと華々しいものになっていたかもしれないと考えると……。くう！なんだかとても悔しく感じて

しまうよ！

「ああ、そう……。それよりもさ、メアリーの幸せと俺のバッドエンドももしかしたらの世界がどう結びついたら関係してくるんだよ。フラグ管理ってなんのフラグ？」

「それをすぐに教えてもいいんだけど娘の求める世界に必要なフラグはあと一つあるんだ。どうせならそつちも話した上で答え合わせと行こうじゃないか。」

「答え合わせって……。俺はまだその答えの予測すら出来ていないだぞ？合わせる答えがないんだからそれはもうカンニングと大差ないだろ、

「うーむ。あれだけ一緒にいたのだから娘の求めて^{ハッピーエンドの条件}いる結末位は察していて欲しかったんだが……。まあそれもいいだろう。」

じいさんはそう言うのと俺の前に姿を現す。突然の事で少し驚きはしたが瞬間移動や頭の中での会話など普通では考えられないような事をこの数時間で何度もしてきた為恐らくできるであろうという予想はある程度着いていた。それでも多少驚いてしまったのは突然の事だったからだろう。

しかしなぜ突然じいさんが俺の目の前に姿を現したのか。今の今まで姿は見せなくとも会話をしていたと言うのに。俺はその答えをじいさんの表情から理解した。

とても真面目な顔をしていたのだ。

今までのじいさんならどんな話でもニコニコと笑みを絶やさずにいて、好々爺と言われていそうな顔だったのに今俺にみせている顔はとても真面目な今まで見た事のない表情だった。

「……どうしたんだよ。そんなおつかない顔してさ。」

「ここからは真面目な話をするから茶化さないで聞いておくれ。」

「……あいよ。」

「君は――、

自分の名前の意味を考えたことはあるかい？」

名前の謎

「俺の、名前？……確かに苗字は珍しいかもしれないけど下の名前はそんなにおかしいものじゃないだろう。大利ひろとしなんてよくある名前だ。」

じいさんの質問に俺は一瞬考えてしまったが、特におかしい所もなにか思う所もある訳は無い。両親から聞いた名付け理由も「大きく広い心で利口に生きて欲しい」というなんともわかりやすいものだったはずだ。

「確かに君の言う通り君の国では普通の名前かもしれないね。でも人の解釈次第で名前の意味なんてものはどうとでもなるものさ。それに今大切なのはありふれた名前か否かじゃない。」

「なら俺の名前の何がどんな意味を持つてるって言うんだよ。」

「それを考える為にはファーストネームとファーストネーム、両方を少しだけ穿った考え方をしてみよう。」

「穿った……？それってどういう意味だよ。その言葉の意味知らないんだけど。」

「そこからかい……？うーむ簡単に言えば物事の本質をちゃんと捉える事かな。」

「へえ。なんか文字の雰囲気的にひねくれた考え方をしてるのかそういう意味かと思ってた。」

「物事は往々にして見た目と実態が違う事があるものさ。話を戻すよ。」

じいさんはそう言うときコホンと1つ咳払いをして俺に説明を始める。

じいさんの話を聞くに日本人の名前は1文字1文字を分解して漢字の意味を読み解いたり、他の読み方をする事によって実際に与えられた意味とは違う意味を持つ場合があるらしい。

「へー……。それで？その考え方をして俺の名前を見るとどうなるっ
てのさ。」

「まず君の名字から考えていこう。則内すのうちは分解して則と内の意味を見
るよ。まずは『則』。これはこの1文字でできまりという意味を持つ
んだ。それに内という文字が付いてきまりの内、つまりはルール内と
いう意味に捉えられる。」

「お、おう。だからって何になるってのさ。」

「本来君はこの世界に来るはずのないイレギュラーな存在だった。で
も君の名前のお陰で弾かれる事もなく馴染む事が出来た……って
言ったら分かりやすいかな？」

「はあ？何がどうなったらそうなるんだよ。意味わからん。」

「まあこういう世界にはそういう機能が備わっているんだ。だからこ
そ君の名前はとて私にとって都合が良かった。それにファースト
ネームもなかなか君の事を言い当てていると思うよ。」

俺はじいさんの言っている世迷言を素直に受け入れる事が出来な
かった。何せ自分の苗字の意味なんて今まで考えた事もないし、それ
のお陰で今ここにいる事が出来ているなんて考えたくなかったから
だ。

しかし下の名前の方が俺の事を言い当てているとはどういう事な
のだろうか。さつきじいさんの言っていたようにできる限り多角的
に少し考えてみるがてんで見当がつかない。

「……ギブアップだ。なあじいさん、俺の下の名前にはどんな意味が
あるって言うんだよ。」

「こつちについてはだいたい無理矢理な解釈になるけど君はそれでも構
わないかい？」

「ここまで聞いたんだ。今更どんな答えが返ってきてても驚きはしても
あんたを悪く言うつもりはない。」

「そっか。それなら私も私の考えをちゃんと君に伝える事にしよう。
と云つてもこつちファーストネームはそんなに難しく考える必要は無いんだ。他の読

み方をすればいい。」

「……と言うと？俺の名前を一体どう変えるんだ？」

「大利^{だいり}。他の漢字に変えるならお内裏様とか大理石とかもあるけど今読ませたい漢字は——。」

「——代理人。つまりじいさんは俺の事を代理としてここに呼んだって訳か？」

「——それもあるね。」

じいさんは少し言い淀んだものの悪びれる素振りもなく俺にそう言い放つ。その姿に俺は怒りが湧いてくるでもなく悲しみに侵される訳でもなく、ただあるがままにその言葉を頭の中で反芻していた。

代理人。ゲーム内でメアリー^{悪役}やギャリー^{仲間}が受け持っていた役割を俺が大利^{代理}として見送っていた。だからこそ俺はどの世界線においても外の世界に行こうとはしなかったし、それが正しいと思い込んでいた。

「ははっ……。じいさんのお陰でなんでもの世界でも外に行こうとしなかったのか身に染みてわかったわ。ありがとよ。」

「……そう決めつけるのはまだ早いんじゃないかな？確かに今まで見てきた君は外に出ようとはしなかった。つまりはギャリー^{送り}君とメアリー^{外に出さない}の役割を代理として受け持ってきたわけだ。」

「ああ。だから俺は外に出ることは叶わない。……だろ？」

「じゃあイヴ^{主人公}君の役割を受け持とうとは思わないのかい？」

「……はあ？いや、それをしたらほかの3人の誰かが出られなくなるかもしれないじゃんか。俺がこの世界に入るきつかけの事を考えてもそんな事は出来ない。」

「なら君の薔薇を……。いや、みんなの薔薇を出る直前にこの世界に投げてしまえば？みんなの体を外に出せて尚且つ代わりとなり得る媒体はその世界に残る……。そんな事はあの時考えなかったのかい？」

「いや、それはっ！……考えなかった。俺が残れば皆は出られる。ならばそれが最善手だとばかり思っていた。」

「その“みんな”の中に何故自分を入れれない。これでも私は君の事怒ってるんだよ？私は君“にも”外の世界に言つて欲しかった。この世界は私の世界ではあるが君達死者の世界ではないからね。」

じいさんはそう言うのと俺に微笑みを向ける。どうやらこの人は良くも悪くも俺がこの世界に残る事を良しとしないようだ。しかしメアリー悪役の代理として呼んだ事を清々しいまでに認めていたのどうしてここまで良くしてくれるのだろうか。

「……じいさんの言いたい事は分かった。でももう3人とも外の世界に行つてしまった以上俺が外に出られる事は無いだろうし、出たとしても俺は元の世界に戻るだけだろ？」

「そう。君が外に出たら娘達と離れ離れになつてしまう。でもそれも案外何とかなつたんだ。逆に考えればいとも簡単に……ね？」

「逆に考える？何を逆に考えるんだよ。」

「娘達の世界に君が行けないのなら娘達を君の世界に連れて行つてあげればいいんだよ。」

「……いや無理だろ。戸籍は？家は？イヴの家族はどうするんだ。」

「そんなの簡単さ、世界を騙すんだよ。私が君にしたみたいにね。外の世界のイヴちゃんとギャリー君の戸籍謄本は既にコピー済みだ。それを君の世界にペーストするだけだからきつと大丈夫だろう。」

「いやそれ普通に犯罪……。」

「ふう……いいかい君。世界の真理を教えてあげよう。」

「はあ……？」

「バレなきや犯罪じゃないんだよ」

「もう怒られる。」

俺はじいさんの言葉に呆れると、じいさんはそんな事など知った事かと言わんばかりにドヤ顔をこちらに見せてくる。しかしそこも何とかなのであれば、後はこの世界から皆で脱出4人する方法のみである。

王様曰く「脱出するには贅が必要」との事だったので俺が残ったのだが、他にも方法があるのだろうか。それともこのじいさんが何か必要なものを準備してくれるのだろうか。俺は何も思いつかない中、じいさんは真面目な表情に戻って口を開く。

「とにかく、だ。これからまだ脱出する前くらいに君を戻すからそこからは頑張ってくれ。私も顔を出そうとは思っているが少し準備が必要だからね。少し待っていてくれると助かるよ。」

「分かった。とりあえずあの絵の前に着いてもじいさんが来るまでは待つてるように声をかけとくわ。」

「ありがとう。それじゃあこれから良い旅路を……。君が外に出る所を見送らせてもらうからね。」

じいさんが喋っている途中から意識が徐々に無くなっていく感覚が強くなっていく。そしてじいさんが言い終わる頃には俺の目の前は暗闇となってしまっていた。

時は遡る

目の前の暗闇に少しずつ明かりが入ってくる。その光は徐々に大きくなっていき、俺の視界を埋めつくして広がっていく。

「っは……ここは？——っ！他の連中は何処だ！」

「あつ！トシやつと起きた！なかなか目を覚まさなかったけど大丈夫？痛い所はない？」

「メアリー？……ああ、痛みとかは特にないから大丈夫だ。」

「そつか！あ、でもおもちや箱に落とされてからトシが起きるまで少し探索してみたけど鍵は見つかんかったや……。ごめんね？」

「それはメアリーが気にすることじゃねえよ。あんま気にすんな。」

「……なんかトシ口悪くなった？」

「あー……気のせいだから気にすんな。」

「絶対に気のせいじゃない！」とこちらを睨むように真っ直ぐと見つめてくるメアリーを俺はスルーして立ち上がる。メアリーがおもちや箱と言っていたがどうやらその通りのようで、だいぶ広い部屋に青人形や無個性達が何体か置いてある。

しかし、1回目の時よりもこの部屋にいる無個性達が少ないような気がするの俺の気のせいでは無いはずだ。だがそれを確認する術を持ち合わせていないのであまり深く考えないでおこう。

なんとなく手持ち無沙汰だった為、ズボンのポケットに手を突っ込むと何やら硬い感触が指先に感じる。何かをポケットに入れていた覚えもない為、入っている物がなんなのか確かめる為にそれを掴んで取り出す。

「あー！なんでトシが探してた鍵を持つてるの!？」

「さあ……？ポケットの中になんてか入ってたんだよ。今まで気を

失ってたしその時にでもあいつらからこっさり入れられたんじゃないか？」

俺がそういうもあまり納得していない様子のメアリーだったが実際問題なんでポケットに入っていたのかなんて俺も分からないのであまり気にしないで欲しい。

そんなことを考えながら出口に向かって歩いていくが、一向に美術品達が襲いかかってくる様子がない。鍵といいコイツらといい不可解な点が多くあるが気にしていても埒が明かないのでズンズンと進んでいく。

「トシいゝ。そんなにどんどん進んで大丈夫なの？」

「周りの奴らも襲ってくる雰囲気がないしさっさと進んだ方がいいだろう。早く2人と合流すればその分アイツらに心配をあんま掛けないだろうしな。」

「……そうだね。私も早くイヴと会いたいよ。」

「……ギャリーの事も言ってやれ。だんだん気の毒に感じてくる。」

「えくだってギャリー私の事見捨てようとしたんだもん。私も簡単に好きになれないよ。」

「まあ言いたい事はわからん事もないがそれでも一緒に行動してみても悪いヤツじゃないって事は少しはわかったんじゃないか？」

「……まあ少しは。」

あまり素直になりきれないメアリーを見てほっこりとしながら先に進んでいく。するとメアリーは何か気づいたような反応を見せたと思うと、突然走り出した。

恐らくメアリーの部屋にイヴとギャリーが入ったのだろう。正直訳を知っている為急ぐ必要が無いのも分かっているのだが、そんなものをメアリーが知っている訳でもなく俺も実際は知るよしもないので着いていかないと何か変な勘違いをされてしまいそうなので小走り程度の速さでメアリーの後を追った。

「トシ遅い！」

「いやメアリーが急に走り出すからだろ。じやなきや俺だって置いてかれなかつたぞ。」

「だって！私の部屋の鍵が開けられたんだもん！ゆっくり歩いてられないよ！」

「どうせイヴかギャリーが何も知らずに開けたってだけなんじゃないか？ここはお前の世界なんだからそんなに慌てる必要も無いだろうに。」

「でも……でもお……。」

そう言つて唸りをあげるメアリーの頭を撫でて落ち着かせながら部屋の入口の方を見やる。元々おもちや箱のあつたこの部屋には案の定2人の姿が見えなかつた為、前回同様この先の部屋に入ったのだろうと見切りをつけて先へと進んでいく。

その先に変わらぬ2人の姿を求めて――。

好き………？

落ち着いた俺達が茨のあつた先へ行こうと一歩足を踏み出すと、部屋に入るよりも先に目の前からイヴとギャリーがこちらに歩いてくる。その姿を見たメアリーは先程のテンパっていたものがぶり返してきたのか2人の方へとずんずんと大股で歩いていく。

「2人ともなんで私の部屋に入ってるのさあ！」

「だって仕方ないでしょ？アンタ達2人が落ちてすぐに部屋の様子が変わったんだもの。安全確認はしておかないと。」

「でも安心して？わたし達、メアリーの部屋では何も手に取らないで見るだけだったから。」

「ないって言っただし少し落ち着け。慌ててもいい事なんて何もねえぞ。」

「でも……でもお……！」

俺は先程の焼き増しを見ているような感覚に陥りそうな程既視感のある光景がメアリーを中心に展開されている。それを見た俺はギャリーにメアリーの相手をするようにジェスチャーをして丸投げしておく。

少し恨めしげな表情をこちらに向けてギャリーはメアリーの方へ歩いていく。俺がそれを見送っていると暇になったからなのかイヴがこちらに歩いてきた。

「どうしたイヴ、寂しくなったか。」

「……お兄さん、口が悪くなった？落ちてから何かあつたの？」

「あー……まあ後でなんでこうなったかわかると言うから秘密にしておこうか。イヴはこの喋り方は嫌か？」

「うーん……、わたしはいやじゃないよ？確かにびっくりはしたけどでもそのしゃべりの方が仲良くなったって感じがするもん。」

「そうか。なら良かった。」

俺はそう言ってイヴの頭を優しく撫でる。イヴは今までのように乱暴に撫でられると思っただのか少し警戒していたが、俺が撫で始めて直ぐに大丈夫そうだと感じたらしく大人しく撫でられる事に準じていた。

するといつの間にやらメアリーの痲癩が収まったらしく、2人が少し離れていた俺たちの所へ歩いてきていた。しかしその表情は片や微笑ましいものを見ているようなニヤニヤとしたもので、片や何故だか怒っているような悲しんでいるようなそんな顔だった。

「なあ、何でメアリーはそんなに不機嫌そうなんだ？」

「あら、そんなの決まってるじゃない。大好きなお兄ちゃんが友達に取られてるんだもの。」

「わあく！そんな事ない！ギャリー適當言わないでよね！トシもギャリーの言っただ事を真に受けないで！」

「お、おう。」

「メアリーもお兄さんのこと好きなの？」

「ふあ!?そ、そんなわけないじゃん！ばか言わないでよイヴ！」

「え〜？わたしはお兄さんのこと好きだよ？」

イヴがそう言うのと俺達3人の中の空気が一気に固まる。俺とギャリーの表情は固まったまま動かず、メアリーは口をパクパクとさせている。そんな事をものともせずイヴは再び口を開き始める。

「もちろんギャリーとメアリーも好きだからね！3人とも大好き！」

「——も、もちろんそういう意味だってことはわかってたから！トシとギャリーにはもったいない言葉って事もね！」

「あ、アンタねえ！いつもいつも一言多いのよ！少しはそういうところを改めなさい！」

「——社会的に死ぬかと思った……。いや、俺まだ高校生だしギリギリセーフだよな……っ？」

メアリーとギャリーがいつもの言い合いをしている中、俺はほつと胸をなで下ろす。まさか小学生に告白紛いな事をされるとは努力思っていたなかつたので、自分の思っている以上に慌ててしまったかもしれない。

「お兄さんはわたしの事好き？」

「え、あ、おお。好きだぞ。好き好き。もーちよー好き。」

「むう……。お兄さんなんか適当すぎない？もつと心を込めて言ってみて！」

「それは然るべき時に然るべき人から言われるまで取っておいて。今の俺にはこれが精一杯。」

「叱るべき時？怒ってる人が怒ってる時に好きって言うの？……お兄さん変なこと言うね。」

何だか盛大に勘違いをし始めたが、イヴの好きって言ってモードが解除されたからまあ良しとしよう。それよりも今の問答の最中一言も喋っていないバカ2人をどういなすか、そっちの方が今の俺には問題なのである。

「あらあらあ。ヒロトシったら随分と初なのねえ。」

「トシのバカー！バカー！」

「なんでそんなに言われにやいけないんだよ。俺は何も悪くねえ。……そんな事より早く行くぞ。」

俺はそう言って3人を背に部屋の扉へと向かい、ノブに手をかける。するとイヴとメアリーは慌てて、ギャリーはやれやれと言わんばかりの雰囲気醸し出しながら着いてくる。それを横目に俺達は漸くこの部屋から出る事にしたのだった。

違い

3人を置いて先にあの部屋を出た俺はそのまま真ん中の建物へと向かっていく。その時にふと違和感を覚えたのだが、何に対しての違和感なのかすぐには分からなかった。

後ろから足音が聞こえているのをあえて無視しながらそのまま歩いていくとそこには1回目と変わらずピンク色の建物が建立されているが、何故だか1回目に見た時と違って付近にある他の建物と同じに手書き感の溢れるものとなっていた。確か1回目の時はここだけ手書き感のない普通の建物のような気がするのだが俺の記憶が間違っているのだろうか。

「もうっ！少し弄ったからってそんなに拗ねなくてもいいじゃない！」

「いや拗ねてないが？」

「トシ……バカって言ってごめんなさい……。」

「ん。ちゃんと謝れたから許す。これからはあんまり言い過ぎないように気を付けろよ？」

「うん……。」

「お兄さんなんで先に行ったの？」

考えている間に3人が追いついて俺に話しかけてくる。それを適当に返しているとイヴがなんとも答えづらい質問を投げかけてくる。さてなんて返したのか……。

「あー……好きって言われ慣れてないから恥ずかしいんだよ。俺の身近にいる連中は好意を直接伝えてくる人がいなかったからさ。」

「へえ〜。お兄さんの周りの人達はシャイな人が多いんだね！」

「類は友を呼ぶとはまさにこの事ね。」

「嬉しい。」

そんなことを喋りながら俺は桃色の鍵を使う。カチャリという音が聞こえてきたと思つたら、それまで持っていた桃色の鍵が瞬く間に俺の手の中から消え去ってしまった。それを目の前で目の当たりにしたのだが特に驚く事もなくそのままドアノブに手を伸ばす。やはりこんな小さなものの瞬間移動よりもやばいものを見てきたせいで何を思うことも無くなつてきている。そんなことをふと思ひながら俺は扉を開ける。

扉を開けるとそこは見覚えのあるピンク色の部屋ではなく真っ黒の部屋となつていた。やはり1回目巡った世界とはどこか違うものとなつているようだ。これも俺が戻つてきたから……と言うよりはじいさんが手を出したからだろうか。

「お兄さん、また足止まつてるよ。早く先に行こ？」

「——ん？ああ悪い。早く行こうか。」

「アンタはよく立ち止まつて考えるわねえ。立ち止まつてもどこにも進めやしないわよ？」

「でもたまには立ち止まつて休憩したり考えたりしないと。ただ前に進むだけなら猪と変わらないだろ？」

「ギャリーもトシも話してないで早く行くよ！私は早く外の世界に行つてみたいんだから！」

「ハイハイ。じゃあ先に進みますかね。」
す

俺達はそう言つて部屋の中にある階段を降り始める。その先はとうやら1回目と変わらないらしく、あの時と同じような景色が拡がっていた。それに少しだけ安心しつつ踏み外さないように1歩1歩着実に歩いていく。

「それにしても全てが黒いわねえ。ここまで全体が黒いと明かりがあつても踏み外しちやいそうだわ。」

「確かにな。イヴとメアリーも足元には気をつけてくれよ。足を踏み外しても助けられないからな。」

「はーい！」

「私は慣れてるから心配しなくても大丈夫だよ！それよりもトシとギャリーの方が私より気をつけた方がいいんじゃないの〜？」

「何よ失礼しちゃうわね！アタシの足腰はそこまで衰えてないわよ！」

ギャリーとメアリーが言い合っているのを横目に俺とイヴはゆっくりと階段を降りていく。ギャリーとメアリーも走って降りずに4人で降りきるとそこはやはり美術館となっていた。しかし俺には1つ気になる事がある。

「悪いけど先に2階に行ってくれないか？」

再会

「悪いけど先に2階に行つててくれないか？」

俺がそう言うのとギャラリーとメアリーが何言つてんだこいつと言わんばかりの視線をこちらに投げつけてくる。が、こんな事もあるうかと言ひ訳は既に考えてある。

「アンタ急に何言ひ出すのよ。」

「いやさ、美術館に来たらいいもののろくに展示物を見ないままこの世界に来たもんだから時間を気にしなくていい今のうちにどんな物があるのか見て見たくてさ。」

「それならみんなで見に行こうよお兄さん！そつちの方が楽しいよ！」

「私もイヴの意見に賛成ー！」

「そうね、アタシもそれがいいと思うわ。というかなんでアンタはこんな所に来てまで単独行動しようとするのよ？」

「いやあ俺の我儘で皆の行動を縛るのも宜しくないと思つてさ。それにイヴとギャラリーはもうあらかた見てると思つたしメアリーに至つては目新しいものなんてないかなーつて。」

「全く……変な気を使うんじゃないわよ。ここまで来たんだもの、みんなで回りますよ。」

何とか言ひ訳が通用したらしく1人でとは行かなかつたものの館内をじっくり見る時間が出来た。これで俺の知りたかつた事――、俺の世界の美術館と間取りや飾つていたものが同じかどうかしつかりと確認出来るようになった訳だ。

皆の行動を俺の我儘で決めてしまった事を申し訳なく思いながら美術館の1階を鑑賞していく。俺がこの世界に来るきつかけとなつた美術館を頑張つて思い出しながら回つていくと、見れば見るほどに同じレイアウトで配置されていた事が分かつてくる。

何故こんなにもゲームと現実には差がないのか。そんな事を考えながら絵画やオブジェクト、宝石の数々をゆつくりと鑑賞する。

「——それにしてもあのバラのオブジェ、イヴのバラみたいによく綺麗だったね！」

「確かにそうねえ……。外で見た時は薔薇だわくって思ったくらいで特に何も無かったけど今となっては気高さと力強さを感じるわね。」

「俺的には薔薇の花弁が何枚が落ちてるのはいい気分ではなかったな。なんかイヴが攻撃を受けたような印象を受ける。」

「もー！他にも展示されてたものはいっぱいあったでしょ！なんでバラの話しかしないの！」

「それくらい今のアタシ達の印象に残ったのよ。まあ勿論深海の世とか悪意なき地獄も面白かったけどね。」

ギャリーは微笑みながらぷりぷりと怒っているイヴに対して優しく返答をしていく。それを素知らぬ顔で聞きながら3人を率いて2階へと向かっていく。そして2階もゆつくりと鑑賞していくが、やはり俺の記憶の中にある美術館とあまり変わりが無いように感じる。これなら確かにこの3人がゲームの外現実世界に出たとしても美術館だけならば違和感なく合流できそうだな。

でも美術館と戸籍が何とかなったとして国の違いや年代の違い、それに伴う言語の違いは大丈夫なのだろうか。まあじいさんの改編能力に期待する事にしよう。きつとあの人なら何とかしてくれるだろう。多分。

「さて、一応あのでかい絵以外は見終わったわね。でもなんであれを後回しにしたのよ？」

「んー？ああ、あれ出口だからだけど？」

「……なんでアンタがそんな事知ってるのかは敢えて聞かないでおくわね。」

「まあおそろく直ぐに俺がその事を知ってる理由がわかると思うから

そんなに警戒しなくても大丈夫だぞ。」

「その発言、一応信用してるから。アタシ達の事裏切らないで頂戴？」
「少なくとも俺にそんな意思はないから安心してくれ。」

俺のその発言にギャリーは怪訝な表情をこちらに向けてくるがこちらとしてもなにも言える事は無いので何も言わずに黙っていた。すると俺らの来た方とは逆側から見覚えのあるシルエツトがこちらに近づいてきた。

「おまたせ。待ったかな？」

「いや、俺達も今着いたところだ。説明もじいさんがいないと出来ないしマジでナイスタイミング。」

「……ヒロトシ。このおじ様は一体どちら様かしら？この世界にいる時点でロクな存在じゃない様に思えるんだけど……。」

「それは俺よりもメアリーの方がよく知ってるはずだ。なあメアリー？」

「そんな……嘘……。——。パパ？」

メアリーが目を見開きながらそうつぶやくとじいさんはいつも以上に優しい微笑みを零しながら返事をする。その光景を見た2人もなんとなく誰なのか察したのか驚いた表情を見せる。ここでネタバラシと行こう。

「もう誰かわかっていると思うけどこの人はワイズ・ゲルテナ。メアリーを描いたり無個性を作ったりした人だ。あと俺をここに呼んだ張本人。」

「今紹介された通り私はワイズ・ゲルテナ。2人とも娘と仲良くしてくれてありがとね。」

俺達がそこまで言う状況が呑み込めていないのか3人とも固まったまますぐに動く様子を見せない。しかしゆつくりと3人が動

き出したと思ったら顔を見合わせて再びこちらに向き直る。

「「え~~~~~っ!!」」

うん煩い。

じいさん

「えー、3人……というかギャリーとメアリーが静かになるまで10分かかりました。」

「そりや簡単に落ち着けるわけないでしょ！大先生でありこの世界の創造者なのよ!？」

「パパと知り合いならそう言ってくれても良かったじゃん！トシつたらなんで教えてくれなかったの！」

「あーこりやまだ落ち着いてねえや。すぐに話を聞く体勢になったのはイヴだけだ。偉いぞ。」

俺はそう言つてイヴの頭を軽くなでるとギャーギャー騒いでいた2人は少し気まずそうに顔を背ける。

まあ確かにどのifの世界でもゲルテナが俺達の前に出てくる事は無かったから今回が大分特殊なのだろうし、俺も3人と同じく何も知らない身だったらギャーギャー騒ぐだろうから気持ちはわかるが。

しかしもう少し早く落ち着いてくれてもいいんじゃないか？特にメアリーなんかはじいさんと全く会えない訳でもないだろうに。

「まあまあ。君……ここではヒロトシ君とでも呼ぼうか。ヒロトシ君も初めてあった時は2人以上に凄かったじゃないか。私は今でも覚えてるよ。」

「そりやあここを探索してる最中、気がついたら暗闇の中にいてなにか知ってそうなじいさんがいるんだから無理やりにも聞き出すようにするわな。」

「ああ、あの時はまだイヴちゃんと2人で探索していたね。それならあそこまで興奮してもおかしくないね。」

「あ、そういえば思い出したんだけどよ。イヴと俺の薔薇が置いてあった所の絵画にロリコン扱いされたんだけどどうしてくれんの。風評被害も甚だしいんだけど。」

「ああ。彼女なら色々な絵画越しに君を監視してただろうしきつと大

丈夫だよ。」

「一応じいさんからも違うつて事伝えておいてくれよ?」

俺達がそんな風に話しているとギャリーとメアリーは少し驚いた表情を見せる。俺とじいさんがここまで仲良いとは思ってなかったのだろうか。まあなんにせよそろそろ話を進めなければ。

「それで?じいさんの準備つてもう終わったのか?何をしてたのかは知らねえけどさ。」

「もちろん。君達のために年甲斐もなく色々頑張つて来ちやったよ。でもこれならなんとかなるはずだよ。」

「そりやありがたい。……なんでお前らはずっと黙つてんだよ。」

「いや、だつて……ねえ?」

「私達が会話に入る隙がなかったつて言うか……。」

「お兄さん達だけで話すすすめすぎ!わたし達ついていけない!」

「そう!それ!」

何だかよく分からないが俺とじいさんの話に入れなかったらしい。じいさんがどうだか知らないけど俺としてはどんどん入ってきてきても良かったんだけどなあ。

「私もヒロトシ君もそんな事気にしないから話に入ってきてよかったのに。」

「あの話に入れるのは多分イヴだけよ……。だつてアタシ達はその時まだ合流してないんだもの。」

「それよりもパパー。さつきトシに準備がどうか聞かれてたけど何の話なの?」

「ここから出る為の絵画……かなあ。あ、勿論この絵空事の世界とはまた違うよ?」

じいさんがそう言うのと3人の顔がポカンとする。しかしそんなこ

ともお構い無しにじいさんは指をパチンと鳴らして絵画を出す。意味がわからないがここはじいさんの世界って言ってたし瞬間移動もこなしていたからもう今更なのだろう。

「これが君達が全員で脱出するための秘密兵器。……名前はまだつけてないんだけどね。」

そんな事を言っただけのけるじいさんの表情は今まで見てきたものより楽しそうだったのは俺の見間違いでは無いのだろう。

デウス・エクス・マキナ

秘密兵器とじいさんが言い放ったそれは、パツと見はただの絵画であるがきつとメアリーの様な存在なのだろう。しかしメアリーの様に外に出てきそうな様子は見られないし赤い服の女の様にモゾモゾと動きそうにもない。

「秘密兵器って言うけどさ、これただの絵だろ？　確かに創作物には命が宿るとか言われたりするがそれだって描いてすぐって訳でもねえだろうし。」

「勿論その通りだとも。現にメアリーだって動けるようになったのも私にとってはつい最近の話だ。」

「なら何でその絵が秘密兵器になるんだよ。じいさんの理論だと俺達は何十年、下手したら何百年とここに閉じ込められないといけないだろう。」

「ふふっ。ヒロトシ君は私を誰だと思っているんだい？その程度の問題は織り込み済みさ。その上でこの子が秘密兵器として存在しているのは何となく理解できるんじゃないかな？」

そう言つて俺の事を見てくるじいさんの目は「言わんとする事は分かっているよな？」と言っているようで、俺は思わず目を逸らして黙り込んでしまった。それにしても現実改変に時間の操作までするとは、どうやらこのじいさんは娘の幸せハッピーエンドの為なら本当に何でもする人らしい事が身に染みて理解出来た気がする。

「さて、それじゃあそろそろ名ばかりの儀式を始めようか。」

「ちよちよちよ、ちよつと待つて頂戴！ついさっきのやり取りを忘れてたのかしら？アタシ達にもわかる様に説明してもらいたんだけど。」

「えー？今のトシとパパの会話で何となくわかったでしょ。ギャリーつたらおバカだなあ！」

「アンタはいつも一言多いのよ……で？今から何をしようとしてい

るのかしら?」

「簡単な事さ、ギャリー君。もう1人のメアリーを作るんだよ。」

「もう1人のメアリー……?それってどういうことなの?」

「つまりはちやんと意思疎通のできる娘美術品を生み出すんだよ。他ならぬ私の……ね?」

じいさんが笑みを浮かべてそう言うといヴとギャリーは驚きを、メアリーは喜びを表情に全面に出して反応をする。その様子を見て更に楽しそうに頷くと再び口を開き始める。

「ギャリー君といヴちゃんはいいい反応をしてくれるね。ヒロトシ君は慣れちゃってそういう反応をしてくれなくてねえ。」

「……じいさん、そういうのは後で聞くから話を進めてくれ。じゃないとキリがない。」

「おっとそうだったそうだった。さっきこの子をもう1人のメアリーと言ったのはここで暮らしてもらおうって意味。つまりこの世界を上手く騙して贄を捧げるって事だね。」

「……おいちよつと待てじいさん。ならこの絵から体が出てないと代わりにはならないんじゃないか?」

世界を騙す云々については既に現実世界で大々的にやらかしているのできつと出来るんだろうなと思えるが、それをする為にも人型のモノが必要だと思ひ質問する。たとえ何とかする算段があつたのだとしてもそれを何とかする方法を教えてもらわなければ贄成も反対も出来ないからだ。

そう思つてじいさんに質問を投げるとじいさんは待つてましたと言わんばかりに楽しそうな表情を浮かべて口を開く。

「確かにヒロトシ君の言う通り、ヒトの代わり足りえるモノはヒトしかない。ならばこの中から出してあげればいいだけじゃないか。」

「——駄目だ、全く意味がわからん。ギャリーは理解出来たか?」

「アタシもさっぱり……。天才が天才たる所以に触れてしまった感じすらあるわね。」

「ゲルテナおじいちゃん、わたし達にできる事はありますか？」

イヴがそう言うと同じいさんはなんでもない様な表情でとんでもない事を言い出した。

「——君達の薔薇の花弁を1枚ずつ欲しいんだ。」

「よし他の方法を考えるぞお前ら。なにかいい案はないか？」

「い、いやちよつとは話を聞いてもいいんじゃないかしら？ゲルテナ先生だつてアタシ達の事を思つてここまでしてくれただもの。きつと確実に且つ安全に脱出できる方法なのよ！」

「そんな事は百も承知だがイヴに1つでも傷をつけてみる。親御さんに謝り倒す事しか出来なくなるぞ俺は。」

「あ、ああ……。そういう事ね。でもそれならイヴ自身はゲルテナ先生の要望をどう思つてるのよ？」

「わたしは全然大丈夫だよ！お兄さんはここまでずっと心配しすぎ！」

何度かイヴから言われた記憶のある言葉を言われる。俺はそんなに過保護なのだろうか？そんな事を思っているとじいさんは少し安堵したような顔を見せる。

「それじゃあみんな1枚ずつ渡してくれるかい？花弁をちぎる時痛いだろうけど出来るだけ痛みを感じないように今設定したからさ。」

「それが出来るなら初めからそうしておいて欲しかったんだが？」

「そんな事したら人は私の存在に甘えるだろう？この世界のデウス・エクス・マキナは簡単には動けないよ。」

「デウス・エクス・マキナ……。確かにゲルテナ先生はこの世界の創造者ですものね。」

「パパはすごいんだぞー！色々できるのはこの世界だけじゃないんだ

から！」

「ゲルテナおじいちゃんってすごいんだね〜！」

俺達はそんな会話をしながら花卉を1枚ちぎる。確かに今までくらったダメージと比べると全く痛みを感じないと言ってもいいくらいのものでなんで今まであんなに痛い思いをしていたのか問いただしたくなるレベルだった。

「……ていうかここまで来たら痛みを無くす事は出来なかったのかよ？」

「いくら此処が私の世界でも人間の機能を完全に無にする事は出来ないよ。ましてやちゃんと生きてる人間なんて私の能力の対象外なんだ。」

「ふーん……。使えるようで使いづらい能力だな。」

「そうかな？ 私は凄く使い勝手のいい能力だと思ってるけど？ 特にこの世界にいるとなんでも出来るからね。」

「あーなるほど。確かにそれは便利だわ。」

やっぱこの人1人いれば何とかかなんじやないかな？

パパ

「さて、花卉も貰ったし少しだけ待っていてくれるかな？私は少しこの子にかかりきりになるから4人で談笑でもしていてくれ。」

じいさんはそう言うのと絵画の前に立って何かをし始める。やっている事が少し気になったが別に覗くほどの事でも無いだろうと軽く返事を返して3人の方へと向きを変える。

すると3人も俺に聞きたい事があるのかこちらに視線を投げてる。

「……そんなに見られても何も出ないぞ。それに聞きたい事があるなら口に出してもらわないと答えられん。」

「じゃあじゃあ一つ聞いていい？おじいちゃんとお兄さんの関係ってなあに？」

「俺とじいさんの関係……。協力者かはたまた或いは洗脳誘拐犯とその被害者か……。まあそんな所だな。」

「いやそれどんな関係よっ！前者はともかく後者なら何でそんなに仲良さげに接する事が出来るのよ！」

「だって俺にとってマイナスよりプラスの方が勝ったし。確かにこの世界に飛ばされたのは嫌だったけどさ。災い転じて福となすってな。」

俺がそう言っただけで笑うとギャリーはなんとも言えない微妙な表情を見せてくる。まあ気持ちはわからんでもないがそれを俺に向けてくれるな。俺だっておかしな事くらい気づいてはいるんだ。それにながち間違いないしな。

「ねえトシ、パパと話をしたのは何時くらい？やっぱりここに来てから？」

「そうだな。初めて顔を合わせたのは……まあ少し前だが話自体は気

絶した時とか眠った時にしてたな。」

「ふうーん……。途中詰まった事については気にしないでおいであげる。」

「ああ、そうしてくれると助かるよ。あれはなんて説明していいのかわからん。後でじいさんに聞いておいでくれ。」

メアリーの質問をはぐらかしてしまったようで申し訳ないが、俺もどう説明をしたらいいのか皆目見当もつかない。今の俺はこの世界から見て並行世界から来たのか、それとも過去に逆行したのか。そこから辺はじいさんの方が詳しいだろう。何せそれを行った張本人なのだから。

「ご歓談中申し訳ないけどちよつといいかな？そろそろこの子も目を覚ますから君たちも含めて儀式を進めるよ。」

「あいよ。でも俺達に何をしろって言うんだ？」

「何も特別な事は無いさ。ただそこでこの子の覚醒誕生を見て欲しいんだ。言わば産婆さんだね。」

「さんばってなあに？」

「子供を産むお手伝いをする人の事だよイヴちゃん。今では助産師と言うらしい。……まあ私自身が言つといてなんだけどどちらかと言えば君達の立ち位置は産婆さんよりも出産を見届ける家族に近いね。」

ただ見守ってくれていればいいからねと言いながら微笑むじいさんに幼子イヴとメアリー2人は今か今かと目を輝かせている。確かにじいさんの作品が実体化する瞬間なんぞ見ようと思っても誰も見る事の出来ないものだと分かつてはいるが、じいさんの言い方のせいカイマイチ喜びづらい感覚に陥っている。

「おっと、ようやく目を覚ましたようだ。それじゃあ出ておいで。私の可愛い末最後の作品っ子ちゃん。」

じいさんがそう言うといーゼルに置かれていたキャンバスから強く、でもどこか暖かい光が発せられ俺は思わず目を瞑ってしまう。この様子だとほか3人もきつと目を瞑っただろう。そうして数秒経過したくらいにゆっくりとまぶたを開くとそこには先程まで絵画に描かれていた少女が悠然と立っていた。

俺達全員が声も出せずに少女を見つめていると、何を思ったのかゆっくりと毅然とした態度を崩さないまま俺の前へと歩いてくる。俺以外にも3人、しかもうち1人は少女の姉妹と言っても差し支えない存在がいるのにも関わらずなぜ俺の前に来たのか。その謎は次の瞬間わかった。

——いや、判らされた。

「はじめまして、パパ。」

——拝啓母さん、結婚も子作りもした事が無いのに一児のパパになりました。いやホントなんで？

名付け

「パ、パパ……う？なんでパパなのかしら……？」

「俺が知るかよ……っ！じいさんがこいつを描いてるところを見てた訳でもねえしよ……！」

「なんでトシがパパなのー！私の妹ならパパの娘でしょー！」

「はわわっ……！お兄さんって子どもいたんだ……！」

「ハッハッハ！」

「？」

何も分かっていなさそうな自称我が娘を除いた全員が各々にリアクションをしていく。しかしイヴは何お勘違いしているんだか。ここに来てからずっと一緒に行動していたのだからこんな特殊な出で立ちの子供なんぞ出来るはずがないだろうに。

「……ねえパパ。わたしになまえをつけてください。」

目の前の少女が何も知らなさそうな無垢な瞳をこちらに向けてそう言うってくる。

「お、俺？じいさんに付けてもらえばいいだろ？お前の姉ちゃんと同じようにさ。」

「そうだよ！トシよりもパパの方がきつといい名前をつけてくれるよ！」

「……パパがいい。おじいちゃんじゃなくてパパにつけてもらいたい。」

どうやらこの少女は意地でも俺に名前をつけて欲しいらしい。しかし俺としてはそれよりもこの子がなぜ俺の事をパパと呼ぶのか原因が知りたい。と、そこで俺は1ついい方法を思いついた。

「OK。なら君がなんで俺の事をパパって言うのか教えてくれたら俺も真剣に君の名前を考える。それでいいか？」

「……わかった。でもわたしの理由はすごくかんたん。パパのきおくをおじいちゃんに見せてもらった。だからパパのことはいつぱい知ってる。でもおじいちゃんのこととはあんまり知らない。……それだけ。」

少女がそう言ってくれたおかげで俺の予測が確信に変わった。まあこの子に仕組む事が出来るとしたらじいさんしか居ないのは分かりきっていた事だが。

そんな訳で漸くイヴからの俺の誤解を解く事が出来て、さらに犯人もわかったので今までのお礼と言わんばかりに愉快犯を睨みつけてから真剣に考え始める。

「うーん……。やっぱりパツとは思いつかばないな。誰か、何かいい案無いか？」

「そうねえ……。花の名前から取るのとかはいいんじゃないかしら？綺麗な名前もいっぱいあるんだし！」

「あつそれいいかも！ギャリーのくせにいい事言うじゃん！」

「メアリーはいつも一言多いのよ！」

「お花ならわたしポインセチアとかいいと思うなあ。真っ赤ですごくキレイなお花だよ。」

ギャリーが花というジャンルを、イヴがその中で自分の好きな花を挙げてくれた。とりあえずはそれを軸にして名前の候補を考えてみよう。

「花か……。名前として使うなら百合とか桜とか……。あとちよつと古風な名前だと梅とか菊、それと桔梗辺りか？」

「ふむ……。LilyにCherryBlossom、PlumにchrysanthemumそしてBalloonFlowerか。花

言葉も全体的に悪くは無いしいんじやないかな?」

「へえ。今挙げた花つて英語だとそう言うのか。桜は知ってたけどさ。あ、あと蒲公英をダンデライオンって言うのは知ってる。」

「……君は本当に綺麗な物にも興味を持った方がいいと思うよ。仮にもこの私が見初めた人間なんだからさ。」

「あー、その件についてはこれから期待って事で。」

俺はじいさんの言葉をそう言っ流して再び考え始める。英名を含めて考えると百合か梅の方が分かりやすく、呼びやすいだろう。……俺としては桔梗とかいいんじゃないかなって思ってたんだけど……、バルーンフラワーはなあ……。

「——よし、決めた。今日から君はリリーだ。」

「リリー……うん、わたしリリー。よろしく、パパ。」

「よし、名前も決まった事だしこれで儀式も終了だ。一応これで3人とも外に出られるようになったけど……すぐに行くかい?」

「あー、俺としてはリリーに愛着が湧いて離れづらくなるのは嫌なんだけど……この子にまた会いに来れたりしないか?夢の中でもいいんだけどさ。」

「夢の中なのであれば毎日会わせる事が出来るよ。実際に対面するのはだいぶ難しいけど……まあ君の部屋のどこかにここに通じるゲートを開く事は不可能ではないよ。」

不可能では無い。じいさんにしてはなんとも暈した言い方に少し違和感を覚えるが、きつとそのように言った意味があるのだろうと思いつながら返答を考える。

「……まあゲートについては今はいい。とりあえず夢で会える様にしてくれないか。じいさんに教育を任せると色々歪みそうだし。」

「君ちよつと失礼じゃないかな?仮にも何人も子供のいる大家族の父親だぞ?」

「でもそれ全部彫刻とか絵画ってオチなんだろう？」

「勿論！私の生前に伴侶となる女性はいなかったからね！」

「なら俺ら4人で遊んであげた方がいい勉強になるだろう。人間関係とか言ったら傷つく言動とかさ。」

「ここでその配慮は必要かい？別に誰がいるわけでもあるまいに。」

やっぱりこういう所は人間として終わってんだよなあこのじいさん。でもこの子の為なら俺達の夢を何やかんやして1つにする事くらいは容易く出来るだろう。時間遡行や平行世界への移動が出来るくらいなのだから。

「まあそういう事だから夢の件は任せた。じいさんならちよちよいのちよいだろ？」

「君は本当に老人使いの荒い若者だよ。——任せておきなさい。私とリリーが毎晩君の夢の中にお邪魔しようじゃないか。」

「パパ！たまにでいいから私とイヴも一緒に呼んでね！あとついでにギヤリーも！」

「ハハッ勿論だとも。メアリーも私の娘なのだから除け者にはしないさ。」

「あの……アタシ達も一緒にご迷惑では無いですか？ゲルテナ先生のお手を煩わせるようであればアタシは大丈夫ですよ？」

「いいんだいいんだ。君もメアリーの友達、なら私から言わせてみれば君達も私の子供達さ。」

じいさんがギヤリー達と話しているのを横目に俺はリリーと会話をする為に視線を合わせる。すると向こうも話したかったのか少し近づいて内緒話が出来るくらいの距離感になった。

「いいかりりー、俺達はこれからここを離れなきゃ行けなくなるけどリリーはここでじいさんと仲良くしてるんだぞ。」

「うん、わかった。」

「よし偉いな。また俺が向こうで寝たらじいさんがここに俺を連れてくると思うからそれまで我慢してくれな?」

「うん。」

「……どうしても会いたくなったらじいさんに頼んで俺に知らせてくれ。どうにかしてここに来られるようにして貰うからな。」

「うん。……パパはわたしのこと、すき?」

「——ああ、大好きだぞ。」

「……わたしもパパのことすきだよ。だからわたしまつてるね。」

リリーはそう言つて俺に笑顔を見せてくれる。初めて見たこの子の笑顔はお世辞にも楽しそうには見えなかつたけど、それでも今までの無愛想な表情と比べたら何倍も可愛い顔だった。

「……それじゃあじいさん、俺達はそろそろ出るよ。夢の件、くれぐれも忘れないように頼むぞ? リリーもじいさんが忘れてたら遠慮せずと言つていいからな?」

「私もそこまでボケてないはずだから安心して寝てくれて大丈夫だよ。責任もつて君の夢にリリーを連れていく事を約束するよ。」

「バイバイ、パパ。またあとでね。」

「バイバイ。……じゃあ行こうか3人とも。」

俺がそう言うと3人は力強く頷いてくれる。じいさんのお陰で少し3人の置いてけぼり感を傍から感じていたが、今となっては些細な事だろう。少しそんな事を思いながら『絵空事の世界』へと俺達は入っていった――。

END : 1 君の求めたハッピーエンド

いつの間にか目を閉じていたのか目の前が徐々に明るくなっていく。ゆっくりと瞼を開けるとそこは美術館の廊下だった。それも、壁や床が変な色をしていないまともな美術館である。

「ああ、戻ってこれたんだな……。」

俺は『絵空事の世界』を背に1人そうつぶやく。しかしそこまでしてようやく気づいた事が1つ。他の3人がこの場にいない。恐くじいさんの事だからきつとゲームと同じ所に他の3人を配置をしたのだらうけど、その場合イヴは何処にいるのだらうか。両親の傍か、はたまたギャリーかメアリーと共にいるのか。若しくはそのどちらでもなく1人で作品を見て回っているのか。

最良はギャリーかメアリーと一緒に行動している事だが、まあその他の場合でも何とかかならない事もないだろう。

「……取り敢えずここから離れるか。ここにいても何もわからん。」

1人寂しく立ち尽くしていてもここに誰が来る事もない事は知っている。なので兎に角ここを離れる事を最優先に動いていく。

少し歩くと俺の目に「指定席」の端が入り込んでくる。そこでふと後ろを振り返ると、『絵空事の世界』は疎かそれを飾る事の出来そうなスペースすら綺麗さっぱりと消えてしまっている。その光景に少し寂しさを覚えつつも、足は戻ろうとはせずに先へ先へと1歩ずつ歩いていく。

「おお……、久しぶりにあの美術館にいたメンツ以外の人を見た気がする……。」

作品を鑑賞している人達。どこかから聞こえる、喋っているという

事しかわからないほど小さな話し声。館内のスピーカーから小さい音量で流れてくるクラシックのような音楽。その全てが俺が元の世界に戻ってきた事を実感させてくれる。

「やつとここまで来る事が出来た気がするな……。それもこれもじいさんが俺の事を振り回したからだろ……。」

そんな事を愚痴りながら1階へ繋がっている階段へと歩いていく。

結局3人の誰とも会わずに1階へたどり着いてしまった。それがなんだか今までの冒険全てを否定してきているようでなんとも悲しい気持ちになるがそれを考えないように俺は足を進めていく。

「やっぱり薔薇のオブジェの所か？あそこならイヴかギャリー辺りがいそうだし。」

逆に言えばメアリーがどこにいいのかでんで見当がつかないのだが、まあ多分イヴと一緒にいるだろう。なんて予測をつけながら俺は歩く速さを少し早めた。

1階に着いて少し歩くとあの世界の入口となっていた『深海の世』を囲っている柵が目に入る。その絵を何度見直しても動く素振りも疎か海の中に入れそうな雰囲気も感じられない事から実は白昼夢だったのではと本格的に疑いを持ち始める。それ程までにこの世界は俺達の過ぎた虚構を否定しているように感じたのだ。

既に一種の諦めのような感情を抱きつつ薔薇のオブジェへ続く道へと足を向けると、そこには見知った顔が3つ並んでいた。

「——えっ?。」

「最後の合流はアンタだったのね。アタシ達待ちくたびれちゃったわよ。」

「トシ遅いー!……でもここまで連れてきてくれたから許したげる。
はっはっは。」

「お兄さん、お疲れ様。わたし達の為にありがとね。」

「メアリー、少しは静かにしなさい。」と優しく宥めるギャリーに対して「やなことだー」と第一次反抗期のような反応を見せるメアリーとそれを見てあたふたしているイヴを見ていると何だかあの世界に戻ったようで、でもこの世界には俺達だけじゃなくて。

言葉に言い表す事の出来ない複雑な感情が渦巻く中、とりあえず俺は3人に提案をする。

「あー、1回外に出ないか？自販機もあるし何より陽の光を浴びたい。」

「——で？なんでアンタはこんなに戻ってくるのが遅かったのよ。」

イヴが紅茶、メアリーが炭酸のジュースを飲んでいる時にギャリーが缶コーヒを開けながらそう尋ねてきた。

「いや分からん。俺は皆で『絵空事の世界』に入った後に気がついたらその絵の前で棒立ちしてたんだよ。しかも少し離れて振り返ったら消えてたしよ。」

「ふーん……そこら辺はアタシ達と大差ないわね。でもなんでヒロトシだけ別れて帰ってきたのかしら？」

「——ここがギャリー達の過ごしてた世界じゃないからだろ。うえるかむとうじゃぱーん”ってな。」

内容が内容なだけにあまり重くなりすぎないようおちやらけて言うとうと、ギャリーは驚いたような納得したようななんとも言えない表情

を見せる。

「変な表情なんかしてどうした？ガスの元栓でも閉め忘れてきたか？」

「失礼ね、そんなんじゃないわよ！……道理でアンタの喋ってる言葉が違うように聞こえるのに理解できるのか謎が解けたのよ。——先生の仕業ね？」

「ああ、そんな事か。まあ恐らくそうだろうな。」

「そんな事って……よく軽く流せるわね。アタシだったら『何してくれんのよ』って文句言っつてやりたくなるわ。」

「あの人とある程度関わってると諦める事が肝心だって理解出来るようになるさ。」

俺が遠い目をしながらそう言うのとギャリーは何となく察したのか先程とは打って変わって可哀想なものを見るような目で俺を見ながら肩にぽんと手を置いてくる。

「ま、他人事なのは今のうちだぞ。ギャリーもこれからあの人に振り回させるだろうよ。」

仲間だなど言わんばかりにいい笑顔でそう言うのとギャリーはギョツとした表情になり、誰でもひと目でわかるくらいに項垂れる。

「そんな事よりもこれからの事だ。お前らこっちの世界に来て家とかどうなったか『頭に入ってる』か？」

「あー……その点は大丈夫みたいよ。少なくともアタシはこっちにちゃんと家があるわ。」

「わたしもママとパパもこっちに来てお家も近くにあるみたい！」
「……。」

俺の質問に対しイヴとギャリーは返事が返ってくるがメアリーが

だんまりを決め込んでいる。何かあったのだろうか？

「どうしたメアリー？なにか都合の悪い事でもあるのか？」

「……だもん。」

「え？なんつった？」

「ギャリーと同じ家なんて嫌だもん！」

「この子この話をするところなるのよ。この世界に来た時とアンタを待ってた時、それに今で3回目ね。」

「イヴと同じ家が良かったあ……。」

「もう決まっちゃった事なんだからグチグチ言わないの。いつでも遊べるような距離なんだからそれでいいじゃない。」

どうやら一人暮らしのギャリーの家に転がり込んだ形となつてしまったメアリーだが本人はイヴと一緒に住みたかったらしい。まあゲームでも姉妹になるエンドがあるくらいだからそうなるか。

「まあいいじゃんか。イヴといつでも遊べるんだし泊まりにだって行けんだろ？」

「むう……それはそうだけどお。」

「わたしが2人の家に泊まってもいいんだよ？ギャリーを仲間外れにしたくないもん。」

そんな事を話していたらイヴのご両親がこちらに向かって歩いてきているのが目に入る。流石に長く外にすぎたか。

「さて、イヴのお迎えも来た事だしそろそろ解散しようか。」

「そうね。また今度会う時はいっぱい話しましょうね。」

「——そうだ！わたし達戻ってきたんだよね？じゃあ言つてない事があるよー！」

「？……ああ、確かに帰ってきたら言わないとだな。」

「じゃあいつせーので言いましょうか！」

「さんせー！」

俺達は笑顔で顔を突き合わせて旅の終わりの呪文をせーので唱える。

「「「ただいま！お帰りなさい！」「」」

あとがき

あとがき

どうも、私です。

今作を最後まで見ていただき誠にありがとうございます。これで彼らの旅路は終わりとなりますが、私達も過ごしているようなありふれた日常が彼らを待っていることでしょう。

その中で時には涙し、時には怒りを顔にしながらその絆を固く結んでいくのだと思います。

今後私がこの話の続きを書く事はほぼ無いかと思いますが、なにか日常の一コマが思い浮かべば不定期であげていこうと思っています。私自身この作品に幾分か成長させてもらったように感じていて、凄く愛着のある作品です。それにここまでの大作を書き終える事自体初めての事なので感無量の気持ちでいっぱいです。

Ibという作品に触れ始めて何年も経ってから執筆し始めたにはあまり理解も深くなく、お見苦しい文章も少なくなかったかもしませんが私の目標が「しっかりと完結させる」だったので第一目標が達成出来てホッと一安心しています。

しかしイヴちゃんに関してはここまでロリ化させる予定はなく、もっと大人びている女の子として書きたかったのでそれだけは失敗したなっと思ってます。

しかしここまで来るとこのイヴちゃんでないとな私のこの話は成立しなかったモノなのだと思います。イヴちゃん、今までお疲れ様。

ギャリーに関しては主人公君と衝突をさせすぎたかなっと思って感じています。

しかしイヴちゃんは主人公君と一緒に行動してきているからギャリーよりも主人公君の方が信用のできる大人（イヴちゃん目線）だしメアリーは最初から主人公君を信頼する様に書こうと思っていたので彼しか強く口を出せる人がいなかったんです。

そのせいかどちらかと言うと悪友のようなポジションに収まっ

てしまったなと私の事ながら思ってしまった。まあこの4人中で最年長ですし嫌な役も引き受けてくれると信じています。ギャリー、今までお疲れ様でした。

最後にメアリー。彼女に関しては他の2人と比べて当初計画していた人物像にかなり近しく書けたのではないかと自分の事ながらに感じております。

原作だとワガママさを前面に出してる彼女ですが、きっとそれも仲間がいなと思ったが故の彼女なりの防衛本能なのだと思いい主人公君には彼女の味方でいてもらいました。だからこそあの甘え具合ですね。

彼女の出番自体は1番遅かったのですがそれでも記憶に残る登場シーンと演出出来たのではないかと思いいます。何せ主人公君の記憶と共に登場ですからね。やりたい事の1つだったので私、大満足です。メアリー、今までお疲れ様。

ゲルテナおじさんは一言、色々はっちゃすぎだけどデウス・エクス・マキナの役割お疲れ様でした。

そして我らが主人公君。この子が1番どう動いてくれるのか分からない子で、私自身もどう動かしてあげるかとても迷いました。しかしそれでも最後までしっかりと主人公として動いてくれたかなと思いいます。

私の代わりとして投入された主人公。その子が皆様の目からこのIbという世界の中で違和感なく動いていたのか気になるところではあります。もし馴染めてなかったとしてもそれはそれでイレギュラーとしては良かったのかなと思いいます。

初めと終わりの両方を無事務めてくれた主人公君、お疲れ様。

これにてこの作品はひとまず幕を閉じます。次回作などは未だに考えていませんがなにか書きたいなくらいには考えておりますので気長にお待ち頂けたら幸いです。

それではまたどこかでお会いしましょう。

後日談 (i f)

夏休み (前編)

7月も終わりには差し掛かったある日。

「あゝあゝ……。夏休み1ヶ月しかねえのにこの課題の量……。やる気失せるわあ……。」

「ちよつと大利!!お友達が来てるわよ!!」

「んあ?友達い??:……今日誰かと遊ぶ約束してないような……まあいいか。今行くー!!」

俺は部屋を出て玄関の方へと重い足をゆつくりと動かす。もしかしたら今日は誰とも会わない日だと俺が勝手に勘違いしているだけで実は何かしら約束を取り付けていたのかも、と記憶を終業式以前まで遡らせてみるも友達とそんな話をした記憶はさっぱりない。

はてさて誰が俺を訪ねてきたのかと少しワクワクしながら玄関へのつそのつそと歩いていくと、土間の所にはイヴとメアリーがおそらく母さんから貰ったであろうチューペットを2人で分け合っていた。

「おーっす。今日は2人でどうした?なんか会う約束とかしてたっけ?」

「あ、トシ。んーん?別に会う約束してないよ?ねーイヴ?」

「うん。それで何する?つて話になった時にお兄さんに会いたいねくつて話になったから来ちゃった。」

「いや来ちゃったって……。まあ課題に絶望してただけだからいいけどさあ……。」

俺がそう言うと2人はチューペットを片手に目をキラキラと輝かせてこちらを見つめてくる。その目力に少しだけ圧されたが何も感じてないような素振りをして咳払いをひとつ落とす。

「それで？俺のどこに来た理由はわかったけどギャリーは？2人が揃っててあいつが居ないなんて珍しいじゃん。」

「あゝ……ギャリーはねえ……仕事が終わらなくて今日も出勤なんだってさ。」

「まじかあ……あいつもだいぶ社畜してんだなあ……。」

「……？お兄さんしやちくつてなに？」

「社畜って言うのは……まあいっぱい働いてる人達の事だな。」

そんな事を話していると母さんがパタパタとスリッパの音を立てながらこちらに向かってくる音が聞こえる。その音を聞いて未だに玄関で話してた事がバレたらグチグチ言われそうだと思つた俺は急いで2人に声をかける。

「2人とも取り敢えずあがつて。俺の部屋行こう。」

「え!?!いいの!?!トシの部屋入るの初めて!!イヴは？」

「わたしも初めて！お兄さんの部屋には何があるのかすごく楽しみ！」

「何って……特に変わったものは無いと思うぞ。あ、でもあんまり部屋の中荒らすなよ。特にメアリー。」

「んな!?!なんで私だけなの!?!イヴにも言ってよー！」

「もちろんイヴにも言ってるつもりだよ。だけどイヴは誰かが唆さない限りそういう事はしないとってるから。その点メアリーは気になつたら何でも手に取るだろ？そこの差だな。」

「納得いかなあ!!差別はんたーい!!」

「あはは……。」

そう言いながら俺たちは家の中をずんずんと進んでいく。その間も2人はキョロキョロと辺りを見渡している。そんなに見られても普通の家だと思っただけだなあ……。

そんなことを思いながら俺の部屋の扉に手をかけると2人の期待値が最高潮に達したのかすごく楽しみを抑えられていないのがある

ありと伝わってくる。

「ほれ。これが俺の部屋だ——」。

「わあ……！……ここがお兄さんの部屋……！」

「うーん……なんかフツー。」

「いや……だから特に面白いものはないって言ってるじゃん。まあその漫画でも読んでよ。」

「うん、わかった。」

「ねーねートシい。パソコンでなんかゲームとか出来ないのー？」

「パソコンはダメ。パソコンする位なら今から外に遊びに行くぞ。」

俺がそう言うとメアリーはあからさまに不機嫌ですと言わんばかりにほっぺを膨らましてこちらに抗議の視線を送ってくる。俺はそれを無視して課題に手をつける。俺も部屋の中にいるから下手はできないだろう。

「——ふう……。取り敢えず一区切り着いたなあ。イヴとメアリーは今何して……るって寝てるのかよ……。」

「大利くお菓子とジュース持ってきたわよ〜って……2人とも寝ちゃったのね。」

「お、ありがと母さん。後で2人と食べるよ。」

「アンタもさっさと課題終わらせるのもいいけどこの子達構ってあげなさいよ?。」

「わかってるって……。でも多分俺より母さんの方が話しが合うんじゃない? 同じ女性ってのも相まってさ。だったら俺より——。」

「大利、それ以上は言っちゃダメよ。少なくとも今日はアンタに会いにきたんだから。」

「……わかったよ。」

母さんは俺がそう返事した事に満足したのかいつもより優しい笑顔を浮かべて俺の部屋を出ていく。それを視線だけで見送った俺は寝ている2人の傍に座りなんとなく頭を優しく撫でる。擦ったそうに、しかし嬉しそうに体を少し振らせる2人を見ながら俺もゆつくりと意識を手放していった――。

「やあヒロトシ。今日は随分と早い就寝だね？」

「パパ……おべんきようたいへんそう……。」

俺が目を開くとまるでアニメに出てくるような洋館の一室のような所で1人用のソファに腰かけていた。俺は今起きた出来事になんの驚きも見せず、目の前のじいさんとリリーに意識を向ける。

「うつす。なんか眠くなつたから寝たわ。リリーも心配してくれてありがとな。でも大丈夫だから安心しな？」

「ううん……わたしはパパのことすごくしんぱい……。それって……めいわく？」

「そんな事ないよ。でもいつも心配させてちや申し訳ないからな。だからそこまで気にしなくていいぞ。」

「うん……ぜんしよはする……。」

「善処って……なんだか政治家みたいな言い回しするなあ……。」

そんな言い回しをじいさんが教えたのかと思い、少しそちらを見やるがじいさんは何も知らないと言わんばかりに首を横に振る。なんとも説得力の無い否定だと少し思いながら俺はリリーに向き直り話をしようと口を開こうとしたその時。館が激しく揺れて、それと共に叫ぶような声が遠くから聞こえてくる。

「――トシー！起きてー！」

「おやおや、メアリー愛娘がヒロトシを起こそうとしているね。どうやら君の寝た理由も昼寝のようなものらしいし一回起きてメアリー愛娘の相手をして来てくれるかい？」

「あーはいはい、分かりましたよ……。じゃありりー、また夜会いに来るからそれまでいい子にしていってくれるか？」

「うん……。わたしいいこにしてる……。」

「ありがとう。じゃあ行ってくるな。」

俺はりりーの頭を一撫でして部屋の扉を開けてその外へと歩く。すると視界が真っ白になっていくと同時に思考も真っ白に――

「トシ〜！起きてよ〜！」

「お兄さん！起きて！」

「――んあ……。今何時……？」

俺は2人が何故そこまで一生懸命起こそうとしていたのか気になつていたが、それよりもどれくらい時間が経ったのか気になり時計を見る。

すると時計は俺が母と話した時間からそんなに経っていない事がわかった。なんで俺をそんなに血相を変えて起こしていたのだろう？

「2人ともそんなに慌ててどうした……？」

「だって……お兄さんが急にバタって倒れたから……。」

「私達すごく心配になって……。」

「ああ……。ただ急に眠くなったから寝ただけだから。だから気にしないでいいぞ。そんな事よりさつき母さんがお菓子と飲み物持ってきてくれたからそれ摘もうぜ。」

「いや気にするよっ！お菓子は貰うけどっ！」
「お兄さんに何もなくてよかった……。」

2人とも安心したのかメアリーはお菓子を、イヴはジュースを口に運んでいく。それにしても俺はそんなに急に意識を失ったのか。まあ確かに寝る前の記憶は2人の頭を撫でるまでしかないからきつと2人の言っている事は確かなのだろう。

……それにしてもなぜ2人は俺がバタツと倒れたことを知っていたのだろうか。少なくとも俺が2人の頭を撫でていた時は寝ていたはず……。もしかして……。

「なあ……2人とも起きてただろ。」

「ん？なんの事？」

「だから、俺が寝る前。2人とも起きてただろ。」

「お、お兄さん……？なんでそんなにこわい言い方するの……？」
「そりや気のせいだ。」

俺がそう言い切ると2人は肩をびくりと震わせる。この様子を見るにどうやら2人とも起きていたらしい。という事は恐らく俺と母さんの会話も聞いていたと思っていた方がいいかもしれない。

「……なあ。俺といるの楽しいか？」

「……急にどうしたのトシ。私達なんかトシの気に障るような事したかな？」

「いや……ただ俺みたいな奴よりギャリーとか、うちの母さんとかの方が話してて楽しいんじゃないかって思ってたな。」

「うーん……それはお兄さんの考えすぎなんじゃないかな？わたし達はお兄さんと一緒にいてすごく楽しいよ？」

イヴがそう言うのとメアリーは勢いよく頷いてイヴの意見に同調する。俺は2人のその姿を見てなんだか少し申し訳ない気持ちになり

つつもそれを表に出さないように意識をする。

「……そっか、ならよかったよ。」

「うん！だからこれからも私達の前からいなくならないでねトシ！」
「わかってるよ。」

俺はそう言うのとタイミングを見計らったかのように部屋の扉がノックされる。その後すぐに扉が開かれて母さんから「お昼ができたからイヴちゃんとメアリーちゃんも食べてっ！」と言われ、3人でリビングへと向かう。

リビングには大皿に盛り付けられた素麺がこれでもかど存在感を主張している。どうやら今日の昼は腹には溜まらないようだ。

「ほらほら！3人とも早く座っちゃって〜！今素麺つゆ渡すからね〜！」

「はーい！」

「ありがとうございます！」

「母さん、これ薬味とかは冷蔵庫の中？」

「そうよ。薬味も今から出すから少し待ってて〜。」

母さんはそう言うつつゆの入った茶碗を3つ机に置いて、その後すぐに薬味の入った小鉢を机の上に並べる。

「さあ！召し上がれ！」

「いただきますーす!!」

「いただきます。」

「「ごちそーさまでした!!」」

「「ご馳走様。」」

やはり素麺は夏といえばの風物詩と言っても過言でないだろう。この涼し気な見た目と薬味とでとても涼しい気分になれる。まあ気分だけで外はとても暑いからこのクーラーの効いた部屋から出たくは無いのだが。

「お粗末さま。イヴちゃん、メアリーちゃん。こんな質素なご飯でごめんなさいね？」

「いえ！すつごく美味しかったです！トシのお母さんありがとうございます！」

「お兄さんのお母さんありがとうございます！」

「いいのよおこれくらい！——あ、そうだ！明日の夜この辺りで夏祭りあるんだけど2人とも、行きたい？」

母さんがそういうと2人の目はキラキラと輝き始める。やはり夏といえば祭り。それが日本の共通認識であると言ってもいいくらいだからそろそろここら辺でもやるだろうとは思っていたがまさか今日の明日だとは思っていなかった。

しかし問題なのはそこではなく、次に発せられた母さんの一言だった。

「もし行きたいならうちの大利連れてっていいわよ♪」

「は？」

は
?????

夏祭り（後編）

「——は？」

「いや、は？じゃないわよ。私とお父さんは仕事で付き添えないからあんたが保護者として付き添うのよ大利。」

「えっ!? いやいやいやいや!! 夜とはいえこんなクソ暑い中俺外に出たくないんだけど!」

俺がそう言うも母さんは俺の発言に聞く耳を持たずにキッチンの方へと戻って行ってしまった。しかし夏祭りとなると俺の学校の面々も一堂に会するだろう。そんな中この2人と一緒にいる所を見られてしまった暁には夏休み明けの学校でさんざつぱら弄られるに違いないだろう。

でもここで俺が声を大にして行きたくないと言ったらこの2人は多少なりとも悲しません結果になってしまうのだろうか。それはそれで申し訳ない気持ちが悪くなってしまうので、何とか2人を悲しませず尚且つ俺もクラスメイトから変に弄られない方法は無いものか無い頭を何とか動かして考える。

「あ、そうだ。ギャリーは行けんの？ あいついるなら俺専用の盾ができるから行くのもやぶさかでは無い。」

「ギャリー? ……多分大丈夫だと思うよ。詳しく聞いてるわけじゃないけどね。」

「よし、じゃあギャリーも呼んで俺の盾になってもらうか。」

「お兄さん………いったいなにから逃げてるの?」

「何って………同級生という名のパラッチ?」

俺がそう言うのと2人は納得してくれたのかウンウンと深く頷いている。やはり女の子のネットワークはパラッチのように俺たち一般^{男ども}人には理解し得ないような複雑なものを持っているのだろう。なんともまあめんどくさい事この上ない。

「まあそんな訳で壁があるなら行ってもいいぞ。」

「やったあ！じゃあ明日の午後4時にここに集合ね!!イヴもそれでいい?」

「うん!」

「ええ……ここに集合すんの?せめて駅前とかの方が良くないか?」

俺がそう提案するも2人は聞き入れる様子もなく話をどんどんと進めていく。その姿をぼうっと眺めながら俺は2人の会話を右から左へと聞き流していた。

翌日

「いやまさか本当に俺ん家に集合するとは……。」

「いやだから昨日言ったじゃん!午後4時にここに集合するって!」

「でも俺はここじゃなく駅の方がいいんじゃないかって言ったじゃんか。」

「でもお兄さん。駅は人がすごく多かったよ?多分みんな今日の祭りに来た人達だと思うけどあそこで待ち合わせなんかしたらきつと会えずに暗くなっちゃうよ?」

「え?ああそりやそうか。それは頭から抜けてたわ。じゃあここで集合するのも致し方ないかあ。」

イヴがそう言うてようやく日本人が本質的にお祭り好きな事を思い出した。そりや遺伝子からお祭り好きなのだから近場で開催される事がわかれば集まってくるのも仕方ないだろう。

「そんなことより!トシはこの格好の私達に何か言うことは無いの!」

「ん?……ああ、2人とも似合ってるぞ。すごくいいと思う。」

「んもう！ヒロトシだったらもつと気の利いたこと言えないのかしら？」

「俺にそういうようなものは求めないでくれ。俺はただの高校生なんだからさ。」

流石にいつまでも玄関で話しているのも如何なものかと思った俺はそう言いながら靴を履く。家の中でさえバカほど暑かったのだが、外に出ると蒸し蒸しとした風が俺を撫でて不快指数がどんどん上昇していくのが手に取るようにわかる程に暑い。そんな中でもイヴとメアリーは元気が有り余っていると云わんばかりに俺とギャリーを急かしながらズンズンとお祭り会場へと足を進めていく。

祭り会場に着くと開始時刻をとづくに過ぎていたからか人がごつた返していた。幾ら俺とギャリーがいるとはいえこの中をイヴとメアリーがでも繋がずに歩いたらはぐれる事は容易に想像できるほどだ。

「……確かにこりや保護者がいるなあ。」

「確かにそうね。だからアタシも駆り出されたんでしょ？アンター人で全部こなそうとなんてしなくていいわよ。」

「それくらいわかってる。……でもこれどうするよ？4人で仲良く手を繋いだら他の人の迷惑になるぞ？」

「まあここは無難に2人を2グループかしらね。決め方は……どうしましよ？」

俺達が道の端でウンウンと悩んでいると痺れを切らしたメアリーが会話に割り込んできた。

「もう！早く行きたいんだからこんな所で立ち止まってないでよ！」

「いやでもね？こんな人の多い中をみんなで歩いたら絶対にはぐれちゃうでしょ？そんな事がないようにアタシ達は考えているのよ？」

「絶対にはぐれないから大丈夫！だから早く行こ？イヴからも何か

「言つてよ！」

「ギャリー、お兄さん。早く行く？」

俺達は2人から「早く行きたい」コールをされて頭を抱えつつ迷子になる事承知で俺だけの裏技を使う事も考えながらその場から動こうとしたその時、ギャリーが突然ハツとなにかに気づいたような表情を浮かべる。

「そうだ！メアリー、イヴ！アンタ達ジャンケンしなさい！」

「なんで急にジャンケン？」

「いいからしなさい！勝ち負けが決まったら教えてちようだいね？」

「う、うん……わかった……。」

ギャリーはイヴとメアリーにそういうところらに向き帰り拳をこちらに差し出してくる。やりたいことはわかったが何となく気づいてないふりをしてその拳に俺の拳を軽くコツンと当てる。

「ちよつとー・ヒロトシアンタわかってやってるでしょ！アタシ達もジャンケンするわよ！」

「はいはい……ちよつとしたおちやめ心だろ？そんなカリカリすんなって。」

「アンタのポケはいつも拾いづらいのよ……。」

なんてそんな事を話しながら俺達もジャンケンを始める。と言ってもそんな長引くようなものでもなく、すぐに俺達の決着はついた。

「よしっ！じゃあ勝ちと負けでペアになってちようだい！これが今日の祭りを回るバディよ！」

「俺と一緒に回るのはイヴか。行きたいところがあったら言ってくれよ？」

「うん！お祭り楽しみだねお兄さん！」

「ええ〜！私ギャリーとおお???いつも一緒だから今日はトシとがいい！」

「アンタの運がない事を呪いなさい！そんな事より行きましょ！こんな日そうそう無いんだから目いっぱい楽しまないとー！」

別れる直前にギャリーと集合場所と時間だけササツと決めてお互いにお祭り会場に足を踏み入れていく――。

「はあく〜！今日は楽しかった！こんな楽しい事毎日やってたら良かったのに！」

「はあく、アンタバカねえ。こんなのが毎日やってたら有難みがないじゃない。偶にでいいのよ偶にで。」

「ぶ〜ぶ〜！ギャリーは夢がないなあ！そんなんだから恋人が居ないんだよ！」

「アンタはいつも一言余計なのよっ！」

そんな会話を後ろで聞いていながら俺とイヴは静かに帰路に就いていた。先程までいたお祭り会場と打って変わって虫の鳴き声以外に聞こえてくる音が前の二人の会話のみでかなり静かなのだけれどその静けさが先程の喧騒も相まってなんとも心地よい。

「ねえお兄さん。」

「んー？どうかしたか？」

「また来年も……一緒に行けるよね？」

「ああ……きつと行けるさ。なんせ俺達には他のどんな物にも敵わない心強い味方がいるじゃんか。」

「あーリリーちゃん！確かに心強い味方だね！」

イヴのその発言を肯定するように大きく頷くと、イヴはその整った顔を綻ばせる。それを見て俺も微笑みが溢れてくるが、そんな空気も長くは続くはずもなく俺は突然横から衝撃を受けてよろけてしまう。

「もー！トシもイヴもおっそーい！早く帰って花火やろ！ギャリーが買ってあるって言ってたからさー！」

「え！花火!? やりたーい！ね？お兄さんもやりたいよね？」

「……そうだな。さっさと帰って花火やるか！」

「おー！トシもノリノリだねー！——私みんなと外に出られて本当に良かったー！」

そういうとメアリーもまた人形のように綺麗なその顔に満面の笑みを浮かべる。俺は——俺達はこの笑顔を守る為にこれからも頑張らないといけないと再認識しながらイヴとメアリーに両腕を引っ張られ転びそうになりながらも1歩1歩しつかりと地面を踏み締めていく。

その先がハッピーエンドに続いている事をいつまでも信じて。

クリスマス

クリスマス——。街ゆく人々の足取りは軽く、その表情は程度は違えど明るいものが多くなるそんなイベントだ。そんな大きなイベントが近づいてきた12月のある日、そんなイベントに特段なんの思い入れもない俺はいつもと変わらない日々を過ごしていた。しかし、そんな俺の平穏を容易く崩してくれる存在が俺の部屋に襲来していた。

「——んで？クリスマスがどうしたって？」

「だあかあらあ！クリスマスの日に皆でイルミネーションを見たいの！ギャリーは賛成してくれたし、イヴのお母さんもギャリーとトシがいるならって条件付きでOKを出してくれたの！」

「だから後は俺が行くって言えば全ては丸く収まる……と。メアリーはそう言いたいんだな？」

「うん！もちろん一緒に行ってくれるよね？」

俺の平穏を脅かすメアリーは肯定してもらえらると思っている様でここまでの経緯をべらべらと話していく。しかし俺はこんなクソ寒い中外に出るなんて考えたくもない。ただでさえ学校に聞くのだった苦痛なのになぜ好き好んで夜に外に出なければいけないのか。ということ俺の次に発する言葉は決まっている。

「断る。」

「うんうん——、え？？」

「だから、断る。」

「ええー!!なんでよお!!」

「寒いだるいめんどくさい。以上。」

俺はそこまで言って会話を切りあげると席を立ち部屋の入口に向かって歩きはじめる。

「ちよ、トシーどこ行くのさ！まだ話は終わってないよ！」

「トイレくらい行かせてくれ。これでも大分我慢してるんだぞ。」
「えっ!?……ゴメン。」

メアリーはなんとも申し訳なさそうな顔をしながら謝ってくるが、俺は特に何も気にすることなく部屋を後にする。正直このままバツクれてもいい気がしなくても無いが、如何せんあいつがいる場所が俺の部屋という事もあり現状最悪な状態だ。何せメアリーの事だからきつと俺が戻るまでずっと待たれてしまうのだから。それにあいつの性格上部屋の至る所を探索ずつというおまけ付きだろう。

とりあえず手早くトイレを済ませて自分の部屋へと思いい足取りで向かうことにする。なぜ俺は己の部屋に行くのにこんな憂鬱な気分にならないといけないのか。

「戻ったぞ。まさかとは思うが部屋のものに手をつけてないよな?」

「当たり前じゃん! さすがにそんな事しないよ失礼な!」

「ならいいけど……んで、クリスマスだっけ?なんでそんなわざわざ面倒臭い日に会いたいんだ?」

「そんなの決まってんじゃない!皆で楽しいことしたいから!」

メアリーは屈託のない笑顔を俺に向けてそう言い切る。なんとも可愛らしいその理由は単純が故に断るのも気が引けるのは俺だけじゃないはずだ。しかしクソ寒い上バカほどカップルがいるような所に行つてまで子守りをしなければならないのか。それならまだ男同士で馬鹿騒ぎしながらイルミネーションを見た方が楽しいまであるだろう。

しかしまあ――。

「――はあ……わかったわかった。着いてけばいいんだろ?」

「っ!!着いてきてくれるの!?ホントに!?!」

「ハイハイ着いてくよ。但しメアリー、お前は俺の指示に従えよ?」

「えー!なんで私だけなの?!ギャリー……はともかくイヴにはそう

「いないの!?!」

メアリーが色々と言っているがそんなもの聞かなくても分かりきっている事だろう。むしろなぜ彼女はイヴが何か言われるような奴だと勘違いをしているのか。

「そりやイヴは強く言わなくても俺の言う事を聞いてくれるからな。それに比べてお前はなかなか話を聞かない……と言うよりも聞いてもすぐに忘れてどっか行ったりするだろう?」

「うっ……否定できない……。」

「まあそういう事だ。これを守れないなら今回の話は無かった事に――。」

「わかった! 守る! 守るからクリスマスの日は空けといてね! それじゃあまたクリスマスに! あ、集合はここね!」

そこまで俺にマシンガンの如く言いたい事だけ言うと、メアリーは俺の部屋から颯爽と出ていく。その物言いからの行動の早さに俺は何かを言う事はおろか、彼女の行動を止める事すら叶わなかった。

「ったく、言いたい事だけ言って帰りやがったな……。にしてもクリスマスか……。こりやめんどくさい事になりそうだ。」

これもじいさんが俺を後継者的扱いにしたからなのか、こんな感じで感が鋭くなってきた感じがある。この予想が当たらなければいいのだが……。

そんな心配など知ったこっちゃないと言わんばかりに無慈悲に時

は進んでいくものであつたという間にクリスマス当日になつてしまつた。この心のざわめきが杞憂である事を祈りつつ俺は家でアイツら3人が集まるのを憂鬱な面持ちで待っている。

「大利〜！お客さんよ〜！」

「はーい！今行く〜！」

どうやら俺が色々と考えている間にそこそこ時間が経っていたらしく、3人が家に到着したようだ。俺はなるべくあいづらを待たせないように急ぎ足で玄関へと向かう。いや、まあ正直アイツらに合流したら行かざるを得なくなつてしまふが今更行かないとか言つたところで聞き入つて貰えないだろう。それに母親に約束を守らなかつたことがバレてしまえばその日のご飯は無くなるか白米のみなんて事になりかねない。

「おいーつす。」

「トシ！メリークリスマス！」

「お兄さん今日はありがとね！メリークリスマス！」

「ヒロトシ、今日はお互いに頑張りましょうね……。メリークリスマス。」

何故か既に疲れ切つているギャリーを見て今までの嫌な予感がさらに強く感じるが、こうして顔を合わせてしまった手前今から断る事が出来るはずもなく……。俺は出来うる限り嫌な予感を気にしない事にして財布と鍵、それとジャケットを手に持つて急いで靴を履く。

ジャケットを羽織りながら玄関の扉に手をかけると、家の中はそこそこ暖かいはずなのにとてもひんやりとした感覚がドアノブ越しに俺の手に襲いかかる。

「冷たつ。——なあ、やっぱ行くのやめね？寒いのに人多いとかやつてらんないからさ。」

「何バカな事言ってるの？いまさら行かないなんて選択肢は無いよー！」

「お兄さんはわたしたちと一緒に出かけたく……ない？」

「ちよつと、メアリーはともかくイヴを悲しませたら承知しないわよ？」

「わかった、わかったから。お前ら揃いも揃って圧がすごい。」

メアリーとギャリーがずいずいとこちらに顔を近づけて威圧して来るため俺はドアの方に追いやられて行く。そんな中イヴはそんな俺をうるうるとした目で見つめてくるのでなおのこと逃げ場がなくなっていく。

「はあ……取り敢えず家出るぞ。母さーん！行ってくるー！」

俺はそういうと母さんの返答もまともに聞かないうちにドアを開けて家から出る。2人の威圧感から逃げるのもそうなのだが、何よりもイヴの悲しげな瞳を向けられている事に耐えられなくなったからだ。

「うわっ……めちやくちや人いんじやん。」

「そりやあクリスマスだもの。きつとみんな恋人や友達とイルミネーションを見に来てるのよ。つまりアタシ達も周りの人達も目的は一緒ってわけね。」

「目的は一緒って言ったってなあ……。こんな人の多い中4人行動はきつくないか？」

「まあそうかもしれないけど……まあそこは気合いよ！アタシ達保護者組がしっかりと手を繋いでいればきつと何とかなるわよ！」

「ええ……。」

クリスマスだと言う事もあり、駅構内から人混みが半端ないことになってる。それもこれも大概の人はクリスマスの影響だと言うのだからこのイベントは俺達日本人と無関係にも関わらず随分と親しまれているものだという事が分かるのだが、だからといって俺はそういうワイワイとしたイベントはあまり得意では無い。

今回だってメアリーに「4人で行きたい」みたいな事を言われたから仕方なくこうして外に出ている訳で。彼女からのお誘いがなかったら今頃家でゴロゴロしながら1人寂しくゲームをやっていた事だろう。それもまた乙なもののだが、それを言い出した所で今更だろう。

「んで？俺らはこれから何処のイルミネーションを見に行くんだ？」

「もちろん駅前のイルミネーションだよ！ここのクオリティはすごく高いってお友達が言ってたもん！」

「ほーん。今まで興味無かったからそんな事知らなかったわ。」

「お兄さんはもう少し色んなことに興味を持ってもいいと思うよ？」

イヴにそんな事を言われ何も言い返せなかった俺は、このなんとも言えない空気を払拭する為に少し強引に話題を変えることにした。

「えつと……そのイルミネーションの場所は確か駅前って言っていたよな？なら早速移動を始めようか。時間は有限なんだしさ。」

「うん！イヴ、ギャリー！楽しみだね！」

「そうね！なんだかんだアタシも見に来るのすごく楽しみだったのよねえ！」

「わたしもすごく楽しみ！ーお兄さん。手、つなご？」

「ん？おおそうだな。ここではぐれたら合流は難しそうだし。ほれ、2人も手え繋ぐぞ。はぐれんなよ？」

俺はそう言つて二人の間辺りにイヴと繋いでない方の手を伸ばす。その手———というか腕に飛びつくようにメアリーが抱きつく、ギヤリーに向かつて舌をちろりと出して挑発の態度をとる。

「今日はトシと一緒にいたい気分だからギヤリーはイヴと手を繋いでくれる?」

「あら、そうなの?ワガママなお嬢様ねえ。じゃあイヴ、アタシとも手を繋ぎましょ?」

「うん!」

「よし、じゃあ移動するぞ。イヴは俺かギヤリーから絶対に離れるなよ?片方離してもいいけどもう片方は絶対に離すな。OK?」

「わかった!絶対にはなさない!」

イヴからの元気な返事を聞いた俺は満足気に頷いて3人を連れ立って駅構内から出る為に入出口の方へと歩いていく。人の波に沿つて出来る限り離れないように歩いていくと、程なくして出入口まで到着した俺達はとりあえず落ち着けそうな所で一息つく事にした。

「みんな人酔いとかはしてないか?もしやばそうなら何処か休めそうなどこ探すけどどうする?」

「私は大丈夫だよ!トシが守ってくれたもんね!」

「わたしも大丈夫!お兄さんとギヤリーが守ってくれたから!」

「あらあら、随分と元気ね。でもはしやぎ過ぎて人様に迷惑をかけたやダメよ?特にメアリー、アンタはつい羽目を外しすぎちゃうんだから気をつけなさいよ?」

「んもー!ギヤリーもトシも似たような事言わないでよー!私はそこまで無闇矢鱈にはしやがないもん!」

メアリーがギャーギャーと喚いていたが俺とギヤリーはそれを全て無視をして、2人を引き連れるように俺達は歩き始め———ようにしたそのタイミングで後ろから俺に向けて声をかけられる。

「——あれ、大利じゃん。何でここにいんの？俺達の誘い断つてたよな？」

「え？うわあ、めんどくさいやつに見つかったよ……。」

「おい聞こえたぞ！今うわあって言ったな!?!うわあって！」

どうやら同じクラスの男子が俺に話しかけてきたようで、今日誘われてるのを蹴っているのもあって正直会いたくなかったのだが会ってしまったのであれば致し方ない。元々は向こうの誘いを断っている事だし同じクラスのヤツらには悪いがこの場は早々に退場させて頂こう。

「うわあって言ったのは申し訳ないが俺はこの3人と予定が入ってたんだ。邪魔してくれんなよ？」

「うわっお前ってそんなキザだったらしい言い方するよなやつだっけ？まあ俺は邪魔するつもりはねえよ。でも今度御三方とどんな関係なのか根掘り葉掘り聞かせてもらおうからな！」

「はいはいわかったわかった。わかったからさっさとどっか行け。」

俺は嫌な顔を隠すことも無くシツシツと空を払うジェスチャーをすると、クラスメイトの連中はケラケラと笑いながら俺達から離れていく。

「……アンタの友達って意外とパワフルなのね。なんかちよつと信じらんないわ。」

「そうか？むしろ自分と違う人だからこそ友達になるんだろ。俺と同じようなやつとか絶対友達になりたくないし。」

「ああなるほどね。確かに自分と似たような人間と話してたら喧嘩ばかりになりそうなもの。」

「それよりも俺は年明けの始業式の日が今から憂鬱だよ……。絶対めんどくさい絡まれ方されんじゃん……。」「

俺は頭を抱えそうになったが両手をイヴとメアリーで塞がれてい
たために意図せずに2人を俺の近くに引き寄せてしまう。

「きやつ。お兄さん急にどうしたの?」

「きやく!トシつたらだ・い・た・んなんだから♡」

「何バカげたこと言ってるんだよ。どんだけませてんだこのマセガキ。それとイヴ、俺の事はそんなに気にしなくていいぞ。ただ少しこれからの事を考えて頭が痛くなっただけだ。」

「なにおう!トシが先にやってきたくせに!」

ギヤースカ言ってきたているメアリーの事はスルーして俺は歩き始める。勿論メアリーはその間も腕に引っ付いてるもんだからまるで俺に引きずられるかのようになっているが、本人は全く意にも介しない様子で俺の腕から離れようとも歩こうともしなかった。

「イルミネーションキレイだったねー!また来年も一緒に見に来たいね!」

「ね〜!……来年は快く一緒に来てくれるよね?トシ。」

「ん?ん〜……ま、考えとく。」

「んも〜素直じゃないのね。ヒロトシってば断るつもりもない癖にい〜。」

「ギヤリーはいらん事言うな。まあ来年の事は来年の俺が考えるだろ。」

語尾に多分と確実につきそうなほど適当に返答しながら俺達は帰路に着いていた。そんな感じでいつもと変わらずに歩いているとメ

アリーが突然何かを思いついたかのような声を上げる。

「あー！そうだ！トシ、来年の初詣も行くからよろしくね！」

「え、嫌だけど。」

「トシに拒否権はナーシ！ね？イヴもトシと一緒にいきたいでしょ？」

「うん。でも……お兄さんの迷惑にならないかな？大丈夫？」

「おいメアリーこのやろっ……はあ、わかった。わかったからイヴはそんな悲しそうな顔すんなよ。な？」

なんだかんだ言っただけ俺はこいつら2人に弱いんだろう。これからイヴとメアリーのお願いを断ることが出来ないんだろうなあと思いつつ、コソコソ笑ってるギャリーを足で軽く小突いてじやれ合いながらわいわいと帰宅するのだった。

初詣

俺達——、というかイヴとメアリーは神社の境内で俺のクラスメイトの女子に囲まれて猫可愛がりを受けていた。

「きゃ〜！この子達可愛い〜！ねえ則内〜、この子達お持ち帰りしていい〜い？」

「え!?!きゃつ！トシ〜!!助けて〜!!!」

「お、お兄さん……。」

いやもう本当に——。

「どうしてこうなった……。」

なぜこうなったのか、それは数時間前まで遡る——。

「ふあ……はあ。朝か……って事は年を越してしまった……。今から外に出るとか考えたくない……。」

「大利〜！正月だからってグータラしてるんじゃないわよ〜！はやく起きなさい〜！」

「朝っぱらからうるさっ……。——起きるかあ。」

布団から這い出て、つい「さむっ」と言ってしまう程には冷えきった部屋の扉を開けると部屋の中よりも冷たい空気が廊下から流れ込んでくる。

「さっつっつむ……。——おおう。」

体が震えると共に変な声が出てしまうが、それを微塵も気にせず俺はリビングへと歩いていく。リビングの方からなにやらお出汁の匂いが香ってくるが、なんの匂いか検討もつかないままに入っていくとそこには何故かイヴとメアリー、それにギヤリーギヤリーがそこでご飯を食べていた。

「——はっ？あれ？もう集合時間？」

「うん、そうだよ！もくトシ起きるの遅いんだから！」

「こおら！嘘つくんじゃないわよメアリー！大丈夫よヒロトシ。アタシ達が早く来すぎただけだから。」

「お兄さんおはよお。お兄さんはおねぼうさんだね。」

「うるへー。母さん、俺にも飯ちようだい。てか今日の飯何？」

俺は3人を尻目に母さんへそう聞くと、母さんは「今日はお雑煮よ」と言ってきたので俺は餅ふたつ入れてもらおうようお願いして席に座る。

「んで何時にここ出る？きつと人も少ないだろうし早い方がいいか？」

「うーんそうねえ。アタシとヒロトシだけなら遅くてもいいんだけどこの子達もいると考えると早い方がいいかもしれないわね。」

「んじや俺飯食い終わったら速攻着替えるからすぐ行こうか。お前らもそれでいいか？」

「私はそれでいいよ！ゴチソーサマでした！」

「わたしもそれで大丈夫だよ。おばさん、ごちそうさまでした。」

イヴとメアリーは母に食べ終えた食器を返しながら俺にそう返答してくる。それを聞いた俺は朝ごはんがまだ出て来なさそうなのを確認して先に着替えを済ませようと一言ギヤリーに言ってからリビングを後にする。

俺の着替えと食事が無事終わり他3人も外に出る準備が整った所で俺達は家から嫌々ながら出ると、冷たく乾いた風が体に突き刺さり速攻回れ右して家に戻りたくなかったがメアリーを筆頭に3人ともそんな蛮行を許してくれるはずがない事は重々承知してるので、大人しく近くの神社に向かつて歩く事に。

程なくして神社が近くなるとそれまで疎らだった人の数が段違いに増えて、まるで某空に浮かぶ城の王族の子孫のように「人がゴミのようだ」と言いたくなる程には集まっているだろう。

しかし流石にこんなところで4人固まって動くのは無理があるし何より周りの迷惑になってしまう為、俺達は2人ずつ参拝して終わり次第鳥居前で集まる事にした。そして今日の俺の相方は――。

「なんかお兄さんとうこうやって二人きりで歩くのすごく久しぶりだね！」

「ああ、確かにそうだな。こつちに帰ってきてからなんだかんだ4人で動いてたからなあ。最後って……「あそこ」でギヤリーを助けた時ぶりか？」

「ねー。それにお兄さん外に出たがらないから……わたし寂しいんだよ。」

「仕方ねえよ。めんどくせえもん。」

「もー！そんな事言うお兄さんは今度いつしよにおでかけね！やくそく！」

イヴはそう言って俺の顔を覗き込んで微笑んでくる。その表情に幾度となく負けてきた俺だが、今度こそそれに負ける訳には行かないとイヴの方はあまり見ないままに俺達はゆつくりと流れる人波に逆

らわず先に進んでいく。

「ふいー……何とか俺達は参拝し終わったがあいつらはどうなんだ？
ここまで人が多いと2人が何処にいるか皆目見当もつかないなあ。」

「ねー。ぶじに2人と会えればいいんだけど……。」

「まあそこは俺とギャリーなら連絡手段もあるしなんとかなるだろ。」

「うー……。はやくわたし達もそのすまーとふおん？つてやつ持ち
たーい！」

やはり元々別の世界……と言えはいいのだろうか。スマートフォンが存在していない世界から来ているものだからか未だに言い慣れていないようだ。

しかしまあイヴの年齢でスマホを持っている子はいるのだが、だからといってイヴとメアリーが持っている利点はあまり感じられない。メアリーに至っては何かと通販サイトで色んなもの買ったたり、動画の見すぎで月初めに通信制限がかかったりしそうで怖い。そういう事もあって買い与えていないのだとギャリーは言っていた。

そんな事を本人達に言うはずもなく何となく流していたらワイワイしている1つの集団がこちらに近づいてきている事に気づく。

「則内じゃん、あけおめことよろー。——えっ、隣の子めっちゃ可愛いじゃん！なに、知り合いなの!？」

「則内の癖に女の子と出かけてるなんて……もしかして誘拐したとかじゃないよね？」

「お前らは俺の事どう思ってるんだよ……。この子はー……うーん……なんだろ。探検友達？まあそんな感じ。」

「ふーん？まあ犯罪じゃなければなんでもいいわ！私達にこの子をー

」。

クリスマスに引き続き再びクラスメイト、しかも女子に出会うとはやっぱり俺は呪われているのかもしれないと思いつながら話をしていると、ギャリー達が人混みから外れた俺とイヴを見つけて駆け寄ってくる。

「2人ともおまたせ〜!——あら?この子達はヒロトシのお友達?アタシギャリーっていうの!よろしくね!」

「え!?トシの友達!?意外とトシって友達いたのね!休みの時はいつも家にいるってトシのお母様が言ってたからてつきり友達いないのかと思ってた!」

「おいコラメアリー、お前そりやどういう事だおい。事と次第によっちゃ——。」

「きや〜!トシに怒られる〜!ギャリー助けて〜!」

「アハハ……、ヒロトシも程々にしてあげて?この子だつてわざと言ったわけじゃないんだから、ね?」

「いやこいつの事だしわざとだろ。……まあいいか。てかこいつら急に静かになって怖いんだけど。」

俺が合流したギャリーとメアリーの3人で喋っているとクラスメイト達がイヴの事を抱き締めたまま固まってしまっていた。こいつらは一体どうしたというのか。

「あ、イヴ。そういえばイヴはなんてお願いした〜?」

「メ、メアリー……。今はこっちに来ないほうが……。」

「え〜?なんで〜?」

メアリーはイヴの忠告も聞かないまま何の警戒もせずに彼女の方へと歩いていく。そんな時何故か今まで固まっていた彼女達がようやく動きはじめる。

「きゃ〜！この子達可愛い〜！ねえ則内〜、この子達お持ち帰りして
い〜い〜？」

「え!?きゃっ！トシ〜!!助けて〜!!」

「お、お兄さん……。」

「どうしてこうなった……。」

急に動き出したかと思えばそんな訳の分からない事を言い出し始
めたこいつは新年早々頭のネジを外してしまったのだろうか。いま
でクラスメイトこんなテンションを見た事のなかった俺は素直にそ
う思ってしまった。

しかし幾ら関わりが薄いとはいえクラスメイトなのだ。そんなや
つを犯罪者に仕立て上げる訳にもいかないし、いい加減イヴとメア
リーを離してもらおうと思えば暴走しているコイツらをそろそろ止め
ることにする。

「おいおい……お持ち帰りなんてしたらお前らの方が犯罪者になる
ぞ。」

「この子達の為なら犯罪だってなんだってやってやる！その程度今の
私になら出来る！」

「大体則内1人でいい思いすぎ！私達にも幸せを分けて！」

「そーだそーだ！私達にも可愛いこと触れ合える時間をー！」

俺が止めに入ると、そんな俺に対してコイツらは口々に馬鹿な事を
言い出す。正直言っている事が馬鹿馬鹿しくてこいつらの言い分を
全て無視してイヴとメアリーからひっぺがしたいが、そんな事をして
やれセクハラだのなんだのと騒がれてはめんどくさい事この上ない
ので何も出来ずにいた。

「あ〜ちよっとお嬢さん達いいかしら？その2人って実は人見知りし
ちゃうのよ。だからその2人から少しだけでも離れてくれると嬉し

いわ。」

「あ、すみません……。2人もごめんね？」

「う、ううん。大丈夫……。だよ？」

「私も大丈夫だよ。ちよつとびっくりしたけどね。」

2人が俺のクラスメイトにそう言うのと、当の本人達は少しホツとした表情を見せて俺の方に声をかけ始める。

「則内！学校が始まったらこの人達とどういう関係か教えて貰うかね！」

「今度お会いしたらその時はまたよろしくお願いしますね！」

「3人ともバイバーイ！」

嵐のように現れやりたい事をやったと思ったら嵐のように去っていく。そんな彼女らを見て俺達は彼女達の過ぎ去っていく様子を眺めるしかできなかつた。

「ま、まあ特に何があつたつて事じゃない訳だし……。今日は帰りましょつか。」

「ああ……。俺の知り合いが悪いな……。」

「お兄さんのおともだちつて……。スゴいね。」

「ねえトシい、お友達は選んだ方がいいよ？」

「余計なお世話だメアリー。てかアイツらは友達じゃなくてクラスメイトだから。そこまで親しくねえよ。」

俺達はそんな事を話しながら帰路に着く。本当ならばここまで時間のかからない外出だったはずだったのに何故こんなことになったのか。そんなことを思いながら俺の家でまた体を温める為に、足早に家へと歩いていく。

あわよくば、今年もいい年になりますように――。